

長野県中央道埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書

— 上 伊 那 郡 箕 輪 町 —

昭和48年度

日本  
長

信州大学附属図書館



3470205356

司  
会

長野県中央道埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書

— 上伊那郡箕輪町 —

昭和48年度



日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会

## 序

昭和48年度長野県中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、上伊那郡箕輪町3遺跡の発掘調査が、4月18日から8月31日にかけて実施された。

この箕輪町の竜西地域は、木曾山脈の経ヶ岳山塊から東流する桑沢・深沢・帯無川等によって形成された広大な扇状地と、いくつかの段丘面が南北に広く展開する地域である。扇頂部一帯、段丘先端部、諸河川の両岸に接する台地縁には遺跡が集中している。木製遺物を大量出土した箕輪遺跡、上伊那郡唯一の前方後円墳「松島王墓」をはじめ、濃厚な遺跡地帯として古くから考古学上注目される地域のひとつである。中央自動車道は、扇状地中央部を南北に横切っているため、遺跡数は少ないが、三河川に面する台地縁に存在が予想され、扇頂部と段丘先端部の遺跡地帯との関連性究明のため、今回の発掘調査には大きな期待がかけられていた。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように90軒以上の奈良・平安時代の住居址と、50棟以上の柱列址の確認、馬具や三彩陶器の出土から歴史時代の地方的な特色を暗示する大規模な集落構成に大きな示唆を与えた中道・堂地遺跡、住居址の発見は少なかったが、縄文時代中期から後期にかけての300基以上の土壇を伴う集落の一端を確認した堂地遺跡大原地籍等、学界に新知見をもたらすものも数多く、この発掘調査の成果は極めて多大であった。

報告書刊行に当って、この発掘調査の実施に深くご理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同伊那工事事務所・工事施行の大林組、余寒末だ去りやらない4月から、残暑のきびしい8月末にかけて長期間この発掘調査に精励された大沢剛長を始めとする調査団の各位、この調査のためにご協力いただいた伊那中央道事務所・箕輪町当局ならびに同町中央道用地被買収者組合等関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和49年3月20日

長野県教育委員会教育長 小松孝志

## 例 言

1. 本書は、昭和48年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいた発掘調査のうち、上伊那郡箕輪町内の調査報告書である。
2. 本書は、契約期間内（昭和49年3月20日）にまとめることが要求されており、なお、調査班が諏訪地区も担当したため、調査結果について充分検討・研究する時間がとれなかった。そのため、調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することに重点をおいた。
3. 遺構図において焼土はドットで、貼床下から検出されたピット等は点線で図示した。ピットの深さは数字で表示し、主要な遺物の出土地点は×印で記入した。遺物実測図は遺物の文様・整形技法等につき全面にわたって詳細な表示をする余裕がないため、帯状に特徴を表わし得る最低限に止めた。表示法で甕の口縁部の横ナデ痕を平行線で表わした。須恵・灰釉・土師の種別は頭文字をアルファベットで表わした。
4. 遺構・遺物実測図の作成には全員であった。
5. 写真は遺構関係を木下・伴が、遺物関係を木下が担当した。
6. 執筆は全員が分担し、それぞれ文末に文責を記した。編集は伴が担当した。
7. 縄文土器については樋口昇一氏の、古代遺物については桐原健氏の指導を受けた。
8. 遺物・実測図・記録等は上伊那郡辰野町辰野東小学校内、長野県中央道遺跡調査団本部に保管しており、遺物の一部は同本部内に展示してある。

# 目 次

序	
例 言	
I 調査状況	1
1 調査にいたるまで	1
1) 中央道関係の経過	1
2) 発掘調査委託契約	10
3) 発掘調査開始までの準備	15
2 調査の実施と経過	16
1) 調査の期間と経過	16
2) 発掘調査協力者	17
3) 現地指導・見学者	17
3 発掘調査の方法	18
II 箕輪町の概況	19
1 箕輪町の環境	19
2 箕輪町の遺跡	21
III 調査遺跡	26
1 南大原遺跡	26
1) 位 置	26
2) 遺構と遺物	27
3) まとめ	27
2 堂地遺跡	28
1) 位 置	28
2) 大原地籍の遺構と遺物	28
ア 平安時代の住居址	28
イ 掘立建物址	30
ウ 方形周溝墓	32
エ 土壇	33
3) 堂地地籍の遺構と遺物	33
ア 平安時代の住居址	33
イ 掘立建物址	34
ウ 土壇	34
エ 溝状遺構	34
4) 孤座地籍の遺構と遺物	35

ア	縄文時代の住居址	35
イ	平安時代の住居址	37
ウ	掘立建物址	43
エ	土壌	44
オ	溝状遺構 1～3	46
カ	その他の遺物	46
5)	まとめ	47
3	中道遺跡	116
1)	位 置	116
2)	遺構と遺物	116
ア	奈良・平安時代の住居址	116
イ	竪穴状遺構	150
ウ	掘立建物址	152
エ	土 壌	155
オ	特殊遺構	157
カ	溝状遺構	158
キ	K区トレンチ他出土石器	158
ク	その他の遺物	159
3)	まとめ	160
	あとがき	349

## 表 目 次

第1表	箕輪町地区遺跡一覽表……………	24
第2表	堂地遺跡大原地籍4号住居址出土土器一覽表……………	31
第3表	堂地遺跡大原地籍獨立建物址一覽表……………	32
第4表	堂地遺跡大原地籍土塚一覽表……………	33
第5表	堂地遺跡堂地地籍土塚一覽表……………	35
第6表	堂地地籍20号住居址出土トイレット・ストーン計測値表……………	42
第7表	堂地遺跡狐窪地籍獨立建物址一覽表……………	43
第8表	堂地遺跡狐窪地籍土塚一覽表……………	49
第9表	堂地遺跡住居址一覽表……………	58
第10表	中道遺跡5号住居址出土土器一覽表……………	119
第11表	中道遺跡17号住居址出土土器一覽表……………	126
第12表	中道遺跡20号住居址出土土器一覽表……………	128
第13表	中道遺跡23号住居址出土土器一覽表……………	131
第14表	中道遺跡24号住居址出土土器一覽表……………	134
第15表	中道遺跡30号住居址出土土器一覽表……………	136
第16表	中道遺跡36号住居址出土土器一覽表……………	140
第17表	中道遺跡68号住居址出土土器一覽表……………	150
第18表	中道遺跡獨立建物址一覽表……………	153
第19表	中道遺跡中道地籍土塚一覽表……………	156
第20表	中道遺跡宮西地籍土塚一覽表……………	156
第21表	中道遺跡住居址一覽表……………	157

## 挿 図 目 次

第1図	箕輪町地区遺跡分布図	23
第2図	箕輪町地区内中央道用地内遺跡分布図	26
第3図	南大原遺跡土壌1	27
第4図	箕輪町地区内中央道用地内各遺跡地形図	60
第5図	箕輪町地区内中央道用地内各遺跡地形図	61
第6図	堂地遺跡堂地竊遺構配置図	62
第7図	堂地遺跡狐窪地竊遺構配置図	63
第8図	堂地遺跡大原地竊1号・2号住居址	64
第9図	堂地遺跡大原地竊3号・4号住居址	65
第10図	堂地遺跡大原地竊5号住居址・柱列1・2	66
第11図	堂地遺跡大原地竊柱列3・4・5・6	67
第12図	堂地遺跡大原地竊柱列7・8・9・土城1～5	68
第13図	堂地遺跡大原地竊方形周溝墓	69
第14図	堂地遺跡大原地竊土壌6～7・堂地地竊1号住居・土城1～3	284
第15図	堂地遺跡堂地地竊土壌4～18・溝1断面図	70
第16図	堂地遺跡狐窪地竊1号・2号・3号・4号住居址	71
第17図	堂地遺跡狐窪地竊5号・6号住居址	72
第18図	堂地遺跡狐窪地竊7号・8号・9号・10号住居址	73
第19図	堂地遺跡狐窪地竊11号・12号・13号住居址	74
第20図	堂地遺跡狐窪地竊14号・15号住居址	75
第21図	堂地遺跡狐窪地竊16号・17号住居址	76
第22図	堂地遺跡狐窪地竊18号・19号住居址	77
第23図	堂地遺跡狐窪地竊20号・21号住居址	78
第24図	堂地遺跡狐窪地竊22号・23号・24号住居址	79
第25図	堂地遺跡狐窪地竊柱列1・2・3・4	80
第26図	堂地遺跡狐窪地竊柱列5・6・7・8	81
第27図	堂地遺跡狐窪地竊柱列9・10・土城1～20	82
第28図	堂地遺跡狐窪地竊土壌23～69	83
第29図	堂地遺跡狐窪地竊土壌72～123	84
第30図	堂地遺跡狐窪地竊土壌127～177	85
第31図	堂地遺跡狐窪地竊土壌178～224	86
第32図	堂地遺跡狐窪地竊土壌226～263	87
第33図	堂地遺跡狐窪地竊土壌264～302	88



第34回	堂地遺跡狐窪地籍土城304～322・246	89
第35回	堂地遺跡狐窪地籍溝状遺構1	90
第36回	堂地遺跡大原地籍1号・2号住居址・出土土器	91
第37回	堂地遺跡大原地籍2号・3号住居址・出土土器	92
第38回	堂地遺跡大原地籍3号住居址・出土土器	93
第39回	堂地遺跡大原地籍4号住居址・出土土器	94
第40回	堂地遺跡大原地籍4号住居址・出土土器	95
第41回	堂地遺跡大原地籍5号住居址・狐窪地籍出土土器	96
第42回	堂地遺跡狐窪地籍5号・6号・7号・8号住居址	97
第43回	堂地遺跡狐窪地籍9号・10号・11号住居址	98
第44回	堂地遺跡狐窪地籍12号・13号住居址	99
第45回	堂地遺跡狐窪地籍13号・15号住居址	100
第46回	堂地遺跡狐窪地籍15号・17号・18号住居址	101
第47回	堂地遺跡狐窪地籍19号・20号・23号・24号住居址	102
第48回	堂地遺跡大原地籍出土土器及び石器	103
第49回	堂地遺跡狐窪地籍21号住居址及び土城・出土土器	104
第50回	堂地遺跡狐窪地籍土城・出土土器	105
第51回	堂地遺跡狐窪地籍土城・出土土器	106
第52回	堂地遺跡狐窪地籍土城・出土土器	107
第53回	堂地遺跡狐窪地籍土城・出土土器	108
第54回	堂地遺跡狐窪地籍土城・出土土器	109
第55回	堂地遺跡狐窪地籍出土土器	110
第56回	堂地遺跡狐窪地籍出土土器	111
第57回	堂地遺跡狐窪地籍出土土器及び石器	112
第58回	堂地遺跡狐窪地籍出土土器	113
第59回	堂地遺跡狐窪地籍出土土器	114
第60回	堂地遺跡狐窪地籍出土土器	115
第61回	中道遺跡5号住居址出土奈良三彩小壺	119
第62回	筑輪町地区中央道用地内中道遺跡地形図	169
第63回	中道遺跡宮内地籍遺構配置図	169
第64回	中道遺跡中道地籍遺構配置図	170
第65回	中道遺跡1号・2号住居址	171
第66回	中道遺跡3号・4号・68号住居址及び土城3・5・6	172
第67回	中道遺跡5号・6号住居址	173
第68回	中道遺跡7号・8号住居址及び柱列3の一部	174
第69回	中道遺跡9号・10号住居址	175

第 70 図	中道遺跡11号・12号住居址	176
第 71 図	中道遺跡13号・14号住居址	177
第 72 図	中道遺跡15号・17号住居址	178
第 73 図	中道遺跡18号・19号住居址	179
第 74 図	中道遺跡20号住居址	180
第 75 図	中道遺跡21号・23号住居址	181
第 76 図	中道遺跡22号住居址及び土壇15・16・柱列10	182
第 77 図	中道遺跡24号住居址及び柱列M 1	183
第 78 図	中道遺跡25号・33号・37号住居址及び土壇13	184
第 79 図	中道遺跡27号・28号住居址	185
第 80 図	中道遺跡29号・30号住居址	186
第 81 図	中道遺跡31号・32号住居址及び土壇22・23	187
第 82 図	中道遺跡34号・35号住居址及び土壇24・29	188
第 83 図	中道遺跡36号・38号・39号・40号住居址	189
第 84 図	中道遺跡41号・42号住居址	190
第 85 図	中道遺跡43号・44号住居址	191
第 86 図	中道遺跡45号・46号・47号住居址	192
第 87 図	中道遺跡48号・49号住居址及び土壇M 1・M 12・M 17	193
第 88 図	中道遺跡50号・51号住居址及び土壇M 2・M 3・M 13	194
第 89 図	中道遺跡52号・53号住居址	195
第 90 図	中道遺跡54号・55号住居址及び土壇M 4	196
第 91 図	中道遺跡56号・57号住居址及び土壇M 5	197
第 92 図	中道遺跡58号・59号住居址	198
第 93 図	中道遺跡60号・61号住居址	199
第 94 図	中道遺跡62号・63号・64号住居址及び土壇M 6・M 10・M 11	200
第 95 図	中道遺跡65号・66号住居址	201
第 96 図	中道遺跡67号・69号住居址	202
第 97 図	中道遺跡彫穴1～9	203
第 98 図	中道遺跡柱列1～4	204
第 99 図	中道遺跡柱列5・7～9・土壇7～11・14	205
第100 図	中道遺跡柱列10～14・土壇21・26	206
第101 図	中道遺跡柱列15～18	207
第102 図	中道遺跡柱列19～22	208
第103 図	中道遺跡柱列23～26	209
第104 図	中道遺跡柱列27～30	210
第105 図	中道遺跡特殊遺構	211

第106回	中道遺跡特殊遺構及び溝状遺構 2	212
第107回	中道遺跡土壌	213
第108回	中道遺跡1号・2号住居址・出土土器	214
第109回	中道遺跡2号住居址	215
第110回	中道遺跡3号・4号・5号住居址・出土土器	216
第111回	中道遺跡5号住居址・出土土器	217
第112回	中道遺跡5号住居址・出土土器	218
第113回	中道遺跡5号住居址・出土土器	219
第114回	中道遺跡6号・7号住居址・出土土器	220
第115回	中道遺跡8号・9号住居址・出土土器	221
第116回	中道遺跡9号・10号・11号住居址・出土土器	222
第117回	中道遺跡12号住居址出土土器	223
第118回	中道遺跡12号・13号住居址出土土器	224
第119回	中道遺跡13号・14号・15号住居址出土土器	225
第120回	中道遺跡15号・17号住居址出土土器	226
第121回	中道遺跡15号・17号・18号・19号住居址出土土器	227
第122回	中道遺跡19号住居址出土土器	228
第123回	中道遺跡20号住居址出土土器	229
第124回	中道遺跡20号住居址出土土器	230
第125回	中道遺跡20号住居址出土土器	231
第126回	中道遺跡20号住居址出土土器	232
第127回	中道遺跡21号・22号住居址出土土器	233
第128回	中道遺跡23号住居址出土土器	234
第129回	中道遺跡23号住居址出土土器	235
第130回	中道遺跡23号・24号住居址出土土器	236
第131回	中道遺跡24号住居址出土土器	237
第132回	中道遺跡25号住居址出土土器	238
第133回	中道遺跡26号・27号・28号住居址出土土器	239
第134回	中道遺跡28号住居址出土土器	240
第135回	中道遺跡29号住居址・43号住居址出土土器	241
第136回	中道遺跡30号住居址出土土器	242
第137回	中道遺跡30号住居址出土土器	243
第138回	中道遺跡30号・31号住居址出土土器	244
第139回	中道遺跡31号住居址出土土器	245
第140回	中道遺跡32号住居址出土土器	246
第141回	中道遺跡33号・34号住居址出土土器	247

第142回	中道遺跡34号住居址出土土器	248
第143回	中道遺跡35号・36号住居址出土土器	249
第144回	中道遺跡37号・38号・39号住居址出土土器	250
第145回	中道遺跡40号住居址出土土器	251
第146回	中道遺跡40号・41号住居址出土土器	252
第147回	中道遺跡42号・43号住居址出土土器	253
第148回	中道遺跡43号住居址出土土器	254
第149回	中道遺跡44号・45号住居址出土土器	255
第150回	中道遺跡46号・47号住居址出土土器	256
第151回	中道遺跡47号・48号・49号住居址出土土器	257
第152回	中道遺跡50号・51号・52号住居址出土土器	258
第153回	中道遺跡52号住居址出土土器	259
第154回	中道遺跡53号住居址出土土器	260
第155回	中道遺跡53号・54号住居址出土土器	261
第156回	中道遺跡54号・55号住居址出土土器	262
第157回	中道遺跡56号住居址出土土器	263
第158回	中道遺跡56号・57号住居址出土土器	264
第159回	中道遺跡58号・59号住居址出土土器	265
第160回	中道遺跡59号住居址出土土器	266
第161回	中道遺跡59号住居址出土土器	267
第162回	中道遺跡60号住居址出土土器	268
第163回	中道遺跡61号・62号・63号住居址出土土器	269
第164回	中道遺跡64号・65号・66号住居址出土土器	270
第165回	中道遺跡67号住居址出土土器	271
第166回	中道遺跡68号・69号出土土器	272
第167回	中道遺跡竪穴1～6・上横M12出土土器	273
第168回	中道遺跡特殊遺構・土壇17出土土器	274
第169回	中道遺跡竪穴7・8他出土土器	275
第170回	中道遺跡B・C区出土土器	276
第171回	中道遺跡B・C区出土土器	277
第172回	中道遺跡出土土器	277
第173回	中道遺跡出土土器	278
第174回	中道遺跡出土土器	289
第175回	中道遺跡K区出土土器	280
第176回	堂地遺跡大原狐塚地籍及び中道遺跡出土鉄器	281
第177回	中道遺跡出土鉄器	282
第178回	中道遺跡出土鉄器及び堂地遺跡・狐塚地籍出土木器・土偶	283

## 图 版 目 次

第1图	堂地遗址·中道遗址远景	285
第2图	堂地遗址大原地籍1号住居址	286
第3图	堂地遗址大原地籍1·2号住居址出土遗物	287
第4图	堂地遗址大原地籍2号住居址	288
第5图	堂地遗址大原地籍2号·3号住居址出土遗物	289
第6图	堂地遗址大原地籍3·4号住居址	290
第7图	堂地遗址大原地籍4·5号住居址出土遗物	291
第8图	堂地遗址大原地籍5号住居址·柱列1~5	292
第9图	堂地遗址大原地籍柱列6~8·方形厩墓·大原地籍全景	293
第10图	堂地遗址大原地籍土壤·堂地地籍柱列1	294
第11图	堂地遗址孤塚地籍全景	295
第12图	堂地遗址孤塚地籍1~3号住居址	296
第13图	堂地遗址孤塚地籍4~9号住居址	297
第14图	堂地遗址孤塚地籍10~13号住居址	298
第15图	堂地遗址孤塚地籍14号住居址·龕	299
第16图	堂地遗址孤塚地籍15~21号住居址	300
第17图	堂地遗址孤塚地籍22~24号住居址·出土遗物	301
第18图	堂地遗址孤塚地籍柱列1~7·土葬	302
第19图	堂地遗址孤塚地籍土壤·出土土器	303
第20图	堂地遗址孤塚地籍溝状遺構	304
第21图	中道遗址全景	305
第22图	中道遗址I·J区·J·K区全景	306
第23图	中道遗址1号住居址·出土土器	307
第24图	中道遗址2·3号住居址	308
第25图	中道遗址4·5号住居址·出土土器	309
第26图	中道遗址6号住居址·出土土器	310
第27图	中道遗址7~11号住居址	311
第28图	中道遗址12~15号住居址	312
第29图	中道遗址出土土器	313
第30图	中道遗址出土土器	314
第31图	中道遗址17~19号住居址	315
第32图	中道遗址20号住居址	316
第33图	中道遗址出土土器	317

第34図	中道遺跡20号住居址出土環蓋	318
第35図	中道遺跡20号住居址出土環	319
第36図	中道遺跡20号住居址出土土環	320
第37図	中道遺跡20号住居址出土土器	321
第38図	中道遺跡21～24号住居址	322
第39図	中道遺跡土土器	323
第40図	中道遺跡25～28号住居址	324
第41図	中道遺跡29～31号住居址	325
第42図	中道遺跡出土遺物	326
第43図	中道遺跡出土土器	327
第44図	中道遺跡32～38号住居址	328
第45図	中道遺跡39～42号住居址	329
第46図	中道遺跡出土土器	330
第47図	中道遺跡43～47号住居址	331
第48図	中道遺跡48～51号住居址	332
第49図	中道遺跡出土土器	333
第50図	中道遺跡52～55号住居址	334
第51図	中道遺跡56～59号住居址	335
第52図	中道遺跡出土遺物	336
第53図	中道遺跡60～63号住居址	337
第54図	中道遺跡65～68号住居址	338
第55図	中道遺跡69号住居址・竪穴1～7	339
第56図	中道遺跡出土遺物	340
第57図	中道遺跡出土鉄器	341
第58図	中道遺跡出土鉄器	342
第59図	中道遺跡柱列1～27	343
第60図	中道遺跡柱列16～30	344
第61図	中道遺跡柱列10～305	345
第62図	中道遺跡特殊遺構・その配石	346
第63図	中道遺跡特殊遺構配石・スナップ	347
第64図	調査関係者	348

# I 調査状況

## 1. 調査にいたるまで

### 1) 中央道関係の経過

#### ア 整備計画とその経過

昭和32年4月、高度経済成長政策の一つとして「国土開発縦貫自動車道建設法」が公布され、その中の一つに中央自動車道予定路線も発表された。その後、諏訪回り案に改正され、本線は西宮線、岡谷から分岐し長野へ通ずるものを長野線と呼んでいる。昭和41年7月に五縦貫道整備計画が決定し、その後、道路整備施行命令が日本道路公団に出されている。中央自動車道西宮線は、小牧・東京間やく360km、そのうち長野県内は、岐阜県中津川市から恵那山トンネルで伊那盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓を通過して山梨県に至る間、やく122kmとなっている。

昭和41年に、日本道路公団名古屋支社は飯田市に飯田工事事務所を設置し、その後の進展に伴い恵那山トンネル東工事事務所、伊那市・諏訪市にも工事事務所が設けられた。長野県でもこれに呼応して、県庁内に長野県中央道建設対策本部が組織され、企画部に中央道課が、その出先機関として中央道事務所が、飯田・伊那・諏訪3市に置かれた。このような現地体制の整備につれて、ルート発表・立入測量・設計協議・市杭設置そして用地買収へと業務は段階的に進むのではあるが、現実は一歩ずつ進まず、年月を費やしていたが、昭和45年頃から用地買収も進展し、それに伴って全線がいくつもの工区に分けられて本線工事が発注されている。昭和42年3月恵那山トンネル補助トンネル工事が始まり、昭和44年11月には恵那山トンネル本線トンネル工事に着手し、昭和45年には阿智工区から本線工事に入っている。昭和47年後半になると埋蔵文化財発掘調査の終るのを追い駆けるように、飯田・高森・松川・飯島・駒ヶ根工区には大形機械が導入されて整地作業がなされ、長期間人手をかけて掘りあげた遺跡が、短時日のうちに姿を消している。ここで問題になることは、日本道路公団から施工業者への工事仕様書の中に、調査予定の埋蔵文化財包蔵地が記載されていないことがあって、工事によって発掘調査前の遺跡が破壊されそうになった例のあったことなど今後の保存事業について、きめこまかい対策の必要性を痛感している。

#### イ 埋蔵文化財の対策とその経過

縦貫道計画が発表された昭和41年頃、開発が全国的に広まりだして、各地で文化財保護についての問題が取りあげられていた。文化財保護委員会（現文化庁）では、開発機関との間でその保護についての調整を計っていた頃であったので、日本道路公団との間で、昭和42年9月に「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」を取交した。それより先、昭和41年には、中央自動

車道関係県文化財主管協議会を開催し、文化財の取扱いについて打合せている。県教育委員会では、昭和42年に入って関係市町村連絡協議会を、飯田・伊那・諏訪3地区で聞きその対策を打合せ。さらに、昭和42年国庫補助事業として、中央自動車道用地内とその周辺の遺跡分布調査を実施し、下伊那地区147遺跡、上伊那地区112遺跡、諏訪地区90遺跡計349遺跡を確認する。その後ルート発表に伴い補足調査を実施し、中央道用地内には、下伊那地区で63遺跡（含斜坑広場）、上伊那地区83遺跡、諏訪地区44遺跡の計190遺跡の存在を知る。分布調査では埋蔵文化財を除く文化財についても調査しているが、その取扱いについては「覚書」に触れられていないこともあって、関係市町村教育委員会にその交渉が任せられている。「覚書」にもとづいて、埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」という）の取扱いについては、その下交渉及び発掘調査は各県教育委員会が当ることになっており、文化庁の指導もあって、長野県が中心となり愛知・岐阜・山梨の4県で「中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会」を持ち、この会には日本道路公団関係者も加って、昭和42、43、44年に開催されたが、管轄公団支社の業務進展がまちまちであり、各県の取り組み方も一様でないため、充分な連絡調整もできないうちに、愛知・山梨・岐阜県の順で、路線内の遺跡発掘調査が開始されていった。

遺跡の取扱いについては、「覚書」の中で、A・路線計画からははずすもの、B・路線計画の中に入れるが保護するもの、C・路線計画の中に入れ、事前に発掘調査をし記録して保存するもの3区分けされている。それに基づいて、中央自動車道用地内遺跡についても、A・B・Cの3区分けされていたが、路線決定の後では、その変更が容易でなく、結局190遺跡すべてCとなった。この最終決定は、県教育委員会の意見聴取に基づいて文化庁でなされる。これらの遺跡の発掘調査は、日本道路公団が費用負担して、県教育委員会と契約して実施するように「覚書」で定められている。しかし、県教育委員会では、直営の発掘調査体制を組織することが困難であるとの立場から、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、その中に遺跡調査団をおいて業務を遂行することにし、そこへ指導主事を調査主任として出向させることにした。

この調査体制が確立する前の昭和45年3月に、飯田市上飯田地区の2遺跡（さつき・古屋垣外）の発掘調査が行われた。この調査は、年度末も迫っているため県教育委員会が受託することは困難なためと、試み的な意味もあって、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、同調査会が受託して実施した。暫定的な措置であったが、長野県下最初の中央道用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査である。

同年4月から、本格的な発掘調査体制確立のために、県教育委員会社会教育課（後に文化課に独立）では、担当指導主事を2名増員し、4名とする。一方では、各地区の関係市町村教育委員会との打合せ会を持ち、日本道路公団名古屋支社との協議も具体化し、6月と7月の現地協議によって昭和45年度の調査地区も決定した。そこで、7月には「長野県中央道遺跡調査会」を整備充実した。

昭和45年度は、8月に下伊那郡阿智村地内7遺跡（調査費179万円）、9月に飯田地内その1地区10遺跡（調査費1590万円）の発掘調査委託契約を相次いで結び、9月2日には、下伊那郡阿智村川畑遺跡において、長野県下中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査の黙入式を挙行している。翌9月3日から2班編成の調査団によって発掘調査を開始している。10月に上伊那郡宮田村地内その1地区6遺跡（調査費500万円）の発掘調査委託契約を結び、昭和46年3月45年度の業務を完了した。

昭和46年度は、4月に、上伊那郡飯島町内その1地区（調査費1224万円）、8月に下伊那郡高森町内その1地区（調査費3120万円）、9月に下伊那郡阿智村圓原斜坑広場その1杉の木平遺跡（調査費730万円）



の発掘調査委託契約が結ばれ、上伊那郡中田切川橋梁工事先工に伴う上伊那郡飯島町内その2、久根平遺跡（調査費123万円）の発掘調査委託契約も、9月に結ばれ、昭和47年3月この年度の業務を完了している。

昭和47年度になると、用地買収業務も進展し、上下伊那郡ともに各工区ごと工事発注が続出する年とあって、県教育委員会においては、担当指導主事3名を増員し、4班の調査団を組織した。飯田・下伊那地区に2班、伊那・上伊那地区に2班ずつ常駐させて発掘調査に当ることとした。4月に、飯田市内その2地区17遺跡（調査費2367.5万円）、上伊那郡飯島町内その3地区8遺跡（調査費677.1万円）、伊那市西春近地区18遺跡（調査費3361.6万円）が、7月には、下伊那郡高森町内その2地区5遺跡（調査費2002万円）、下伊那郡松川町内12遺跡（調査費1864.3万円）、駒ヶ根市内8遺跡（調査費563.5万円）が、8月には、上伊那郡南箕輪村内その1地区5遺跡（調査費1051.5万円）のほか、飯田市山本地籍石子原遺跡において、多量に発見された石器群は、中期ローム層包含の旧石器としてその重要性が認められ、第2次調査の協議が成立し、飯田市その3（調査費410万円）として発掘調査委託契約が結ばれている。さらに10月に入って、上伊那郡南箕輪村内その2地区4遺跡（調査費514.4万円）と辰野町内その1地区3遺跡（調査費497.2万円）等10地区81遺跡、調査面積132,180㎡の広範囲にわたって発掘調査委託契約が結ばれている。

昭和48年度は、調査地区の主体が上伊那郡から諏訪郡に移動するため、長野中央道遺跡調査閉本部を辰野町に移設し、伊那市に作業場をおいてこの業務に当ることとした。調査地域も3郡にわたって広範囲にわたるため、県教育委員会においては、担当指導主事をさらに1名増員し調査に万全を期している。4月に、伊那市内その2地区4遺跡（調査費2121.6万円）、箕輪町地内3遺跡（調査費1214.4万円）、辰野町内その2地区14遺跡（調査費3480万円）、富士見町内その1地区5遺跡（調査費1588.8万円）の発掘調査委託契約が結ばれ、伊那市から富士見町にわたる広域内の調査が開始されている。7月においては、下伊那郡阿智村斜坑広場その2杉の木平遺跡（調査費989万円）、諏訪市内その1地区7遺跡（調査費1588.8万円）、10月には、諏訪市内その2地区2遺跡（調査費888万円）の発掘調査委託契約が結ばれている。

## ウ 中央道関係の経過一覽

この経過一覽は、前項のものと同様のものも多いが、10数年にわたる道路建設の過程と発掘調査の経過は、将来活用されることがあろうと思われるので記載した。中央自動車道建設法案とそれに基づく機関県の対策機関設置、ルート発表の経過、文化財保護のための諸協議・諸会合、発掘調査に関する経過については全部転載した。用地買収契約および工事着工については、最初のものだけ記載した。

32・4・16 国土開発縦貫自動車道建設法の公布（施行同年7月31日）

◆7・25 中央自動車道予定路線を定める法律制定

39・6・16 国土開発縦貫自動車道建設法の一部改正により、中央自動車道予定路線は諏訪回りに改正

41・7・25 五縦貫道整備計画決定、道路整備施行命令が日本道路公団に出る

◆8・12 長野県中央自動車道対策協議会開催

◆8・12 恵那山トンネル立入測量開始

◆9・22 中央自動車道長野県建設協力会開催

◆9・30 下伊那郡阿智村の一部、飯田市、壽町（14km）ルート発表

- 41・11・16 長野県中央道建設対策本部設置、県企画部に中央道課および飯田中央道事務所設置  
 #・12・15 中央自動車道関係県文化財主管課協議会開催（東京）
- 42・2・14 中央道建設用地内文化財の取扱いについて関係市町村連絡協議会開催（下伊那地区）  
 #・2・21 " " "（上伊那地区）  
 #・2・22 " " "（諏訪地区）
- #・3・23 恵那山トンネル（4.7km）ルート発表  
 #・3・28 下伊那郡上郷町・飯田市座光寺・高森町・松川町（14.5km）ルート発表  
 #・3・31 恵那山トンネル補助トンネル工事着工
- #・4・15 文化庁で中央自動車道用地内の埋蔵文化財保護対策打合せ会開催  
 #・5・4 伊那中央道事務所設置  
 #・5・30 中央道建設地域内埋蔵文化財分布調査費国庫補助申請
- #・6・13 中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第1回 長野県庁）  
 #・8・1 下伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 147  
 ～12  
 （団長 大沢和夫）
- #・11・1 上伊那郡飯島町・駒ヶ根市・宮田村・伊那市・南箕輪村（36.6km）ルート発表  
 #・11・10 上伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 112  
 ～26  
 （団長 林 茂樹）
- #・11・27 諏訪地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 90  
 ～12・15  
 （団長 藤森栄一）
- #・12・16 下伊那郡阿智村殿島・智里地区（5.65km）ルート発表
- 43・2・27 公団名古屋支社と中央道埋蔵文化財の保護措置について協議（43年の発掘調査について）  
 #・3・5 公団本社と保護措置について協議（43年の発掘調査について）  
 #・7・23 下伊那郡阿智村智里殿島地区、県内のトップをきって用地買収契約成立  
 #・10・12 中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第2回 松本市）
- 44・3・18 " " "（第3回 岐阜市）  
 #・7・15 公団名古屋支社と協議（飯田市上飯田地区の発掘調査について）  
 #・8・12 上伊那郡辰野町（8km）ルート発表  
 #・10・3 飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社から意見聴取（県教委回答 12・11）  
 #・10・8 中央道関係市町村教委連絡協議会開催（飯田市）  
 #・10・20 飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社との現地協議  
 #・10・31 中央道関係市町村教委連絡協議会開催（伊那市）  
 #・11・11 恵那山トンネル本線トンネル工事起工式  
 #・12・11 公団名古屋支社と協議（45年の発掘調査について）
- 45・1・29 諏訪郡富士見町（11.2km）ルート発表  
 #・2・2 公団名古屋支社と協議（上飯田の3遺跡と45年度の発掘調査について）  
 45・2・23 岡谷市と諏訪市の一部（14.7km）ルート発表

- 45・2・24 下伊那郡阿智村殿島地区において、県下最初の平地地区本線工事開始
- ・2・27 長野県中央道遺跡調査会結成（飯田市上飯田地区の調査に限る）
- ・3・2 公団名古屋支社と長野県中央道遺跡調査会との間で、上飯田地区2遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 80万円）
- ・3・5 飯田市上飯田地区さつみ・古屋垣外遺跡の発掘調査開始（～3・21）（团长 大沢和夫）
- ・3・31 飯田市上飯田さつみ・古屋垣外遺跡発掘調査報告書刊行
- ・4・22 公団名古屋支社と協議（45年度の発掘調査について）
- ・4・23 上・下伊那地区中央道用地内遺跡視察（県教育委員会担当者）
- ・5・8 下伊那郡阿智村～松川町間（57遺跡）埋蔵文化財包蔵地についての意見聴取（県教育委員会回答 5・26）
- ・5・14 中央自動車道西の宮線起工式（於多治見市）
- ・6・1 公団名古屋支社と協議（発掘調査上の問題について）
- ・6・9 下伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（飯田市）
- ・6・11 下伊那郡阿智村7遺跡・飯田市（上飯田・座光寺）7遺跡・鼎町2遺跡・上郷町1遺跡について、公団名古屋支社と現地協議
- ・6 昭和45年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査予算案を6月県会に提出
- ・6・29 上伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（伊那市）
- ・6・30 諏訪地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（諏訪市）
- ・7・8 上伊那郡宮田村地内7遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（～10日）
- ・7・22 長野県中央道遺跡調査会結成準備会・第1回理事会開催（飯田市）
- ・8・17 下伊那郡阿智村地内7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 179万円）
- ・9・1 飯田地区その1地内10遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 1590万円）
- ・9・2 中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査導入式挙行（下伊那郡阿智村小野川川畑遺跡）
- ・9・3 下伊那郡阿智村地内7遺跡（川畑・北垣外・橋場・矢平II・杉ヶ洞・宮の脇・坊塚）発掘調査開始（終了9・22）
- ・9・3 岡谷市内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～5日）
- ・9・5 伊沢県教育長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- ・9・7 諏訪郡富士見町内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～10日）
- ・9・8 田中県教育次長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- ・9・22 飯田地区その1地内10遺跡（山岸・天伯B・権現堂前・さつみ・赤坂・宮崎A・宮崎B・大門原B・大門原D・大久保）の発掘調査開始（終了46・1・18）
- ・10・19 上伊那郡宮田村地内6遺跡（高河原・釈迦堂・宮の沢・元宮神社東・天伯古墳・円通寺）の発掘調査開始（終了45・12・18）
- ・10・28 公団名古屋支社総務部長・田中県教育次長、権現堂前・大門原B 遺跡視察
- ・10・29 公団名古屋支社副支社長、大門原B・大門原D 遺跡視察
- ・11・16 長野県中央道遺跡調査会第2回理事会開催（飯田市座光寺大門原B・宮崎A、上伊那郡宮田

村大伯古墳視察、理事会宮田村福祉センター)

- 45・11・17 公団名古屋支社との協議 (昭和46年度発掘調査地区の選定について)
- # 11・28 下伊那郡阿智村地内発掘調査報告会開催(下伊那郡阿智村智里東小学校)
- # 12・5 上伊那郡宮田村地内発掘調査報告会開催(上伊那郡宮田村福祉センター)
- # 12・25 茅野市・原村・諏訪市の一部(12.4km)ルート発表、これをもって県内やく122kmのルート発表完了
- 46・1・12 伊沢県教育長、下伊那郡飯島町山岸遺跡視察
- # 2・1 公団名古屋支社と協議 (昭和46年度の発掘調査地区について、飯田市山本・伊賀良地区用地内遺跡視察)
- # 2・2 下伊那郡高森町・松川町・上伊那郡飯島町地内遺跡について、公団名古屋支社と現地協議(昭和46年度発掘調査地区決定)
- # 2・28 上伊那郡宮田村地内中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- # 3・11 飯田地区その1発掘調査報告会開催(公団・各事務所・市町村教委に対して)
- # 3・15 飯田地区その1発掘調査報告会開催(一般公開)
- # 3・20 飯田地区その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- # 4・1 飯島町地内その1地区(七久保)7遺跡の発掘調査委託契約成立(委託金額 1224万円)
- # 4・12 飯島町地内その1地区(七久保)発掘調査団結式挙行(飯島町役場)
- # 4・13 飯島町地内その1、7遺跡(鍬物師原・鳴尾天白・鳴尾・尾越・遺溝・北原東・小段遺跡)の発掘調査開始(終了46・7・3)
- # 4・26 長野県中央道遺跡調査会第3回理事会開催(伊那市上伊那郷土館)
- # 5・24 恵那山トンネル斜坑口および土捨場問題協議会、長野県庁企画部長室で開催(公団名古屋支社、恵那山トンネル東工事事務所、阿智村教育委員会、同建設課、長野県中央道課、飯田中央道事務所、下伊那地方事務所商工建築課、飯田教育事務所、長野県教育委員会)
- # 6・7 下伊那郡阿智村園原杉の木平・児の宮遺跡緊急分布調査(～8)
- # 6・16 公団本社・同名古屋支社と協議(下伊那郡阿智村園原恵那山トンネル斜坑口と土捨場予定地の保護措置について)
- # 7・1 公団名古屋支社から恵那山トンネル飯田方斜坑広場(杉の木平遺跡)埋蔵文化財について意見聴取
- # 7・15 飯島町地内その1発掘調査報告会開催(飯島町役場七久保支所)
- # 7・20 公団名古屋支社総務部長と県教育長の協議(恵那山トンネル斜坑土捨場問題について)
- # 8・1 下伊那郡高森町地内その1(10遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額 3120万円)
- # 8・6 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査団結式と打合せ会(高森町役場)
- # 8・10 下伊那郡高森町地内その1地区、10遺跡(弓矢・無縁堂・神堂垣外・鍬物師原A・瑠璃寺前・大島山東部・赤羽根・出原西部・出早神社附近・正木原I)発掘調査開始(9・14中断、10・23再開、終了47・1・14)
- # 8・18 恵那山トンネル飯田方斜坑広場埋蔵文化財保護措置について県教委回答

- 46・8・30 公団名古屋支社と志那山トンネル斜坑広場（杉の木平遺跡）の現地協議
- ＃・8・31 公団名古屋支社と上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）の現地協議
- ＃・9・4 伊沢長野県教育長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡・高森町鐘鐺原遺跡視察
- ＃・9・10 下伊那郡阿智村圓原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査打合せ会（阿智村駒場公民館）
- ＃・9・13 下伊那郡阿智村圓原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額730万円）
- ＃・9・14 赤尾長野県教育次長、下伊那郡高森町鐘鐺原遺跡視察
- ＃・9・16 下伊那郡阿智村圓原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査開始（終了11・1）
- ＃・9・17 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）委託契約成立（委託金額123万円）
- ＃・9・20 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）発掘調査開始（終了10・13）
- ＃・11・18 長野県議会社会文教委員会一行下伊那郡高森町瑞瑞寺前遺跡視察
- ＃・11・19 長野県中央道遺跡調査会第4回理事会開催（高森町畜産センター）
- 47・1・25 飯田市山本・伊賀良12遺跡、下伊那郡豊町1遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- ＃・1・26 下伊那郡高森町地内4遺跡、松川町地内10遺跡、上伊那郡飯島町地内8遺跡、富田村地内1遺跡、駒ヶ根市地内8遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- ＃・1・27 伊那市西春近地内18遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- ＃・2・29 上伊那郡飯島町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＃・2・29 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＃・3・20 下伊那郡高森町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＃・3・20 下伊那郡阿智村斜坑広場その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＃・3・25 下伊那郡阿智村圓原斜坑広場（杉の木平遺跡）発掘調査報告会開催（智黒西診療所）
- ＃・3・26 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（高森中学校）
- ＃・3・27 圓原斜坑広場（杉の木平遺跡）、高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（一般公開）
- ＃・4・1 飯田市内その2地区（17遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額2367.5万円）
- ＃・4・1 飯島町内その3地区（8遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額677.1万円）
- ＃・4・1 伊那市西春近地区（18遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額3361.6万円）
- ＃・4・3 飯田市内その2地区発掘調査打合せ会（飯田合同庁舎）
- ＃・4・10 飯田市内その2地区ほか下伊那地区発掘調査閉結図式舉行（飯田合同庁舎）
- ＃・4・10 飯田市内その2地区、17遺跡（かぶき畑・柳田・山田・石子原・石子原古墳・ようじ原・上の平東部・寺山・六反田・滝沢井尻・小垣外・三登瀛・上の金谷・辻垣外・大東・酒屋前・大門原B）の発掘調査開始（終了48・2・7）
- ＃・4・24 上伊那地区発掘調査閉結図式と発掘調査打合せ会（上伊那地方事務所会議室）
- 47・4・25 飯島町内その3地区、8遺跡（うどん坂南・うどん坂Ⅱ・うどん坂Ⅰ・山溝・八幡林・石上神社前・庚申平・太田沢春口平）の発掘調査開始（終了47・6・28）
- ＃・4・25 伊那市西春近地区・18遺跡（和手・富上山下・富士塚・高瀬沢・南丘A・南丘B・名瀬南・名瀬東古墳・名瀬・白沢原・山寺垣外・細ヶ谷B・百敷刈・北丘B・大境・山の根・城平・

城平上)の発掘調査開始。(終了47・12・14)

- 47・4・26 長野県中央道遺跡調査会第5回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- ＊・6・20 公団名古屋支社と、上伊那地区橋梁工事に伴う調査遺跡追加と、飯田市山本石子原遺跡第2次調査について協議(県庁教育次長室)
- ＊・6・22 公団名古屋支社と飯田市山本石子原遺跡第2次調査について現地協議。
- ＊・7・3 下伊那郡高森町内その2地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額2,002万円)
- ＊・7・6 下伊那郡松川町内(12遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,864.3万円)
- ＊・7・6 駒ヶ根市内(8遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額563.5万円)
- ＊・7・7 駒ヶ根市内8遺跡(大徳原南B・大徳原南A・大徳原北・横前南・中山原・新田原・女体北切石墓地)の発掘調査開始。(終了47・9・1)
- ＊・7・12 飯田市内その3(石子原遺跡第2次調査)の発掘調査委託契約成立。(委託金額410万円)
- ＊・7・14 下伊那郡松川町内12遺跡の発掘調査打合せ会。(松川町福祉センター)
- ＊・7・24 下伊那郡高森町内その2地区5遺跡(神田裏・新田西裏・増野新切・増野川子石・鐘崎原A)の発掘調査開始。(終了47・11・9)
- ＊・7・24 下伊那郡松川町内12遺跡(里見Ⅱ・里見Ⅴ・境の沢・中原Ⅰ・庚申原Ⅰ・庚申原Ⅱ・平林・やし原・片桐神社東・水上・文源田Ⅲ・文源田Ⅳ)の発掘調査開始。(終了47・11・11)
- ＊・8・15 公団名古屋支社と上伊那郡南箕輪村内9遺跡と辰野町内その1地区3遺跡について現地協議。
- ＊・8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)発掘調査団結儀式。(飯田教育事務所)
- ＊・8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)の発掘調査開始。(終了47・9・30)
- ＊・8・21 上伊那郡南箕輪村内その1地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,051.5万円)
- ＊・9・1 上伊那郡南箕輪村内の発掘調査打合せ会開催。(南箕輪村公民館)
- ＊・9・4 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区9遺跡(南原・三本木原・曾利目・在家・大芝原・大芝東・南高根・北高根A・北高根B)の発掘調査開始。(終了47・12・9)
- ＊・10・9 上伊那郡南箕輪村内その2地区(4遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額514.4万円)
- ＊・10・9 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額497.2万円)
- ＊・10・11 上伊那郡辰野町内その1地区の発掘調査団結儀式と発掘調査打合せ会。(辰野町公民館)
- ＊・10・12 上伊那郡辰野町内その1地区3遺跡(五反出・越道・平出山の神)の発掘調査開始。(終了47・11・30)
- ＊・11・15 長野県中央道遺跡調査会第6回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- ＊・12・4 公団名古屋支社と昭和48年度調査体制・調査地域について協議。(公団伊那工事事務所)
- ＊・12・5 公団名古屋支社と伊那市内その2地区(4遺跡)・箕輪町内(3遺跡)・辰野町内その2地区(14遺跡)・諏訪郡富士見町内(7遺跡)について現地協議。
- ＊・12・15 上伊那地区中央道埋蔵文化財包蔵地出土の遺物展示会開催。(上伊那地方事務所大会議室)  
～・16 一般公開)
- ＊・12・16 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査報告会開催。(辰野町公民館)

- 48・2・28 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ◆ 3・16 上伊那郡飯島町内その3地区発掘調査報告会開催 (飯島町公民館)
- ◆ 3・18 飯田市内その2・その3、高森町内その2、松川町内発掘調査報告会開催 (下伊那教育参考館)
- ◆ 3・19 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区発掘調査報告会開催 (南箕輪村公民館)
- ◆ 3・20 飯田市内その2地区(17遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ◆ 3・20 飯田市内その3(石子原遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ◆ 3・20 下伊那郡高森町その2地区(5遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ◆ 3・20 下伊那郡松川町内(12遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ◆ 3・20 上伊那郡飯島町内その3地区(8遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ◆ 3・20 駒ヶ根市内(8遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ◆ 3・20 伊那市西春近地区(18遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ◆ 3・20 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区(9遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ◆ 3・24 駒ヶ根市内発掘調査報告会開催 (駒ヶ根市役所)
- ◆ 3・26 伊那市西春近地区発掘調査報告書開催 (伊那市福祉センター)
- ◆ 4・9 昭和48年度長野県中央道遺跡調査団結団式挙行 (上伊那地方事務所会議室)
- ◆ 4・12 伊那市内その2地区(4遺跡)の発掘調査委託契約成立 (委託金額2121.6万円)
- ◆ 4・12 上伊那郡箕輪町内(3遺跡)の発掘調査委託契約成立 (委託金額1214.4万円)
- ◆ 4・12 上伊那郡辰野町内その2地区(14遺跡)の発掘調査委託契約成立 (委託金額3480万円)
- ◆ 4・12 諏訪郡富士見町内その1地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立 (委託金額1065.6万円)
- ◆ 4・16 伊那市内その2地区、5遺跡(赤坂・ますみが丘・城楽・月見松・山本田代)発掘調査開始(終了48・7・31)
- ◆ 4・17 上伊那郡箕輪町内・諏訪郡富士見町内その1地区発掘調査打合せ会 (各教育委員会)
- ◆ 4・18 上伊那郡箕輪町内、3遺跡(南大原・堂地・中道)発掘調査開始(終了48・8・31)
- ◆ 4・18 諏訪郡富士見町内その1地区、5遺跡(手洗沢・長尾根・足場・母沢・甲六)発掘調査開始(終了48・7・11)
- ◆ 4・18 上伊那郡辰野町内その2地区発掘調査打合せ会 (辰野町教育委員会)
- ◆ 4・19 上伊那郡辰野町内その2地区、14遺跡(手長神社旧跡・若宮・荒神社久沢・樋口内城館址・大久保尻・神送・公家塚・牧垣外・大窪・堂ヶ入・藤の森・沢頭・沢入口・上の原)発掘調査開始(終了48・10・23)
- ◆ 4・23 長野県中央道遺跡調査会第7回理事会開催 (伊那市上伊那図書館)
- ◆ 5・22 長野県議会社会文教委員一行、上伊那郡箕輪町中道遺跡視察
- ◆ 6・4 公園名古屋建設局と、下伊那郡阿智村斜坑広場と、諏訪市内・富士見町内の発掘調査予定地域について現地協議 (県庁教育次長室、各公園工事事務所)
- ◆ 6・20 長野県教育委員一行、上伊那郡箕輪町中道遺跡視察

- 48・6・27 長野県中央道遺跡調査会一志顧問、上伊那郡箕輪町中道遺跡・諏訪市大熊城址現地指導
- ＊・7・2 下伊那郡阿智村斜坑広場その2(杉の木平)の発掘調査委託契約の成立(委託金額989万円)
- ＊・7・2 諏訪市内その1地区(7遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額1588.8万円)
- ＊・7・20 諏訪市内用地問題について公団・諏訪市・被買収者組合委員と協議(諏訪市役所)
- ＊・7・21 下伊那郡阿智村斜坑広場その2地区の発掘調査団結成(飯田教育事務所)
- ＊・7・23 下伊那郡阿智村斜坑広場その2地区の発掘調査打合せ会(阿智村教育委員会)
- ＊・7・25 下伊那郡阿智村斜坑広場その2(杉の木平遺跡)発掘調査開始(終了48・10・20)
- ＊・7・26 諏訪市内その1・その2地区発掘調査打合せ会(諏訪市役所)
- ＊・7・30 諏訪市内その1地区、7遺跡(清水・小丸山古墳・金山北・城山・大熊城址・荒神山・大熊道上)、同その2地区2遺跡(平林・本城)発掘調査開始(終了48・12・14)
- ＊・8・8 長野県小泉教育次長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡視察
- ＊・10・10 諏訪市内その2地区(2遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額888万円)
- ＊・10・10・11 長野県酒井出納次長、辰野町樋口内城館址・諏訪市大熊城址・阿智村杉の木平遺跡視察
- ＊・10・14 日本道路公団本社理事・名古屋建設局長等、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡視察
- ＊・10・16 恵那山トンネル斜坑貫通式に伴い、公団名古屋建設局長等下伊那郡阿智村杉の木遺跡視察
- ＊・11・18 長野県中央道遺跡調査会一志顧問、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡現地指導
- ＊・11・1 長野県中央道遺跡調査会第8回理事会開催。辰野町樋口内城館址遺跡視察(辰野町)
- ＊・11・13 昭和49年度諏訪地域用地買収状況について打合せ会(公団諏訪工事事務所・県高速道課・県諏訪中央道事務所・伊那教育事務所・同諏訪支所・県文化課、於諏訪合同庁舎)
- ＊・11・21 公団名古屋建設局と昭和49年度調査体制と発掘調査地区について協議(諏訪工事事務所)

## 2) 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に、公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で協議することになっている。その結果、記録保存と決定され、発掘調査が必要となった場合、公団は、県教育委員会に委託して実施されることになっている。そのため、県教育委員会は、公団と現地協議などの事務接衝のうえ、調査遺跡の発掘面積、調査費、調査期間、調査方法等が決められる。その後、公団から調査依頼、県教育委員会から調査受託の文書の往来があつて、つぎのような発掘調査委託契約が締結されている。



## ア 発掘調査委託契約書

- |           |   |
|-----------|---|
| 1 委託事務の名称 | 中央道埋蔵文化財発掘調査（箕輪町内）                              |
| 2 委託期間    | 昭和48年4月12日～昭和49年3月20日                           |
| 3 委託金額    | 12,144,000円也                      ¥12,144,000円也 |
| 4 委託金支払場所 | 日本道路公団名古屋支社                                     |

日本道路公園（以下「甲」という。）は、長野県教育委員会（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2 甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受理した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3 乙は、発掘調査の実施にあたり作業箇所作業表示旗をかかげ発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

4 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B5版20部）を作成し委託期間内に甲に提出しなければならない。

5 乙は、費用精算調書を作成し、委託期間満了後1箇月以内に甲に提出しなければならない。

第6条 この契約に基づく報告書、費用精算調書其の他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

第8条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第5条第4項に規定する報告書を提出しないときは甲は遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額に対して年8.25%の割合で計算した金額を徴収することができる。

2 甲の責に帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対して遅滞日数に応じて年8.25%の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条 乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は預書の委託金額の10分の1を違約金として甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条 この契約を変更する必要があるときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名の上、各自1通を保有す。

昭和48年4月12日

委託者 名古屋市中区栄4丁目1番1号(中川ビル11~12階)

日本道路公団名古屋支社

支社長 平野和男

受託者 長野県教育委員会

教育長 小松孝志

#### イ 長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に出ることになっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度頭初の理事会において、発掘調査の受託を決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約・昭和48年度役員・斜坑広場その2地区調査団組織はつぎのとおりである。

#### (7) 長野県中央道遺跡調査会規約

第1条 この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道建設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用方法を研究することを目的とする。

(名称)

第2条 この調査会は長野県中央道遺跡調査会(以下「調査会」という。)と称する。

(組織)

第3条 調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

(1) 会長 1名 (2) 理事 若干名 (3) 監事 2名

事務所)

第4条 調査会の事務所は、会長が別に定める事務所内に置く。

(会長及び理事)

第5条 会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

2 理事は次に掲げるもののうちから会長の委嘱した者をもってあてる。

- (1) 学識経験者
- (2) 関係学会の役員
- (3) 関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者
- (4) 関係市町村教育委員会の教育長
- (5) 関係行政機関の職員  
(会長及び理事の職務)

第6条 会長は調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2 理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

- (1) 調査会の運営に関すること。
- (2) 発掘調査の受託に関すること。
- (3) 規約の改正に関すること。
- (4) その他必要な事項

3 会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代行する。

(理事会の招集)

第7条 理事会は必要に応じて会長が招集する。

2 理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3 前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

4 理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(顧問)

第8条 調査会に顧問若干名を置くことができる。

2 顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3 顧問は会長の諮問に応ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

(監事)

第9条 監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

2 監事は、調査会の会計を監査する。

(役員の任期)

第10条 役員の任期は一年とする。ただしその職にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

(幹事)

第11条 調査会に幹事を置く。

2 幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。

3 幹事は、会長の命を受け調査会の事務を処理する。

(調査団)

第12条 調査会に調査団を置く。

2 調査団の組織及び運営について別に定める。

(事務の管理執行の規定)

第13条 調査会の事務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

(経費)

第14条 調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

(会計の区分)

第15条 調査会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

2 調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

(出納及び現金の保管)

第16条 調査会の出納は、会長が行なう。

2 調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

(決算)

第17条 会長は、会計年度終了後1ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

(財務に関する事項)

第18条 この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

(委任)

第19条 調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほか会長がこれを定める。

(付則)

この規約は、昭和45年7月22日から施行する。

イ) 昭和48年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿 (昭和48年11月現在)

顧問	一志 茂樹	(県文化財専門委員)			
会長	小松 孝志	(県教育長)			
理事	金井喜久一郎	(県文化財専門委員)	米山 一政	(県文化財専門委員)	
	藤沢 宗平	(県文化財専門委員)	藤森 栄一	(長野県考古学会会長)	
	原 嘉藤	(信濃史学会理事)	小泉兵次郎	(県教育次長)	
	飯島 了巳	(県文化課長)	馬場 昌人	(飯田教育事務所長)	
	瀬尾 忠幸	(伊那教育事務所長)	羽生 保吉	(下伊那地区教委協議会長)	
	坂井 喜夫	(上伊那地区教委協議会長)	小松 稔	(諏訪地区教育協議会長)	
	小林 彰	(阿智村教育長)	松沢 一美	(伊那市教育長)	
	河手 貞則	(箕輪町教育長)	熊谷 大一	(辰野町教育長)	
	小林 繁治	(富士見町教育長)	中村 文武	(諏訪市教育長)	
	倉田 利久	(下伊那教育会長)	木下 衛	(上伊那教育会長)	
	藤森 純一	(諏訪教育会長)	林 茂樹	(長藤小学校長)	

監事	岡沢 幸朝	(県文化課長補佐)	浦野 孝之	(伊那市社会教育課長)
幹事	金井 汲次	(県文化課文化財係長)	泉 勇一郎	(県文化課文化係長)
	西沢 清	(県文化課主査)	浅川 欽一	(県文化課主査)
	矢島 太郎	(県文化課主任)	堀内規矩雄	(県文化課主事)
	佐藤 文武	(飯田教育事務所総務課長)	佐藤 陸	(飯田教育事務所主任)
	下平 久雄	(飯田教育事務所主事)	矢野 公一	(伊那教育事務所総務課長)
	松沢 成海	(伊那教育事務所社会教育課長)	久保田秀明	(伊那教育事務所主任)
	麻生 弘明	(伊那教育事務所主任)	鈴木 長治	(伊那教育事務所主事)
	今村 善典	(県文化課指導主事)	桐原 健	(県文化課指導主事)
	山田 瑞穂	( )	伴 信夫	( )
	宮沢 恒之	( )	丸山聡一郎	( )
	岡田 正彦	( )		

ウ) 長野県中央道遺跡調査会調査団 (箕輪班)

調査団長	大沢和夫		
調査主任	伴 信夫	今村善典 (総括)	
調査員	中村竜雄	木下平八郎	郷道哲章
	片桐孝男	酒井幸則	三浦孝一
	田畑辰雄	竹村和紀	長沼英光
調査補助員	高桑俊雄		

エ) 発掘調査遺跡の状況と面積

遺跡名	現況	遺跡の状況	全体面積	用地内面積	調査面積
南大原	畑	帯無川と深沢川にはさまれた台地上にあり縄文中期の遺物を包含する。	2,000m <sup>2</sup>	500m <sup>2</sup>	100m <sup>2</sup>
堂地	畑 水田	深沢川右岸の台地上にあり、土師後期の住居址が確認されている。集落跡である。	21,800	21,800	4,360
中道	水田	深沢川左岸、堂地遺跡に相対する台地上にある。土師後期の遺物を包含する。	16,250	3,000	600

3 発掘調査開始までの準備

調査団本部を飯田より辰野へ移転したことによる辰野本部の整備、調査地区が4地区に分散したことにより資材の「配等」に多くの時間を当てねばならなかったが、調査開始までの主な仕事は次のようであった。

- 4月5日 文化課で調査打合せと主任会
- 4月6日 資材調達・資材配分（伊那・箕輪・辰野・富士見の各地区に分ける）
- 4月7日 本部整備・飯田より資材の運搬
- 4月9日 調査団結団式を上伊那地方事務所で行う。
- 4月10日 調査員会・各班ごとの調査打合せ会
- 4月11日 調査主任会 調査打合せ
- 4月12日 調査区内遺跡巡検 伊那―箕輪―辰野（伊那工事事務所庶務課長同道）  
箕輪町教委連絡
- 4月13日 本部・宿舎整備 資材整理
- 4月14日 本部整備 資材現地への運搬
- 4月16日 伊那発掘開始状況見学
- 4月17日 本部整備 箕輪町教委打合せ会
- 4月18日 朝8時半、発掘現場中道遺跡へ調査団集結する。箕輪町川手教育長の激励挨拶後、調査団  
総括主任の作業上の説明などがあり、調査が開始された。

## 2. 調査の実施と経過

### 1) 調査の期間と経過

箕輪町地区では既に工事が始められており、発掘調査は全て調査対象遺跡の両側でブルドーザーがうなりをおけているという中で行われた。中道遺跡は契約時の調査面積は狭く小遺跡と考えていたが、表探を行ってみると予想外に広く、その10倍近い面積を調査する結果となった。遺構は二群に分かれることがわかり、南東部を中道遺跡中道、北西部を同宮西地籍と呼ぶことにした。また、堂地遺跡大原・狐塚地籍が土取場となっていることから工事が急がれ、跡地を水田化するため施工者の手によって表土を全部はぐとのことであった。従って調査者は表探によって遺跡の範囲を確認し土盛部を指定した上、ブルドーザーの後を追って遺構の確認地点を保護するという便法を取らざるを得なかった。南大原遺跡にしても調査区周辺は既に盛土が行われ、凹地になった遺跡を工事用トラックが巻き上げる土煙りの中で発掘するという状況であった。

後記するような多くの遺構を調査し得たことは幸いであったが、発掘費用も調査期間も予定を軽く超過してしまっただけでなく、調査員の不足に加え工事者に引渡しをせられる、後半では早天で土色の識別に苦勞する等困難の連続であった。許される範囲内で最善を尽した心算であるが、調査方法の上で問題が多々あったことを反省している。記して、お詫びしておきたい。各遺跡の調査期間・実働日数は次の通りである。

中道遺跡	調査期間	4月18日～7月10日	実施日数	71日	遺物整理・実測	
堂地遺跡	〃	6月19日～8月31日	〃	61日	図作成	9～3月
南大原遺跡	〃	7月11日～7月12日	〃	2日	報告書作成	

## 2) 発掘調査協力者

作業員募集については箕輪町教育委員会にお願いしてあったため、多くの方々の参加、御協力を頂くことができた。また、農村地帯であるため地元の方が多く、実直な作業ぶりであったため円滑に調査を終了することができた。記して感謝の意を表わしたい。

### 箕輪町

有賀 仲人	有賀二三子	有賀丑之助	有賀 勝	有賀 員雄	井沢チエ子	井沢千代子
井沢ふき子	井沢 幸子	泉沢 好子	泉沢 益子	上田 政治	浦野はる子	浦野とみ子
浦野たか子	太田 嘉世	大槻 英	大槻 道久	大槻 友成	大槻はな子	大槻くわ代
大槻 亀	大槻まさえ	金沢 阿詞	唐沢 政国	唐沢きみ子	唐沢加寿男	唐沢 勝定
唐沢 由人	唐沢はる子	唐沢 賢造	唐沢と志江	唐沢 義秋	唐沢けい子	唐沢 菊江
唐沢とし江	唐沢 初子	唐沢 禮子	唐沢 操	河手みはる	菊池はつえ	北川 間吉
北川あや子	北川 順吉	北原 明	熊谷 昇	桑沢ゆき子	小原 正子	小林 全一
柴 貞子	柴宮 依作	清水 一声	清水今朝市	清水博之助	白鳥 清重	白鳥 弘
白鳥テル子	白石 明子	城倉 栄子	竹入千鶴子	竹入 春江	田中 豊治	田中 信男
田中 昭子	田中今朝雄	田中世喜子	田中 勉	田中ちとせ	田中 惇子	知野 重良
千村 理重	千村みさを	千村 源吉	土橋ふみ子	土橋 文雄	中島 和計	根橋 長人
花園 おわ	原 昭夫	馬場 晴一	馬場はな子	樋口なかえ	藤田 忠人	藤田 高一
藤田あき子	藤森テル子	増沢 拡子	増沢八百人	増沢 一歳	増沢 清志	増沢 稔
増沢さかえ	松田五十鈴	丸山よし江	丸山 孝雄	丸山とし子	宮沢伊佐勇	宮下喜与一
宮下 世志	三浦ふじの	向山 かく	毛利 政巳	矢沢 喬治	矢島伝三郎	

### 辰野町

小沢 たい	山内志賀子	丸山 雅子	百瀬 正巳	
南箕輪村				
伊藤美智子	出羽沢節子	永井 和子	毛利 長子	矢ヶ崎達二
長野市				
鈴木御恵子	丸山 優子			

## 3) 現地指導者・見学者

発掘調査にあたっては6月27日、8月9日、一志茂樹博士の二度にわたる現地視察と遺跡の性格に関する御講演を通じ、また、6月22日には故藤森栄一氏からは個々の遺構に接して多大の御教示、御指導を頂いた。県内でも有数の大遺跡の発掘となったため多数の方々の視察・見学を受けているが、主な方は次の通りである。(敬称略)

研究者	倉田芳郎教授・文化庁亀井正道技官・阿部義平技官・奈良国立文化財研究所高島忠平・小笠原好彦・群馬県教委井上唯雄主事・黒坂周平・米山・取・向山雅重・友野良一・林茂樹・中島豊晴・倉科明正・宮坂光昭・柴登己夫・会出通・長崎元広・飯島洋・矢崎勝郎・樋口昇一・神村透
日本道路公団	本社第二工事課長・名古屋支社文化財担当主事・伊那工事事務所長・庶務課長ほか
県関係	松田晴男県議・県教育委員・教学指導課指導主事・伊那教育事務所長・同総務課長・同主事・同各主事
箕輪町当局	町議会建設委員会・教育長・教委事務局主事・公民館関係者
上伊那郡各機関	上伊那文化財専門委員会・各部落婦人学級・長岡新田長寿会・末亡人協議会
学校関係	荻原貞利教頭・箕輪南小学校生徒(先生引率)

### 3. 発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡発掘調査は、工事により破壊される遺跡・遺構を工事着工前に調査し記録保存することを目的とする緊急発掘である。そのため発掘調査は中央道用地内に限定される。

事前に分布調査を行ない、その遺跡の広がり時期は一応確認されている。調査方法の細部は「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針」という小冊子を参照されたいが、その概要を記すと遺跡記号の頭2字は遺跡名から、末尾にはその遺跡の中において中央道がどの部分を通るかによって4区分し、次のO～Cの記号を付した。O—全面かかるもの、A—遺跡の頂部がかかるもの、B—中央部を横切るもの、C—先端部にかかるものの4区分がそれである。用地内の遺跡全面にグリットを設定することを原則とし、小遺跡ややむを得ない事情のある遺跡は適当にトレンチを入れたものもある。グリットの設定は2m間隔の基準方眼を設定し、中央道の長軸方向に01～99の2桁の数字を用い、それに直交する方向にA～Yの25字のアルファベットを用いた。その敷え方は名古屋を背に東京方面に向かって立ったとき、左から右へ01～99とし道路のセンターラインを50とする。アルファベットは中心杭のうち、遺跡内で最も名古屋寄りを起点として東京方面へABC……とする。A～Yの25字で50mをおさえ、その範囲を地区としておさえ、それもABC……と表示する。これによって、25地区1250mがとれる。グリット地点は「NCB BH50」というように表示する。これは中道遺跡のB地区H50地点ということになる。このようにグリットを設定してから適宜にグリットをほり、遺構が確認されたら周囲を広げていく方針を取った。

調査中の記録としては、「調査日誌」「調査記録」「住居址調査カード」を使用し、また、調査員の努力によって「調査速報」を週刊で発行し、作業員の方々に理解してもらった。(伴)



## Ⅱ 箕輪町の概況

### 1. 箕輪町の環境

箕輪町は、長野県の南部地域、上伊那郡の北部に位置し、中央部を南流する天竜川によって中箕輪と東箕輪とに分かれている。西方中箕輪は、木曾山脈北部の経ヶ岳山塊に属する黒沢山(2126)、烏帽子、桑沢山(1538)に続く山地帯と、その山麓に形成された雄大な扇状地とそれに続く河岸段丘を経て天竜川に達し、東の河岸段丘から山麓に形成される小規模の扇状地をすぎると、一気に伊那山脈の前山の高原から高雄山(1205)、三ツ峰(1391)に連っている。面積やく85.5km<sup>2</sup>、東西やく18km、南北やく8kmの地域で、昭和47年末現在人口やく16,800人を数える。

この地は、古くは美和郷の中にあり、鎌倉時代には箕輪郷と呼ばれていた。箕輪町地内は、江戸時代箕輪33ヶ村のうち、沢・大出・八乙女・松島・木下・下古田・中原新田・富田・中曾根・三川町・福与・長岡・北小河内・南小河内である。明治2年に沢・大出・八乙女・下古田・上古田・中原新田・松島・木下・富田の9ヶ村合併して箕輪町となり、三川町・福与・長岡・南小河内・北小河内の5ヶ村が合併して東箕輪村となっている。明治22年に福与・三川町は合併して箕輪村となった。昭和30年、中箕輪町、箕輪村、東箕輪村の3ヶ村が合併して箕輪町をつくり、その後、昭和31年に二軒家部落を伊那市に編入させて今日に至っている。

伊那盆地は、天竜川の上流にあたり、西側の木曾山脈(中央アルプス)、東側の赤石山脈の間にあって、大きく細長い盆地である。北は辰野町から南は飯田市南部の天竜峡まで長さ80kmに及んでいる。最北端の辰野町付近では幅3kmに過ぎないが、最も幅の広い所は南箕輪村から伊那市北部にかけての一帯で、その幅やく13kmをはかる。北部地域(辰野町～伊那市北部)を見ると、辰野町を頂点として鋭角な三角形状に広がっている。箕輪町はそのほぼ中間に位置しているため、北部から南部にかけて急激にその幅を広めている。すなわち、北部では4km、南部では7kmである。第4紀を通じてたえず沈降してきている。それに反して盆地周辺の山地はたえず上昇してきている。山地が急激に上昇するとき、その山地は激しく浸食され、そして生じた礫砂は、山の前面に押し出されて堆積が進む。急激に上昇する山地の山麓部には必ず扇状地が発達すると言われている。

上伊那地方において扇状地が最も顕著に発達している所は、辰野町から伊那市間の天竜川右岸地域である。西の木曾山脈の北部山地の経ヶ岳以北の山麓に見られる。これらの山地を源として東流する河川を見ると、北から北の沢川、桑沢川、深沢川、帯無川、大泉川、小沢川があり、北ほど流路が短かく、南ほど長い。これは、西側山地が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路の長さに比例して、山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。箕輪町の南部を東流する帯無川から、南箕輪村の中央部

を東流する大泉川によって形成された大泉扇状地は最も雄大なものである。従って、箕輪町の扇状地は、大泉扇状地の一部と、その北にある帯無川の扇状地がこれに次ぎ、北部の深沢・桑沢川の扇状地は小規模化している。山麓を見ると、古世層に属するチャートや礫岩層を混在する傾家変成岩類に属する片状ホルンフェルス帯に覆われ、伊那市北部を西走する権兵衛峠断層に直交する断層線が北走しているためケルンバットが並列し、その直下に崖錐面や小規模な扇状地が重複している。またこの盆地地域は、天竜川をはさんで両岸に見事な河岸段丘の発達している所でもある。前述の基盤の上下運動に支配されたもので、はじめは平坦であった所が徐々に周辺部が上昇し、中央部が下降するため平坦面はしだいに湾曲する。この湾曲は逆断層を伴い易く、表層を覆う礫層は差別浸食を受けて段丘が形成される。この運動のくり返しによって現在のような何段もの河岸段丘と、船底形の盆地地形が形成されたものである。上伊那郡の段丘は6段が数えられ、その模式的なものとして竜西地域では、荒神山面、大泉面、神子柴面、南殿面、と低位段丘に分類されている。中箕輪地籍でそれを見ると、荒神山、丸山面にあたるものは見当らず、中曾根、中原、八乙女を結ぶ大泉面、中央道通過地から東側下方の神子柴面、現在の木下・松島の街村の並ぶ、国道153号線と飯田線の通過する南殿面とその下方天竜川の氾濫原に接する最下位段丘とが規則的に並んでいる。天竜川の東側は、氾濫原に接る段丘面から上位段丘の規模は小さく、山麓の扇状地との識別が困難なくらいで山地帯に続いている。その中央部を一の沢川が西流し、その谷をはさんで、北に金剛化峰、南に萱野高原が並び、その奥は伊那山脈に続く山地帯である。

中箕輪地籍について見ると、集落の最も密集している所は、木下、松島、から北大出に続く低位段丘と神子柴面の段丘端とその崖下である。段丘崖下に湧く豊富な水と、平坦地形は、古くからここに人を定着したであろうし、古くは段丘上を北走する春日街道や、崖下を横走する三州街道筋でもあり、大正年代に開通した鉄道もこれと平行して走るため街村が発達している。この街村は北大出から北へ行くと、飯田線は低位段丘を走るため、国道沿いと沢川周辺とに分離している。この街村集落を除くと、段丘上や扇状地の一面に集村形態をなしている。その一つは、経ヶ岳山塊の山麓に並ぶ集落で、南から富田・上古田・下古田であり、や、下方の中曾根・一の宮・中原・八乙女である。中曾根を除いては、帯無川や深沢川沿いに発達している集落である。これらの集落は、古くから発達したもので、明治以前から独立した村を形成していたものである。これらの集落とや、異った形態を示しているものは原町である。西天竜水路沿いに直線的に並ぶもので、古くは扇状地のため水利便がよくなかった広い台地であったが、西天竜水路が開鑿されてから順次集落化されたものであろう。

辰野町から伊那市にかけての広大な扇状地は、元来灌漑用水に恵まれず山林・原野が多く、耕地も川沿いの一部を除いては、畑地が大部分で養蚕・畑作農業を中心とした経営によるほかなない地域であった。江戸時代において天竜川上流からの引水計画を立てたものの、実現の見込みが立たないまま長い年月が過ぎたと伝えられている。明治39年にいって関係5か町村によって西天竜開電期成同盟が結成され、大正8年になって西天竜耕地整理組合が設立のはこびとなっている。水路の工事は、大正11年に着手され昭和3年に幹線水路が完成している。この年から開田工事に着手し、昭和14年に完成している。幹線水路の工事は前後7年の歳月を要し、延々26kmに及び、開田工事も12年の年月を経て、1200haの水田開発を実現している。現在もなおこの水路には潤々と水を湛え、この地域を潤している。この水路を境にして、上方では河川の近くや、沢利用の水田地帯を除いては、畑地と林野が多く、水路の下方は延々と耕地整理化さ

れ水田が続き、上伊那地区の代表的な水田地帯となっている。

中央自動車道は、南側の南箕輪村から西天竜水路の上方沿いを平行して通過し、中箕輪の深沢川右岸の堂地地帯で水路と交差し、その下方に位置する段丘崖端を経て辰野町に通じている。

## 2. 箕輪町の遺跡

### —中箕輪地区を中心として—

箕輪町は、天竜川をはさんで典型的な河岸段丘が形成され、竜東地区には恵まれた広大な扇状地や段丘面が形成されているため、遺跡分布の濃厚な所として知られている。とくに、上伊那郡唯一の前方後円墳の「王墓」と、その周辺の数基の円墳と、天竜川を隔てて対立する長岡古墳群との関係、昭和27年からの土地改良工事によって発見された「箕輪遺跡」—木下の渋田—久保下地帯—の多量な弥生式土器と共に出土した、木器・木棺は、古代水田跡解明のための貴重な資料である。昭和47年の農業構造改善事業に伴う「北城遺跡」緊急発掘調査の結果、弥生後期の大集落の一面と中世火葬墓群の発見など見られ、この地域の特色の一端を物語っている。

この町の遺跡を概観すると、竜西の中箕輪地帯には埋文包蔵地やく60、古墳は消滅したものを含めて16基あり、竜東の東箕輪地帯には埋文包蔵地60余と、古墳は消滅したものも含め28基が存在していた。地形の差異が大きく、その分布状況も異っている。中箕輪では、経ヶ岳山麓と段丘種子柴面の先端部とその崖下、さらに最下位段丘に集中か所が見られる。これに対して東箕輪地帯では、山地が天竜川近くまで迫っているため、天竜川に接する段丘面や扇状地に集中している。一の沢川によって形成された長岡扇状地に最も多く、南の小河川による扇状台地の三日町・福与地帯に多い。密度は断然東箕輪の天竜川沿いの台地上が最高であることは、分布図(図1)を見れば明瞭であるが、さらに、東箕輪の遺跡は全部全国遺跡地区に登録されたものであるが、中箕輪の場合は、遺跡地図収録のものは30、信濃考古総覧記載のものと、昭和44年農振地域等の分布調査によるものを含めて60余であるので、いかに東箕輪地帯の密度が高いことがうかがわれよう。中央自動車道は、中箕輪地帯の扇状部を横切っているので、遺跡の紹介は中箕輪地帯に限ることとする。

中箕輪地帯は、前述の環境で説明したように現在各所に形成される集落との関連が非常に濃く、経ヶ岳山麓山麓に並ぶ遺跡群、中央の広大な扇状地は概してその分布が薄いものの、扇状地を切って流れて川沿いの遺跡、段丘種子柴面の先端部・その崖下と低位段丘の遺跡群に分けて説明する。

#### 1) 経ヶ岳山麓山麓の遺跡

山麓に並ぶ小扇状地は、それぞれ独立した遺跡になっている。南から富田・一の宮・上古田・下古田・長田の集落が形成され、その集落の周辺にそれぞれの遺跡が分布している。一の宮A遺跡(9)で住居址の存在が確認されたほかは調査の進んでいない地域である。縄文中期のほか、土師・須恵・灰釉陶器片の

出土の多い地域でもあり、今後の調査が期待される地域といえよう。

## 2) 扇状地川沿いの遺跡

扇状地全体では遺跡の分布はや、稀薄であるが、南より北の地域の方がその分布は多めである。遺跡の立地を見ると、中曾根の2遺跡(29・30)を除いては殆んど川沿いの台地であることは興味深い。すなわち、帯無川沿いに並木下・日向(31・32)であり、深沢川沿いは大原・竜ヶ崎・大原坂頭・五輪・北川遺跡(3・30~37)であり、桑沢川沿いは長田東・沢北原・大原遺跡(38~40)である。山麓の遺跡を含めるとそれぞれの川沿いに列状に並んでいる。道路工事中に縄文中期の住居址数基が確認された大原坂頭(33)を除いてはその実態が把握されていないが、今回の発掘調査によって大成果をあげた堂地(含大原)・中道遺跡は、この範疇に入るものであれば、ほかにも意外に大きな遺跡が眠っているのではなかろうか。

## 3) 段丘先端部の遺跡

段丘種子菜面の先端部を見ると、南北に列状に並ぶ遺跡群が見られ、丸山・木下・王墓の古墳も立地している。この一帯は、縄文時代から弥生・古墳時代以後にかけての複合遺跡地帯と考えられる。昭和46年農業構造改善事業に伴う緊急発掘調査によって20基以上の弥生後期住居址と、中世火葬墓群が確認された北城遺跡(44)や、縄文前・中・後・晩期のほか弥生中・後期から、土師・須恵片を多量に出土している上の林遺跡(45)や上伊那郡唯一の前方後円墳の松島王墓と、その周辺の王墓付近遺跡等は、この段丘先端の濃厚な遺跡分布の一端を示しているであろう。大出地籍の大出・がんぜん・稲荷山(51~53)遺跡は表面採集で多くの遺物が拾集できる所でもあり、中道遺跡にも近い所であるので、大集落の存在が予想されよう。

## 4) 低位段丘(沖積段丘)の遺跡

天竜川の氾濫原に接する最低位段丘にあたり、分布する遺跡数こそ少ないが、久保下・苫谷・馬場・御室田(56~59)遺跡は、かの有名な箕輪遺跡で、それぞれ多量出土を示している。この一帯からは縄文中・後・晩期のほか弥生中・後期から、土師・須恵にいたる遺物の出土も多く、丸木舟・木製櫓・山下駄木製農具・木器や多量の木炭が発見された所である。この遺跡は、南箕輪村塩の井地層にまで続く大遺跡と推定されている。この発見は、昭和27年の土地改良事業の折多量出土したもので、地元好学者によって発見されたものである。学術的発掘調査が実施されていないのは惜しまれるが、古代水田址の存在を証しづける遺跡であり、段丘上に立地する古墳群との関連深い重要な遺跡地帯であろう。大清水(61)遺跡からは、木製の木串が発見され、古代人の信仰を示す遺物のひとつとして注目されている。北方には竜水社(62)遺跡だけであるが、今後所在の確認されるものがあるであろう。(今村)

# 英輪町全圖



第1圖 英輪町地区道路分布圖

第1表

箕輪町地区遺跡一覽表

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代						弥生時代		土師	須恵	灰釉	中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前	中					
①	南大原	中箕輪大原					○									
②	堂地	〃 堂地				○	○					○	○	○	○	
③	大原	〃 大原				○	○	○	○			○	○	○		
④	中道	〃	○				○					○	○	○	○	
5	土取場	〃 富田					○				○	○	○			
6	ソレツカ	〃 〃					○					○	○			
7	北垣外	〃 〃					○									
8	一の宮B	〃 一の宮					○									
9	一の宮A	〃 〃					○	○					○			
10	五斗山	〃 上古田					○									
11	上古田南原	〃 〃					○									
12	垣外	〃 〃					○									
13	オザキ	〃 〃					○									
14	下市田南原	〃 下古田					○					○		○		
15	侍墨	〃 〃					○									
16	深沢北	〃 〃					○				○					
17	金原	〃 〃					○					○		○		
18	寺田	〃 〃										○				
19	犬吠	〃 〃					○									
20	堂前	〃 〃					○					○	○	○	○	
21	上溝	〃 〃					○					○	○	○		
22	ガラン	〃 〃											○			
23	北原	〃 長田					○						○			
24	県営苗圃	〃 〃					○									
25	長田南原	〃 〃					○									
26	長田	〃 〃					○	○				○				
27	長田北原	〃 〃					○					○	○	○		
28	榎の木沢	〃 富田			○		○					○	○	○	○	
29	中曾根	〃 中曾根	○				○							○		
30	下原	〃 〃					○									
31	並木下	〃 木下					○									

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代					弥生時代			土師	須恵	灰釉	中世	備考		
				草	早	前	中	後	晩	前	中						後	
32	口向	中笑輪中原					○											
33	大原坂頭	＊ 上古田					○											
34	竜ヶ崎	＊ 下古田					○											
35	十郎	＊ 下古田					○					○	○	○	○			
36	五輪	＊ 八乙女					○					○	○	○				
37	北川	＊ ＊					○						○					
38	長田東	＊ 長田			○		○					○						
39	沢北原	＊ 沢上					○											
40	大原	＊ 大原				○	○					○	○	○				
41	丸山	＊ 木下										○						
42	猿楽	＊ ＊										○						
43	南城	＊ ＊										○	○	○	○	○		
44	北城	＊ ＊										○	○	○	○	○		
45	上の林	＊ ＊				○	○	○	○		○	○	○	○				
46	藤山	＊ 松島					○											
47	中山	＊ ＊					○											
48	白杵	＊ ＊					○											
49	大道上	＊ ＊					○											
50	王墓付近	＊ ＊					○		○								○	
51	大出	＊ 大出					○					○	○					
52	かんぜん	＊ ＊					○					○	○					
53	稲荷山	＊ ＊										○	○	○				
54	ハギハラ	＊ ＊					○					○						
55	田中城址	＊ 木下															○	
56	久保田下	＊ ＊																
57	苦谷	＊ ＊																
58	馬場	＊ ＊						○	○	○		○	○	○	○			水田址
59	御室田	＊ ＊																
60	鍛冶坂下	＊ ＊								○		○		○				
61	大清水	＊ ＊					○		○		○	○	○					
62	竜水社	＊ 松島										○	○					
1	王墓	＊ ＊										○	○					前方後円墳

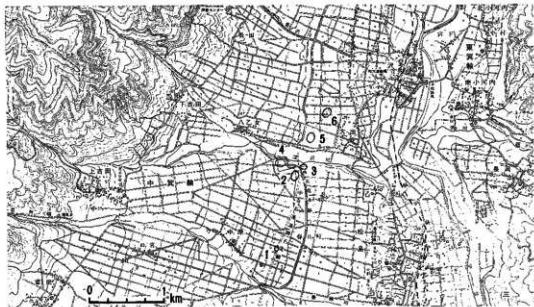
### Ⅲ 調査遺跡

#### 1. 南大原遺跡

##### 1) 位置

南大原遺跡は上伊那郡箕輪町中箕輪大原11260～663番地にある。(図2・4)天竜川の形成した河岸段丘上に支流帯無川が緩傾斜の原状地を発達させているが、遺跡はその扇尖部に立地する。北方の深沢川、南方の帯無川が田切地形を形成する台地上にある。標高755m、帯無川との距離は約500mあり畑・桑園となっている。

中央道は遺跡東端を通過する。他遺跡の調査が手間取ったため工事が進み、周囲は既に土盛され遺跡範



第2図 箕輪町地内中央道用地内遺跡分布図(1:50000)(1.南大原遺跡 2.堂地遺跡大原地籍  
3.堂地遺跡電地地籍 4.堂地遺跡孤塚地籍5.中道遺跡中道地籍 6.中道遺跡宮西地籍)



面に指定した狭い面積が残されていた。グリットはセンター杭ST A61700mを起点AAとしてAVまで、25～40の幅で設定した。

## 2) 遺跡と遺物

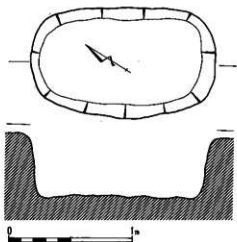
調査の結果、土壌1基が検出された(図3)。150×90cmの長楕円形の土壌で、深さ53cm、底は平坦である。壁・床は礫を含む砂質ロームで不良であり、遺物は出土しなかった。

## 3) まとめ

南大原遺跡では土壌1基確認されたのみで、他のグリットから縄文土器小破片1点と中世陶器片1点が出土した。分布調査の際、加曾利E式土器片、黒曜石片等が採集されている。従って、本遺跡の中心部は西上方の緩やかな傾斜地にあるものと思われる。今回の調査で出土した2点の遺物は、いずれも、磨滅しており上方からの流れ込みと思われる。

土壌の時期は把握できなかったが、用地内に重要な遺構がなかったことは遺跡保存の観点から幸いであった。

(酒井幸則)



第3図 南大原遺跡土壌1 (1:30)

## 2. 堂 地 遺 跡

### 1) 位 置

遺跡は上伊那郡箕輪町中英輪8350番地他にある(図2・4の2・5の1・2、写1・2)。菅無川と深沢川に開析された台地は西方山麓では上古田部落を乗せる扇状地となるが、遺跡はその扇端部に近く位置し、東への緩傾斜面にある。北側は深沢川との比高50~60mの急な段丘崖となっている。

中央道通過地は堂地遺跡大原遺跡の一部と堂地地籍であるが、この両遺跡は西天電用水を狭むだけで地形的にも同一段丘にあり一連の遺跡と考えてよい。狐窪地籍はこれより5m程低い、深沢川によって形成された段丘面にある。この三地籍の標高は740~755mの間にある。大原地籍は畑・果樹園で、堂地地籍は水田・畑・狐窪地籍は畑・桑畑であった。

大原地籍・狐窪地籍は土取場となり跡地が水田化されるため工事が急がれ、施工者の手によって表土を全面はぐことになった。そのため事前に表探によって遺物散布区を確保し、ブルドーザーが稼働してから後を追って遺構の発見に努め保護する手段を取った。従って、グリットは設定できなかったが、全面発掘に近い調査が可能になった。堂地地籍は用地内で土盛する必要から路線内両側にグリットを設定し、遺構を確認した上、調査日数を短縮する必要上ブルドーザーにより表土をはいだ。

地層は大原地籍では30~120cmの耕土黒土層下に削土部ではバミス塊が散在する7mに及ぶローム層があり、旧深沢川の河床かと思われる礫層が東西に走るのが観察された。堂地地籍は各水田の西半は耕土下直ちにロームとなり遺田時に遺構が破壊されており、東側の掘土部は保存されていた。

### 2) 大原地籍の遺構と遺物

#### ア. 平安時代の住居址

##### (1) 1号住居址(図8・36・176、写3~7)

遺構 2号住居址の東側12mにあって、住居址群の中では2号住居址とともに台地の小高い場所に位置する。東西3.95、南北3.60mの隅丸方形である。主軸方向はN 65°Wで壁と床面は全体に軟弱である。カマドは西壁中央部にあってロームを掘り残し軸の一部に利用する石組粘土カマドである。カマドの保存状態は良いが焼土は殆どなかった。柱穴と思われるピットは住居址内では確認できず、北西隅に貯蔵穴と思われるものがある。カマドの左前方で内黒土師環が床面や浮いて出土した。覆土は黒馬色土である。

遺物 土師器、須恵器(図36)、鉄器(176)が出土している。土師は壺(5・11)、小形壺(4・9・12)環(2・3・8)があるが、小形壺4はロクロ引によるもので、12は巻上痕が下半部に目立つ。

環は糸切底である。須恵器は環蓋(1・6・7)の他破片が出土している。鉄器は刀子(176図20)と鎌片が出土している。刀子は床面上から鎌は東壁上から出土したものである。

この住居址は中道Ⅱ期に属する。

(三浦)

#### (2) 2号住居址(図8・36・37、写8-16)

遺構 1号住居址の西12mにあり東西4.10m南北3.90mの方形の竪穴住居址である。主軸方向はN66°Wで壁は良く保存されている。床面は特にカマド付近が堅硬であるが全般に良好であった。周溝は北壁西側と北西隅を除き全体にめぐらされている。周溝中には径5-10cm、深さ10cm以下の小ピットが多数確認されたが壁の構造を知る資料となり得よう。竪穴内には柱穴はないが、カマドは西壁中央を挟り込んで構築された石組粘土カマドで袖に土器片を貼っていた可能性もある。特記すべきことはカマドに煮沸用の長胴甕がかけられた当時の姿で出土したことである(図8の4、写13)

壁外には東壁に3、南壁に5、西壁に5コの柱穴があるが、住居に伴うものも含まれると考える。

遺物 土師器では甕(37図3・5)、小形甕(図2)は木葉底で、環(37図1、写11)は花状の暗文を付し、底部は糸切後外周磨きされ「豊足」という所有者を表わすと考える墨書がある。環は赤色胎土の美しいものである。須恵器は環(36図14・16)、環蓋(13・15)があるが、15は内面に腐印がある。長頸瓶頸部(37図4)は覆土中のものである。遺物からみて住居址は中道Ⅱ期に属する。

(三浦)

#### (3) 3号住居址(図9・37・38、写17-19)

遺構 本址は遺構群の中央東端に位置し、北に柱列3、西に柱列4が隣接する。プランは東西4.40、南北4.30mの方角を呈し、主軸方向はN72°Wを示す。壁は垂直に掘りこまれ、周溝は幅10cm、深さ5cm程で全周している。床面はほぼ平坦であるが、礫層上にあるため良好ではない。柱穴は5コ、南東隅のものは他より大きく深めである。西壁中央にあるカマドは石組粘土カマドと思われるが、石は完全に抜き取られその痕跡が認められた。南壁寄り中央にあるピットは焼土と小礫が多量に含まれており、灰溜的な目的に使用されたと考える。

本址は火災にあった住民址で、床面から約5-10cmの厚さで炭化材と焼土が堆積していた。中央部に向けて倒れている材は9図4・7の板材を除き他は丸太と思われる。材質を炭焼経験者に見て頂いたところ杉か檜とのことであった。

遺物 焼失した住居にしては遺物が少なく、覆土からは土師器破片が3点(38図3-5)、小形甕(図6)甕が6個体(図7-11)、床面からは小形甕(図1)、甕(図2)、須恵器甕(37図6)が出土している。土師器甕の整形は浅く細いカキ目のある1点を除けば寛整形である。中道Ⅱ期の住居址である。(田畑)

#### (4) 4号住居址(図9・39・40・176、写20-28)

遺構 遺構群の北東隅にあり東西6.15、南北7.90mの隅丸方形のプランである。大原地帯では最大で主軸方向はN64°Wをはかる。壁は垂直で周溝がカマド付近を除いて全周する。床は硬く良好である。主柱穴は4コ、補助柱穴2コがある。西壁中央の石組粘土カマドの南側に貯蔵穴があり、遺物はカマド周辺が最も多く、主柱穴の全てからも出土している。覆土はロームブロック混りの黒土で、ここから土器捨て場のよ

うな状況で多量の土器片が出土した。カマド南側では栗と思われる炭化物も少量出土した。

遺物 土師器は甕(39図10-15、40図1・2・4・5・14-21)、小形甕(39図7-9、40図3・12・13) 坏(39図4・5、40図11)があり甕底部には木葉痕を持つものが多い。須恵器では坏蓋(39図1、40図6) 坏(39図2・3、40図7・9)、高台坏(40図8・9)がある。土師鉢(39図6)は数少ない例である。鉄器は北側隅より鎌(176図1)、南側より柄の木質が残る刀子(同図2、写28)が出土している。住居址は中道Ⅱ期である。(三浦)

#### (5) 5号住居址(図10・41、写29-31)

遺構 遺構群の北端に位置し、柱列7・8の西側にある。東西4.80、南北4.60mの隅丸方形のプランは主軸方向N64°Wを示す。北壁は垂直でよく保存されているが南壁はや・崩れたものと思われる。床面は中央部が固いが壁際にあるため、他は軟弱である。周溝は東壁と北壁の東部を除いて設けられ幅は10-15cm、深さ最高で7cmである。主柱穴4と補助柱穴2がある。西壁中央の石積粘土カマドは原形を殆んどとどめない。北西隅に浅い貯蔵穴があり、覆土は小礫を含む黒土であった。遺物はカマド周辺に集中した。

遺物 土師器は甕(41図4)、ロクロ引きによる小形甕(2・3・7)と瓦ナデによるもの(同図8)、赤色暗文坏(同図1)がある。須恵器では甕(8)と坏(6)、長頸類片が出土している。

石器では砥石が1点出土している。住居址は中道Ⅲ期に属する。(三浦)

#### イ. 掘立建物址(図10-12、写32-38)

掘立建物址(調査時に柱列と呼称して来たので以下柱列と呼ぶ)は遺構群の北東隅に集中し、3・4・5号住居址に囲まれるようにして9棟発見された。柱根までを確認する余裕を持たなかったが、柱穴はいずれもロームまで掘り込み、黒土中から確認できるものが多かった。南西部の1・2号住居址から方形周溝基周辺も精査したが、木の根と思われる不規則なピットや少数の柱穴はあっても、遺構と考えられるものは存在しなかった。

形態を分類すると空地、中道遺跡を通じて最も多い基本型と考える3間×2間のAa型がある。柱列2(10図4、写33)と柱列7(12図1、写38)がこれであるが、これの変形として equal 的付属施設を持つ応用型がある。棟と平行に廊を持つAaⅠ型として柱列4(11図2、写35)がある。3間×3間で梁行が1間多いがAa型と類似する柱列3(11図1、写34)はAc型に分類した。

桁行2間のものをB型として大分類したが、2間×2間のBa型として柱列8(12図2、写38)があげられる。これは北側の棟持柱が確認できなかった。柱列5(11図3、写36)は中央に総柱を持つ点で異なるのでBaⅠ型とする。柱列1(11図1、写32)は東側に他の2列と同様な柱穴列があるかに見られたが、確認のため削っている間に東中央の棟持柱を除いて消えてしまったため図示しなかったが、A型の変形であった可能性もある。柱列9(12図3)は周囲に他の柱穴を探したが2列のみの2間×1間の遺構で、ともに、一応Bd型に分類した。柱列1は東西方向の棟の切妻棟造を考えて良さそうである。

柱列6(11図4、写37)は4間×3間で柱間が狭くBc型に分けた。

掘立建物址の時期については削土によって既に当時の生活面が失われていることが考えられ、柱穴から

第2表

空地遺跡大原地籍4号住居址出土土器一覽表

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	整形	備考
39-1	环蓋	S	15.2			良	青灰色	内外ともロクロ、自然輪(緑)	
4-2	环	S	15.5	4.0	8.3	砂質	青灰色	口縁体部内外ともロクロ、底部糸切+回転削り	
4-3	环	S	12.8	(3.0)	(8.1)		黒灰色	口縁体部内外ともロクロ	
4-4	环	H	15.2	5.5	8.0	小石粒多含	淡赤褐色	口縁体部外面ロクロ、内面黒色底部糸切+回転削り	麻印
4-5	环	H	11.2				淡赤褐色	口縁体部ロクロ 内面黒色研磨	
4-6	鉢	H	16.2			雲母多含	茶褐色	口縁内外横ナア体部内外寛ナア	
4-7	小甕	H	11.0	7.9	7.6		淡黒褐色	口縁内外横ナア胴部内外とも寛ナア底部木葉痕	
4-8	小甕	H	11.9	12.8	8.6		淡赤褐色	口縁内外とも横ナア、胴部内外寛ナア 底部木葉痕	
4-9	小甕	H	17.4				淡黒褐色	同上	
4-10	甕	II	19.6				淡赤褐色	同上	
4-11	甕	H	19.8			雲母多含	赤褐色	口縁内外とも横ナア、胴部内外とも寛ナア	
4-12	甕	H	25.6			小石粒含	暗赤褐色	同上	
4-13	甕	H	28.4			小石粒多含	赤褐色	同上	
4-14	甕	H	30.2				淡赤褐色	口縁内外とも横ナア、胴部内外とも寛ナア	
4-15	甕	H	23.6				赤褐色	同上	
40-1	甕	H	26.0			砂質	赤褐色	口縁内外とも横ナア、胴部内外とも寛ナア	
4-2	甕	H	23.5			小石粒含	淡赤褐色	同上	
4-3	小甕	H			7.8		赤褐色	内外とも横ナア、底部木葉痕	
4-4	甕	H			9.2		茶褐色	同上	
4-5	甕	H			8.4	不良	赤褐色	内外とも横ナア、底部木葉痕	
4-6	环蓋	S	15.7				青灰色	内外ともロクロ	
4-7	环	S	15.4				黒灰色	口縁体部内外ともロクロ	
4-8	高台环	S	15.3	4.0	12.5		青灰色	口縁体部内外ともロクロ、底部糸切+回転削り	
4-9	环	S	12.9	3.8	7.3		灰白色	同上	
4-10	高台环	S	15.4				黒灰色	口縁体部内外ともロクロ	
4-11	环	H	14.0				暗赤褐色	口縁体部外面ロクロ、内面黒色研磨	
4-12	小甕	H	12.7				暗褐色	口縁横ナア、胴部カキ目	
4-13	小甕	H	15.4			雲母多含	淡褐色	口縁内外とも横ナア、胴部内外とも寛ナア	
4-14	小甕	H	22.5				茶褐色	同上	
4-15	甕	H	22.4			雲母多含	淡褐色	口縁内外とも横ナア、胴部内外とも寛ナア	
4-16	甕	H	20.5				赤褐色	同上	
4-17	甕	H	22.5			良	黒褐色	口縁内外横ナア、胴部内外とも寛ナア、内面黒色	
4-18	甕	H			10.5		暗茶褐色	内外とも寛ナア、底部木葉痕	
4-19	甕	H			8.0		淡褐色	内外とも寛ナア、内面黒色、底部木葉痕	
4-20	甕	II			10.9		茶褐色	同上	
4-21	甕	H			9.4		茶褐色	内外とも寛ナア、底部木葉痕	

の遺物の出土もなく確証もないが、孤塚地籍、中道遺跡のあり方を勘案すると大原地籍1～5号住居址が中道目・Ⅱ期に属し、それらと掘立建物址が切り合っていないことをみても、これら住居址と共存した可能性が強いと考える。

Ba型の柱列8は柱列7に付属する納屋かとも、BaI型の柱列5は高床式倉庫、Bd型の柱列9は柱列1に付属する納屋とも考えられる。他は雁を持つなどから住居址とも考えられるが、概とも倉庫とも取れ断絶はさせたい。

(三浦)

### 堂地遺跡大原地籍掘立建物址一覧表

第3表

※寸法 上段は最大寸法、下段( )内は直交させて得た寸法

柱列 番号	図版 番号	型	規模 (間)	桁行 (m)	梁行 (m)	棟方向	柱間寸法(m)			備考
							桁行	梁行	廊梁行	
1	10-3	Bd	2×1	6.0 (5.5)	3.6 (3.1)	N15°E	2.0 (1.8)	3.6 (3.1)		棟方向90°される可能性あり
2	10-4	Aa	3×2	6.4 (6.0)	5.5 (4.9)	N17°E	2.1 (2.0)	2.3 (2.5)		
3	11-1	Ac	3×3	7.8 (7.3)	5.7 (5.1)	N25°E	2.6 (2.4)	1.9 (1.7)		
4	11-2	AaI	3×2	5.3 (4.9)	3.7 (3.6)	N13°E	1.7 (1.6)	1.9 (1.8)	(1.8)	
5	11-3	BaI	2×2	6.4 (6.1)	5.8 (5.5)	N16°E	3.2 (3.1)	2.9 (2.8)		総柱あり
6	11-4	Ec	4×3	6.3 (6.0)	5.2 (4.9)	N27°E	1.6 (1.5)	1.7 (1.6)		
7	12-1	Aa	3×2	5.3 (5.0)	4.4 (4.2)	N18°E	1.8 (1.7)	2.2 (2.1)		
8	12-2	Ba	2×2	3.5 (3.2)	3.5 (3.2)	N22°E	1.8 (1.6)	1.8 (1.6)		
9	12-3	Bd	2×1	5.1 (4.7)	2.6 (2.2)	N17°E	2.6 (2.4)	2.6 (2.2)		一列直交せず

#### ウ. 方形周溝墓 (図13の1、写39)

遺構 遺構群の西端部にあり、方形周溝墓の北は比高にして1m弱下る傾斜面となる。北から見るとやや小高い段丘面の北端に位置する。ブルドーザーによって上部は破壊されているが、東西7.7m、南北8.2mと僅かに南北に長い隅丸方形で、西南隅寄りに幅1.4mの陸橋を残す。溝の掘り方はU字形で、幅は広い所で1m、狭い所で0.6mあり、深さは東溝25cm、西溝20cm、南溝60cm、北溝15cmと浅い。溝長は東6.0m、西溝3.6m、南・北溝5.6mである。溝中からの出土遺物はない。墓壇は破壊されていて確認できなか

ったが、中央より、や・南側に痕跡らしきものが残る。土は露にかけたが遺物を発見出来なかった。

(片桐)

#### エ. 土 塚 (図12・14、写41~43)

土塚は遺構群の西部に多い。土塚1~4は長楕円形のプランで壁が垂直に落ち込む船底状の断面を有し210×130cm内外、深さ75cm程という共通性を持っている。遺物こそないが墓塚としての機能を考えるのが最も適切と考える。住居址、独立建物址群の西方にあり、や・離れていることも集落の墓域であり平安時代の墳墓群と考えて良さそうである。ローママウンド、砂利マウンドは未掘のものを含めて5コあるが大門原タイプに近いものは土塚7(14図、写44)のみで他は風倒木の痕跡かと思われる不規則な埋土状況のものであった。

(片桐)

堂地遺跡大原地籍土塚一覧表

第4表

番号	図版 番号	プ ラ ン		大 き さ (cm)			状態(上部内部など)	出土遺物	その他(時期等)
		平 面	断 面	長軸	短軸	深さ			
1	12図	長楕円形	船底	205	100	85	覆土 暗褐色土		
2	12図	◇	◇	210	90	65	◇		
3	12図	◇	◇	210	132	75	覆土 褐色土		
4	12図	◇	◇	232	160	70	◇		
5	12図	不整形	スリ鉢	230	320	85	ローママウンド		
6	14図	◇	◇	550	415	60	砂利マウンド		
7	14図	◇	◇	340	332	76	ローママウンド		
8	14図	隅丸方形	ナベ底	220	170	34	ビット		
9	未掘	楕円形	?	280	200	?	ローママウンド		
10	同	不整形	?	275	245	?	ローママウンド		
11	同	長楕円形	?	170	95	?			
12	同	円形	?	80	75	?			

### 3) 堂地地籍の遺構と遺物

#### ア. 平安時代の住居址

##### (1) 1号住居址(図14)

遺構 急峻な深沢川の段丘崖上に位置している。東西2.50m、南北3.40mの隅丸方形で主軸方向はN18°Eをはかる。壁は耕土が浅かったため殆んど破壊され、10～12cmの高さである。床面は中央に向ってくぼみ全体に軟弱である。西側にビットがあるが柱穴となるものは確認できなかった。北西隅に2～3cmの焼土と石を残す部分があり、石組粘土カマドがあったかと推定する程度である。黒色の覆土には木炭片が含まれ、特に北側に多かった。遺物は北壁に集中した。小形で単なる竪穴かともとれる住居である。

遺物 土師甕の胴部片が5個体出土しているが、胴部のみのため図示しなかった。長胴甕は篦ナデ甕形によるもので、根拠はよわいが中道Ⅱ期に属するかと思われる。(三浦)

#### イ. 掘立建物址

##### (1) 柱列1 (図14)

遺構 1号住居址の西にあって段丘崖に近接している。外縁の柱穴は不規則な並びであるが、中央部は方眼状に通り、2間×8間、東西4.52m、南北7.60mの大きさとなり、全遺構規模は東西7m、南北13.6mである。主軸方向はN9°Wを示す。柱穴は漸移層を掘り込みローム層に通している。黒褐色土が充填する柱穴は径20～50cmで深さは6～27cmである。柱間は桁行で平均95cm、梁行で150cmを計る。遺物なしのため時代判定できないが新しい時代の可能性が高い。(三浦)

#### ウ. 土 塚

深沢川の段丘崖より40m離れた地点に集中する。18コの土塚の内、内部に小ビットを持つ土塚2(15図)木炭片の混入するものとして土塚2・11・12がある。土塚1は土塚というよりは配石遺構で、ロームを強く掘り込み方形石囲みの中に石をしいている。次表中特記しない土塚の覆土は黒土であった。

土塚2の深鉢片(48図4～6)は縄文中期初頭に属するもので、遺構外や遺構に伴わない「その他」の土器片(同7～17)は口縁にソーメン状粘土紐を貼付する7や、半截竹管や縄文を施文する11～14は縄文中期初頭に、柱列1の部分で出土した15～17は後期前半に位置付けられる。

従って土塚の多くはこれらの時期に掘られたものであろう。

(三浦)

#### エ. 溝状遺構 (図6の2、15の16)

溝1は段丘崖の南77mにあって東西方向で用地を横断している。砂礫を含む黒土層からロームまで掘り込んでおり、内部の堆積土は黒褐色中に多量の小礫を混入する。底部のローム上には砂利層があり水が流れたことを示している。溝中の遺物は須恵器で2点は壺片、1点は内面に青海波文を持つ甕胴部片である。この溝は当然大原地帯を横断した筈であるが、同地帯の該当部は既に掘削されたり土盛部があり確認できなかった。

溝の廃棄された時期について確たる証拠はないが、平安時代までさかのぼる可能性もあると考える。

(三浦)



堂地遺跡堂地地籍土壌一覽表

第5表

番 号	図版 番号	プラン		大きさ (cm)			状態(上部内部など)	出土遺物		その他 (時期等)
		平面	断面	長軸	短軸	深さ		深鉢	その他	
1	14回	不整形	ナベ底	70	50	14	方形石囲み			
2	*	円形	*	105	96	28	木炭片(2~3cm)	2箇体分		縄中初
3	*	隅丸方形	*	70	60	19				
4	15回	不整楕円	*	190	80	31	底部凹凸あり			
5	*	*	*	170	70	28				
6	*	*	船底	220	156	32	底に小穴1	3点		縄中初
7	*	円形	ナベ底	85	82	10		2点		縄中初
8	*	不整楕円	スリ鉢	130	95	26				
9	*	円形	ナベ底	112	110	29				
10	*	不整楕円	船底	164	95	22	覆土黒褐色			
11	*	円形	スリ鉢	210	205	24	相当量の木炭	3点		縄文
12	*	不整楕円	船底	380	230	38	木炭少量	1点	打石斧	縄文
13	*	*	*	796	320	82	礫			
14	*	隅丸方形	一部袋状	130	118	46	覆土褐色	1点		縄文中初
15	*	不整円形	フラスコ	170	165	33	*			
16	*	隅丸長方形	船底	278	160	31	覆土黒褐色			
17	*	不整楕円	*	250	150	26	覆土褐色			
18	*	*	*	370	145	54	覆土黒褐色			

4) 狐窪地籍の遺構と遺物

ア. 縄文時代の住居址

(1) 1号住居址(図16・49、写48~50)

遺構 本址は調査区の南西部にあり、18号住居址の南35mの位置にある。東西4.30m、南北4.15mの楕円形を呈する凹穴住居址である。主軸方向はN74°Wを示す。壁高は約30cmあり、なだらかに床面に落ち込む壁の状態は良好である。南壁ぞいに幅13cm、深さ5cm前後の房溝らしいものが存在する。床面は堅緻で

柱穴は計6あり、主柱穴4の他に補助柱穴が2コ北東の壁寄りにある。炉は住居址のほぼ中央にあり浅くならぬにきぼ、その北西寄りに径20cm、高さ13cmの深鉢胴部を埋燻炉として使用している(写49)。底には深鉢口縁部片をしき、炉内には木炭・灰・焼土を含む黒土が充満していた。

東壁から40cmのところには8×40cmの棒状の石が床面に埋め込まれており、この石より東の床面と壁外部は堅く踏みかためられており入口と思われる。炉の西40cmに10×50cmの炭化材があり、炉周辺には細かい炭化物が多量に存在した。

遺物 炉に使用された深鉢(49図1)以外は破片のみである。床面で3点(2・3・5)、炉で2点(17)、覆土で3点(4・6・8)である。床面遺物の1・7は縄文中期初頭梨久保式であるが、他は中期初頭の後続形式である。住居址は縄文中期初頭に属する。(木下)

#### (2) 14号住居址(図20・49の1~28・59の1~3、写63・64)

遺構 本址は調査区の北東隅にあり、10数mで深沢川の段丘崖となる台地北端に立地する。住居址はブルドーザーにより削り取られ床面部分が残っているにすぎない。床面は荒れ平面プランを明確には把握できないが、5.7×5.8mの円形竪穴住居址になるものと思われる。主軸方向はN18°Wで小礫を含む褐色土層上にある床面は軟弱で東に傾斜する。

炉址を取りまいて10コのピットがある。比較的大きな4コは深さも一定しており主柱穴と考えられる。住居址中央部や・北寄りに円形の石囲み炉と考えられる部分があった。径60×70cm、深さ35cmで黒土が落ち込み焼土・木炭片は殆んどない点疑問が残るが、底から深鉢口縁部片が出土した。

遺物 深鉢片(49図9~26・28)が多いが、本址に伴うものは11・19・25・26の4点であろう。25・26口縁部で肥厚し波状口縁となる部分の耳状把手である。浅い沈殿で文様を構成するが縄文中期最末と考えられる。住居址の時期は縄文中期末葉であり、他の覆土遺物は縄文中期初頭期の所産である。

石器は小形打石斧(59図1)、凹石(同2・3)が出土し、後者は敲打器としても使用されている。

(酒井)

#### (3) 21号住居址(図23の2・50・58・59、写71)

遺構 本址は調査区の北西部に位置し段丘崖寄りが小高いため南へ緩く傾斜する微地形を利用している。南壁では土壇141を切っており、東壁は土壇142に切られている。長径5.5m、短径4.4mと南北にや・長い楕円形の竪穴住居址である。主軸方向はN19°Eを示し西と北壁はローンを東側は礫混入層に掘り込むため傾いが、南壁は黒褐色土を掘り込んでいるため範囲の確定に苦心した。

南壁下には周溝があり床面は軟弱である。柱穴は11コあるが同時に使われたとは考えられない。南壁沿いののは貯蔵穴かとも考えられる。中央や・北寄りには石囲み炉があり人頭大の石を使用していた。内部からは木炭・焼土が検出された。

遺物 土器はすべて破片であるが大部分覆土中より出土した(50図1~9・11~24)。同図10は土偶胴部(41図10)を覆うような状態で床面上より出土した。縄文中期初頭のものである。他の土器片も同時期のものが多いが、15は縄文前期最末の暗ヶ峯式に、23・24は中期前半整沢式と考える。

石器は床面より黒曜石製の石鏃(58図1・2)、石匙(同3)、打石斧(59図7~10・12)、大形石匙(同11)があり、7~9、12はサヌカイト製である。住居址は縄文中期初頭である。(長沼)

## イ. 平安時代の住居址

### (1) 2号住居址 (図16、写51)

**遺構** 本址は調査区の西部にある。東西2.85m、南北3.80mの隅丸長方形であり、主軸方向はN38°Wを示す。壁の状態は良くローム面を11~23cm掘り込んでいる。床面はや・固いという程度である。周溝はなく北隅に1×1.2m、深さ40cmの貯蔵穴がある。柱穴は5コあるが、他の柱穴の位置からみて貯蔵穴の中に1コの存在が考えられ、主柱穴は4コであろう。カマドは北西壁中央北寄りであり、右袖が貯蔵穴に接している。袖の前部に左右1コづつの石を配する石組粘土カマドである。内部に焼土・灰・少量の木炭が残っていた。

**遺物** 土師のごく小さな破片以外ないが、カマドの形態等からみて平安時代後半と思われるが確定できない。(木下)

### (2) 3号住居址 (図16、写52)

**遺構** 本址は調査区の西端にあり、北に4号・東に2号住居址がある。住居址は東西3.8m、南北2.75mと小形の隅丸長方形プランを有し、主軸はN23°Wを示す。ブルトラーザにより上部を削られ正確な壁高は不明である。床面は砂質のローム層で中央部に若干固さを持つ部分があるが、たたきの床面ではない。柱穴はない。カマドは北壁中央部にあり直接壁につくりつけた石組粘土カマドである。内部に僅かな焼土があり、周囲にはカマド石と思われる2コの石が転落している。

**遺物** 土師小破片が数点出土したのみで正確な時期は不明であるが平安時代後半と考えている。

(酒井・中村)

### (3) 4号住居址 (図16、写53)

**遺構** 本址は調査区西端にあり南に3号住居址がある。住居址は東西3.3m、南北4.0mの隅丸長方形で主軸方向はN38°Wである。壁高は東30cm、西40cm、南25cmで床面は軟弱であるが、中央部は貼床され幾分固い。北壁中央部には石組粘土カマドが直接壁にとりつけられている。

**遺物** 土師器小破片が数点出土しているが時期の細分は無理である。平安時代後半と思われる。

(酒井・中村)

### (4) 5号住居址 (図17の4・42の1~2、写54)

**遺構** 本址は調査区の北西端に位置し段丘崖を背にする。すぐ西側には6号住居址が隣接している。プランは東西4m、南北4.10mの隅丸長方形を呈し、その主軸方向はN72°Wを示す。ブルトラーザにより破壊され壁の状態とカマドの形状・規模などは明らかでないが、カマドは東壁中央に位置している。床面もキャピラ痕が残り荒れているが、西側の一部に貼床が認められた。カマド南側には貯蔵穴が検出され、中には若干の焼土が含まれていた。柱穴は6本認められ、壁外の2本はや・斜めに掘り込まれており補助柱穴と考えられる。柱穴から上屋構造を考えると切妻造りと考えられる。

**遺物** 遺物はごく少量で床面より須恵器の坏蓋と土師器の甕(42図1・2)が出土した。甕は口縁横ナデ、体部上半が磨きされている。遺物少量のため断定できないが中道初期の住居址である。(田畑)

(5) 6号住居址 (図17の5・42の3~12、写55)

遺構 本址は調査区の北西端に位置しており、すぐ東側には5号住居址が隣接している。プランは東西4.60m、南北4.40mの方角を呈し、主軸方向はN85°Wを示す。上面をブルドーザーによって破壊されているため、壁、カマドなど明らかでない状況が多い。床面は平坦でや・固く、主柱穴は4コであるが2コは壁を切っている。カマドは西壁中央部に壁を挟り込んで構築し、石組粘土カマドであったと思われる。

遺物 床面からは口縁部横ナデ、頸部から胴部にかけて浅く細いカキ目のある土師器の甕 (42図7)、須恵器の環 (42図3~6) が出土している。6はカマド北側から完形で出土した。また、覆土からは須恵器甕 (42図8・9)、土師器の甕 (42図10~12) が出土し、11は小形甕でロクロの早い回転による砂粒の移動が見られ、糸切底である。遺物からみて中道前期の住居址である。 (田畑)

(6) 7号住居址 (図18の1、42の13~15、写56)

遺構 本址は北西部の微高地にあり、周囲に遺構は少なく、西上方の5・6号住居址と東下方の16号住居址の中間点に位置する。住居址は東西2.80m、南北2.85mの方角プランを有し、主軸方向はN84°Wを示す。床面近くまで削り取られているため床面を遡うことによりかろうじて範囲を把握した。床面は固く良好である。径30cm・深さ15cmの柱穴状のピットが北隅寄にある。カマドは石組粘土カマドと思われ東壁中央に痕跡が残る。焼土は比較的多く、土師片が数点入っていた。

遺物 発掘時には全て覆土として遺物を取り上げているが、上記の状況から床面と考えて良いと思われる。須恵器では坏蓋 (42図13)、環 (14) があり、土師器甕 (15) は細く浅いカキ目を有する。他は器形復元できない小破片である。遺物からみて中道前期の住居址である。 (酒井・中村)

(7) 8号住居址 (図18の2・42の16・17、写58)

遺構 本址は調査区の北端、深沢川の段丘崖よりにある。南東の15号、南西の16号住居址が近接する。住居址は東西3.80m、南北3.90mの方角プランを有し、主軸方向はN84°Wである。北隅から北壁下に浅い周溝がめぐらされる。床面は東北部が砂礫層土の床面となるため荒れているが、他は固く良好である。

カマドは石組粘土カマドの痕跡が東壁中央部にあり壁に直接取り付けられたものと思われ、焼土が認められた。西壁から北隅にかけても焼土が見られた。南隅の貯蔵穴と推定される部分から土師器片が若干出土した。

遺物 竪整形による甕 (42図16) が床面から、須恵環 (17) は床面よりやや浮いて出土している。小破片ではあるが細く浅いカキ目をもつ甕もあり、住居址は中道前期の時期である。 (酒井・中村)

(8) 9号住居址 (図18の3・4、43の1~6・176の3、写57・77)

遺構 調査区の北端、段丘崖寄りにあり東の10号住居址と並ぶ。住居址は東西3.70m、南北3.50mの隅丸方形のプランを有し、主軸はN77°Wを示す。壁の残存高は18~30cmである。東隅からカマドにかけて張り出し部を持っている。床面はわずかに東に傾斜し圓い北側は凹凸がある。柱穴は6コあるが浅く主柱穴は何れとも断定し難い。カマドは石組カマドで東壁中央の壁を挟って構築している。カマドの遺存状況

は良好で焚口部に小さなピットがある。袖には土器片をはりつけたかと思われる部分もある。

遺物 床面からは土師甕(43図1)が、覆土からは須恵坏(2)、土師の小形甕(3・6)、甕(5・6)が出土している。鉄器では刀子(176図3)が床面から出土しているが茎に対し刃部がそり気味である。細く浅いカキ目のある甕(1・4)やロクロ引小形甕(6)からみて中道Ⅲ期の住居址である。

(酒井・中村)

(9) 10号住居址(図18の5・43の7~12、写59・75)

遺構 台地の深沢川寄りに位置し9号住居址との距離9mである。東西3.75m、南北3.70mの隅丸方形を呈する寝穴住居址である。主軸方向はN73°W。壁はブルトーザーによって破壊され南壁が5cmの高さで残されているのみである。床面は西部では礫混入層上につくられている。柱穴は4コあるが西側のは浅い。カマドは東壁中央に直につくりつけられている。土器はカマド付近から多く出土した。

遺物 床面からは須恵器で坏蓋(43図7)、坏(8)、土師で坏(9)、細く浅いカキ目のある甕(10)が出土した。覆土からは須恵器の高台坏(11)、土師坏(12)が出土した。遺物からみて中道Ⅲ期の住居址である。

(三浦)

(10) 11号住居址(図19の1・43の13~14、写60)

遺構 本址は調査区の北東端に位置している。プランは東西3.45m、南北3.70mの方形で主軸方向はN70°Wを示す。壁は垂直で床面に達し、周溝は南壁下にのみ検出された。床面は固く比較的良好であるが小礫が混入している。カマドは煙道部等は削平により破壊されているが石組粘土カマドである。床面の3コの石はカマド石と思われる。

遺物 遺物は非常に少なく、土師器の甕片5点、坏片1点、長頸瓶の破片1点が出土している。図上復元可能な土器は須恵器の坏(43図13)と、土師器の甕(同図14)は胴部に細く浅いカキ目を持つものである。本住居址は中道Ⅲ期の住居址である。

(出畑)

(11) 12号住居址(図19の2・44の1~5、写61)

遺構 調査区の南東部にある一群の住居址・柱列群中にあり11号住居址、柱列3:7に近接している。東西4.2m、南北4.95mの隅丸方形の住居址で、主軸方向はN61°Wである。壁上部は削平されているが残存部は垂直で良好なものである。床面は北側に砂礫包含層があるが、他はローム層上につくられ平坦である。部分的に軟弱なところもあるが、床面は固く良好である。柱穴は内外とも確認したが不明である。

カマドは西壁中央にあり天井石は転落しているが石組粘土カマドで焼土も検出された。

遺物 床面密着の遺物はなく、何れもや・浮いて覆土中より出土している。須恵器では坏蓋(44図1~3)、坏(同図4・5)があり5は赤焼きである。他に甕2個体の破片がある。四耳甕片もあるが灰釉片はない。土師器では坏及び甕があり、鉄器では角釘と鉄塊の小さなものが出土している。

遺物からみて中道Ⅲ期の住居址である。

(竹村)

(12) 13号住居址(図19の3~5・44の6~21・45の1~11・176の7・178の2、写62・65)

遺構 調査区の中央に近く、溝状遺構の北にある。溝状遺構の西溝の延長部によって本址の西壁の一部

が切られている。東西5.25m、南北5.10mの隅丸方形の住居址で主軸方向はN12°Eとなる。残存壁高は25cmで垂直に落ち込む。周溝は南壁中央部で切れるが、ここでは床面が高くなっており入口施設があったものと考えられる。床面は固く良い。特に4コの支柱穴内の範囲は堅緻であった。カマド西側のピットは土器片が出土し貯蔵穴と考えられる。また、いわゆるトイレットストーンが9個集積するピット(19図5)もあった。北壁中央の石組粘土カマドは壁を挟り込んで構築され土器が出土した。

遺物は長頸瓶が南壁寄り中央床面より、炭化した木皿片がカマド東側柱穴横より、鋳釜がカマド左右袖部より、鉄鍔が西壁より中央部覆土中から出土している。床面・壁部の全域にわたって焼土、炭化材や竹と推定する炭化物の小片が検出され、大災にあった住居址と考えられる。

遺物 多くの遺物が出土している。須恵器では坏蓋(44図6~8)高台杯(14~19)杯(10~12・45図4)、甕(44図20・21)、長頸瓶(45図1・2)、茶壺(同図3)があり蓋(44図9)はこれと組まれる可能性もある。土師器では甕(45図5~7・10・11)があり11は内外面にロクロのゆるい回転を利用して調整した横への砂粒移動痕が顕著である。鋳釜(同図9)は接合できない胴部片からみると長胴の中道遺跡22号住居址のものと同形となるようである。本址の出土遺物では須恵高台杯の点数が多い中で中道Ⅲ期の他の住居址の様相と異なる。図示しなかったが細く浅いカキ目を持つ甕片があり、45図11は中道53号住居址にも見られる点で、中道Ⅲ期の住居址と考える。鉄鍔(176図7)木器(178図2)。(竹村)

(13) 15号住居址(図20の2~3・45の12~19・46の1~4・176の4、写66)

遺構 調査区の北側中央に位置し、西に8号住居址、東に13号住居址が近接している。この地区はや・窪地になっているため黒色土層が深くっており、覆土から縄文式土器片が出土している。プランは東西4.85m、南北4.80mの方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向は新カマドからみてN13°E、旧カマドからみてN82°Wを示す。壁は傾斜をもって床面に達し、壁高は南壁で30cm、北壁で51cmである。周溝はなく、床周辺は軟弱であるが中央部は固い。また、床面中央から西壁のカマドにかけて焼土が認められ、3~5cmの厚さで固く叩いてあり、この面が新カマド期の床面となっている。西壁カマドの南側に5×20cm大の石いわゆるトイレット・ストーンが7コあり、北壁カマド東側でも2コ床面にあった。

支柱穴(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>)は4コで、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>は焼土と炭の混入した覆土で灰溜めと考える。カマドは西壁南寄りと北壁東寄りにあり、北壁のものが住居址廃棄時のものである。ともに石組粘土カマドで壁を挟り込んでいる。規模は旧が0.7×1.10m、新が0.8×1.12mで土師甕片が内部より出土している。

遺物 床面からは須恵器坏蓋(45図12)土師器小形甕(45図16・46図1)が出土し、46図1はロクロ引によるものである。覆土からは須恵器の坏蓋(45図13)、杯(45図14・15)、ロクロ引による小形甕(46図2)が出土している。甕は5筒体(45図17~19、46図3・4)が出土しており、46図4のものは極細のカキ目を施している。鉄器では刀子(176図4)が西壁寄り覆土から出土している。

他には覆土中より灰輪皿皿、横瓶の破片が出土している。遺物からみて中道Ⅲ期の住居址である。

(田畑)

(14) 16号住居址(図21の1~2、写67)

遺構 調査区の北側中央からや・西寄りに位置する。プランは東西5.10m、南北6.15mの隅丸長方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN52°Wを示す。壁は傾斜しているが、壁高46~64cmと深く、本地籍で最

大の住居址である。周溝は認められず、床面は軟弱である。床面上に集石が2カ所検出され、覆土中にも人頭大の石が十数個ある。柱穴は3コあるがP<sub>2</sub>は補助柱穴と思われる。P<sub>3</sub>は貯蔵穴、P<sub>4</sub>は木炭と焼土が混入しており灰溜めであろう。カマドは西壁中央部にあり、1×0.9mの石組粘土カマドは壁に切り込んではいない。遺存状況は非常に良いが支脚石は確認できなかった。

遺物 遺物出土に期待をかけたが、覆土中から土師甕胴部小破片が数点出土したのみであった。

遺物量が少なく断定できないが、平安時代後半の住居址と推定される。

(田畑)

(15) 17号住居址 (図21の3・46図5～11、写68)

遺構 遺跡中央より少し西に位置する。ブルトナーにより上部を破壊されている。プランは東西3.40m、南北3.50mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN75°Wを示す。壁は垂直に立ち、壁高は東8cm、西22cm、南18cm、北22cmである。床面は平坦ではあるが軟弱で、柱穴は浅いが3コ確認した。東壁中央に石組粘土カマドの痕跡を残し、その両側に焼土が多かった。カマドの両側に貯蔵穴があり、炭・焼土が多量にみられ土器片も少量出土したことから灰溜めとして使用されたと思われる。

覆土は暗褐色で床面の中央南寄り須恵環(46図5・写76)が完形で出土した。

遺物 須恵器環(46図5～7)の他2点、土師器では環(同図8～9)のうち8は赤色暗文の環である。甕(10)、小形甕(11)がある。中道Ⅲ期の住居址であり極細のカキ目を有する甕が出土している。

(片桐)

(16) 18号住居址 (図22の1・46の12～20)

遺構 調査区の南西部分にあり周囲を縄文時代の土壌がとりまく。住居址のプランは削土をまめがれた床面の範囲から推定すると、東西3.60m、南北4.20mの方形であったと考えられる。推定的主軸方向はN82°Wを示す。床面は固い部分もあったが、礫層上にあるため不良である。柱穴とみられるものが四隅に1コづつあるが深浅まちまちである。カマドは西壁中央部にあったものと思われ焼土が認められ、左には貯蔵穴かとみられる部分がある。床面には遺構の状況に比較すると良く遺物が残っていた。

遺物 須恵では甕・環の小破片がある。土師器では内面黒磨きの環(46図12～14)、小形甕(15)、甕(17～20)の他にクロクロ引の小形甕片、極細のカキ目を有する甕片があり中道Ⅲ期の住居址である。

(酒井・中村)

(17) 19号住居址 (図22の2・47の1～5・59の6、写69)

遺構 調査区の南東端に位置し、北側には柱列1・2がある。北と東側を旧西天電用水と溝に切られているが残存部は東西4.30m、南北4.60mあるので、それ以上の隅丸方形の住居址であったと思われる。主軸方向はN81°Wを示す。壁高は西で22cm、南で12cmである。床面は西側が軟弱で東側は粘床があり、下部の床面は堅緻である。また、ここで焼土も認められた。主柱穴は2コ確認され東側中央に貯蔵穴と思われるピットがあり焼土や土師甕片が出土した。東側に焼土が多かったことからカマドは東壁にあったと推定する。

遺物 覆土中の遺物が多いが、須恵器では環(47図1～4)の他2点、環蓋2点と土師器で小形の甕(5)の他、極細のカキ目を有する甕など8コ体分の破片がある。中道Ⅲ期の住居址である。

(片桐・三浦)

(18) 20号住居址 (図23の1・47の6~14・176の5、写70・77)

遺構 台地の北西部に位置し、23号住居址とは3m、柱列7とは4mの距離をもつ。本址は柱列3によって切れ、南半部は壁もつかめな程攪乱されている。規模は東西5.70mで大形の隅丸方形を呈する住居址である。主軸方向はN78°Wで北壁沿いに幅20cm、深さ10cmの周溝がある。残存する床面は堅緻で主柱穴は4コある。西壁中央の石組粘土カマドは保存状態が悪い。東壁中央にもカマドの痕跡のような焼土が見られた。北西隅の貯蔵穴にはトイレットストーンが入っていた。これはフラ加工の際の錘と考える。

遺物 床面からは須恵環(47図7)と土師器で小形甕(10) 甕(12・13)が出土した。13のカキ目は粗く深い。覆土からは須恵器で坏蓋(6)と土師器で皿形土器(8・9)、甕(14)を出土したが、皿形土器は堂地、中道の両遺跡を通してみても出土例はない。平安末期からのカワラケとも器形を異にする。本址に伴うものであろうか。他に葉壺かと思われる遺片もある。中道Ⅲ期の住居址である。(三浦)

堂地地籍20号住居址出土トイレット・ストーン計測値表

第6表

資料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
長さcm	11	12.5	10.7	7.7	12.2	10.7	14.0	11.6	9.9	13.1	12.0	12.7	13.8	10.4	10.2	11.7
幅 cm	3.1	2.0	3.8	3.0	5.1	3.1	2.9	3.6	4.2	3.5	3.2	3.3	3.2	4.4	3.2	3.8
重量g	160	90	100	80	170	70	170	130	130	150	130	140	160	150	120	130

(19) 22号住居址 (図24の1、写72)

遺構 調査区の南端、土盛の真下で発見された。プランは東西3.30m、南北3.85mの隅丸長方形を呈する壁穴住居址である。主軸方向はN9°Eを示す。壁はほぼ垂直で周溝はなく、床面は軟弱である。柱穴は5コ認められP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は主柱穴、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は補助柱穴と思われる。炉或いはカマドはなく、東北隅から木炭が少量検出された。火所がないところから住居址というより壁穴とした方が適当かも知れない。

遺物 遺物は全くないといっても良い。土師の小片が出土したのみである。時期は不明であるが、他の住居址の時期からみて平安時代後半の住居址である可能性は大きい。(田畑)

(20) 23号住居址 (図24の2・47の15~19・176の6、写73・77)

遺構 調査区の北東端の農道寄りで見えられた。住居址は東西4.25m、南北4.85mの方形を呈し、主軸方向はN60°Wである。東壁はかなり削り取られているが、残存壁高は約20cmである。周溝が北東隅からカマド部を除きめぐらされている。床はタタキの状態で堅緻である。主柱穴(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)は規則性を持ち、他は補助柱穴である。東壁中央や北寄りに石組粘土カマドの痕跡が残り焼土・石が認められた。カマド右には貯蔵穴と思われるピットがあり焼土にまじって土器片が出土した。遺物はカマド部に集中した。

遺物 床面からは土師器でロクロ引による小形甕(47図16)、極細のカキ目を持つ甕(同図17・19)、筥ナデによる甕(18)が出土した。覆土からは須恵器の高台坏底部(15)が出土している。鉄製品では角釘(176図6、写77)が出土し、長さ11cmで頭部を折り曲げている。



23号住居址は遺物からみて中道Ⅲ期の住居址である。

(酒井)

(21) 24号住居址 (図24の3・47の20~24、写74)

遺構 本址は遺跡の北端、段丘崖よりに位置する。残存する遺構は床面だけで壁は殆んどない。プランは東西3.60m、南北3.65mの隅丸方形で、主軸方向はN78°Wを示す。床面は平坦ではあるが砂礫混りで軟弱である。四隅の柱穴が主柱穴と思われるが1コだけ浅い。東側中央や、北寄りに焼土が多いが石組粘土カマドの痕跡と思われる。床面中央より西にも焼土がある。

遺物 図示したものは覆土としたものも床面から多少浮く程度で床面遺物に含めてよいと考える。全て土師器でロクロ引による小形甕 (47図20・22) と甕整形による小形甕 (21)、甕 (23・24)がある。鉄器では紡錘車の軸部かと思われるものがある。本址は中道Ⅲ期の住居址である。 (片桐)

ウ. 掘立建物址 (図7・25~27、写78~80)

柱列は調査区の東半部に偏在する。特に大原地籍・中道遺跡で多く見られるAa型のものは東端の農道沿いに並ぶ。形態からみると上記両遺跡には存在しなかった異質の建物址が見られる (図7)。

形態分類を試みると、中道遺跡において基本型としたAa型は3棟ある。柱列2 (写78)、柱列6 (写79) 柱列8がそれであるが柱列6・8は内部に総柱を持っていた可能性もある。柱列1 (写78) は一見Aa型に見えるが西側の柱間が狭く、廂か間仕切を持っていたと考えられBaⅡ型とした。

堂地遺跡・狐窪地籍掘立建物址一覧表

第7表

※寸法上段最大寸法、下段 ( ) は直交させて得た寸法

柱列番号	図版番号	型	規模 (間)	桁行		棟方向	柱間寸法 (m)			備考
				(m)	(m)		桁行	梁行	廂梁行	
1	25-1	BaⅡ	2×2	5.2 (4.8)	5.3 (4.8)	N16°E	2.6 (2.4)	2.65 (2.4)	(1.7)	西に廂か間仕切
2	25-2	Aa	3×2	5.3 (4.9)	4.4 (4.0)	N12°E	1.8 (1.6)	2.2 (2.0)		
3	25-3	F	4×2	7.4 (7.1)	4.0 (3.6)	N18°E				柱間は2.2と1.4mの二種 20号住居址を切る。
4	25-4	D	1×1	2.4 (1.8)	2.4 (1.8)	N6°E				柱列5と一対をなすか。
5	26-1	D	1×1	2.8 (1.8)	2.5 (1.8)	N6°E				柱列4と一対をなすか。
6	26-2	Aa	3×2	5.4 (5.0)	4.6 (4.1)	N18°E	1.8 (1.7)	2.3 (2.1)		
7	26-3	F	4×2	8.8 (8.2)	4.6 (4.2)	N18°E	2.2 (2.1)	2.3 (2.1)		
8	26-4	Aa	3×2?	6.1 (5.7)	4.0 (3.6)	N19°E				柱間間隔不揃
9	27-1	D	1×1	7.4 (6.4)	4.6 (3.7)	N3°E				柱穴方形
10	27-2	D	1×1	7.0 (6.1)	5.2 (4.2)	N10°E				柱穴方形

次にあげる型は構造上からも柱間寸法からも異質で、前記の一群とは時代を異にするものではないかと考えるものである。D型とした柱列4・5は1×1間の正方形で、互の距離8mあるが一对をなす建物のように観取される。溝状遺構も柱列も時代を確定できないが両者の共存を考えても良いと思われる。D型の柱列9・10は長方形を呈するが柱穴は方形で埋土の色が柱穴ごとで異り建物遺構として捉えることはできない可能性のあるものである。

F型の柱列3と柱列7は構造的にも類似性が強く、柱列3は中道Ⅲ期の20号住居址を切っており、柱穴が2段構造となるものが5つあり、柱穴中より土師片を出土した。当時の生活面が失われているため時期決定できないが、この一画で表採時に青磁椀片2点、中世陶器片を採集し、発掘調査でも柱列3の東側外部で青磁椀(41図9)が出土し、柱列7の北西隅外の土壌213は青磁椀片、鉄釘を出土する中世のものであることから、この二棟は中世の建物址と考えたい。(三浦・伴)

## 工. 土 壌 (図7・27～34・50～54・58～60、写81～89)

孤塚地籍で検出された土壌は総数326基にのぼる。土壌の形状・出土遺物については土壌一覧表を参照されたい。

多くの土壌から多少なりとも遺物の出土をみたが、何分にも小破片が多く時期、形式等判然としないものが多い。一応、出土遺物がその土壌に伴うものと単純に考えて時期別にみると、縄文前期後半～末3基、中期初頭69基、中期前半15基、中期末葉1基、中期7基、後期1基、後・晩期2基、晩期1基、縄文7基である。平安時代の土師・須恵を出土するもの7基、中世青磁片等を出土するもの1基がある。

土壌分布は調査区の南部、大原地籍を乗せる段丘の崖下は少なく、深沢川の段丘崖寄りに濃密となり、21号住居址周辺に集中する。縄文中期前半までの遺物を出土するものは溝1の西溝以西に圧倒的に多く、縄文中期初頭梨久保式期の1号住居址、や、後出の21号住居址と土壌群との集落におけるあり方を知る好資料であろう(図7)。両住居址の中間、18号住居址周辺の土壌には打石斧を伴うものが多い。

縄文前期 諸磯B式では土壌87から52図24が梨久保式深鉢片と、土壌322から有孔銅付土器の粗形といわれる浅鉢(54図24)がII向Ⅱ式の小破片とともに出土している。十三葎提式では土壌10の50図30がある。

縄文中期初頭 従来、跡場式とされてきたものと梨久保式を出土するものは多い。51図21(土壌49)、52図1(土壌56)、52図10(土壌70)、53図5(土壌141)、同図8(土壌153)、同図9(土壌155)、54図25・26(土壌308)等がある。注意したいのは北陸地方との文化交流を示す木目状燃糸文が3例あることである。52図28(土壌106)、53図22、写86(土壌177)、54図23(土壌316)がそれであるが、51図2(土壌14)は土壌243にも同一個体片かと思われるものがあり、北陸系の土器であろう。

諏訪地方での仮称原沢式の好例として土壌13出土(写82)の深鉢(51図1、写83)がある。この五領ヶ台式の要素の強いものに52図27(土壌106)、53図3(土壌141)、53図14(土壌226)、53図19(土壌239—写88)、54図3(土壌278)、同図9～19(土壌315)等があり、出土する土壌数も遺物量からみても最も多い。

縄文中期中葉 土壌7(写真81)出土の50図26・27や口縁部内面に数条の爪形連続押引文をめぐらす浅鉢は蹄板式でも古いものである。浅鉢の出土数は多く、51図3(土壌14)、同図17(土壌41)、同図28・30

(土壌54)、52図8・11(土壌70)、同図21(土壌80)、同図25(土壌96)、同図29・写85(土壌107)、53図7(土壌141)がある。この浅鉢は土壌41でや、異質な51図18を伴う以外は原沢式と考えられる破片と伴出してあり、中期初頭最末まで上る可能性もあることを付記しておきたい。

より後出のものに51図20(土壌35)がある。井戸尻式である。

縄文中期末葉 土壌246は底と周囲に柱穴を持つ径2.30m、深さ76cmの竪穴状遺構である(写89)。内部からはドングリの炭化した実、深鉢(53図24・25・54図1・2)が出土した。深鉢は曾利V式である。

縄文後・晩期 53図27(土壌291)は後期、浅い条痕を持つ53図27(土壌254)は後晩期のものであろう。口縁内側に一条の沈線をめぐらす53図20(土壌147)、同図11~13は条痕を持つ深鉢で13はくびれて立上る口縁部に二条の沈線をめぐらしている(土壌218)。これらは辰野町樋口五反田遺跡に類例を求めることができ(長野県中央道視察文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡辰野町その1—)、永式に比定される。

特殊遺物を出土したものに土壌48がある。内部からは土偶(178図3)、ミニチュア土器(同図4・写84)磁石(178図5)が出土しているが、伴出する深鉢片は十三芒提式もあるが多くは原沢式期のものである。土壌226(写87)からは土偶脚部(178図6~8)が並べられて出土し、53図14が伴出した。この2例は縄文中期初頭における土偶の埋葬儀礼を教えてくれるものとする。ミニチュア土器片は土壌70からも出土している。ロームマウンドは14基あるが火門原タイプはない。風倒木の痕跡かと思われる。(伴・酒井)

#### オ. 溝状遺構

##### (1) 溝状遺構1(図7・35、写46・47・90~92)

遺構 孤塚台地のほぼ中央部、調査区の東半に存在する。最初は大方形周溝基かと考えて検出にかかったが、西溝の延長部は平安時代(中道Ⅲ期)の13号住居地の壁の上端を僅かに切り、溝の砂質土が住居址上を覆うことが確認され平安時代以降の遺構であることが判明したものである。また、溝状遺構2によっても切られている(図7、写46)

南部は長方形の環壕状をなしている。環壕部の南溝は46.3m、東溝33.2m、西溝は南から32m地点で東西に走る中央溝を分岐させるが更に調査区を2分するように68.2m延長し、深沢川の崖丘近くまで掘っている。環壕部の北溝、即ち、東西に走る中央溝は西から33.2mまで確認したが、東溝までは届かず消えるものようで、この東端部は東溝とは約50cmの高度差を持ち高い。環壕部の溝幅は1.1~1.6mである。

環壕部西溝には南から6mのところの溝底より25cmの高さを持つロームのブリッジ(写92)があり、長さは3mを計る。これは黒土層から掘り残された入口施設ではなかったかと思われる、中央溝との分岐点より南2m地点以南でも溝底が25cm深く掘り込まれており、本溝状遺構が単なる排水施設として掘られたものでなく、外部と区画する意味を持っていたと思われる。

西溝と中央溝との分岐点は切り合いの可能性も考え慎重に調べたが埋土にも格別な差はなく、溝底差も全くなかった。同時に掘られた可能性が高い。だが、中央溝と西溝の分岐点以北は断面図I-Jのような壁が緩傾斜を持ち、分岐点近くが50cm弱と深いのみで他は浅く20cm程であり、環壕部の他の溝がU字状の掘り方であること、中央溝と西溝には礫・砂層があり流水の形跡が認められ機能差が感じられる。

環壕部の周溝で区画された内部施設の存在も考え精査したが、区画内では縄文—平安時代の土壌、ロー

ムマウンドが検出されたが、溝と切り合っているものは何れも本遺構の方が新しかった。南溝東寄りに柱列4・5が確認されたが本遺構と関係があるか判断はできない(図35、写46・47・90・91)

遺物 西溝の環壕部分、溝底より浮いて須恵器燧片、中央溝より土師燧片が出土した。縄文土器片(54図27~42)もある。溝状遺構1は13号住居址を切っていることから平安時代後半以後であるが、時代の下限を切ることはできない。今後の類例の増加に待ちたい。(郷道)

#### (2) 溝状遺構2(図7、写46・47)

遺構 調査区の中央を西から東へ流れた溝で確認された部分 1mある。幅は表土を削っているの不明に近いが、褐色土に掘り込む部分では0.4~1.2m、深さ10~15cmで砂礫が堆積している。溝1を切っている。

遺物 縄文時代の土器片、打石斧が出土したのみであるが、新しい時代のものと考えている。(伴)

#### (3) 溝状遺構3(図7)

遺構 調査区の北西、深沢川の段丘崖寄りにあって西から東へ流れたものである。残存部9m、幅60~80cmで砂礫が10~15cmの厚さであった。

遺物 全く検出できなかった。時代も不明である。(伴)

### カ. その他の遺物

遺構に伴わない遺物をここに一括した。21号住居址の南西に雨築と思われるロームの落ち込みがあり、黒土中より多くの縄文中期土器片を出土し、試験溝を設定したが遺構は確認できなかった。14号住居址、15号住居址の南部にも遺物が多かった(7図)。

縄文時代前期 56図1は縄文を地文とし、粘土紐を半載竹管で軽く押捺しているもので前期末葉と思われる。

縄文中期初頭 少数であるがゾーメン状粘土紐を貼付するものがある。55図10・24・37は無文部に、同図30は縄文を地文に、56図3は平行沈線地文とするものである。これらは暗ヶ峯式に見られる要素である。次の挿編、梨久保式としては54図28~37、39、40の溝状遺構1出土のもの、同図43~45、55図1~9、12、16~23、25~29、31、34、56図6、12、20、21等がある。54図39、55図27、29は木目状縞糸文を有するものである。次いで仮称原沢式・唐沢式期では54図27、41、42、55図39、40、56図13~19、36等がある。半載竹管による交互刺突、隆帯に縄文を付すなどの特色を持ち厚手で胎土には金雲母が多く含まれる。

縄文中期前半 55図42~48は口縁内側に数条の押し爪形文をめぐらす浅鉢である。茶褐色で胎土に金雲母を多量に含む。ここでは勝坂式の古いものとして分類したが、関東では五領ヶ台式第2類(注1)、五領ヶ台式(注2)とされ、山梨県下向山遺跡ではこの浅鉢と五領ヶ台式が共存している(注3)が、深鉢は原沢式のものに類似性が強い。当地方に於てどのような共存関係を持つかは類例の増加を待たねば結論できないが、本遺跡でこの浅鉢は10箇体以上の出土があるのに対し、勝坂式の古いものが少ないことから原沢式に伴ったものではないかとも思われる。

56図22、23、25、26、29-31は腰坂式、同図38、40、41は平出第3類Aかと思われる。

縄文中期末葉 加曾利Ⅱ式期の土器で56図27、44は古い方であるが、56図42、43は最末の曾利Ⅴ式である。

縄文後期・晩期 57図4は後期の粗製土器である。晩期には55図36が口唇に指圧痕を持つ深鉢片で、57図5、6、8は擦痕状の浅い条痕をもつもの、工字文帯を持つ同図9がある。57図のものは20号住居址覆土遺物で永式に比定される。

その他、縄文時代の土偶(41図10、11、178図9)があり、11は柱列8検出時に出土した。石器では石鏃(58図19、20)、剥片石器(同図21-33)、剥片石核(同図34-37)があるが黒曜石製である。打製石斧(57下図1、2、60図11-22)もある。中世では青磁柄片(41図9他3点)や陶片少量があり、9は柱列3の南で出土した。(伴)

注1 江坂輝弥「相模五領ヶ台貝塚調査報告」考古学集刊No.3

2 今村啓爾「宮の原貝塚」武蔵野美術大学考古学研究会

3 吉田 格「関東の石器時代」雄山閣考古学選書8

## 5) ま と め

堂地遺跡は道路用地と土取場となったため広大な面積を調査しなければならなくなった。県下ではこれだけの広範囲の全面発掘は始めてである。遺跡は3地籍に分かれるので順を追ってまとめてみたい。

大原地籍においては方形周溝墓1基、平安時代の住居址5軒、掘立建物址9棟、土壌12が検出された。方形周溝墓は弥生時代から古墳時代初期につくられるものであるが、本遺跡のは遺構は勿論周辺からも弥生時代遺物等は全く出土していない。形式的には伊那谷に最も多い牛王堂Ⅱ形式に近いもので、飯田盆地では弥生後期に多く見られる。

住居址は平安時代中期以後のもので中道Ⅱ期は2軒(3、4号住居址)、中道Ⅲ期3軒(1、2、5号住居址)である。住居址のグループ性をみる好資料であろう。2号住居址はカマド内に鳥帽子形甕が使用時の姿で発見され、3号住居址は火災にあい炭化材が多く残されていた。5軒のカマドは総て西壁中央にある。掘立建物址は形態の個性が強く使用目的については今後の研究にまちたいが、横方向はほぼ同一で中道Ⅲ期の住居址と併存したか、それ以後の可能性が考えられる。土壌群のうち土壌1-4は長楕円形の深い奇一性のあるもので墓穴と思われ、住居址・掘立建物址とともに平安期の集落機能を構成するものと考えられる。

堂地地籍では深沢川段丘崖に面した所で平安時代住居址1軒、掘立建物址1棟、土壌群、溝状遺構が発見された。住居址は中道Ⅱ期と推定され、西力の大原地籍との関連が強い。掘立建物址は今回報告する他の柱列とは形態差が大きく、後世のものと考えられる。土壌の多くは縄文時代中期初頭のものと考えられる。遺跡は深沢川沿いに更に東方に延びるものと予想される。

狐窪地籍では住居址24軒、掘立建物址10棟、溝状遺構3と土壌326が発見された。少量の遺物も含めると縄文前期末葉以後晩期まで、平安時代、中世と各時代の遺物が出土した。

縄文中期初頭の住居址は梨久保式期の1号住居址、仮称原沢式期の21号住居址の2軒である。これらと該期遺物を出土する多くの土壌との関連を把握しなければならないが、形態差、出土遺物から多少グループ性を持っていることを記して詳細な検討は今後にゆずりたい。遺物からみると梨久保式の一要素である木目状器糸文の資料が6点あり、県内出土例を殆んど倍加させた。他の北陸系の土器とともに文化交流現象を知る貴重なものである。次いで、原沢式の資料は従来岡谷市原沢遺跡の1例のみであったが、土壌13出土の完形深鉢を始め多くの資料を得、住居址内のセットではないとはいえ貴重な成果をあげた。

縄文中期初頭の遺構は調査区の西方に拡がるものと思われ、用地外で多数の打石斧等を表採している。

縄文中期末葉の14号住居址は土壌246と同期で関連があるかも知れない。縄文後・晩期の遺物は少なく遺構としては土壌218の晩期永式比定が唯一のものである。

平安時代の住居址21軒は遺物の殆んどない4軒を除き全部中道Ⅲ期のもので、単一の集落構成を持つものと考えられる。同時期でもカマド位置をはじめ住居址に個性がある。火災にあった13号住居からの木製皿椀のものは注意される。平安時代の建物址とみた柱列1・2・6・8は調査区の東部に集中している。これら平安時代後半の住居址群は中道Ⅲ期に出現し短期間で消滅しているが、深沢川の対岸の中道遺跡では奈良から平安末まで存在することを考えると中道集落の分村と考えて良いものだろうか。いずれにしても中道集落とは強い関係を持ったものであろう。深沢川の谷水田だけでは生活は困難であったと思われ、畑作或いは牧での生計が中心であったと考える。いわゆるトイレット・ストーンはワラ細工の鎌と考える。

中世の遺構としての可能性を柱列3、柱列7に求めているが、土壌213、柱列3南で青磁片が出土し、この地区で中世陶器片を表採したという以外根拠はない。この地筋には長者屋敷があったという伝承があり長者屋敷とも別称されている。溝状遺構1は中道Ⅲ期以降のものということは確定的である。そこで中世の居館址とも考えたが、それを証する遺物、建築遺構は全くない。

遺跡は調査区西方用地外の農道掘り割り断面にも土師住居址が見え、深沢川沿いに西方へ拡大している。調査区東の水田部にも当然遺構の存在が予想される。今回の調査では遺跡の中央部を調査したことになる。

(酒井)

堂地遺跡狐窪地籍土壌一覽表

No. 1

棟号	図番	図形	面積	長さ	幅	土質	土層(上部・内部など)	土層	土層物	その他(時間等)
1	27-3	円形	150	142	90			3点		縄中初
2	27-4	円形	150	150	29					
3	27-5	円形	105	102	29					
4	27-6	不整形	220	150	34					
5	27-7	円形	97	89	17			15点	フレイク、削片石器	縄中初
6	27-8	円形	72	65	11			2点	フレイク	縄中初
7	27-9	円形	85	75	20			1個体	フレイク	縄中前中
8	27-10	円形	90	80	10			10点		縄中初
9	27-11	円形	110	90	30			12点	打石片1	縄中初
10	27-12	円形	58	53	20			1点	打石片1、フレイク	縄中前中
11	27-13	円形	80	80	42				打石片1	縄中
12	27-14	円形	88	70	40			12点	打石片2、打石	縄中初
13	27-15	円形	120	100	75			30点	焼跡、打石片1	縄中前中
14	27-16	円形	113	117	24			12点	焼跡、打石片1	縄中前中
15	27-17	円形	97	80	45			2点	フレイク	縄中初
16	27-18	円形	107	100	52				フレイク	縄中
17	27-19	円形	105	70	18					縄中
18	27-20	円形	254	116	49			4点		縄中初
19	27-21	円形	100	97	16			1点	磁器	縄中
20	27-22	円形	100	88	24					縄中
21	27-23	円形	105	75	23					縄中
22	27-24	円形	133	78	60					縄中
23	27-25	円形	116	115	25					縄中
24	27-26	円形	130	106	35			3点		縄中初
25	27-27	円形	260	110	25			4点		縄中初
26	27-28	円形	100	85	20					縄中
27	27-29	円形	80	80	13			2点		縄中初
28	27-30	円形	120	110	30					縄中
29	27-31	円形	100	70	50					縄中
30	27-32	円形	100	90	15			2点		縄中
31	27-33	円形	70	50	10					縄中
32	27-34	円形	250	120	45					縄中
33	27-35	円形	80	77	30			6点		縄中初
34	27-36	円形	112	110	40			1点		縄中初
35	27-37	円形	77	68	15			2点		縄中初
36	27-38	円形	120	90	24			5点		縄中初

堂地遺跡跡地籍土壌一覽表

No. 2

番号	區画番号	平 面 形 状	ク ラ ン ク ン 面 積	大 き さ (m)	長 短 軸 長 さ	覆 土	状 態 (上部・内部など)		上 遺 物	その他 (時期等)
							傾 斜	深 鉢		
37		不規則形	円筒	78	70	36		深鉢 2点	フレイク	縄文
38		不規則形	スリ鉢	63	75	25	赤炭			
39		円形	ナベ底	76	69	20				
40		不規則形	ナベ底	210	115	47			磁石1	
41	28-12	円形	ナベ底	115	105	29	合炭	遺土面に土器半面体	浅鉢片	縄 中 期
42		楕円形	スリ鉢	73	66	32				
43	28-13	円形	ナベ底	83	80	15				
44	28-14	楕円形	ナベ底	100	88	20			打石片1	縄 文
45	28-15	楕円形	ナベ底	90	75	22			フレイク	縄 中 期
46		楕円形	スリ鉢	58	47	15			1点	縄 文
47		円形	ナベ底	73	69	18				
48	28-16	楕円形	ナベ底	123	112	10			5点	縄 中 期
49	28-17	円形	スリ鉢	96	91	23			4点	縄 中 期
50	28-18	不規則形		157	118			ロームマウンド	7個陶、ミニチャコア フレイク	縄 中 期
51		楕円形	ナベ底	116	85	13				
52	28-19	正円形	炭 灰	96	97	31			土師焼片	平安時代
53	28-20	正円形	炭 灰	149	148	76	合 木 炭	遺土面に焼土	打石片1	縄 文
54		不規則形	スリ鉢	124	100	68		ロームマウンド	5点	縄 中 期
55	28-21	円形	ナベ底	126	120	31			2点	縄 中 期
56	28-22	円形	ナベ底	95	89	19			3点	縄 中 期
57	28-23	円形	ナベ底	115	114	21		大櫛2コ	40点	縄 中 期
58	28-24	楕円形	炭 灰	135	111	58				
59		長楕円形	ナベ底	250	125	37	菅 木 炭			
60		不規則形	ナベ底	232	105	27				
61		楕円形	一段底	118	81	50		砂利混入		
62		楕円形	ナベ底	85	72	14				
63	28-25	円形	ナベ底	103	103	31				
64	28-26	正円形	ナベ底	115	113	19				
65	28-27	楕円形	ナベ底	111	90	30				
66		楕円形	ナベ底	116	85	27				
67	28-28	円形	二段底	69	63	25			1点	縄 中 期
68	28-29	楕円形	ナベ底	52	47	16			2点	縄 中 期
69	28-30	楕円形	円筒	105	85	28			1点	縄 中 期
70		楕円形	円筒	95	85	55	合 木 炭	2段部分炭灰	浅鉢、ミニチャコア、フレイク	縄 中 期
71		円形	円筒	90	85	20	菅 木 炭	上部に焼土	16点	縄 中 期
72	28-1	楕円形	スリ鉢	182	156	80			5点	縄 中 期



堂地遺跡狐狸地籍土壌一覽表

No. 3

番号	図版番号	平面	形状	面積	長さ	幅	土質	状態(上部・内部など)	出土	土産物	その他(時間帯)
73		不規則円形	ナベ底	88	56	33					
74	29-2	円形	ナベ底	91	86	36			2点		縄中初
75	29-3	円形	ナベ底	60	59	21			2点		縄文中期
76		円形	スリ鉢	60	55	25					
77		円形	ナベ底	75	65	14					
78	29-4	不規則円形	ナベ底	150	100	22					
79	29-5	不規則円形	舟底	128	97	30			1点		縄文中
80		円形	舟底	90	70	25			12点	残鉢	縄中前平
81	29-6	円形	スリ鉢	100	82	24			10点		縄中初
82	29-7	不規則円形	ナベ底	124	94	21					
83		円形?	ナベ底	46	35	62		底面凸			
84		円形?	舟底	198	160	72		土層斜面上にある			
85		円形?	舟底	73	50	45		ロームワウンド。土層85を切る	1点	(黒土層より出土)	
86		隅丸方形	ナベ底	129	100	20		土層斜面に切られる	9点	フレイク	縄中初
87	29-8	円形	円底	40	35	28					
88	29-9	円形	ナベ底	125	123	55			2点		縄中初
89	29-10	円形	ナベ底	52	44	16			1点		縄中初
90	29-11	円形	ナベ底	55	45	22			3点		縄中初
91	29-12	円形	片蓋状	55	49	22					
92	29-13	円形	片蓋状	96	65	18					
93	29-14	円形	ナベ底	73	71	21					
94	29-15	円形	蓋状	108	105	30					
95		円形	スリ鉢	124	64	17					
96	29-16	正円形	ナベ底	100	94	20					
97		円形	ナベ底	88	80	20				残鉢(縄中前平)	平安時代
98	29-17	正円形	スリ鉢	82	80	37		中央凹			
99		隅丸方形	円底	54	52	34					
100	29-18	不規則形	スリ鉢	165	142	22		小さい凹穴あり		11点	縄中初
101		円形	ナベ底	108	96	20					
102		円形	ナベ底	87	80	11					
103		円形	円底	93	81	16				2点	縄中初
104	29-19	円形	蓋状	102	100	21				6点	縄中初
105	29-20	円形	スリ鉢	98	86	24				5点	縄中初
106		不規則円形	舟底	184	60	48					
107	29-21	円形	片蓋状	135	122	21				1個	縄中初
108		円形	スリ鉢	132	115	33				2点	縄文中

堂地遺跡跡瓦竪地籍土壙一覽表

No. 4

番付	区画番号	ア ラ ウ		大 き き (m)	状 態 (上 部・内 部2 点)	出 発 地	土 遣 場	その他 (時期等)
		平 面	断 面					
109	29-22	不整形	スリ鉢	183	170	30		
110		楕円形	ナベ底	109	79	17		上部で須山瓦片
111		楕円形	スリ鉢	140	111	34		
112	29-23	不整形	二段底	76	65	15		
113	29-23	不整形	ナベ底	130	82	35-13		10点 フレイク
114	29-24	楕円形	ナベ底	84	65	16		1点
115	29-25	楕円形	ナベ底	127	95	18		
116	29-25	楕円形	スリ鉢	93	67	14		1点
117		不整形	ナベ底	185	105	20		
118		不整形	ナベ底	108	67	16		2点
119		楕円形	スリ鉢	166	131	23		
120	29-26	不整形	ナベ底	120	105	25		
121	29-26	楕円形	ナベ底	185	127	15		
122		不整形	舟底	180	110	48		
123	29-30	円形	ナベ底	133	143	87		
124	29-28	楕円形	ナベ底	190	115	55		
125		楕円形	ナベ底	158	122	18		
126	29-29	不整形	スリ鉢	127	89	38		
127	30-1	楕円形	ナベ底	92	61	17		
128		楕円形	ナベ底	80	58	15		
129		円形	ナベ底	66	56	37		
130		円形?	ナベ底?	65	60?	98		
131		楕円形	ナベ底	232	130	85		
132		楕円形	ナベ底	115	97	25		
133	30-2	円形	ナベ底	88	85	17		
134	30-3	円形	円蓋	65	63	30		
135	30-4	不整形	スリ鉢	82	71	39		
136		不整形	束腰	274	244	?		
137	30-5	不整形	不整形	229	91	35		
138	30-6	楕円形	スリ鉢	68	58	29		
139		円形	円蓋	74	64	18		
140	30-9	不整形	スリ鉢	208	130	56		
141	30-10	楕円形	円蓋	175	157	45		
142	30-8	楕円形	ナベ底	130	90	25		
143	30-7	楕円形	ナベ底	96	82	20		
144		円形	ナベ底	187	178	20		



壹地遺跡跡孤窪地竊土竊一覽表

No. 6

番付	図面番号	ブ	ウ	ン	ク	大	小	深さ	層上	状況(上部・内部など)	出土	上	遺	物	その他(時期等)
181	31-4	楕円形	野山	野山	野山	野山	野山	30	合						
182		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	78	14	壁・土間					
183	31-5	円形	円形	円形	円形	円形	円形	87	20	壁・土間					
184		楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	118	22	壁・土間					
185	31-6	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	98	8	中央・東側に小穴					
186		楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	88	20	小穴					
187		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	195	14						
188		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	240	15	合					
189	31-7	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	132	25	合					
190	31-8	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	120	20						
191		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	128	67						
192	31-9	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	116	77	表バミス					
193		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	100	83	下合					
194	31-10	円形	円形	円形	円形	円形	円形	147	38	清水					
195		楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	67	58						
196	31-11	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	115	70						
197		楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	95	68	合					
198	31-12	長円形	長円形	長円形	長円形	長円形	長円形	157	83	45					
199		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	250	95	30-80					
200		真円形	真円形	真円形	真円形	真円形	真円形	227	103	30					
201		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	153	145	28					
202		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	170	7	ローママウンド					
203		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	167	7	ローママウンド					
204		楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	96	77	12					
205		楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	110	75	7					
206		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	205	190	11					
207	31-13	円形	円形	円形	円形	円形	円形	115	113	12					
208		楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	137	120	10					
209		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	—	—	—					
210		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	82	68	12					
211		不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	132	144	45					
212	31-14	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	156	115	36					
213	31-15	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	不整形	190	185	28					
214	31-16	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	146	100	72					
215	31-17	長円形	長円形	長円形	長円形	長円形	長円形	160	83	13					
216	31-18	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	210	168	58					
217		楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	125	95	12					

臺地遺跡孤塚地籍土類一覽表

No. 7

番号	同族番号	ゾ	ア	シ	ク	大	深	土	状	部	内	部	な	ど	深	積	土	遺	物	その他(時期等)
		平	面	面	積	長	短	深	況	上	部	内	部	な	ど	積	土	遺	物	その他(時期等)
218	31-19	円形	円形	円形	円形	106	91	29							1個体				縄文 遺物	
219		不整形	不整形	不整形	不整形	189	113	20												
220		小竪楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	157	104	31												
221	31-20	楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	85	72	38												
222	31-21	円形	円形	円形	円形	100	95	53												
223	31-22	円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	95	90	15												
224	31-23	円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	73	68	15												縄中 初
225		不整形	—	—	—	297	104	37												
226	32-1	円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	101	101	13												縄中 初
227		楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	200	170	20												縄中 初
228	32-2	楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	180	125	48												
229	32-3	楕円形	門形	門形	門形	132	116	52												
230		竪楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	100	57	18												縄中 初
231	32-4	小竪楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	123	103	35												
232	32-5	楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	172	109	10												
233	32-6	楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	118	95	9												縄中 初
234	32-7	円形	溝状	溝状	溝状	118	105	58												縄中 初
235		長楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	270	145	15												縄中 初
236	32-8	円形	片楕円形	片楕円形	片楕円形	110	98	37												
237	32-9	方形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	130	90	9												縄中 初
238		楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	172	144	15												縄中 初
239	32-11	楕円形	二股底	二股底	二股底	205	140	23												
240		小竪楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	86	78	18												
241		楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	112	110	50												
242		楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	95	80	12												
243	32-10	小竪楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	95	76	16												
244		不整形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	86	81	10												
245	32-12	楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	143	143	25												
246	32-80	円形	二股底	二股底	二股底	230	200	76												
247	32-13	楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	166	145	23												
248		楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	102	82	29												
249		不整形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	105	105	12												
250	32-14	楕円形	片楕円形	片楕円形	片楕円形	125	112	62												
251		楕円形	門形	門形	門形	102	84	27												
252	32-15	楕円形	門形	門形	門形	145	128	83												
253	32-16	円形	溝	溝	溝	117	112	57												
254	32-17	小竪楕円形	ナベ底	ナベ底	ナベ底	247	195	29												

堂地遺跡孤陸地籍土壌一覽表

No. 8

番号	区画番号	ア 平面	ラ 断面	ン 断面	大 き さ (m)		土 質	土 質	出 産	土 質	物	その他 (時期等)
					縦軸	横軸						
255		円形	円形	円形	145	134	香木炭		7点			縄中初
256	32—18	楕円形	ナベ底	ナベ底	110	97	54		20点			縄中初
257		不定形	ナベ底	ナベ底	166	12						
258		不定形	ナベ底	ナベ底	275	19						
259	32—19	楕円形	円形	円形	130	98	46					
260		不整形	ナベ底	ナベ底	353	57						
261		不整形	ナベ底	ナベ底	90	73	22					
262		不整形	ナベ底	ナベ底	165	130	47					
263	32—20	楕円形	ナベ底	ナベ底	128	70	22					
264	33—1	不整形	ナベ底	ナベ底	100	100	13	含バミス		土師片		平安時代
265		円形	ナベ底	ナベ底	107	100	28					
266	33—2	楕円形	ナベ底	ナベ底	135	25						縄文中期
267		楕円形	ナベ底	ナベ底	95	57	24	含バミス				
268	33—3	不整形	ナベ底	ナベ底	97	80	15	含炭灰				
269		円形	ナベ底	ナベ底	75	73	23	含炭灰		黒曜石		縄文
270	33—4	不整形	二阶段	二阶段	148	122	40					
271		不定形	舟底	舟底	130	81	22					縄中初
272		正円形	ナベ底	ナベ底	90	87	11					
273	33—5	楕円形	円形	円形	87	65	15	炭色				
274	33—6	正円形	ナベ底	ナベ底	117	115	20	炭形色				
275		不整形	不整形	不整形	145	25		含砂利				中央に小穴
276		円形	ナベ底	ナベ底	90	85	17	含木炭				
277		不整形	ナベ底	ナベ底	165	—	—	含木炭				
278	33—7	不定形	ナベ底	ナベ底	100	—	—					縄中初
279		楕円形	ナベ底	ナベ底	110	90	25					
280	33—8	楕円形	ナベ底	ナベ底	155	148	15					平安時代
281		円形	ナベ底	ナベ底	164	154	21	含木炭				
282	33—9	不整形	ナベ底	ナベ底	120	100	70	木炭				
283		不整形	ナベ底	ナベ底	196	147	28					
284		楕円形	舟底	舟底	122	81	40					
285		楕円形	舟底	舟底	156	108	100					縄文後・縄中
286	33—10	不整形	舟底	舟底	123	108	52					
287	33—11	楕円形	舟底	舟底	112	81	44					縄中初
288		不整形	ナベ底	ナベ底	142	121	32					
289	33—12	楕円形	ナベ底	ナベ底	124	122	47	含木炭				縄文
290		楕円形	二阶段	二阶段	137	120	55	含木炭				縄文
291	33—13	楕円形	ナベ底	ナベ底	233	206	27					縄文後期

堂地遺跡跡頭埋地籍土壌一覽表

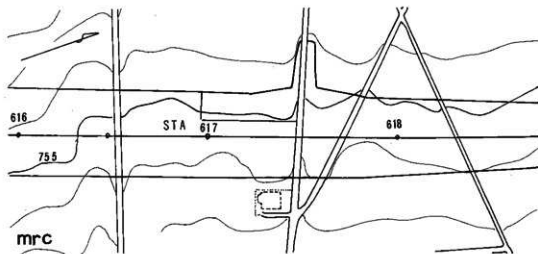
No. 9

番号	図原番号	ア 平 面	ラ ン ク	シ ン ク	大 き さ (m)	状 態 (土 質)	出土遺物		その他(時期等)
							遺跡	遺物	
292		楕円形	ナベ底	瓦輪	105 98 14		1点	縄文	縄文(時期等)
293		不定形	ナベ底		110 68 20		2点	フレイク	縄文
294		楕円形	円底		83 65 15	底面凸あり	1点		縄文
295	33-14	円形	ナベ底		112 101 12	含炭粒	3点		縄文中期
296	33-15	円形	ナベ底		132 82 10		2点		縄文中期
297		不定形	ナベ底		100 85 18		2点	フレイク	縄文
298		不定形	ナベ底		— 29		30点		縄文中期
299	33-16	楕円形	円底		127 95 32				
300	33-17	楕円形	ナベ底		102 88 12				
301	33-18	楕円形	ナベ底		98 83 15	赤木炭粒			
302	33-19	円形	スリ鉢		68 60 20		1点		縄文中期
303		楕円形	ナベ底		77 65 22				
304	34-1	楕円形	スリ鉢		98 56 22		1点		縄文中期
305	34-2	楕円形	スリ鉢		80 68 13		2点		縄文中期
306		不整形	不整		135 82 15	赤砂利			
307		楕円形	ナベ底		120 85 18	赤炭粒			
308	34-3	楕円形	スリ鉢		158 122 30		2点		縄文中期
309		円形	スリ鉢		91 87 23				
310	34-4	円形	ナベ底		122 115 16				
311		不定形	ナベ底		139 110 32		2点		縄文中期
312		不定形	舟底		183 55 15				
313	34-5	長楕円形	円底		255 128 24	磁のビット痕			
314	34-6	楕円形	ナベ底		98 85 29	炭	2点	フレイク	縄文中期
315	34-7	円形	ナベ底		86 84 28	多	2個体	フレイク	縄文中期
316		不整形	ナベ底		154 133 12	石3コ その下より土器	2個体	打石片	縄文中期
317		楕円形	ナベ底		64 33 12		3点	フレイク	縄文中期
318		不整形	スリ鉢		92 75 20				
319		長方形	不整		68 54 28				
320		不整形	ナベ底		125 65 15	磁に凹部			
321		不定形	不整		163 105 18				
322	34-10	円形	ナベ底		105 86 34	赤炭粒			
323		円形	ナベ底		133 145 17	多			
324	34-11	楕円形	不整		84 82 15	底深く焼土、小彫穴?		炭粒	縄文中期
325		楕円形	ナベ底		76 72 41	含炭		フレイク	縄文
326		不定形	不整		162 105 14				
327		不定形	不整		125 74				
328	34-12	正円形	ナベ底		50 50 27	含炭粒			縄文



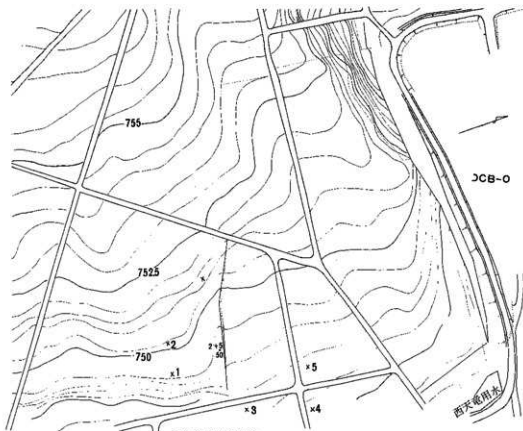






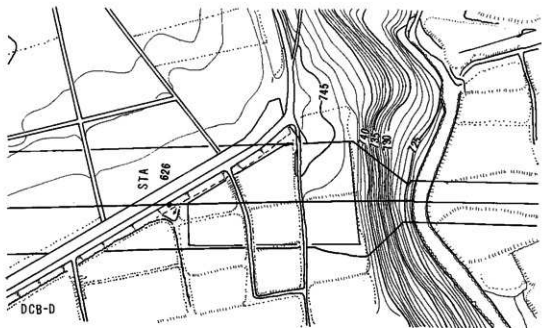
1. 南大原遺跡

第4圖 箕輪町地内中央道用地内各遺跡地形図 (1:2000)

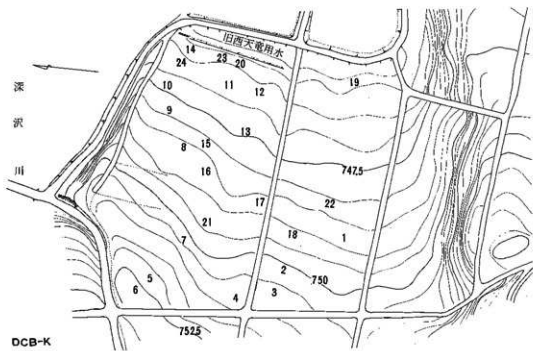


2. 箕輪遺跡孤丘地籍

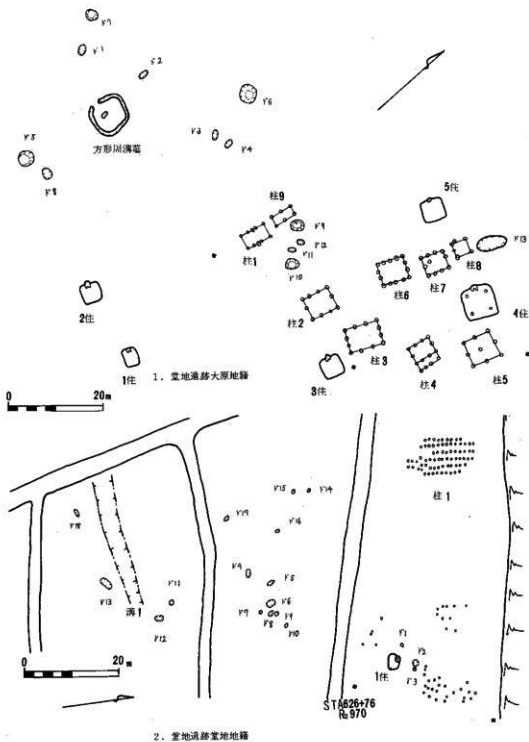
第4圖 箕輪町地内中央道用地内各遺跡地形図 (1:2000)



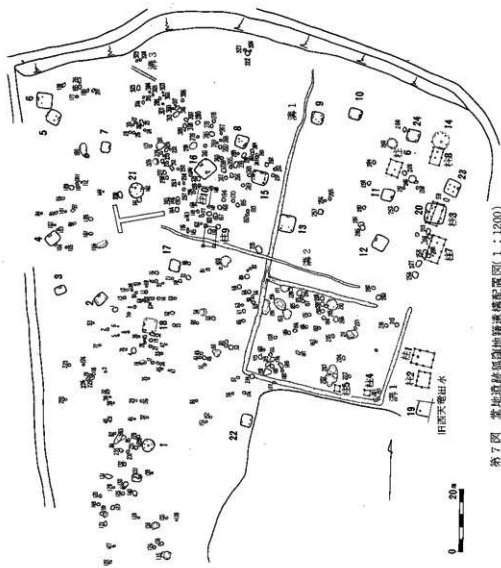
1. 當地凍跡當地地籍



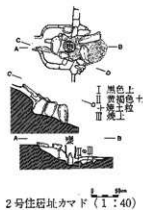
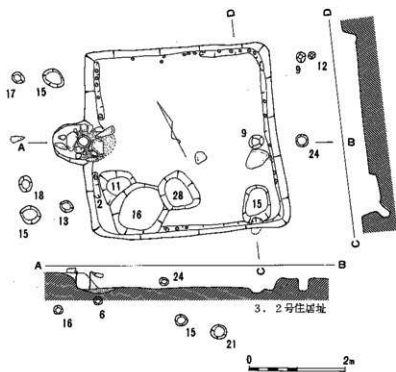
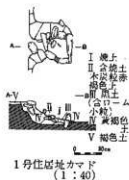
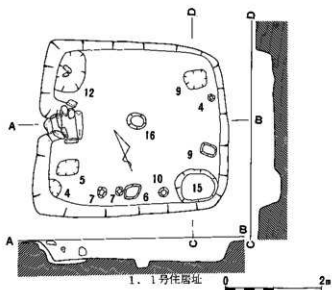
第5圖箕輪町地内中央道用地内各遺跡地形図(1:2000)



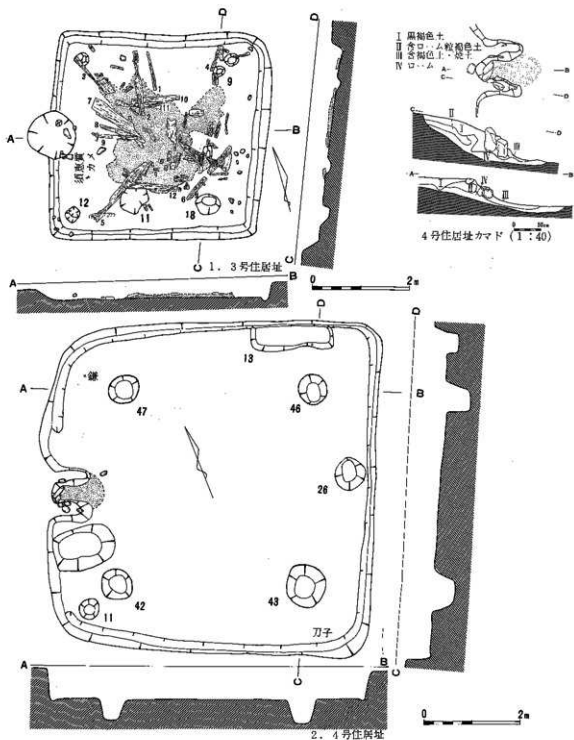
第6圖 堂地遺跡大原・堂地地籍遺構配置圖(1:800)

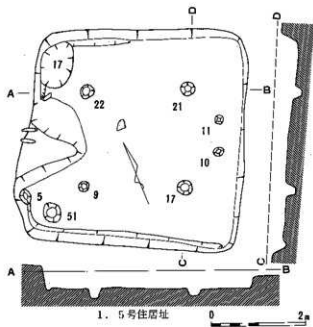


第7图 高家路遗址平面结构配置图(1:1200)



第8図 堂地遺跡大原地帯1・2号住居址 (1:80)

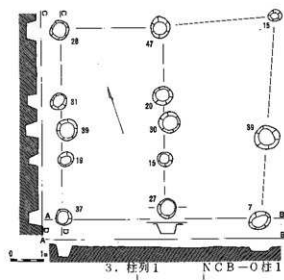




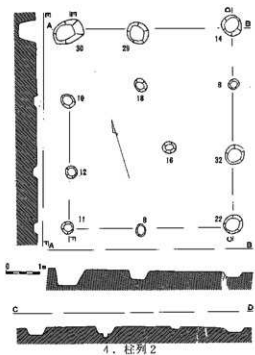
1. 5号住居址



5号住居址カマド中央部断面図



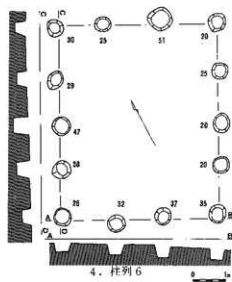
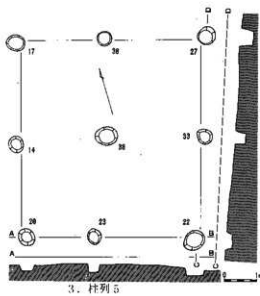
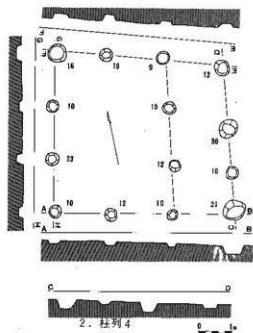
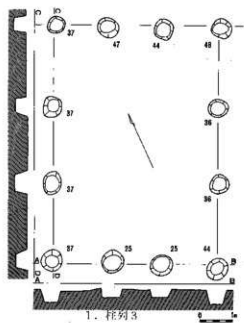
3. 柱列1 NCB-O柱1



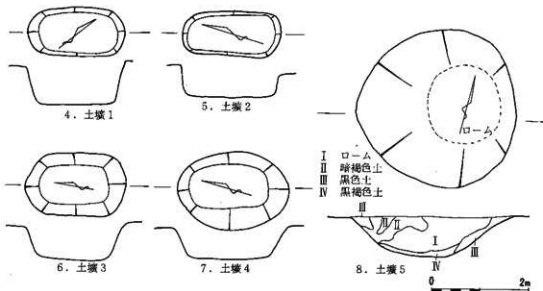
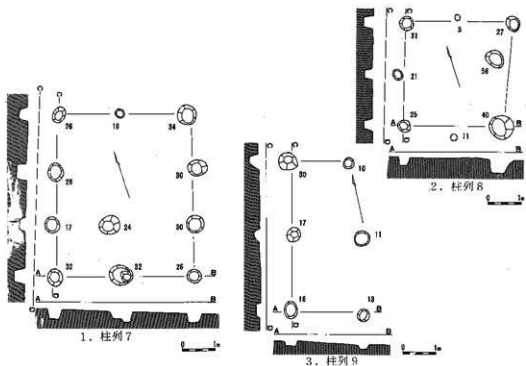
4. 柱列2

第10図 室地遺跡大原地籍5号住居址柱列1・2 (作尺址  
1:80, 柱列 1:120)

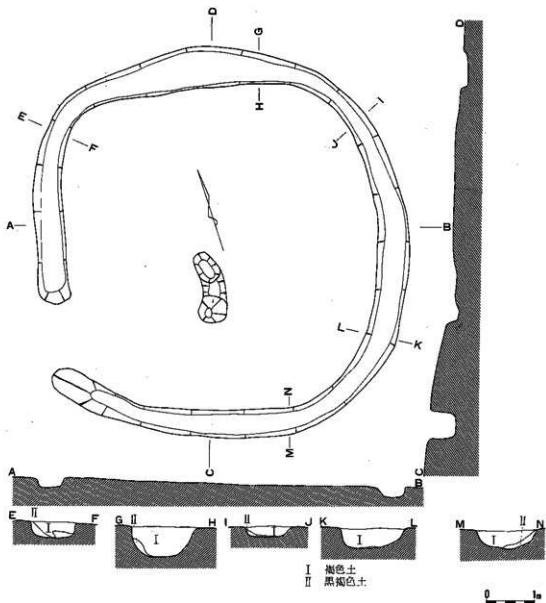




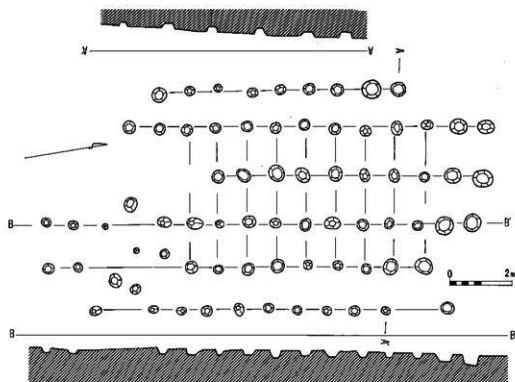
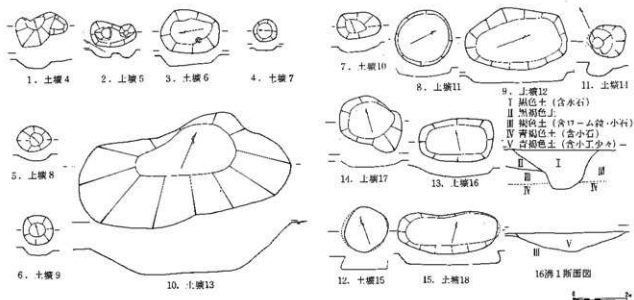
第11图 堂地遺跡大原地籍柱列3·4·5·6



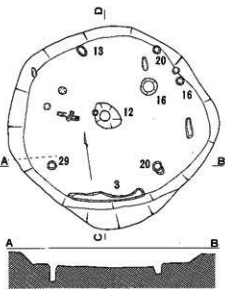
第12图 堂地遺跡大原地籍，柱列7·8·9土坑1~5（柱列 1：120，土坑 1：80）



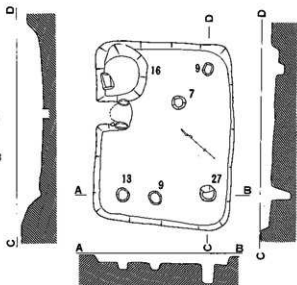
第13图 堂地遺跡大原地籍方形周溝墓 (1 : 80但し断面図E-F~M-Nは1 : 40)



第15图 堂地遺跡堂地地籍土罐4-18, 溝1, 断面, 柱列1 (土罐溝 1:80, 柱列 1:120)



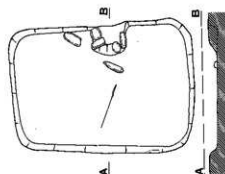
1. 1号住居址



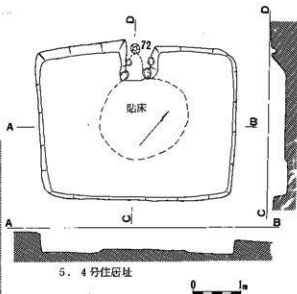
3. 2号住居址



第16图 1号住居址埋葬炉断面图

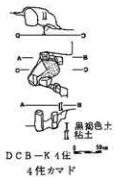
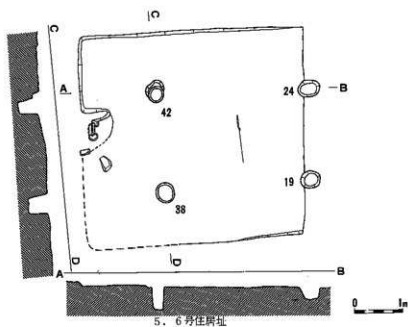
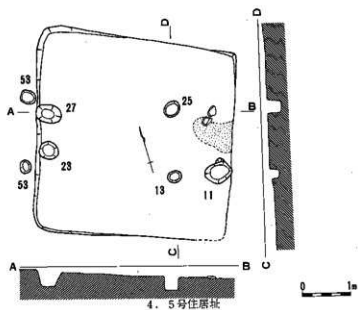


4. 3号住居址

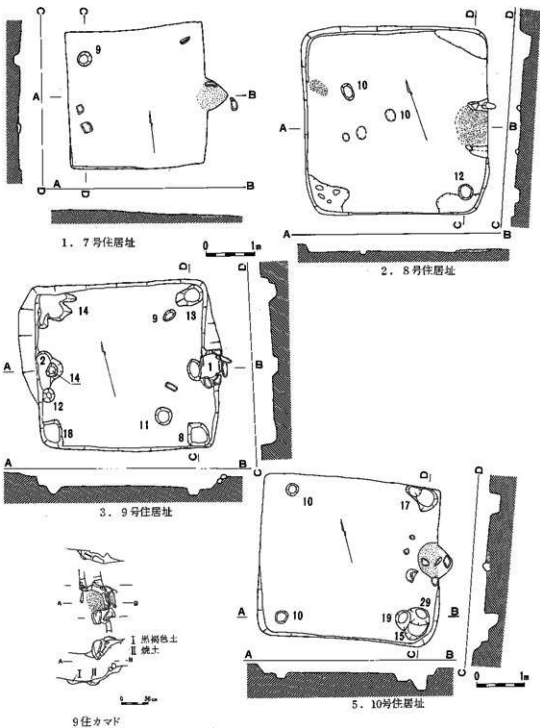


5. 4号住居址

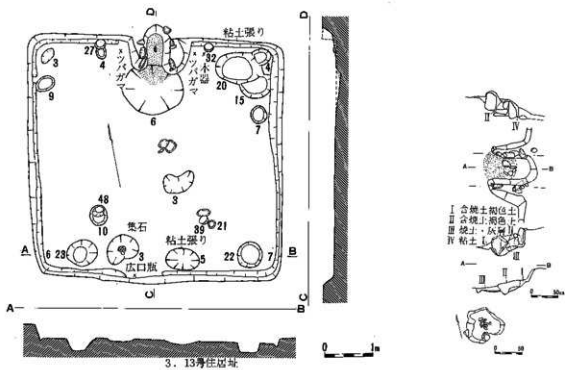
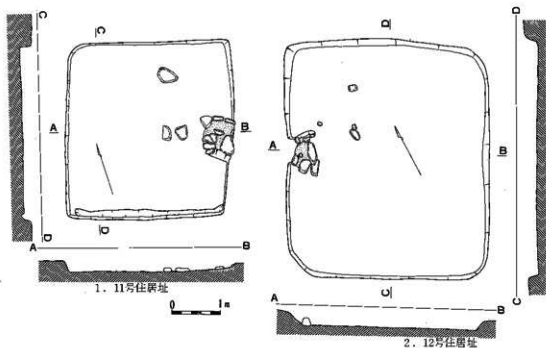
第16图 堂地遺跡孤窪地籍1·2·3·4号住居址: (1:80)



第17図 堂地遺跡狐窪地籍5・6号住居址(1:80)

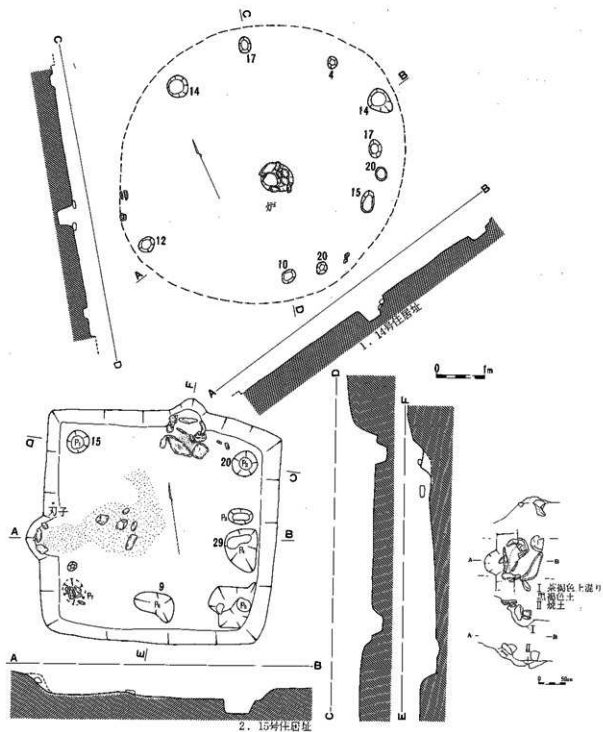


第18図 堂地遺跡狐窪地籍7・8・9・10号住居址(1:80)

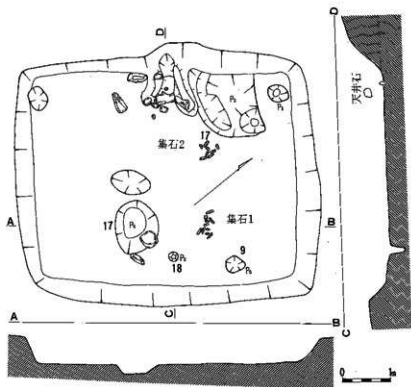


第19図 堂地遺跡孤嶺地籍11・12・13号住居址 (1:80)





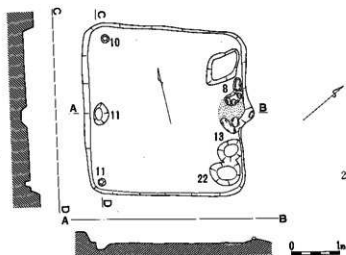
第20图 堂地遺跡狐窪地籍14・15号住居址 (1:80)



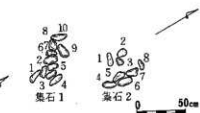
1. 16号住居址



- I 黒褐色土含
- II △ 焼土
- III 黄褐色土含
- IV 木炭粒
- V 粘土
- VI 焼けたロ-
- △ (灰?)
- V 焼土

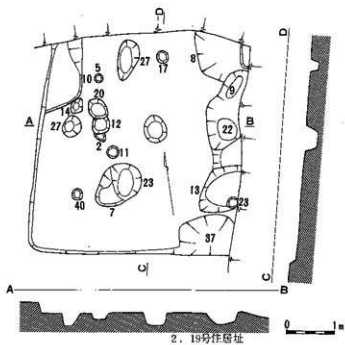
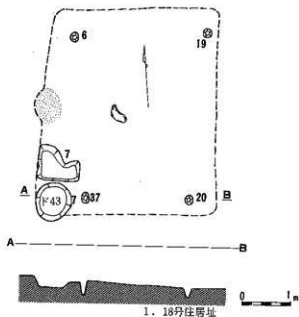


3. 17号住居址

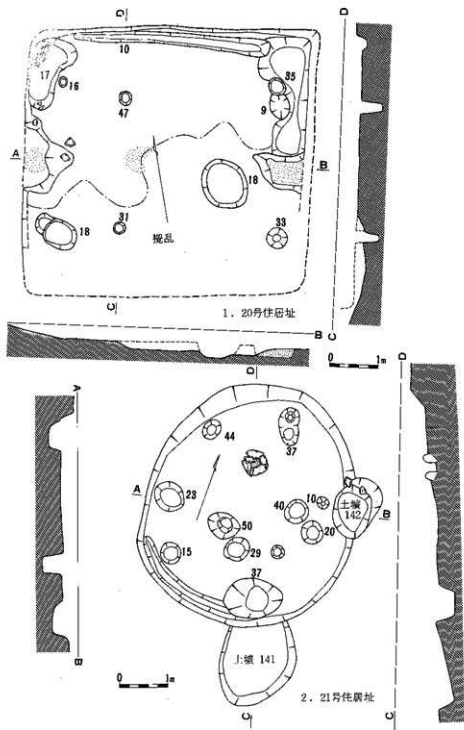


2. 16号住居址カマド集石1・2

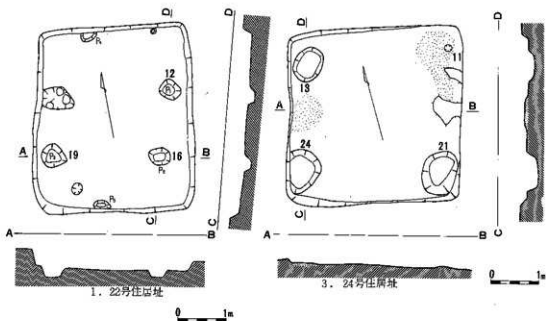
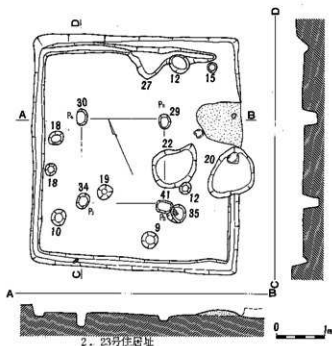
第21図 堂地遺跡狐塚地籍16・17号住居址 (1:80)



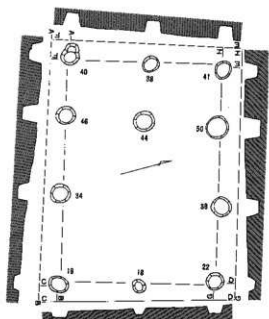
第22图 堂地遺跡狐塚地籍18・19号住居址 (1 : 80)



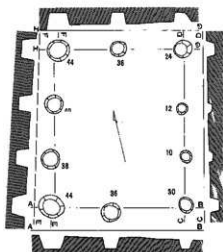
第23图 堂地遺跡狐窪地籍20・21号住居址(1:80)



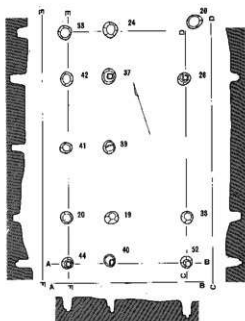
第24图 营地遗址狐岭地籍22·23·24号住居址 (1:80)



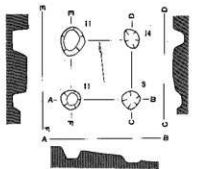
1. 柱列 1



2. 柱列 2

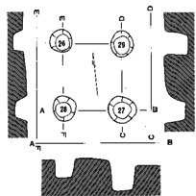


3. 柱列 3

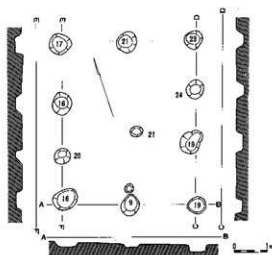


4. 柱列 4

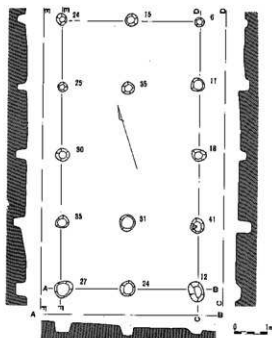
第25图 棠地遗址狐窟地籍柱列1·2·3·4 (1:120)



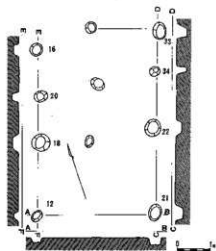
1. 柱列 5



2. 柱列 6

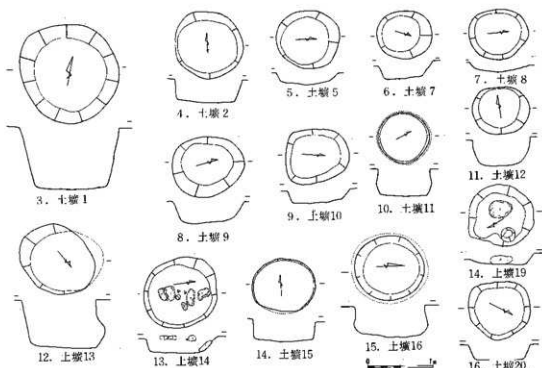
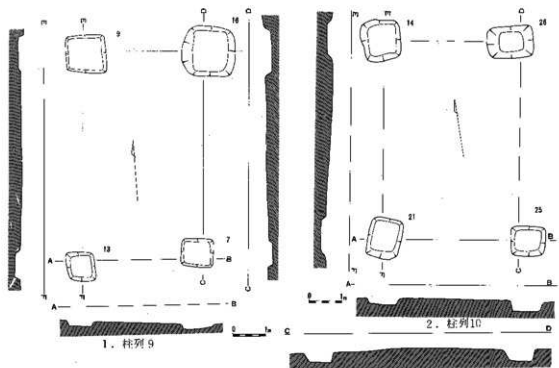


3. 柱列 7



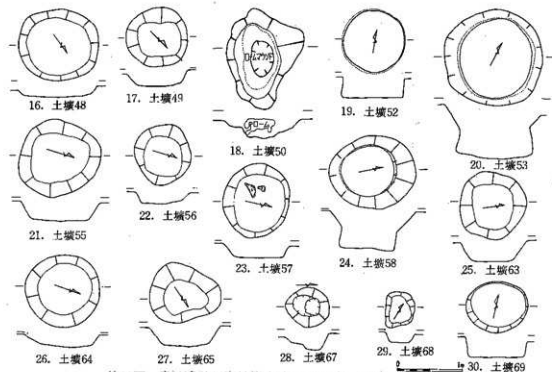
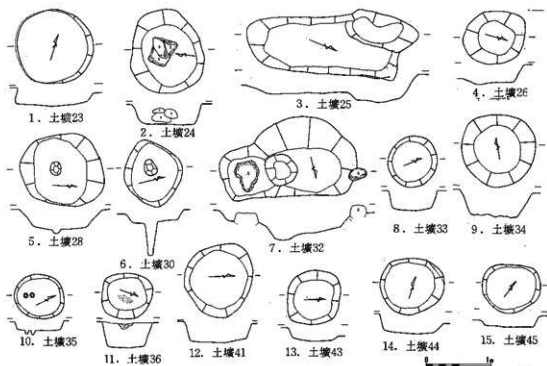
4. 柱列 8

第26图 棠地遺跡狐窪地籍柱列 5·6·7·8 (1:120)

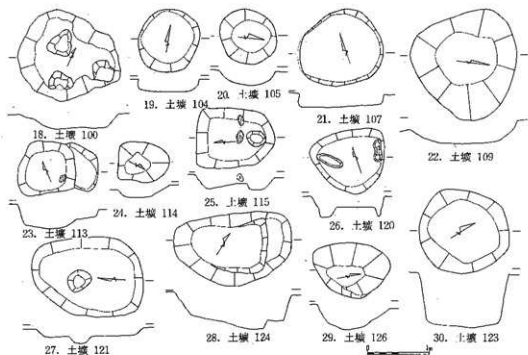
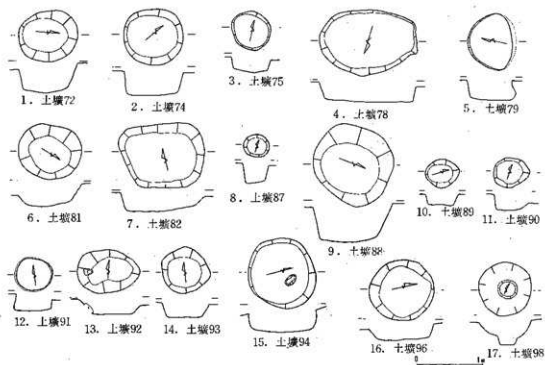


第27圖 草地遺跡孤羅地窟柱列9・10・土坑1~20(柱列1:120,土坑1:6)

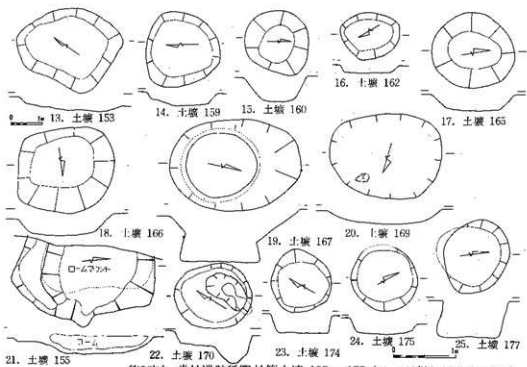
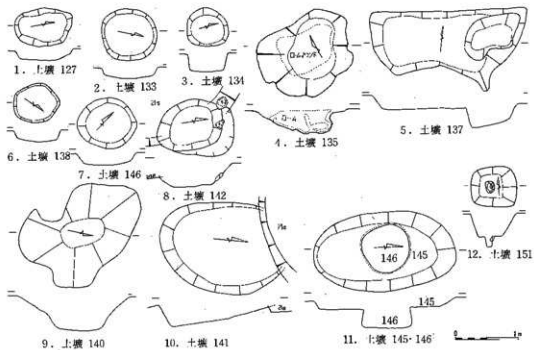




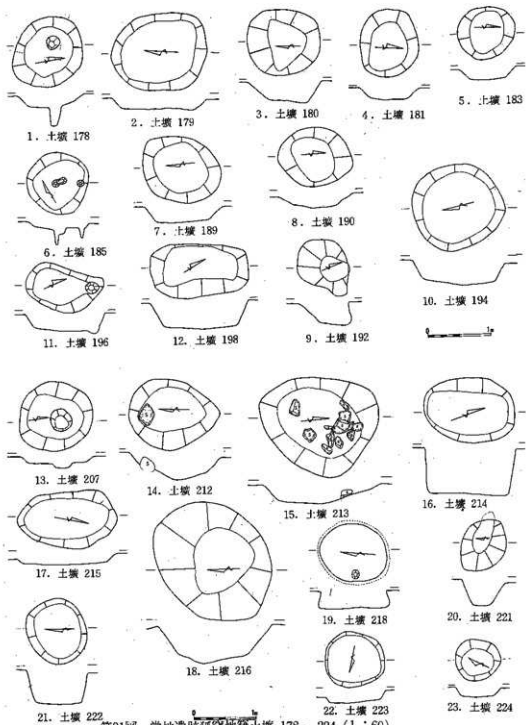
第28图 蒙地遗址孤窟地籍土壤23-69 (1:60)



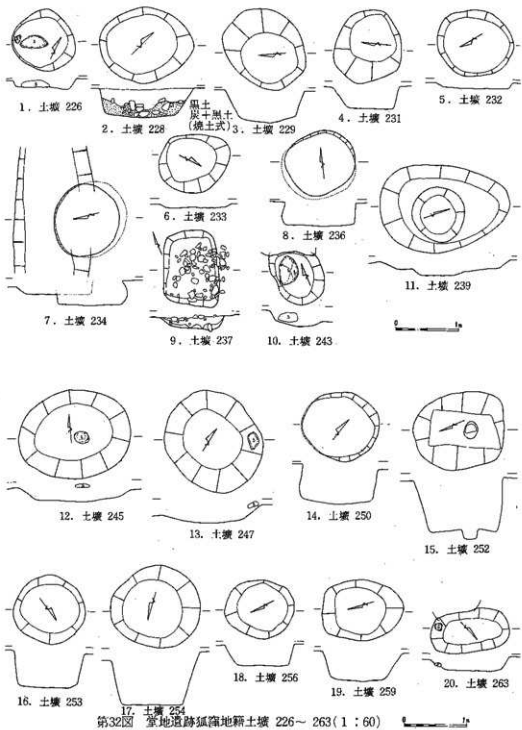
第29图 京地遗址孤冢地籍土坑72~123 (1:60)

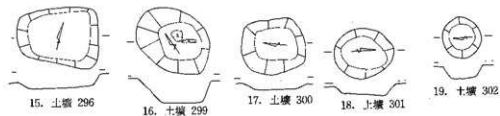
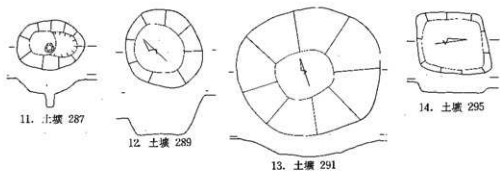
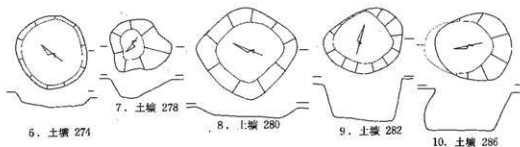
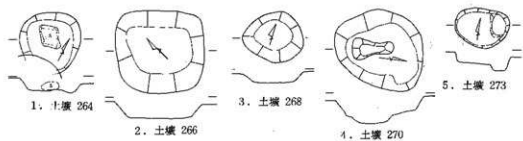


第30列 空地跡跡獨地籍土塿 127~177 (1:60但し13は1:120)



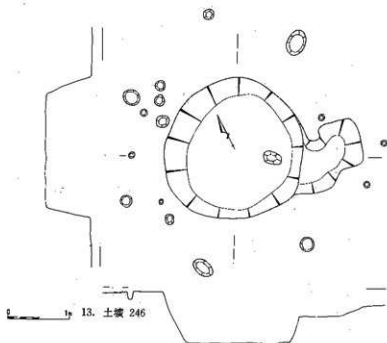
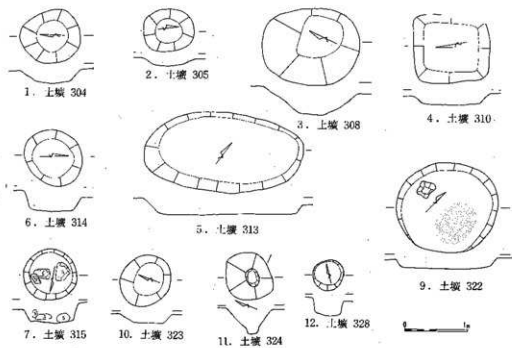
第31图 唐地遗址孤窟地坑土坑 178—224 (1:60)



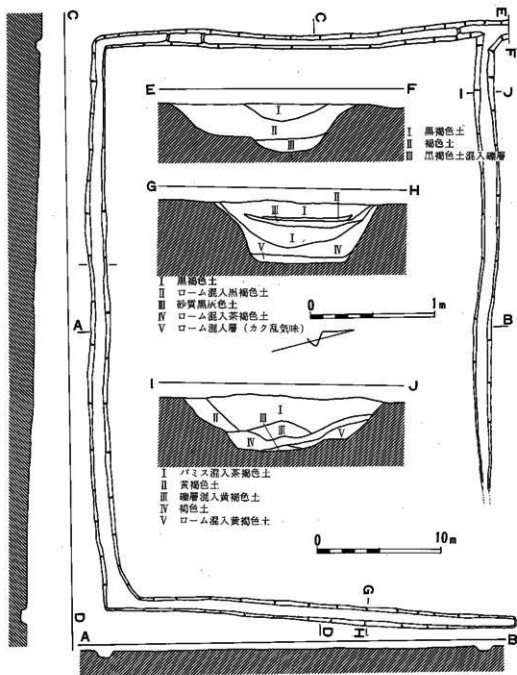


第33图 空地遺跡孤窪地籍土壘 264~302(1:60)



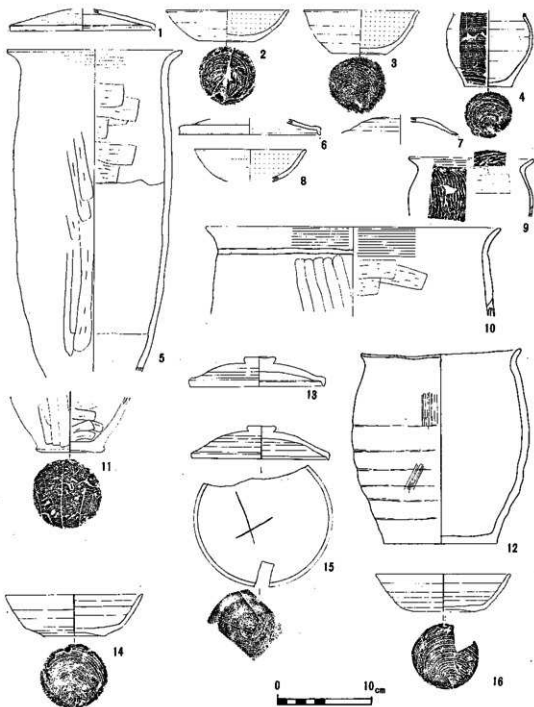


第34图 堂地遺跡孤壺地籍土罐 304~322·246 (1:60)

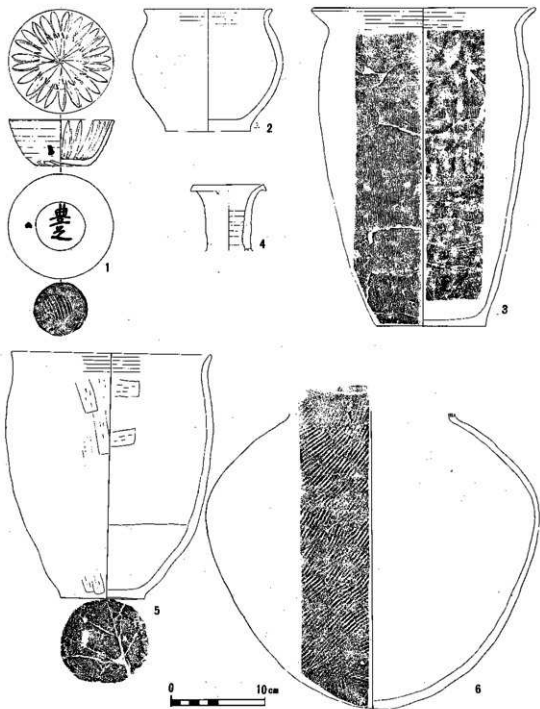


第35図 堂地遺跡孤壙地籍，溝状遺構1（1：300但し中央断面図は1：30）

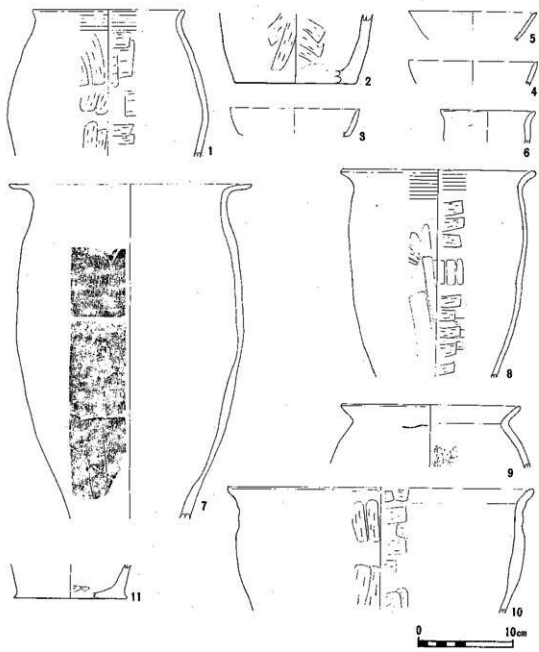




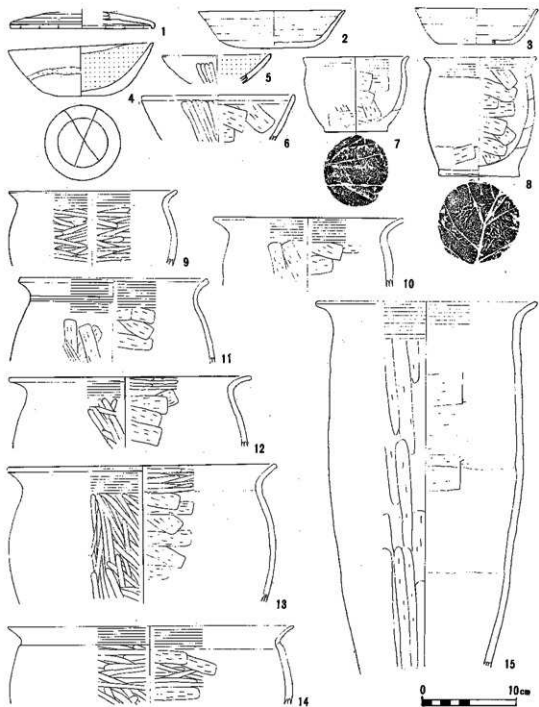
第36图 堂地遺跡大原地縄1号2号住居址出土土器(1:4) 1住 1~5 12座, 6~11 繩上, S(1·6·7), H(2~5·8~12) 2住 13~16 座, S(13~16)



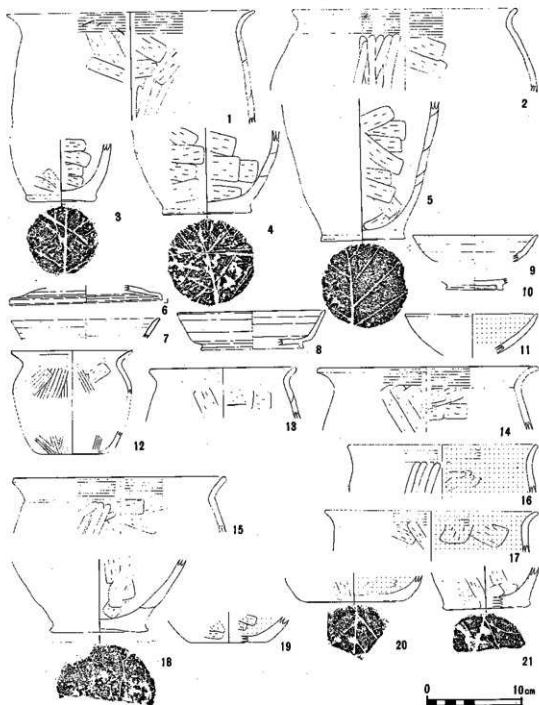
第37圖 堂地遺跡大原地第2号3号住居址出土土器(1:4)  
 2住 1~3 床, 4~5 覆土, S(4), H(1~3·5) 3住 6床, S(6)



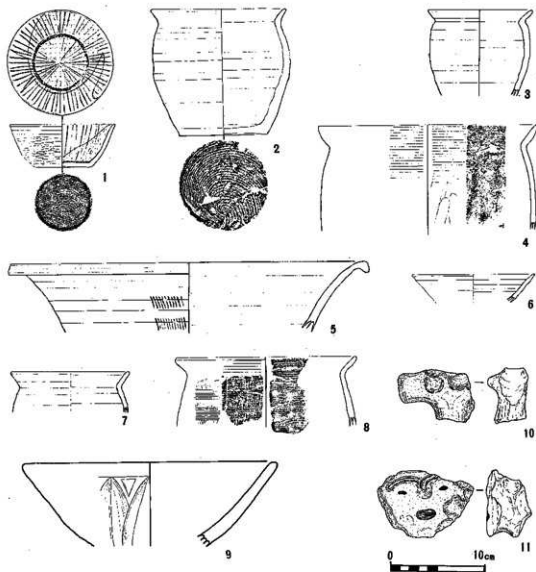
第38図 堂地遺跡大原地第3号住居址出土土器 (1:4)  
 1~2 床, 3~11 覆土, S (3~5), H (1~2・6~11)



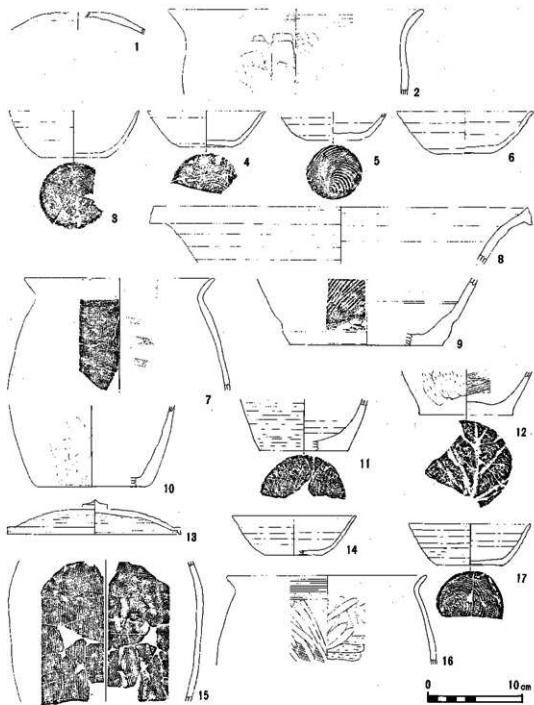
第39圖 堂地遺跡大原地籍4号住居址出土土器 (I : 4) 1~15 Ⅱ, S (1~3), II (4~15)



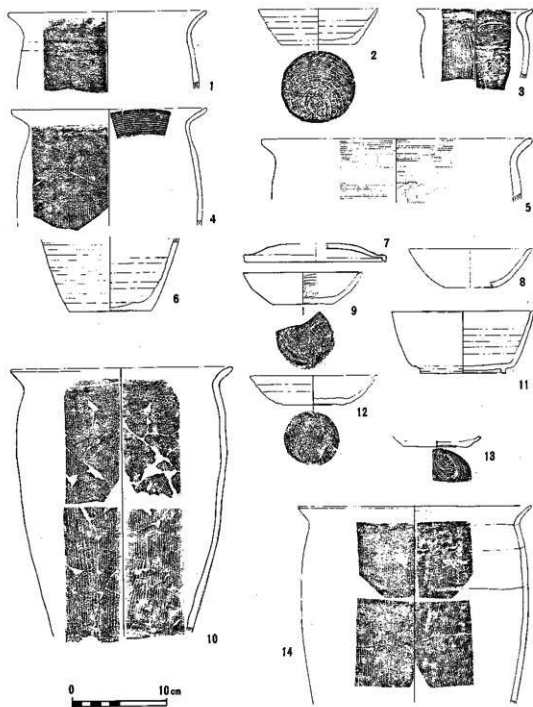
第40图 常地遺跡大原4号住居址出土土器(1:4)  
 1~5 床, 6~21 椀・土. S (6~10), H (1~5・11~21)



第41図 棠地遺跡大原地輪5号住居址狐窪地輪出土土器(1:4但し9~11 1:2) 5住 1~4床,  
5~8覆土, S(5・6), H(1~4・7・8)狐窪地輪 9~11その他 青磁(9), 土偶(10・11)

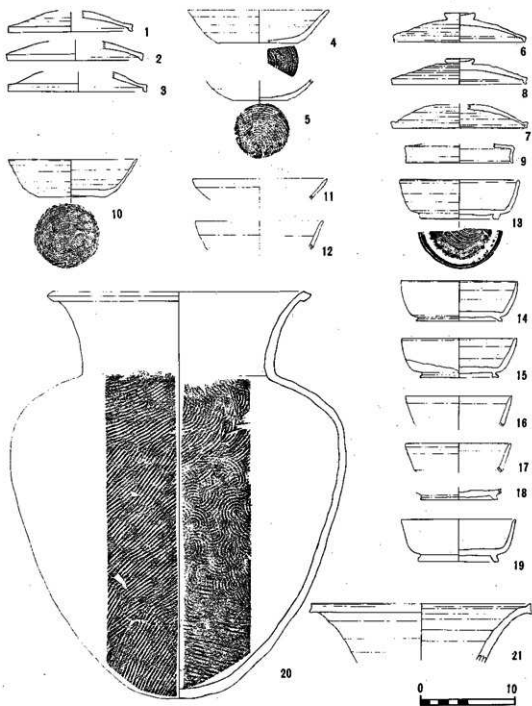


第42图 堂地溪滩孤窠地籍5号6号7号8号住居址出土土器(1:4)5住 1-2床,S(1),H(2),6住  
3-7床,8-12覆I.S(3-6·8·9)H(7 10-12),7住 13-15覆I.S(13-14)H(5),8住 16床,17覆I.  
S(2)H(8)

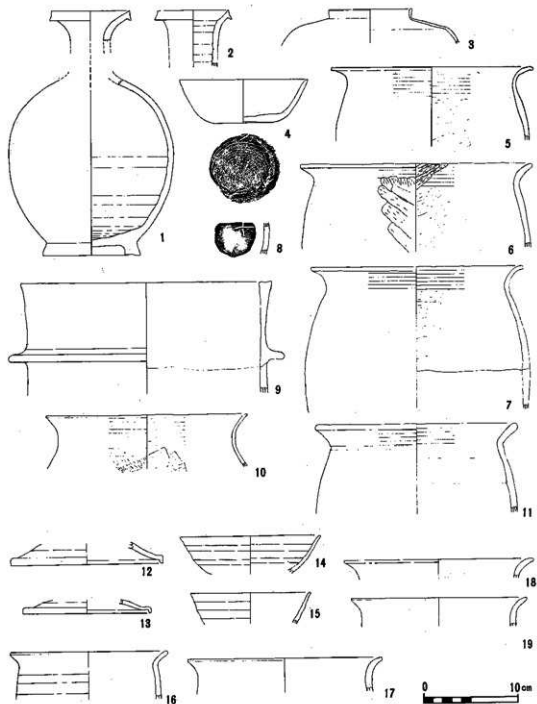


第43图 堂地遺跡孤窪地籍9号・10号・11号住居址出土土器 (1:4)9住1床 2~6覆土 S(2H  
 (1・3~6) 10住 7~10床,11・12覆土S (7・8・11・12) H (9・10) 11住 13・14床S (13) H (14)

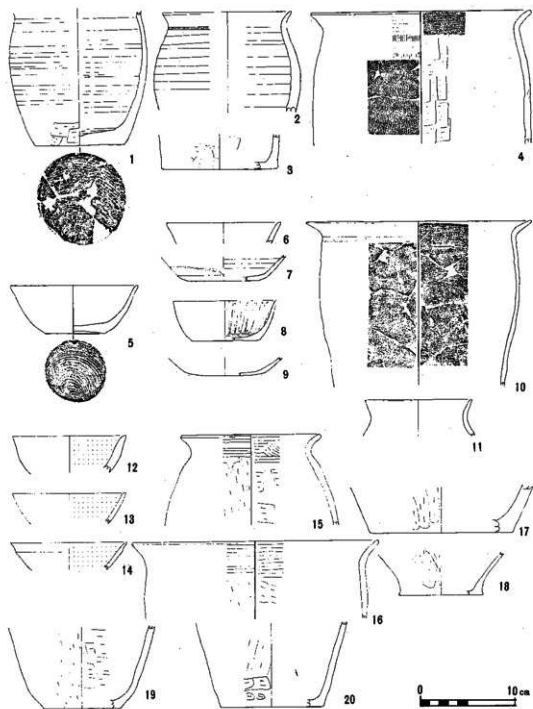




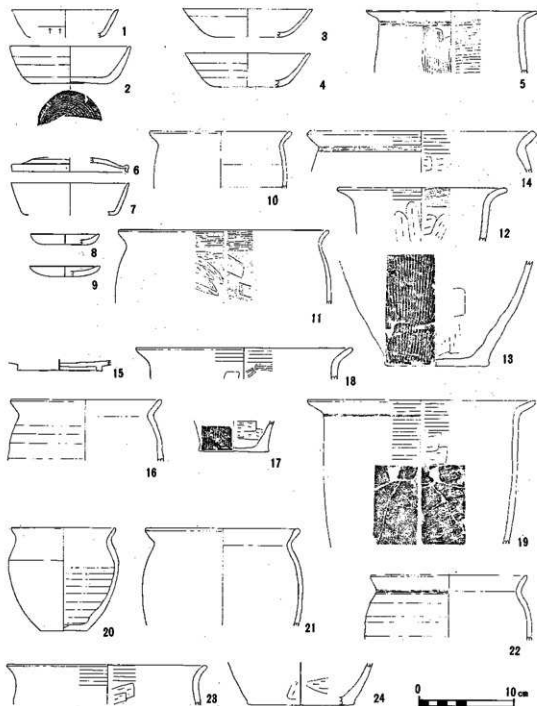
第44图 棠地遗址孤墩地籍12号、13号住居址出土土器(1:4)12注 1~5覆土S(1~5) 13注 6·7  
·10~18·20·21注



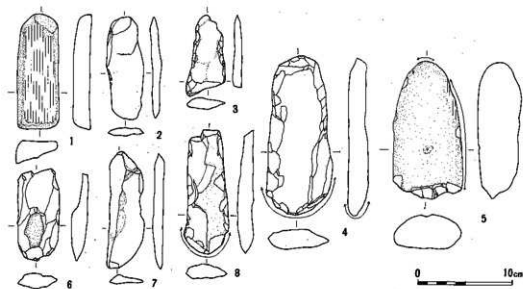
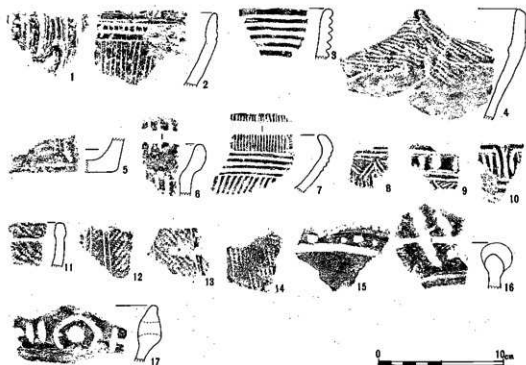
第45图 堂地遗址孤鹿地籍13号·15号住居址出土土器 (1:4) 13住 1~9床, 10·11覆土S (1~4) H (5~11) 15住 12·16床, 13~15·17~19覆土S (12~15) H (16~19)



第46図 堂地遺跡孤窪地籍15号・17号・18号・住居址出土土器(1:4)15住 1床, 2~4, 覆土  
 H(1~4) 17住 5~8, 10床, 9・11覆土 S(5~7)H(8~11) 18住 12~20床 H(12~20)

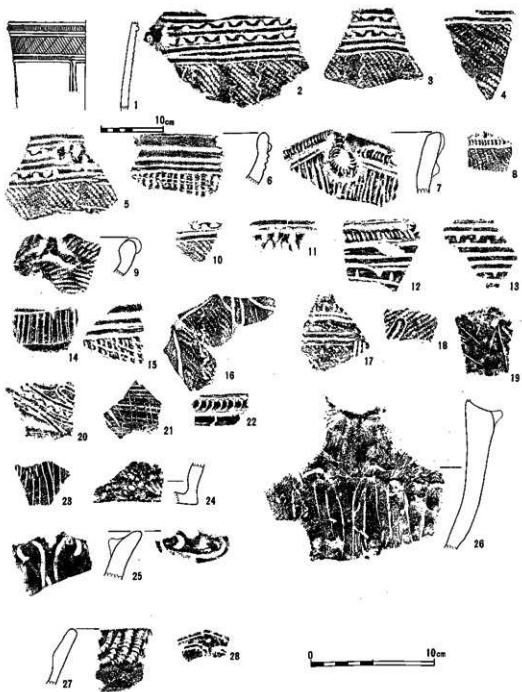


第47图 堂地遺跡狐窪地籍19号・20号・24号住居址出土土器(1:4)19住 1~5覆土(S-1~4, H-5) S(1~4) II(5) 20住 7・10~13床, 6・8・9・14覆土(S(6~7) II(8~14) 23住 16~19床・15覆土(S(15) H(16~19) 24住 20床・21~24覆土(H(20~24)

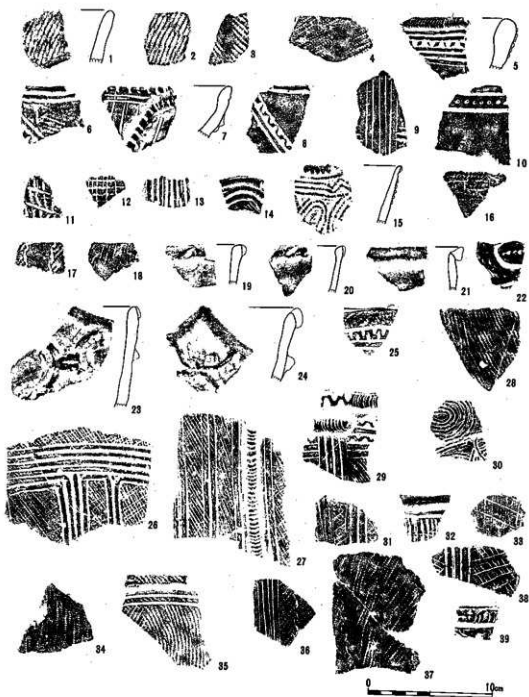


第48図 堂地遺跡大原・堂地地籍出土土器及び石器（土器 1：3，石器 1：4）  
 （上図 1～3 大原地籍 その他，4～6 堂地地籍 4住置土，2～5 大原地籍グリット他，6～8  
 土壇2，7～17 堂地地籍 その他）（下図 1 大原地堂地地籍 その他）

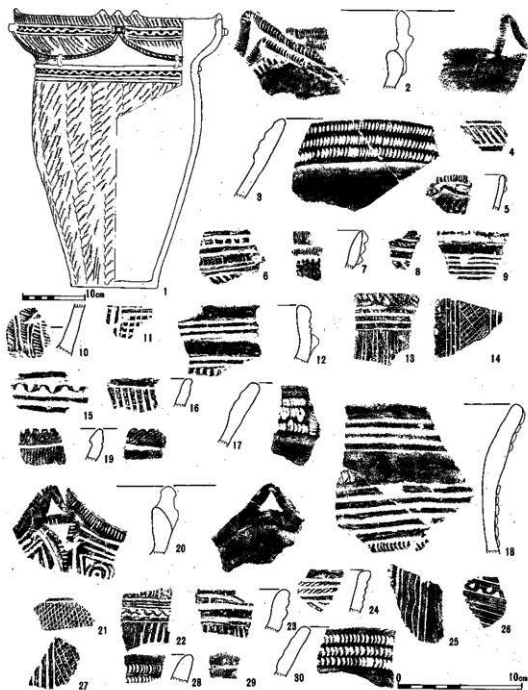
堂地遺跡大原地籍・堂地地籍出土石器（1：4）  
 （1. 大原地籍4号住置土，2～5大原地籍グリット他  
 ，6～8堂地地籍その他）



第49图 常地遺跡孤羅地籍出土土器 (1:3但1は1:6) (1住1・7 灶, 2~3・5 床, 4・6・8 覆土, 14住 9・10・12・13・14~25・27 覆土, 11・28 床, 26 炉)

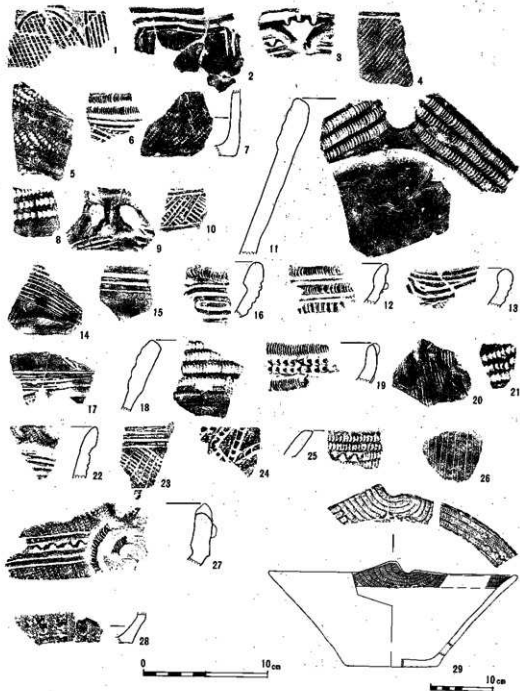


第50图 堂地遺跡孤窪地籍21号住居址及び土壌出土土器 (1:3) 21号住 1~9・11~24 覆土  
 10床面, 土壌6・25, 土壌7・26・27, 土壌9・28・29, 土壌10・30, 土壌12・31~35, 土壌13・36~38)



第51图 棠地遺跡孤窪地籍土壘出土土器 (1:3 但し1 1:6) (土壘13 1, 土壘14 2~7, 土壘19 8~9, 土壘23 10~11, 土壘23 12, 土壘27 13~14, 土壘32 15, 土壘41 16~18, 土壘43 19, 土壘35 20, 土壘49 21, 土壘45 22~23, 土壘51 24~26, 土壘54 27~30)

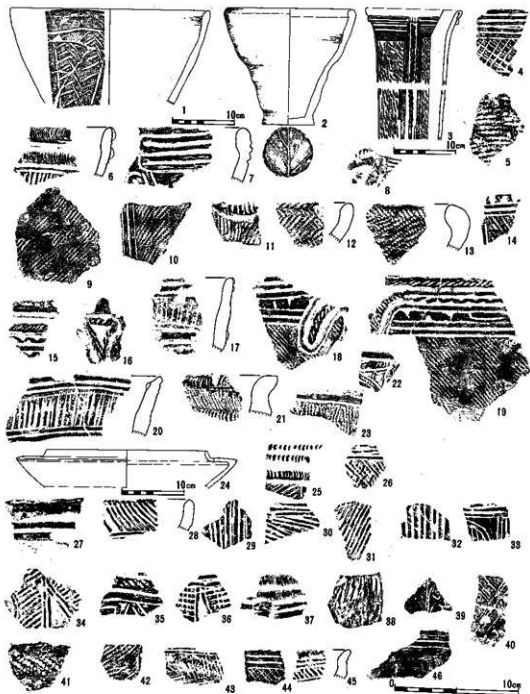




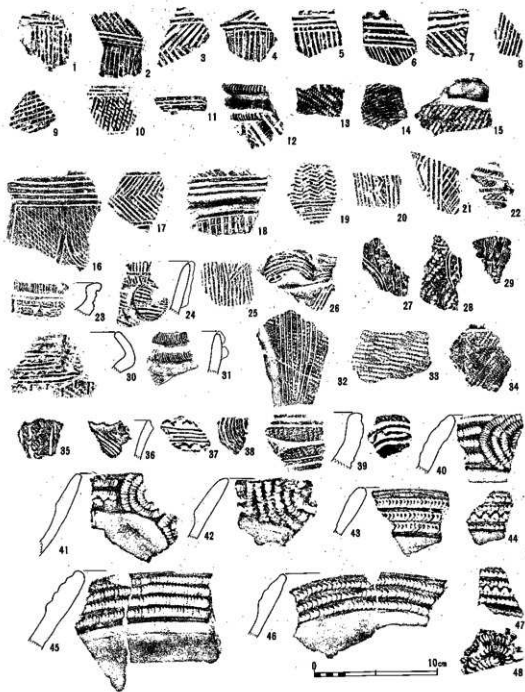
第52图 室地遺跡孤羅地籍土擴出土器(1:3)(29=1:6)。(土擴56 1~3, 土擴57 4, 土擴58 5, 土擴69 6, 土擴70·7~14, 土擴71 15·16, 土擴72 17, 土擴73 18·19, 土擴80 20~23, 土擴87 24, 土擴96 25, 土擴105 26, 土擴106 27·28, 土擴107 29)



第53図 堂地遺跡孤徑地籍土坑出土土器(1:3但し6・20~22 1:6)(土壘113  
 1・6,土壘109 2,土壘141 3~5・7,土壘153 8,土壘155 9,土壘177 10,土壘  
 218 11~13・17,土壘226 14,土壘224 15,土壘229 16・18,土壘239 19,土壘147 20  
 ・21,土壘177 22,土壘235 23,土壘246 24・25,土壘254 27,土壘255,28~30,土壘256  
 31~35,土壘260 36,土壘291 37~40)



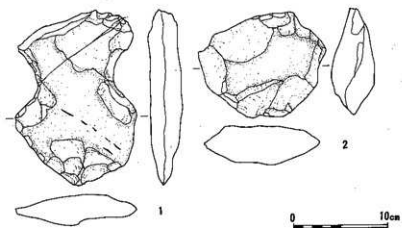
第54図 堂地遺跡孤塚地籍土城出土土器 (1:3但し1~3・24 1:6) (上表 246  
 1・2,土城 278 3,十塚 291~3・4~8,土城 315 9~19,土城 316 20~23,土城 322 24  
 土城 308・25・26 溝状遺構27~42その他 43~46)



第55図 堂地遺跡孤窪地層出土土器 (1:3)  
その他 1-48



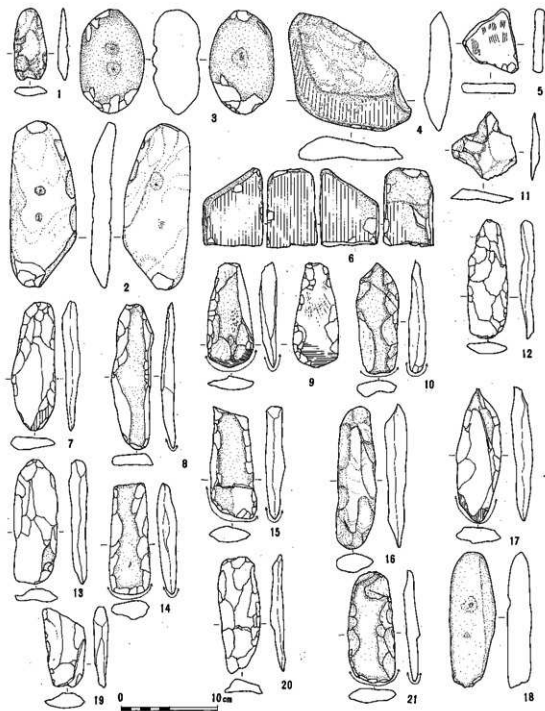
第56図 室地遺跡跡狐窪地籍出土上器 (1:3)  
 その他 1~44



第57図 堂地遺跡狐窪地層出土土器及び石器(土器1:3石器1:4)  
 (上図・下図 その他1・2)

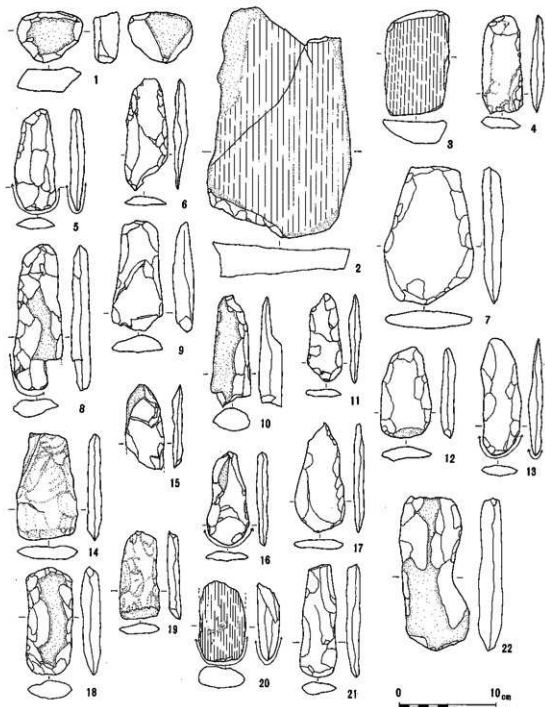


第58図 堂地遺跡孤塚地籍出土石器 (1:2) (21号住 1・2 床, 3 覆土, 土壌5・4, 土壌8・5, 土壌13・6, 土壌15・8, 土壌44, 9-12, 土壌49・13, 土壌 225・15, 土壌 234・16, 土壌 235・17, 土壌 322・18, その他19-37)



第59圖 堂地遺跡孤崗地籍出土石器(1:4)  
 (14住覆土 1~3, 15住覆土 4, 16住覆土 5  
 , 19住 6, 21住床 9·11 覆土 7·8·10·12, 土壞 7  
 13, 土壞 9 14, 土壞 12 16~18, 土壞 13 19, 土壞 14  
 20, 土壞 17 21)





第60図 堂地遺跡狐窪地籍出土石器(1:4)  
 (1 土塚19, 2 土塚24, 3 土塚40, 4 土塚43,  
 5 土塚44, 6土塚43, 7 土塚53, 8・9 土塚 200,  
 10 土塚 315, 11~22 その他)

### 3. 中道遺跡

#### 1) 位置

遺跡は上伊那郡箕輪町中箕輪中道3037～3284番地にある(図2・62・63・64、写93)。伊那谷特有の田切地形は中道遺跡の乗る台地から始る。天竜川の形成した広い河岸段丘を經ヶ岳山塊から流下する南の深沢川と北の桑沢川が開析している。

本遺跡は南西部の中道地籍と北西部の宮西地籍とに、二分された遺構分布状態を示す。中道遺跡は深沢川の左岸、段丘上から始り堂地遺跡と相対する。深沢川との比高は50～60mであり、八乙女部落から大出部落へと東向の緩傾斜面となっている。宮西地籍の遺構群との間は100m程の無遺構地帯となるが、この部分は微高地となっていたようで、宮西地籍は北東へ僅かに傾斜し、小川の流れる雨潤地籍の凹地へと向っている。遺跡の西部を西天電用水が流れるが、これを境に西は畑、東は水田地帯となる。昭和3年からの開田工事により遺跡地形は変えられ、表上の浅い部分では遺構を破壊している。

グリットはS T A 62900mをA AとしてK Pまで、幅34～64mまでの範囲に設定し調査した。宮西地籍は契約時に遺跡範囲に入れてなかったため工事用道路等が設定されており両側グリットの調査は不可能であった。他は可能な限り発掘調査した。

地層は各水田の西部ではロームまで削平している場合が多かった。埋土部では30～50cmの崩土層を残している。遺構空白部のG区では耕土下砂礫の多い部分があったが、他の地区では厚さ7m以上のローム層となっている。(田畑)

#### 2) 遺構と遺物

中道地籍ではS T A 62960m地点から63200m地点までの240mの範囲に奈良・平安時代の住居址33軒、独立建物址30棟等が見えられ、宮西地籍ではS T A 63320mから63420m地点まで100mの間に同時代の住居址26軒と独立建物址1棟、土壇18コが確認された。以下、その調査結果を記すが、住居址については西地籍一連の番号をつけ、柱列と呼んでいる独立建物址と土壇については呼称に宮西地籍のMを付して区別した。(図63・64、写94～96)

##### ア 奈良・平安時代の住居址

(1) 1号住居址(図65の1・2・108の1～12、写97～99)

遺構 B区の東端で検出された住居地で、南には2号住居址、東には3号住居址が隣接する。プランは

南北4.10m、東西4.80mの隅丸方形を呈す竪穴住居址である。主軸方向はN79°Wを示す。壁は垂直で掘いが西壁は溝状の擾乱部が2カ所あり切られている。壁高は30cm前後である。床面は砂礫混りて凹凸があり荒れている。柱穴は6つあるがP<sub>1</sub>を除いて他は浅く、補助柱穴と見られる。カマドは東壁中央やや南より石組粘土カマドがあり壁を扶け込んでいる。笑口から壁の切り込み部まで焼土が充填している。

遺物 床面から須恵器の環(108図1・2)が出土している。環は何れもロクロ引痕が顯著で、体部が大きく開き糸切底となる特徴を持つ。土師器では小型甕(同図6)が出土しておりロクロ引である。カマドからは土師器の環(4・5)が出土し、他に須恵・土師片数点が出土している。覆土からは須恵環(3)が、土師器ではロクロ引小型甕(10)とカキ目整形の小型甕(11)、甕(12)が出土している。

鉄器では刀子片が出土している。遺物からみて本址は中道Ⅲ期の住居址である。(田 畑)

## (2) 2号住居址(図65の3・4・108の13~21・109の1~17、写100~102)

遺構 B区の南端にあり深沢川段丘崖より5m、北の1号住居址から5m、北東の3号住居址から10mの位置にある。南北6.60m、東西6.70mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN37°Wを示す。壁は地山の砂礫質ロームを掘り込み南壁25cm、北壁47cmの壁高を持つ。周溝はカマド両脇より東隅のピットに連なっている。床面は固く良好で柱穴は5つあるが主柱穴は4つである。西壁中央の石組粘土カマドは壁の一部を掘り残り両袖の一部としている。袖には土師器片を使って補強している部分があり、内部には焼土が多量にあった。北東隅の2つのピット内部には焼土が多量に入り、東・北壁ぞいに10cm程の厚さで焼土があった。

覆土中から遺物が多く、床面では完形となる高台杯が2つに割れ北隅より出土し、中央部には石が多く投入されており、中には標痕のある砥石に使用されたものが3つ確認された。

遺物 床面の須恵器では杯蓋(108図13・14)、高台杯(15、写102・16)、甕(109図12)があり、土師器では杯底部(108図17)、粗く浅いカキ目のある甕(108図20・109図1・6)、筥調整の甕(108図21・109図2・3・7・9~11・13)がある。覆土の須恵器では杯(108図18、写100)、広口壺(19)、土師では甕(109図4・5・8・14)がある。石器では砥石(172図1)と大型で磨痕擦痕のある砥石状のもの(173図1~5)が出土している。

覆土中の杯(108図18)は他からの混入とみられ異質であるが、他の遺物からみて本址は中道Ⅰ期の住居址である。(木 下)

## (3) 3号住居址(図66の1・110の1~4、写103)

遺構 B区の南端にあり、20mで深沢川段丘崖となる。南北4.90m、東西4.50mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である。壁高は50cm程で垂直である。東壁中央の石組粘土カマドは壁を扶けて構築されたものであるが軸石は既になく、煙道部は非常に良好な状態で遺存していた。床面は北半部は固く良好で、南半部は軟弱であった。南西隅と南東隅は貼床となる。南壁沿いに周溝がめぐり、中央部には炉と見られる焼土のつまった浅い落ち込みがある。カマド右のピットは焼土のある灰溜めとトイレット・ストーンの落ち込む貯蔵穴があり土鍾(178図13)がその石の下から出土している。土壘5は本址を切り、土壘6は本址に切られている。

遺物 床面の須恵器では坏蓋(110図1)、土師器ではロクロ引小形甕(2)、巻上手法の小形甕(3)、甕(4)が出土している。前記の土師(写253)の他に図示しなかったが、須恵甕片、高台坏片がある。遺物からみて本址は中道Ⅲ期の住居址である。(郷道)

(4) 4号住居址(図66の2・110の5~7、写104)

遺構 D区の南部に位置し68号住居址の貼床下で確認されたもので、68号住居に切られている。プランは南北3.50m、東西3.30m前後で隅丸方形を呈すると思われる。主軸方向はN65°Wを示す。床面も68号住居址のものと同様しているため識別が困難であったが、割合軟弱である。支柱穴は4コ認められ、東壁中央にカマドの粘土・焼土が残されていた。

遺物 床面の土師器では小形甕(110図5~6)と甕(7)がある。他に寛切底の須恵器坏片があり、68号住居からの混入と思われる杯片を除くと古い要素の強い遺物である。遺物が少ないので断定はできないが中道Ⅰ期の住居址と思われる。(田畑)

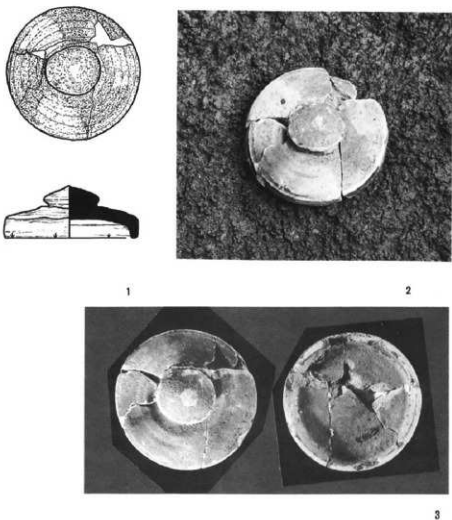
(5) 5号住居址(図67・110の8~27・111~113、写105~111)

遺構 中道地籍C区にあり6号住居址を切っている。段丘崖から2番目の遺構群の中では最大の住居址である(64図)。住居址は南北8.45m、東西9.45mの隅丸方形で大きく、構造も20号住居址と共通するものがある。主軸はN75°Wで壁はすべて垂直に掘り込み、粘質黄色ロームの壁は50~58cmを計る。西壁下を除いて幅広い周溝がある。北壁下のものは45~70cmの幅で、深さ10~20cmあり、東隅から6号住居址へ若干入り込む。南壁下のものは6号住居址のものと同様で識別できなかった。床面は6号住居址上は貼床で赤味をもったロームであるが、他の部分はタタキで厚織である。6号住居上の貼床部の北半もかなりの固さを持ち、南壁に近づくにつれ貼床は薄くなり両址の床面が共通となるようである。住居の中央を用水路が通っているがカマド部分だけ調査した。石組粘土カマドが西壁中央にあり、焚火部の焼土はレンガ状に固かった。柱穴は8コあるが支柱穴の配置は不明である。壁沿いには人頭大から50cm程の平石が配され、北側で3、東側で3、南側2コほぼ等間隔で置かれることから礎石と思われる。

東壁には入口施設が設けられ、6号住居址の壁を利用し、周溝部から埋土し坂道としている。上面はロームの固い貼床である。この前にはトイレット・ストーンが集積が見られ、左床面には焼土が認められ、床面より5cm浮いて奈良三彩小壺蓋が出土した。遺物は北西隅よりカマド周辺に集中し、6住の小ピット群上部からは坏の出土が多かった。

遺物 床面からは須恵器で坏蓋(110図8~11)、高台坏(同図12~20)、坏(同図21~27・111図1・3・5)、甕(111図7)が、土師器で坏(同図2)、甕(同図9~11・13~18・112図2~8)が出土した。カマドからは須恵器の小形壺(111図6)、甕(同図8)と土師甕(111図12・112図1)が、覆土からは土師甕(112図9~18・113図1~19)が出土した。遺物の出土量が多い。

110図19は坏底部を転用として使用したもので墨が付着し磨痕がみられる。奈良三彩小壺蓋(61図)は実珠掻みを持つ器高1.4cm・径3.5cmの完形品である。色調は緑を基調に白・黄褐色彩を筆塗りした二彩に近いもので裏面にも緑釉が施されている。胎土は白色の軟質のものである。表面にはロクロ引痕が残る。5号住居址は中道Ⅰ期の形式設定の基準となった住居で奈良時代に属する。(酒井)



第61図 中央道遺跡5号住居址出土奈良三彩小蓋蓋 1. 実測図(1:1) 2. 出土状況 3. 実大写真

第10表 中道遺跡5号住居址出土土器一覽表No.1

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	整	形	備考
110-8	环蓋	S				不	良		内外ともに口ケロ	
110-9	环蓋	S				硬質・良			内外ともに口ケロ	
110-10	环蓋	S				硬質・良				
110-11	环蓋	S				良			内外ともに口ケロ	
110-12	高台环	S	15.5	3.7	11.9	小石粒多含硬質	鉄灰色		内外とも口ケロ、底部蹴切+回転跡ナシ	底部染印
110-13	高台环	S	12.0	3.5	8.5	小石粒多含硬質	灰褐色		内外とも口ケロ、底部蹴切+回転跡ナシ	

第10表 中道遺跡5号住居址出土土器一覧表No.2

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	整	形	備考
110-14	高台環	S	12.6	2.9	10.5	小石粒多含硬質	暗青灰色	内外ともロクロ、底部寛切+回転蓋ナデ?		
110-15	高台環	S	15.5	3.5	14.0	硬質・良	淡青灰色	内外ともロクロ、底部寛切+回転蓋ナデ、高台のはりつけ入念		
110-16	高台環	S			10.5	硬質・良	青灰色	底部寛切+回転蓋ナデ		
110-17	高台環	S	17.0	4.0	13.0	硬質・良	青灰色	内外ともロクロ		
110-18	高台環	S	13.9	3.6	10.0	石英粒含	ねずみ色	内外ともロクロ、底部寛切+回転蓋ナデ		胎土、色調ともに良質
110-19	高台環	S			8.9	硬質・良	青灰色	内外ともロクロ、底部寛切+回転蓋ナデ、黒色の曇状のもの付着		転用碗
110-20	高台環	S			9.7	硬質・良	青灰色	ロクロ、底部寛切+回転蓋ナデ		
110-21	環	S	13.6	4.4	6.4	石英粒含	口縁・青灰色 体部淡灰色	内外ともロクロ、整形荒い、底部一段接合もつ跡止承切		
110-22	環	S	14.7	4.5	8.5	小石粒含胎土不良	口縁薄青灰色 体部赤褐色	内外ともロクロ、水引き痕は内面に著しい 内外に十字の火だすき、底部寛切+回転蓋ナデ組織体下半部埋埋き		
110-23	環	S	12.1	3.3	6.2	硬質・良	口縁-黒灰色 体部-淡灰色	内外ともロクロ、下半部に一部厚肌ナデ、内外に火だすき、底部一段接合をもつ、承切		
110-24	環	S			7.0	軟質・小石粒少 兼含	淡青灰色	内外ともロクロ、底部近くは磨かれてある、底部寛切+回転蓋ナデ、中心部以外磨く		
110-25	環	S	10.8			緻密・良	黄灰色	内外ともロクロ		
110-26	環	S	12.5	3.4	6.7	緻密・良	黄灰色	内外ともロクロ、寛で全面研磨、底部寛切+回転蓋ナデ、中心部以外は磨かれてある、丸味をもつ底		底部蓋印
110-27	環	S	12.7			良	灰白色	内外ともロクロ、体部に指汗痕あり		
111-1	環	S	12.1	3.6	6.4	緻密・良	灰白色	内外ともロクロ、整形入念、口縁部や内面磨する、底部寛切+回転蓋ナデ、中心部を残し磨かれてある		底部蓋印
111-2	杯	H	14.3			軟質不良	黄褐色	内外ともロクロ		
111-3	杯	S			7.0	良	青灰色	内外ともロクロ、底部寛切+回転蓋ナデ		
111-4	小形壺	H			5.0	軟質・雑	黒色	外面深く深いカキ目が底部までおよぶ、内面ハケ状工具による横ナデ、底部木葉痕		
111-5	環	S			7.5	小石粒含軟質	青灰色	内外ともロクロ、内面底部2条の沈線、底部磨止痕跡、内外に火だすき		
111-6	壺	S	網最大幅 10.7cm			小石粒多含	灰褐色	内外ともロクロ、内部凹凸はげしい、頸部から肩部に自然輪		

第10表 中道遺跡5号住居址出土土器一覧表No.3

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	装	形	備考
111-7	壺	S	13.2		11.5	小石粒含	灰 色			内外ともロクロ、内部のナデ入念、外面黒色の付着物あり、底部彫削?
111-8	小形壺	S	30.0	胴部 13.0		小石粒含良	濃 灰 色			内外ともロクロ、外面肩部より印目あり、 胴部にも印目あり、内部肩部より色調灰褐色。
111-9	小形壺	H	15.1	14.6	6.0	良	黒茶褐色			口縁横ナデ、胴部縦ミガキ、底部近く横 ミガキ、底部彫削、やや丸底
111-10	小形壺	H	12.7	15.2	7.8	良	茶 褐色			口縁内外とも横ナデ、胴部縦ミガキ、内面 横ミガキ、底部彫削、口縁部縦ミガキ
111-11	小形壺	H	9.0			雲母・小石粒含	暗 褐色			口縁内面広いカキ目横方向、外面胴部から 肩部縦ミガキ目、内面横ナデ、薄手
111-12	小形壺	H	10.3			雲母・小石粒含	外 黒 褐色 内 黒 色			口縁から胴部内外とも横ナデ、胴部縦の浅 いカキ目、内面横ナデ
111-13	小形壺	H	13.6			良	黄 茶 褐色			口縁から胴部内外とも横ナデ、外面胴部縦 ミガキ、内面横ミガキ
111-14	小形壺	H	13.6			砂質・不良	赤 茶 褐色			口縁内外とも横ナデ、外面胴部横ミガキ、 内面胴部縦ミガキ目、二次焼成痕あり
111-17	壺	H	22.0			硬質・良	黄 褐色			口縁内面広いカキ目横方向、外面横ミガキ、 胴部外面広いカキ目、内面縦ミガキ、口 縁部に横をもつ
111-16	壺	H			8.0	不 良	黄 褐色			外面浅く印広のカキ目、内面同様、丸底を もつ底部
112-1	壺	H	20.0			小石粒少量含	灰 褐色			口縁内面やや広いカキ目横方向、外面カキ 目横方向十横ナデ、胴部外面浅く縦の カキ目、内面縦ミガキ、胴部入念
112-2	壺	H	21.0			良	茶 褐色			口縁内外とも横ナデ、胴部外面縦ミガキ 目、内面サキ状工具による整形、胴部に 朱沈着
112-3	壺	H			9.2		暗 褐色			内外とも横ナデ、底部木葉痕
112-4	壺	H	21.0		18.0	不 良	赤 褐色			口縁内外とも横ナデ、胴部外面カキ目? 内面横ナデ、胴部直下に最大巾をもち底部 へと細くなる
112-5	壺	H				不 良	赤 褐色			外面カキ目、内面横ナデ

第10表中道遺跡5号住居址出土土器一覽表No.4

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	整	形	備考
112-6	甕	H			9.0		茶褐色		外面寛ナデ、内面カキ目、底部木炭痕	
112-7	甕	H			10.0		茶褐色		外面細いカキ目、内面寛ミガキ、木炭痕	
112-8	小形甕	H	12.6			良	灰褐色		口縁内外横ナデ、胴部外面横ナデ内面寛ミガキ、口縁段有	
112-9	甕	H	21.2				黄褐色		口縁内外横ナデ、胴外面ハケによる調整内面横ナデ	
112-10	甕	H	19.5			良	茶褐色		口縁内外とも横ナデ、胴外面細いカキ目内面寛ミガキ、胴部下段有	
112-11	小形甕	H	15.0			良	黒褐色		口縁内外面とも横ナデ、胴内面一部カキ目	
112-12	甕	H	18.5			良	灰茶褐色		口縁内外面とも横ナデ、胴内面寛ミガキ	
112-13	小形甕	H	15.0			緻密・良	茶褐色		口縁外面横ナデ、内面カキ目、胴外面カキ目? 口唇部くの字に内反接をもつ	
112-14	小形甕	H	14.7			良	茶褐色		口縁内外面とも横ナデ、胴内面寛ミガキ	
112-15	小形甕	H	14.8			緻密・良	茶褐色		口縁内外面とも横ナデ、胴外面広いカキ目内面細いカキ目二重になる、口唇部くの字に内反接をもつ	
112-16	小形甕	H	17.0			良	暗褐色		口縁内外面とも横ナデ、胴内面寛ミガキ	
112-17	小形甕	H	16.8				暗褐色		口縁内外面とも横ナデ、胴部内面カキ目、胴外面広いカキ目、口唇が舌状にとび出る	
112-18	小形甕	H	12.8			硬	黄黒褐色		口縁内外面とも横ナデ、胴内外口クロによる内面水引き	御土土層の底物である
113-1	小形甕	H	17.3			緻密・良	茶褐色		口縁内外面とも横ナデ、胴外面横状器具による整形の横ナデ	
113-2	小形甕	H	16.0			砂	黄		口縁・胴部とも寛によるナデ	
113-3	甕	H	18.5						口縁・胴部とも寛によるナデ、胴内面一部寛ミガキ	
113-4	甕	H	25.8			良	茶褐色		口縁内外とも横ナデ、胴部寛ミガキ	
113-5	甕	H	23.0			良	茶褐色		口縁内外とも横ナデ、胴部内面寛整形	
113-6	甕	H		8.6			黒褐色		胴内面寛ミガキ、底部近く寛で削る、外面筋によるミガキ、底部木炭痕	
113-7	甕	H		9.5			暗褐色		胴内外面とも寛によるミガキ、底部木炭痕	
113-8	小形甕	H		8.0			茶褐色		胴外面横ナデ、底部木炭痕	



第10表 中道遺跡5号住居址出土土器一覧表No.5

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色刷	壁	形	備考
113-9	甕	H			10.5		茶褐色	刷外面荒ナア、底部木炭痕		
113-10	小形甕	H			7.7		黒褐色	刷外面ハケ状器具による変形、底部木炭痕		
113-11	甕	H			10.9		灰茶褐色	刷外面荒ナア		
113-12	小形甕	H			5.8	真	赤茶褐色	刷外面底部近く真でけずり込込である、内面荒ナア		
113-13	甕	H			11.2		茶褐色	刷外面荒ナア、底部木炭痕		
113-14	甕	H			14.2		暗褐色	刷内外面とも荒ナア、底部木炭痕		
113-15	甕	H			10.0		茶褐色	刷内面ハケ状器具によるナア、底部木炭痕		
113-16	甕	H			11.7		黒褐色	刷内外面荒ナア、底部木炭痕		
113-17	甕	H			9.0	真	暗褐色	刷内面荒による変形、底部木炭痕+厚割?		
113-18	甕	H			10.0		赤茶褐色	刷内外面とも荒ミガキ、底部木炭痕		
113-19	甕	H			9.5		暗褐色	底部木炭痕		

(6) 6号住居址 (図67・114の1～6、写112)

遺構 中道地籍C区にあり5号住居址によって大部分破壊され東壁部と床面を残すのみである。南北6.80m、東西6.90mの隅丸方形を呈する住居址であったと推定される。主軸方向はN74°Wを示し、東壁は50cm、残存する北壁高は10～15cmであり南壁は、本址の床面が傾斜するため5号住の床面と一致し、5号住の壁と共有するようである。周溝は西壁沿いを欠くが幅広く深さ12～16cmのものである。床面は固く北西隅には径10cm、深さ15cm内外の小穴群がある。これは5号住床面検出の際確認されたもので配置からすると本址の施設と思える。用水路を一部調査した結果では西壁中央寄りに焼土がありカマドがあったと推定される。

遺物 床面から土師で甕(114図1～4)、小形甕(5)が出土し、覆土からは土師の埴底部と思われるもの(6)が出土した。他に須恵器甕、坏、高台坏等があるが焼切り手法のものも多く古い様相を持つ。住居址は中道I期のものである。(伴・酒井)

(7) 7号住居址 (図68・114の7～11、写113・122)

遺構 中道地籍C区にあり5号住居址と隣接する。南北4.00m、東西4.20mの隅丸方形を呈する住居址で、主軸方向はN72°Wを示す。西壁の残存壁高は30cmで、ほぼ垂直である。西壁中央部の石組粘土カマドは保存が良好であるが支脚石が抜き取られている。床は固く周溝が部分的にある。主柱穴は4コありカマド両側には焼土の入る灰溜めがある。

遺物 土師器のみである。床面からは小形甕(114図7)と甕(8・9)、覆土からは埴底部(10・11)

が出土している。須恵器が欠ける点で断定は出来ないが、中道Ⅱ期の住居址と考えられる。(郷 道)

(8) 8号住居址 (図68の2・115の1～6・176の8・9、写114)

遺構 中道地籍C区に位置し柱列3号に切られている。プランは南北3.90m、東西4.20mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はN 87°Wを示す。壁はほぼ垂直で壁高は約30cmである。周溝はなく、床面は周辺は軟弱であるが中央部は固い。柱穴は6コ検出されたが主柱穴は4コである。カマドは西壁中央やや南よりに位置し石組粘土カマドであったと思われる。焼土が多く残っている。

遺物 床面からは土師の甕(115図1・2)が出土しているが、2は入念な整形されている。覆土からは土師小形甕(3・4)、甕(5・6)、角釘2点(176図8・9)が出土した。他に須恵器で甕胴部片坏片、土師器で高坏片、頸底部片が出土している。本址は中道Ⅱ期の住居址である。(田畑・中村)

(9) 9号住居址 (図69の1・2・115の7～20・116の1～2、写115)

遺構 中道地籍D区に位置し、12号住居址が隣接している。プランは南北3.70m、東西4.20mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はN 46°Eを示し、壁は垂直で砂礫混入褐色土層を掘っているため、床面とも荒れている。北西部には住居址より古い砂利マウンド状の掘込部があり、柱穴4コ検出されたが不規則である。西壁中央やや南よりに石組粘土カマドが壁内側に構築され煙道が50cm外に延びている。

遺物 床面からは灰釉碗(115図7～9)、土師内黒杯(13・14)が出土し、13は内面に暗文風磨きされている。カマドから土師甕(同図17・18)が、覆土からは須恵杯(11)、灰釉碗(10)、小瓶(12)、土師器で内黒杯(15・16)、小形甕(19・20)が出土し、15は口縁の一部に刻目を持ち、20はロクロ引によるものである。甕(116図1・2)のうち2は極細のカキ目を持つ。中道Ⅲ期の住居址である。(田畑)

(10) 10号住居址 (図69の3・116の3～21、写116・123)

遺構 中道地籍D・E区にまたがって存在する。67号住居址の東10mの位置で、11号住居址、36号住居址の上に乗っている。南北5.60m、東西5.30mの隅丸方形竪穴住居址である。主軸方向はN 60°Wを示す。壁は礫混じりの層を掘り込んでいるため良くしまっており、11号住居址の上は黒土の為悪い。残存壁高は10cm前後である。周溝、柱穴はない。床面は礫混入黒土であるが固く、11・36号住居址の上はロームの張床となる。東壁中央南よりにある石組粘土カマドは既に破壊されており、左の袖石の一部を残すのみであり、中に焼土・環・甕の破片があった。

遺物 須恵器では高台杯(116図3・7～9)、杯(4)、細頸瓶(17)、甕(18・19)がある。土師器では内黒杯(5・6・10～14)、灰釉皿を模したかと思われる皿(15)、碗(16)、甕(20)、ロクロ引小形甕(21)がある。12の環は墨書がある。遺物からみて中道Ⅳ期の住居址である。(木下)

(11) 11号住居址 (図70の1・116の22～30、写117)

遺構 中道地籍E区10号・36号住居址の下に、西隅を切られる形で重なって検出された住居址である。南北5.60m、東西5.30mの隅丸削張方形である。主軸方向はN 64°Eを示す。壁は砂礫層を掘り込んでお

り壁高 40～45cm である。周溝は壁直下を幅 10cm、深さ 5cm 程でめぐっている。床面は固く、柱穴は 8 コだが、主柱穴は 4 コである ( $P_1 \sim P_4$ )。他は覆土からみて上の住居址のものである。東壁中央の石組粘土カマドは石を抜き取った痕跡があり、煙道部が確認された。カマド内部には 6cm の焼土が残り燼片が出土した。

遺物 灰軸椀 (116 図 22・23)、須恵杯 (24)、土師器では内黒環 (25～28)、小形甕 (29～31) が出土した。遺物からみて中道Ⅳ期の住居址である。

(木 下)

(12) 12号住居址 (図70の2・3・図117・118の1～3、写118・124～126)

遺構 中道地帯D区に位置する。南北4.80m、東西5.80mの隅丸方形の住居址で主軸方向はN 80°Wを示す。壁は砂礫混入ロームで垂直に掘り込まれ北壁60cm、東壁40cmである。ほぼ廃棄時の壁高を残している。周溝が全周し幅10～20cm、深さ15cm程である。床面は中央部がやや堅固である。主柱穴は4コ検出され補助柱穴は3コある。北西隅には貯蔵穴がある。西壁中央の石組粘土カマドは良く保存され、焼土が厚く残り煙道の出口には石を方形に組んでいた。遺物はカマド周辺に集中した。

遺物 須恵器では環 (117 図 1～8)、壺戸部 (18)、甕 (19・20) があり、灰軸では高台付椀 (9) がある。土師器では極細からやや粗いカキ目の甕 (117 図 21～24・118 図 1～3) が多い。内黒環 (117 図 11・14・16・17)、高台椀 (同図 15) があり、11 は墨書が見られる。中道Ⅲ期の住居である。

(竹 村)

(13) 13号住居址 (図71の2・118の7～19・119の1～4・176の10、写119・127～132)

遺構 C区にあり5号住居址の西16m、15号住居址の南0.5mにある。南北6.20m、東西5.80mの隅丸方形を呈し、主軸方向N 82°Wの住居址である。壁はロームを掘り込み良好である。周溝はなく床面は良好で、特にカマド前面は固い。中央部35号住居址上は貼床である。柱穴は6コあるが主柱穴は4コ ( $P_1 \sim P_4$ ) である。東壁中央の石組粘土カマドはロームを掘り残り袖の一部としている。支脚上に土師甕底部がかぶせられ、内部に焼土が多量に残っていた。南隅の浅いピットは焼土灰が多く残っていた。西隅の壁近くに棒状の礫・トイレットストーンがあり形態からみて工具と思われる。

中央南隅より土師環2コ (118 図 13・14) が、カマド左に須恵杯 (同 8)、同右前部に短頸壺 (同 18)、西壁下中央部床面上10cmに刀子片1、 $P_4$  近くに刀子 (176 図 10)、カマド内より小形甕 (119 図 1) が出土した。カマド周辺に遺物が集中した。

遺物 須恵器では壺杯 (118 図 4～6)、環 (7～9)、壺・甕底部 (10～12)、短頸壺 (17) が出土した。土師器では高台椀 (13)、環 (14・16) があり、13・14には「石」の墨書がある (写127・128)。赤色胎土の暗文環 (15)、小形甕 (18・19・119 図 1～3) があり、119 図 3 はクロコ引である。同図 4 は須恵甕である。刀子 (176 図 10) には柄木質部が残存した。中道Ⅲ期の住居址である。

(木 下)

(14) 14号住居址 (図71の3・4・119の5～7、写120)

遺構 中道地帯B区にある。北13mに13号住居址がある。南北3.30m、東西3.30mの隅丸方形のプランは主軸方向N 80°Wを示す。ロームを掘り込む壁は南壁35cm、北壁30cmあり、周溝はない。床面の一部に軟弱部があるが良い方である。東壁中央の石組粘土カマドはロームを掘り残り両袖の一部に利用する。内部に焼土・須恵片があった。覆土・床より鉄滓が出土し工房址的性格を持つ住居である。

遺物 図示したものは覆土出土だが、須恵器甕(119図5)は青海波文を内面に持つ。土師器小形甕(6・7)はロクロ引で、他に須恵高台坏片・灰釉残片が床面で出土する。中道Ⅱ期の住居である。(木下)

(15) 15号住居址(図72の1・2・119の10~22・120の1~7・176の11、写121・133~4)

遺構 中道地籍C区にあり13号住居址とは50cmの距離である。南北4.10m、東西4.35mの隅丸方形の住居址で主軸方向はN90°Eを示す。駅高は東20cm、南30cmで周溝は南壁中央より西隅にかけてある。床面は固い。柱穴は3コ確認したが用水路下に更に1コあると思われるので主柱は4となろう。東壁中央の石組粘土カマドは煙道の平行する配石が残っている。カマド右にトイレットストーン集積がある。南壁中央床面より20cm浮いて刀子が出土した。

遺物 須恵器では坏蓋(119図8・9)、高台坏(10・13)、坏(12・14)、甕(17・18)がある。土師器では内黒坏(15・16)、小形甕(19~22・120図1・2・6)、甕(120図3~5・7)がある。鉄器では刀子(176図11、写267)がある。遺物からみて中道Ⅱ期の住居址である。(木下)

(16) 16号住居址(図64)

遺構 中道地籍C区B~D、34グリット以西に存在を予想しているもので、用地外に大部分がかかる。用地内の部分も水田境に近く調査不能であった。電柱移転工事に伴い土師片が出土し床面の存在も確認している。時期は不明である。(伴)

(17) 17号住居址(図72の3・4・120の14~19・121の1・3~5、写135・145)

第11表 中道遺跡17号住居址出土土器一覽表

図番	器形	類別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	装飾	備考
120-8	高台坏	S	15.5	4.5	9.8		淡青灰色	内外ともロクロ	
120-9	坏	H	17.2	5.2	6.9	良	暗褐色	外面ロクロ、内面黒色研磨、底部糸切	
120-10	坏	H	13.5	3.9	7.2		褐色	外面ロクロ、内面黒ミガキ、黒色研磨、底部糸切+静止莖刷	
120-11	坏	H	15.1				暗褐色	外面ロクロ、内面黒ミガキ、褐色一部赤褐色	
120-12	坏	H	15.0						
120-13	高台坏	H	13.5				赤褐色	内外とも横ナゲ	
120-14	小形甕	H	13.2			不	良 暗褐色	口縁内外とも横ナゲ、胴内面に莖刷あり	
120-15	小形甕	H	18.7			石英粒含	明褐色	口縁内外とも横ナゲ、胴外面カキ目	
120-16	甕	H	28.4				赤褐色	口縁内外とも横ナゲ、底部に壁をもつ	
120-17	甕	H	28.5				赤褐色	口縁内外とも横ナゲ、胴ハケ状器具による莖刷	
120-18	甕	H			8.0	石英粒含	赤褐色	底部木炭痕	
120-19	甕	H			7.2	石英粒含	暗褐色	外面莖刷、底部木炭痕、一段石くなる	
121-1	甕	H			8.0	良	明褐色	内面ハケ状器具による莖刷、底部木炭痕	
121-3	甕	H			8.8	石英粒含	赤褐色	底部木炭痕	
121-4	小形土師	H	8.5	3.7	6.5		赤茶褐色	口縁内外とも横ナゲ、胴内面による調整、底部木炭痕	
121-5	甕	H	18.7				赤褐色	口縁内外とも横ナゲ、胴外面洗いかき目内面調整	

遺構 中道地籍E区に位置する。南北4.40m、東西4.30mの隅丸方形を呈する竪穴住居址は主軸方向N 65°Wを示す。壁はほぼ垂直で周溝が全周する。床面は良い。柱穴は3コ検出された。東壁中央に石組粘土カマドがあるが原形を留めない。その北には古いカマドが壁を挟り込んでいたらしく、焼土・粘土が確認された。

遺物 須恵器では高台杯(120図8)の他、甕片が出土している。土師では内黒環(9~12) 皿形土器(13)、小形甕(14・15)、甕(120図16~19・121図1・3・5)、小形土器(121図4、写145)が出土している。他に刀子片1、鉄滓がある。中道Ⅱ期の住居址である。(木下)

(18) 18号住居址(図73の1・121の6~17、写136)

遺構 中道地籍E区にある。南北4.40m、東西3.90mの隅丸方形を呈し主軸方向はN 34°Eである。壁は西壁が高く33cm、東壁24cmである。周溝はないが床面は固い。主柱穴は4コと思われるが東側が貯蔵穴等と重なり確認できなかった。四隅に貯蔵穴があるが、面積から考えて同時使用されたものではなからう。北壁中央や、東よりに石組粘土カマドの痕跡を残す。覆土は上部で茶褐色、下部は黒色土であった。

遺物 須恵器では坏蓋(121図6)、坏(7・9)、瓶胴部(16・17)があり、灰釉椀(8)もある。土師器では内黒環(10~13)、高台脚部(14)、ロクロ引小形甕(15)がある。土師内黒環(11・12)には「宮見」の墨書があるが人名であろうか。13は焼成後穿孔されている。他に須恵細頸甕片がある。中道Ⅲ期の住居址である。(竹村)

(19) 19号住居址(図73の2・3・121の18~23・122・173の7・8、写138・146~8)

遺構 中道地籍E区にある。南北3.50m、東西3.30mの隅丸方形住居址で主軸方向はN 52°Wを示す。壁は西壁50cmと高く東壁は30cmである。床面は平坦であるがや・固い程度で、壁近くに浅いピットが10ある。西壁中央の石組粘土カマドは原形を留めており袖には甕片を塗り込み補強したものである。支脚・天井石も残されていた。(写138)住居址内には石が多く投こまれていた。カマド周辺で坏などが完形で出土した。

遺物 須恵器では坏(121図18)、耳付壺(122図3)があり、土師では内黒環(121図19~21)、坏(122図2)、高台椀(同図1)、ロクロ引小形甕(121図23)、甕(同図22・122図4~7)にはカキ目を持つものが多い。図示した他に須恵壺・横瓶片が床面より出土している。鉄器では鍔茎1、角釘1が、石器では砥石(173の7・8)がある。中道Ⅲ期の住居址である。(竹村)

(20) 20号住居址(図74・76の2・123~125・176の12・178の11・173の9・10、写139~144・149~161・254・268~272)

遺構 中道地籍E区にあり、本遺跡で最大級の住居址である。南北8.25m、東西8.45mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN 63°Wを示す。壁はほぼ垂直で周溝がめぐり、それに沿って礎石とみられる平石や礎を配する。間隔は規則性を持つ部分もあるが一定しない。主柱穴は4コであるが補助柱穴が南西隅・北西隅、カマド両脇にみられる。西壁中央の石組粘土カマドは壁ロームを掘り残し、袖の一部に利用している。支脚石は特にしっかりしたもので、カマド内部には蓋環等が落ち込んでいた。床面はカ

マド前は平組であるが、貼床されている箇所が多く下部には多くのピットが見られた。カマド右手の大穴には焼土、粘土塊、骨粉等が見られ完形大形環 (124 図 1) が出土した。壁外には東壁沿いに小穴群が見られた。床面南半部では手付細頸瓶・鉄鏝・榑金具・尾錠が出土した (74 図、写139~144)。本址は北壁を柱列 24 に切られている。

遺物 遺物の出土量は多くカマド周辺に集中した。須恵器では坏蓋 (123 図 1~15、写 149) 坏 (123 図 16~30・124 図 1~9、写 150~158)、甕 (124 図 13・14・125 図 1~3)、手付細頸瓶 (124 図 15、写 159) がある。土師器では坏 (124 図 10~12)、鉢形土器 (125 図 4・5)、甕 (125 図 6~12・126 図 2~10)、甗

(同図 1・10) がある。坏で 123 図 30 の墨書は読めぬが 124 図 3 は「下合」である (写 155)。鉄製品では紡錘車軸 (176 図 12、写 269)、刀子 3 点 (同図 13、写 268)、尾錠 (同図 14、写 271)、榑金具 (同図 15、写 270)、鏝 (同図 16、写 272) があり、鉄鉢か鍋かと思われる破片もある。鉄滓と錆口かと思われる小片が出土し、土製紡錘車 (178 図 11) がある。カマド左集石下からは桃種と推定されるものが出土した。磁石は 2 点 (173 図 9・10) である。

坏底部は 5 号住居址に比し寛切を減じ糸切底が増加し、小皿ではあるが内黒坏片も出てくる点で本址遺物は新しい様相を強めている。本址の所属時期は中道 I 期の新しい方である (郷 道)

第 12 表 中道遺跡 20 号住居址出土土器一覽表 No. 1

図番号	器形	種別	口径 (cm)	胎高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	装	形	備考
123-1	坏蓋	S	16.9	3.4		細石含	青灰色		内外ともロクロ	
123-2	坏蓋	S	14.8	3.6		小石含	青灰色		内外ともロクロ	
123-3	坏蓋	S	15.2	3.1		小石粒含	青灰色		内外ともロクロ	
123-4	坏蓋	S	14.6	3.2		緻密・良	灰白色		内外ともロクロ	
123-5	坏蓋	S	13.4	2.7		小石粒含	青灰色		内外ともロクロ	
123-6	坏蓋	S	15.7	3.2		緻密・良	灰白色		内外ともロクロ	
123-7	坏蓋	S	15.8	2.5		小石粒多含	青灰色		内外ともロクロ、自然釉	
123-8	坏蓋	S	12.6	2.4		緻密・良	灰白色		内外ともロクロ	
123-9	坏蓋	S	15.2	2.5		緻密・良	青灰色		内外ともロクロ、自然釉	
123-10	坏蓋	S	15.4	3.5		小石粒少量含	青灰色		内外ともロクロ	
123-11	坏蓋	S	13.8			小石粒少量含	青灰色		内外ともロクロ	
123-12	坏蓋	S	18.5 (9.8)			緻密・良	灰白色		内外ともロクロ、自然釉 (黄緑色)	
123-13	坏蓋	S	18.5			小石粒多含	青灰色		内外ともロクロ	
123-14	坏蓋	S	15.9	3.7		小石粒少量含	灰青色		内外ともロクロ	
123-15	坏蓋	S	15.4	2.5		良	青灰色		内外ともロクロ	
123-16	坏	S	12.7	3.5	9.4	小石粒少量含	灰白色		内外ともロクロ、底部広く腰部はほぼ直に立ちあがる 底部寛切十回転製 整形入念	
123-17	坏	S	12.9	4.2	6.4	緻密・良	灰白色		内外ともロクロ 整形入念 口径やや外反する 底部一段縁をもつ 糸切	
123-18	坏	S	13.1	3.7	9.0	良	わずみ色		内外ともロクロ 口径やや外反 底部寛切十回転製	
123-19	高台坏	S	13.3	3.7	3.2	小石粒多含	淡青灰色		内外ともロクロ 腰部の整形良 底部寛切十回転製	

第12表 中道遺跡20号住居址出土土器一覽表 No. 2

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	口径 (cm)	胎土	色調	整	部	備考
123-20	環	S	13.3	4.4	6.1	小石粒多含	濃青灰色	内外ともロクロ。腰部丸く張り11線や中 外反する 底部糸切		
123-21	高台環	S	13.6	3.5	11.3	良	ぬずみ色	内外ともロクロ 整形入念 底部寛切+回転彫削		
123-22	環	S	14.6	3.4	9.1	小石粒多含	ぬずみ色	内外ともロクロ 底部寛切?+回転彫削		
123-23	高台環	S	13.0	3.5	11.3	小石粒多含	青灰色	内外ともロクロ 整形入念 底部糸切?+回 転彫削		
123-24	環	S	13.0	3.5	8.2	緻密・良	一部灰白色	内外ともロクロ 内面整形入念 底部是切+ 回転彫削 外周磨かれてある		
123-25	環	S	12.6	3.6	7.2	緻密・良	灰白色	内外ともロクロ 外面水引き痕跡 底部寛 切+回転外周磨き?		
123-26	高台環	S	11.7	2.9	10.3	良	灰白色	内外ともロクロ 底部寛切+回転彫削		
123-27	環	S	15.5	4.7	8.0		灰白色	内外ともロクロ 底部寛切+回転彫削		
123-28	環	S	14.5		10.2	不	良 灰白色	内外ともロクロ 整形難		
123-29	高台環	S		10.9			青灰色	底部寛切+回転彫削 外周磨き		
123-30	高台環	S	11.8	4.2	11.0	軟質・小石含	灰白色	内外ともロクロ 底部寛切+回転彫削 調整入念		遺書
123-31	環	S	11.8	6.2		緻密・良	濃青灰色	内外ともロクロ 調整入念 底部糸切		
123-32	高台環	S		12.4		小石少量含	青褐色	内外ともロクロ 底部糸切+外周回転彫削 外周の調整入念		
124-1	高台環	S	18.1	5.5	14.7	緻密・良	ぬずみ色	内外ともロクロ 底部寛切+回転彫削 外周 整形入念		
124-2	環	S	15.1			小石粒含	赤褐色	内外ともロクロ		
124-3	高台環	S	12.3	3.9	10.6	緻密・良	青灰色	内外ともロクロ 底部糸切+回転彫削		遺書
124-4	高台環	S	11.9	3.8	10.0	小石粒含	青灰色	内外ともロクロ 底部寛切+回転彫削		
124-5	環	S	13.1	4.2	6.5	小石粒含	青灰色	内外ともロクロ 底部糸切		
124-6	高台環	S	12.1	3.6	9.9	緻密・良	青灰色	内外ともロクロ 調整入念 底部寛切+回転 彫削		
124-7	環	S	12.4	4.4	9.1	網石含	青灰色	内外ともロクロ 整形難 底部寛切+回転彫削		
124-8	環	S	13.0	3.4	10.7	緻密・良	ぬずみ色	内外ともロクロ 底部寛切+回転彫削		
124-9	環	S	13.0	3.9	8.0		灰白色	内外ともロクロ 底部寛切+回転彫削		
124-10	環	H	13.5	4.2	7.5	良	茶褐色	内外ともロクロ 調整入念 底部寛切+回転 彫削		
124-11	環	H	12.4			砂	良 赤褐色	内外ともロクロ 口縁近く 泥ミガキ内面黒色		
124-12	環	H	14.4	5.2	7.6	緻密	良 赤褐色	内外ともロクロ 外部内外とも泥ミガキ 底 部糸切 一部内面黒色		
124-13	甕	S	30.6			良	灰白色	口縁部内外ロクロ 胴外水引き 内面青褐色		
124-14	甕	S	43.2			良	青灰色	口縁部内外ロクロ 胴部外ツツキ目		
124-15	煎茶碗	S	6.8	19.7	8.3	良	灰	内外ロクロ 調整入念 底部糸切+回転彫削 自然釉		

第12表 中道遺跡20号住居址出土土器一覽表 No. 3

図番	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	整	形	備考
125-1	甕	S	32.0			良	青灰色		口縁内外ともロクロ 頸部外面流状文	
125-2	甕	S	23.4			緻密・良	青灰色		口縁内外ともロクロ 頸部外面叩き目	
125-3	甕	S	24.2			緻密・良	青灰色		口縁内外ともロクロ 頸部外面叩き目	
125-4	小形鉢	H	11.7	8.0	7.2	小石粒含	赤褐色		口縁内外横ナゲ 頸部横ナゲ 胴内外とも横ナゲ	
125-5	鉢	H	19.3	8.8	18.3	細	赤茶褐色		口縁 頸部内外とも横ナゲ 胴外面施ミガキ 内面寛ナゲ	
125-6	小形甕	H	10.5	11.2	8.4	細石含	暗褐色		口縁内外横ナゲ 頸部内外横ナゲ 胴内外寛ナゲ 底部木蓋痕	
125-7	小形甕	H	10.6	12.5	9.3	緻密・良	暗褐色		口縁内外とも横ナゲ 頸部横ナゲ 胴内面寛ナゲ 外面寛用木蓋痕	
125-8	小形甕	H	14.3			緻密・良	赤褐色		口縁内外とも横ナゲ 頸部横ナゲ 胴内外寛ナゲ	
125-9	小形甕	H	15.5			小石粒含	赤褐色		口縁内外とも横ナゲ 頸部横ナゲ 胴内外寛ナゲ	
125-10	甕	H	19.4	25.5	8.0	砂質	赤褐色		口縁 頸部内外とも横ナゲ 胴内外寛ナゲ 木蓋痕	
125-11	甕	H	15.5			良	暗褐色		口縁内外横ナゲ 胴内外とも寛ナゲ	
125-12	甕	H	18.4			小石粒含	赤茶褐色		胴部内外とも横ナゲ 胴内面寛ナゲ 外面カキ目	
126-1	甕	H	27.4		15.4	小石粒含	赤褐色		口縁内外とも横ナゲ 胴部内外とも寛ナゲ 底部木蓋痕	
126-2	甕	H	24.2			砂質	赤褐色		口縁内外とも横ナゲ 胴部内外寛ナゲ	
126-3	甕	H	22.9			小石粒含	赤褐色		口縁内外とも横ナゲ 胴部内外寛ナゲ	
126-4	甕	H	29.6			良	明褐色		口縁内外とも横ナゲ 胴部内外寛ナゲ	
126-5	甕	H	21.5			小石粒多含	茶褐色		口縁内面カキ目 外面横ナゲ 頸・胴部外面カキ目 内面寛ナゲ	
126-6	甕	H	21.5				赤褐色		口縁横ナゲ 胴内外寛ナゲ	
126-7	甕	H	25.2			小石粒含	赤褐色		口縁内外とも横ナゲ 胴外面施ミガキ内面寛ナゲ	
126-8	甕	H	23.2			良	暗褐色		口縁内外とも横ナゲ 胴内外とも寛ナゲ	
126-9	甕	H			8.7	小石粒含	赤褐色		胴部内外とも寛ナゲ	
126-10	小形甕	H			8.0	小石粒多含	暗褐色		胴部内外とも寛ナゲ 底部木蓋痕	
126-11	甕	H			9.4	小石粒少含	赤褐色		内外とも寛ナゲ 木蓋痕	

(21) 21号住居址 (図75の1・127の1～5・173の11・176の17～19・178の10、写162・166・255・276)

遺構 中道地跡E・F区にある。23号住居址に西側を切られて検出された住居址で、南北6.40m、東西6.10mの隅丸方形になると思われる。推定される主軸方向はN69°Wで壁高は南30cm、北24cmである。北壁では柱列21号に切られるが、床面は平坦で所々固い面がある。残存部に支柱穴2があるが4コあったものと、また、カマドは西壁にあったものと推定される。覆土は暗褐色土で刀子2点が、高坏は東壁・北壁の直下床面から分散して検出され接合されたものである。東側中央で鎌、東壁直下から砥石が出土した。



遺物 須恵器では坏蓋 (127図1~2)、坏 (同図3) の他4点、甕 (5) の他3点、長頸瓶片がある。土師器では高坏 (同図4、写166) があり、内面黒色磨研されている。鉄器で鎌 (176図17)、刀子 (同図18・19)、石製品で砥石 (173図11)、紡錘車 (178図10) がある。中道Ⅱ期の住居址と思われる。(片桐)

(22) 22号住居址 (図76の1・3・127の7~18・177の1、写163・167~170・273)

遺構 中道地籍E区にあり柱列10によって切られている。南北3.60m、東西3.50mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN77°Wである。壁は垂直で周溝はない。床面は軟弱で支柱穴は4ある。東壁下南よりのピット上面には貼床があった。東壁中央部の石組粘土カマドは原形を良く保ち、壁を扶って構築されている。煙道部には柱列10の柱穴が掘られ破壊されている。赤土の入る暗褐色の覆土で、床面では内黒坏がカマド北側で鈔釜は中央北よりつぶれて出土した。カマド周辺に遺物が多かった。

遺物 須恵器では坏 (127図6) の他長頸瓶が、灰釉碗 (7・8) がある。土師器では内黒坏 (9~12) があるが11は墨書を持つ (写168)。小形甕 (17)、甕 (16・18)、長胴の鈔釜 (15、写170)、高台付碗 (13・14) がある。鎌 (177図1、写273) は刃部側に木質部が付着している。

本址は中道Ⅳ期の住居址である。

(三浦)

(23) 23号住居址 (図75・128・129・130の1~5・173の12、写164・171)

遺構 中道地籍E区に位置し、21号住居址を切っている。南北7.50m、東西7.25mの方形の竪穴住居址で比較的大きい。主軸方向はN63°Wを示す。垂直な壁は55~60cmと深く原形に近いと考える。床面は軟弱で南側床面は小礫が多く良好である。支柱穴は3コ確認し、北壁下には補助柱穴5コがある。西側床面中央に人頭大から拳大の集石があった。東壁中央に石組粘土カマドがあり袖には補強のため土器を貼りつけている。カマド北袖より完形須恵坏が、また、覆土中からは鉄洋3点が出土した。

遺物 須恵器では坏蓋 (128図1~22)、坏 (23~47) があるが、43は墨書されている。灰釉では碗 (48) があり、土師器では坏 (49~54) はすべて内面黒色磨研されている。須恵器の甕 (129図1) 片は他に個体数が多い。須恵細頸瓶頸部 (同図2)、土師小形甕・甕 (3~26・130図1~5)、砥石 (173図12) がある。中道Ⅲ期の形式設定基準となった住居址である。(片桐)

第13表 中道遺跡23号住居址出土土器一覧表 No.1

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	数	形	備考
128-1	坏蓋	S	16.5			良	青灰色		内外ともロクロ	
128-2	坏蓋	S	14.4			不	青灰色		内外ともロクロ	
128-3	坏蓋	S				長石含	濃青灰色		内外ともロクロ	
128-4	坏蓋	S	15.7			小石粒少量	青灰色		内外ともロクロ	
128-5	坏蓋	S	12.2				濃青灰色		内外ともロクロ	
128-6	坏蓋	S	15.2				赤灰褐色		内外ともロクロ	
128-7	坏蓋	S	15.8			良	濃青灰色		内外ともロクロ	
128-8	坏蓋	S				小石粒少量	濃青灰色		内外ともロクロ	
128-9	坏蓋	S	14.9				青灰色		内外ともロクロ	

第13表 中道遺跡23号住居址出土土器一覧表 No.2

図番号	器形	種別	口径 (cm)	口高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色	装	形	備考
128-10	环蓋	S	12.8				青灰色	内外ともロクロ		
128-11	环蓋	S					黒灰色	内外ともロクロ		
128-12	环蓋	S	14.3				黒灰色	内外ともロクロ		
128-13	环蓋	S	15.5			良	暗灰色	内外ともロクロ		
128-14	环蓋	S	12.8			小石粒少量含	濃青灰色	内外ともロクロ		
128-15	环蓋	S	14.0			小石粒少量含	濃青灰色	内外ともロクロ		
128-16	环蓋	S	13.5				灰褐色	内外ともロクロ		
128-17	环蓋	S	14.6				淡青灰色	内外ともロクロ わんぐりする器形		
128-18	环蓋	S					淡褐色	内外ともロクロ		
128-19	环蓋	S	13.6				青灰色	内外ともロクロ		
128-20	环蓋	S	16.1				濃青灰色	内外ともロクロ		
128-21	环蓋	S	13.4				赤褐色	内外ともロクロ		
128-22	环蓋	S					青灰色	内外ともロクロ		
128-23	环	K	11.9	(4.0)	(5.0)	良	灰白色	口縁・体部内外ともロクロ 底部未切? 一段高くなる。ハケで轆漻をぬる		
128-24	环	S	11.2	(3.0)	(5.0)		褐色	口縁・体部内外ともロクロ 底部未切?+回転製り		
128-25	环	S	12.8	(3.6)	(6.8)		青灰色	口縁・体部内外ともロクロ 底部未切?		
128-26	环	S			6.0		濃灰色	口縁・体部内外ともロクロ 底部未切		
128-27	环	S	12.2	3.0	5.7	小石粒含	濃灰色	口縁・体部内外ともロクロ 底部未切		
128-29	环	S	12.0	4.7	5.3		青灰色	*	*	
128-30	环	S	12.7	4.8	6.8		青灰色	*	*	
128-31	环	S	13.1				淡青灰色	*	*	
128-32	环	S	13.9	4.7	7.0		濃青灰色	*	*	
128-33	环	S	12.9				青灰色	*	*	
128-34	高台环	S			9.9	小石粒・含	ねずみ色	内外ロクロ、底部未切+回転製り		
128-35	高台环	S			10.1		青灰色	*	*	
128-36	高台环	S			9.9	小石粒・含	青灰色	体部内外ロクロ、底部未切?+回転製り		
128-37	环	S	13.2				淡褐色	口縁 体部内外ともロクロ		
128-38	高台环	S			9.5		青灰色	底部未切+回転製り		
128-39	高台环	S	12.5	3.3	9.5	小石粒・含	濃青灰色	口縁・体部内外ともロクロ、底部未切+回転製り		
128-40	环	S	13.3			小石粒・含	灰褐色	口縁・体部内外ともロクロ		
128-41	环	S			6.2		ねずみ色	体部内外ロクロ、底部未切		
128-42	高台环	S	15.7	5.2	11.1		淡灰褐色	口縁 体部内外ともロクロ 底部未切+回転製り		
128-43	高台环	S	12.7	4.3	8.6		淡褐色	*	*	黒書
128-44	环	S			6.5		灰白色	底部未切		
128-45	高台? 筒	S	15.0				暗灰色	口縁・体部内外ともロクロ		
128-46	环	S			8.0	小石粒含	ねずみ色	体部、内外ともロクロ		
128-47	环	S	13.5				淡褐色	口縁・体部内外ともロクロ		
128-48	筒	K	11.9				灰白色	口縁・体部内外ともロクロ		
128-49	环	H			6.0		茶褐色	外面ロクロ、内面黒色、底部未切		
128-50	环	H			8.2		暗褐色	口縁・体部外面ロクロ、内面黒色露着		
128-51	环	H			8.4	小石粒・含	淡赤褐色	外面ロクロ、内面黒色露着、底部未切		
128-52	环	H			8.2		暗褐色	外面ロクロ、内面黒色、底部未切		
128-53	环	H	13.0				茶褐色	口縁・体部外面ロクロ、内面黒色、暗文		
128-54	环	H	13.2				淡赤褐色	口縁・体部外面ロクロ、内面黒色、裏面露着		
129-1	甕	S	27.0			良	赤茶褐色	口縁内面、胴部内側ロクロ、一部叩き目、自然釉		
129-2	長頸甕	S					濃灰色	内外ともロクロ		
129-3	小形甕	H	14.2			小石粒・含	濃青灰色	口縁・胴部、胴部内外ともロクロ、樽手		
129-4	小形甕	H	12.6				暗褐色	口縁、内外とも横ナデ、胴部内外とも横ナデ		

第13表 中道遺跡23号住居址出土土器一覽表 No.3

図番号	器形	類別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	製	形	備考
129-5	小形甕	H					茶褐色		口縁内外とも横ナデ、胴部内面寛ナデ横、外面寛いかき目	
129-6	小形甕	H	13.0	13.2	7.1		茶褐色		口縁内外とも横ナデ、胴部内外とも寛筒製	
129-7	小形甕	H	12.8				暗茶褐色		内外ともワクロ、底部未切	
129-8	小形甕	い			4.8		赤茶褐色		内外とも寛筒製、底部木葉痕	
129-9	小形甕	H	12.8				暗茶褐色		口縁内外とも横ナデ、胴部内外面ワクロ、傳子	
129-10	小形甕	H	14.2				赤褐色		口縁内外とも横ナデ、胴部内外とも寛ナデ	
129-11	小形甕	H			7.4		暗茶褐色		胴部内外ともワクロ、底部静止未切+回転刷り	
129-12	小形甕	H	15.3				赤褐色		口縁内外とも横ナデ、胴部外面寛ナデ	
129-13	小形甕	H	15.2				暗赤褐色		口縁内外とも横ナデ、胴部外面くし状器具による整形	
129-14	小形甕	H			6.5	小石粒含	暗茶褐色		胴部内外ともワクロ、底部未切	
129-15	甕	H	19.0				赤茶褐色		内外横ナデ、胴部内外寛ナデ	
129-16	小形甕	H			7.8		赤茶褐色		底部木葉痕	
129-17	甕	H			7.7		暗茶褐色		内外寛ナデ? 一糸の沈着、底部木葉痕	
129-18	甕	H			8.7		茶褐色		底部静止未切	
129-19	甕	H	25.8				黒褐色		口縁内外横ナデ、胴部一胴部寛ナデ	
129-20	小形甕	H	15.7				茶褐色		口縁内外横ナデ、胴部寛ナデ	
129-21	甕	H			7.5		茶褐色		外面寛いかき目、内面寛ナデ	
129-22	甕	H	21.2			小石粒含	暗茶褐色		口縁内外とも横ナデ、胴部寛ナデ	
129-23	甕	H					赤茶褐色		口縁内外とも横ナデ、胴部寛ナデ	
129-24	甕	H			8.9	小石粒含	赤褐色		内外とも寛ナデ	
129-25	甕	H			6.8		茶褐色		内外とも寛ナデ、ワクロ? 底部木葉痕	
129-26	甕	H			7.7		暗茶褐色		内外とも寛ナデ、底部木葉痕	
130-1	小形甕	H	14.6				茶褐色		口縁内外ワクロ、胴内外寛ナデ	
130-2	甕	H			14.2	小石粒含	赤茶褐色		内外寛ナデ、底部木葉痕	
130-3	甕	H			8.7		暗褐色		外面、かき目、内面寛ナデ	
130-4	甕	H			9.6		赤褐色		底部木葉痕	
130-5	甕	H			9.8	小石粒含	暗茶褐色		内外寛ナデ、底部木葉痕	

(24) 24号住居址 (図77・130の6~30・131、写165・172)

遺構 中道地籍F区にある。南北6.30m、東西6.40mの方形竪穴住居址で主軸方向はN61°Wである。壁はほぼ垂直で約50cmの壁高を持つ。周溝が全周し、床面は北半部は良好であるが南半部は泥礫層にあるため荒れている。主柱穴は4コあるが根固め石を持つ。他のピットには焼土や焼土ブロックが含まれる。特に東壁下のものは焼土・粘土塊を含み遺物が多かった。壁外ピットは本址に付属する。西壁中央の石組粘土カマドは石が少なかった。

遺物 須恵器では坏蓋(130図6~11)、坏(13~16・18・20)、高台坏(21~25)、甕(27)、壺底部(131図1)、甕(10・11)がある。土師では坏蓋(130図12)、坏(17)、皿形土器(19)、墨書のある碗(26)、甕(130図28~30・131図2~9・12・13)が出土した。なお表土中からは青磁片が出土している。

24号住居址は中道前期の住居址である。

(郷道)

第14表 中道遺跡24号住居址出土土器一覽表

同番号	器形	類別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	整	形	備考
130-6	坏蓋	S	15.3	4.2		小石粒多含	青灰色		内外ともロクロ	
130-7	坏蓋	S	16.2	3.5		小石粒多含	青灰色		内外ともロクロ	
130-8	坏蓋	S	14.0				濃青灰色		内外ともロクロ	
130-9	坏蓋	S	13.3	3.7		良	濃青灰色		内外ともロクロ	
130-10	坏蓋	S	13.2				灰白色		内外ともロクロ	
130-11	坏蓋	S					濃灰色		内外ともロクロ	
130-12	坏蓋	H	16.7	3.9			赤褐色		内外ともロクロ、内面黒色研磨	
130-13	坏	S	11.3	3.6	7.5	小石粒多含	濃灰色		内外ともロクロ、口縁外面黒色、底部未切	
130-14	坏	S	12.9			良	青灰色		内外ともロクロ、一部ハケ状器具による痕跡?	
130-15	坏	S			11.0	小石粒多含	青灰色		内外ともロクロ、外面に火だすき 底部未切	
130-16	坏	S	13.2				淡青灰色		内外ともロクロ、調整入念	
130-17	坏	H	11.8				赤褐色		内外ともロクロ	
130-18	坏	H	14.3			小石粒多含	黒褐色		内外ともロクロ	
130-19	坏	H	14.1	21.9	6.5	不 良	赤褐色		内外ともロクロ、器底は低く、底部は光澤をもつ?	
130-20	坏	S	15.4			小石粒多含	濃青灰色		内外ともロクロ	
130-21	高台坏	S	12.3	3.9	9.8		黒灰色		内外ともロクロ、底部未切+回転調整	
130-22	高台坏	S	12.0	3.4	8.2		淡青灰色		内外ともロクロ、底部未切+回転調整	
130-23	高台坏	S			8.8	小石粒多含	青灰色		底部未切り+回転調整	
130-24	高台坏	S			8.6	石英粒多含	淡灰色		底部未切り+回転調整	
130-25	高台坏	S	12.7	4.6	9.2	不 良	灰白色		内外ともロクロ、底部未切+回転調整	
130-26	甕	H	12.2			良	赤茶褐色		内外ともロクロ、体部中央整形入念、口縁やや外反する	番号
130-27	甕	S	44.0			良	黒灰色		口縁 胴部内外ともロクロ	
130-28	甕	H	19.0				茶褐色		口縁 内外とも横ナデ、肩部内面調整	
130-29	甕	H	26.0			雲母多	赤褐色		口縁 内外とも横ナデ、肩部外面ハケ状器具による調整	
130-30	甕	H	24.3			石英粒多	赤褐色		口縁 内外とも横ナデ、胴外面尾ミガキ	
131-1	高台坏	S			12.8	小石粒多	青灰色		底部未切+回転調整	
131-2	甕	H	20.8			良	明褐色		口縁 胴部内外とも横ナデ、胴内外とも細く深	いかき目
131-3	甕	H	23.9			石英粒多	黒褐色		口縁外面横ナデ、肩部・胴部寛いかき目	
131-4	甕	H			7.2	小石・雲母多	暗褐色		底部未整形	
131-5	甕	H			7.3		茶褐色		底部未切?	
131-6	甕	H			8.4	雲母多含	黒褐色		底部 内面内引き線 唇止未切 胴下部横ナデ、底部未整形	
131-7	甕	H			7.4	小石粒多	茶褐色		底部未整形	
131-8	甕	H			9.0		赤褐色		底部未整形	
131-9	甕	H			8.4	小石粒少量	赤茶褐色		底部、内面ロクロ、未切	
131-10	短甕	S			10.7		淡青灰色		胴部・胴部内外ともロクロ、整形入念、底部未切?+回転調整	
131-11	大口甕	S			10.8	良	青灰色		ロクロ、付高台、自然釉一部に	
131-12	甕	H	16.4				茶褐色		口縁内側いかき目、外面横ナデ、胴外面	いかき目
131-13	甕	H			10.0		暗褐色		外面整形、底部未整形	

(25) 25号住居址 (図78・132・177の2・3、写173・181～4・275)

遺構 中道地籍のF区の用地境にかかるため完全な調査はできなかった。南壁が33号住居址を、西壁が土壇13を切っており、壁高は約80cmと原形を留めている。南北7.50mあり隅丸方形、主軸方向はN63°W、壁は垂直で周溝が幅12cm、深さ8cmで全周するものと思われる。床面は良好で主柱穴2が検出され、土柱は4コであると思われる。カマドは未調査部にあるものと思う。北隅に貯蔵穴がある。

遺物 遺物の出土量は多い方である。須恵器では坏(132図1～5)、刻雲のある甕(6)覆土中の坏(11～13)、釉の厚くかかる双耳甕(14)があり、高台坏(13)は転用硯として使用されている。土師器では墨書のある(7)を始め内黒坏(8・9・15・16)、極細のカキ目のある甕(10・17)がある。鉄製品では板状鉄片(177図2、写275)と紡錘車(同図3)が出土している。

本址は中道Ⅲ期の住居址である。

(長沼・木下)

(26) 26号住居址 (図78の2・133の1～9、写174・185)

遺構 中道地籍F区にあり、すぐ東の37号住居址の西壁の一部を切っている。プランは南北4.70m、東西4.60mの隅丸方形を呈する。四方の副部はやや張り、主軸方向はN70°Wを示す。壁はほぼ垂直で周溝はない。床面は若干の凹凸があるが固く、中央部がやや高い。主柱穴は4コ認められ、西壁は壁を切っている。東壁中央の石組粘土カマドは殆んど原形を留めない。

遺物 床面からは須恵器で高台坏(133図1)、坏(2)があり、2は底部彫切後回転施刷りである。陶瓶(3)は本址と37号住居址の両方から破片で出土し接合されたもので、37号住居址遺物の可能性の方が強いと思われる。土師器では甕(5・6)は施調整が人念にされている。覆土からは須恵器の坏蓋(7)、土師小形甕(9)、甕(8)が出土している。中道Ⅲ期の住居址である。

(田畑)

(27) 27号住居址 (図79の1・133の10～13、写175)

遺構 調査区F区にあり31号住居址が隣接する。東西4.60m、南北4.40mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、東北・南東隅に張り出しがある。主軸方向はN60°Wを示す。壁は垂直で西壁が27cm、他は約20cmであった。床面は軟弱で中央がやや高い。床面も混雑ロームが基盤となり、浅い落ち込みが2コ、柱穴が1コあり、壁外に本址に付属すると考える柱穴8コが検出された。東壁ほぼ中央部に焼土が認められ、カマドの痕跡と思われる。

遺物 床面からは土師器の甕(113図10)が出土し、覆土からは須恵坏蓋(11)、高台坏(12～13)が出土し、他に甕の底部片もある。本址は中道Ⅲ期の住居址である。

(田畑)

(28) 28号住居址 (図79の2・133の14～19・177の4・5・134、写176・277)

遺構 中道地籍F区にあり、中道遺構群の北端にある。東西4.90m、南北4.80mの隅丸方形竪穴住居址である。主軸方向はN85°Wで東壁は水用造成時に相当破壊されている。壁はほぼ垂直で約30cmで周溝は東壁下を欠く。床面はロームのタタキである。主柱穴は4コある。北西隅の穴からは灰塊が出土し、カマド左の穴は焼土・炭を多く含む灰留めかと思われる。西壁中央に石組粘土カマドが考えられるが粘土の

み残存した。本址は柱列12によって切られている。

遺物 須恵器では坏(133図14~16・134図9)、坏蓋(134図7・8)、壺底部(133図17)が出土し、土師器では小形甕(133図18・19)、甕(134図1~6)、高坏坏部(同図10)、同脚部(11)が出土した。図示しなかったが内黒坏底部片が床面より出土している。甕は寛削りのもののみである。鉄器では刀子(177図4、写277)、紡錘車軸(同図5)がある。本址は中道Ⅱ期の住居址である。(郷道)

(29) 29号住居址(図80の1・135の1~17、写177)

遺構 中道地籍E区にあり、本址の西部は用地外にかかるため調査不能である。本址は69号住居址を破壊し、その上に貼床している。南北7.40mで方形を呈する住居址と思われ、主軸方向はN63°Wである。垂直な壁は45~65cmほどあり周溝はない。床面は平坦で固いが東側は混雑ルーム層を基礎としている。柱穴は4コある。カマドは未調査部分の西壁中央にあるものと思われる。

遺物 須恵器では高台坏(135図1・7・8)、坏(2・9)、坏蓋(6)、灰釉では瓶底部(3)、皿(10)、土師器では内黒坏(11・12)、赤色胎土暗文坏(16)、小形甕でロクロ引によるもの(13・15)と寛調壁のもの(14・17)、甕(5)がある。図示しなかったが極細のカキ目をもつ甕片もあり中道Ⅲ期の住居址と考えられる。(長沼・木下)

(30) 30号住居址(図80の2・136~7・138の1~15・177の12、写178~9・186~8・278)

遺構 中道地籍のE区にあり柱列9に切られている。プランは東西6.00m、南北5.70mの隅丸方形を

第15表 中道遺跡30号住居址出土土器一覽表 No.1

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	整	形	備考
136-1	坏蓋	S	16.4			小石粒多含	黄灰色	内外ともロクロ、自然釉		
136-2	坏	S	12.7	4.0	6.8	石英小石含	灰白色	内外ともロクロ、体部中央から口縁部にかけて外反する底部一段壁をもつ	未切	
136-3	坏	S	18.8	(5.0)	15.0	緻密・良	青灰色	内外ともロクロ 調整良 口縁から体部にかけて一部自然釉 内底に火だすき		高台付?
136-4	坏	S	16.0			精選・良	灰青色	内外ともロクロ		
136-5	坏	S	13.1			粗石混入	赤褐色	内外ともロクロ		
136-6	坏	S	11.2			粗石混入	青褐色	内外ともロクロ 口縁部外反する		
136-7	坏	S	12.0			小石粒含	灰白色	内外ともロクロ 調整不良		
136-8	坏	S	14.5	4.3	10.0	精選・良	赤褐色	内外ともロクロ 体部(面)水引き痕跡しい 底部未切		
136-9	高台坏	S	16.3	3.5	13.2	緻密・良	ねずみ色	内外ともロクロ 底部 寛切+回転寛削		
136-10	高台坏	S	15.8	3.6	12.4	良	灰白色	内外ともロクロ 底部内面に火だすき 寛切+回転寛削		
136-11	大口瓶	S	13.2			小石粒含	灰白色	内外ともロクロ 口縁部に自然釉		
136-12	坏	H	13.8			粗石粒含	赤茶褐色	内外ともロクロのあと、横ナゲ		
136-13	甕	H			7.2	粗石粒含	暗褐色	内面寛ナゲ 外面寛削 底部木蓋痕		
136-14	坏	H			7.8	石英粒含	赤褐色	内面黄色研磨 底部寛切+回転寛削		
136-15	高坏	H	14.2				茶褐色	口縁外面横ナゲ 体部寛ナゲ横 脚部寛ナゲ縦 体部内面黄色研磨		
136-16	高坏	H	14.0			長石粒含	赤茶褐色	口縁外面横ナゲ 体部寛ナゲ縦 内面黒色研磨 口縁大きく外反		

第15表 中道遺跡30号住居址出土土器一覽表 No.2

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎 上	色 調	整	形	備 考
136-17	小形甕	H	9.5			小石粒含	赤褐色	口縁ナデ、胴・内外面とも黒ナデ、肩部に段をもつ		内面取付物
136-18	小形甕	H	14.0			小石、雲母含	暗褐色	口縁内外横ナデ、胴内面黒ナデ		
136-19	小形甕	H	14.0			小石粒・含	茶褐色	口縁内外横ナデ、胴内面黒ナデ		
136-20	小形甕	H	12.0			良	赤褐色	口縁内外横ナデ、胴内面黒ナデ		
136-21	小形甕	H	13.2				赤褐色	口縁内外横ナデ、胴内面黒ナデ		
136-22	小形甕	H	14.8	18.8	8.3	小石粒含	赤褐色	口縁内外とも横ナデ、胴内面横ナデ、外面無任表面 外周部位置十一部ハツ目、内面黒ナデ、底部木葉痕		
136-23	小形甕	H	13.8			不	良 暗褐色	口縁内外横ナデ		
136-24	小形甕	H	16.7			石英粒含	灰褐色	口縁内外横ナデ胴外面黒削、内面黒ナデ		
136-25	小形甕	H	17.0			不	良 暗褐色	口縁内外横ナデ、胴外面黒ナデ		
136-26	小形甕	H	18.0			小石粒含	暗褐色	口縁内外横ナデ、胴内面黒ナデ		
136-27	甕	H	19.6				赤褐色	口縁内外横ナデ、胴内外黒ナデ		
136-28	甕	H	21.5			精選・良	赤褐色	口縁内外横ナデ、胴外面黒削、肩部に段をもつ		
136-29	甕	H	19.3			良	暗褐色	口縁内外横ナデ、胴内面黒ナデ		
137-1	甕	H	20.7	40.4	9.1	小石粒多含	赤褐色	口縁内外横ナデ、胴・外面黒削、内面黒 ナデ横、底部木葉痕		
137-2	甕	H	28.2			小石粒含	灰褐色	口縁内外横ナデ、胴・外面黒削、内面 黒ナデ、裏ミガキ		
137-3	甕	H	25.3			良	赤褐色	口縁内外横ナデ、胴・外面黒削、内面黒ナデ		
137-4	甕	H	25.5			良	赤褐色	口縁内外横ナデ、胴・外面黒削、内面黒ナデ		
137-5	甕	H	20.5				茶褐色	口縁内外横ナデ、胴・外面一部ハケ状器具 による整形、内面黒ナデ、底部一糸の沈縮		
137-6	小形甕	H				良	赤褐色	口縁下内外横ナデ、胴外面ヘラ削、内面黒 ナデ、肩部内外黒ナデ、肩部が張る		
137-7	甕	H			9.4		灰褐色	内外面黒ナデ、底部木葉痕		
137-8	鉢?	H			9.7		暗褐色	内外面黒ナデ、底部高台の様になる、木葉痕		
137-9	甕	H			9.8	精選・良	赤茶褐色	内外面黒ナデ、底部木葉痕		
137-10	甕	H			9.8		赤褐色	内外面黒ナデ、外面ハケ状器具による調整 底部木葉痕		
137-11	甕	H			9.6		暗褐色	内外面黒ナデ、底部木葉痕		
138-1	環蓋	S	18.2	3.9		緻密・良	灰白色	内外面とも口クロ		
138-2	高台環	S	14.0	4.4	11.6	良	灰白色	内外面とも口クロ、底切+回転整形		
138-3	環	S	14.2				青灰色	内外面とも口クロ		
138-4	環	S	12.4				青灰色	内外面とも口クロ、口縁に段をもつ		
138-5	環	H			8.0	小石粒含	赤褐色	体部外面一部黒ナデ、内面黒色研削、底部 底切+回転整形		
138-6	小形甕	H	11.7			小石粒含	赤褐色	口縁内外とも横ナデ、胴内外ともハケ状 器具による調整		
138-7	小形甕	H	15.8			精選・良	赤茶褐色	口縁内外とも横ナデ、胴内外とも黒ナデ		
138-8	甕	H	21.0			不	良 暗褐色	口縁内外とも横ナデ、肩部に段をもつ		
138-9	甕	H	21.2				赤褐色	口縁内外とも横ナデ、胴内外とも黒ナデ		
138-10	甕	H	27.1			小石粒多含	赤褐色	口縁内外とも横ナデ、胴内外とも黒ナデ、底部黒		

第15表 中道遺跡30号住居址出土土器一覽表 No.3

図番号	器形	類別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	整	形	備考
138-11	甕	H	21.8			良	暗褐色	口縁内外とも横ナデ、肩外面ミガキ、内面ナデ		
138-12	甕	H			7.6	精選・良	赤茶褐色	胴、外面ミガキ、内面ナデ、底部木炭痕		
138-13	小形甕	H			8.3		暗褐色	胴、内外面ミガキ、底部木炭痕		
138-14	小形甕	II			8.4	良	赤褐色	胴、内外面ナデ、底部木炭痕		
138-15	小形甕	H			8.8		暗褐色	胴、内外に指土痕、底部木炭痕		

呈する竪穴住居址で西と南壁がやや張り出している。主軸方向はN50°Wを示す。壁は垂直で約30cm、砂礫が僅かに混入するが良好であった。周溝は認められず、床面中央部は固く良好で周辺はビットなど切り合いが多数ある。主柱穴は4コ認められた。西壁中央にあるカマドは石は、1コしかなく粘土を主体としたものであったかと思われる。焼土は比較的少なかった。カマドの両側に貯蔵穴があり土器片が多数出土した。東壁より床面で鏝状鉄器(写179)が出土した。

遺物 遺物量は多く床面からは須恵器で坏蓋(136図1、写186-1)、坏(同図2-10、写186-7)が出土し、広口瓶口縁(11)がある。土師器では坏(12・14)、高坏(15-16)、小形甕(17-25)、甕(136図26-28・137図1-11)がある。甕(136図28・137図1・3-5)は鳥帽子形の長胴で頸部に稜をもつもの(136図25・28・137図5)がある。覆土からは須恵器の坏蓋(138図1)、坏(138図2-4)、土師器で内黒坏(138図5)、小形甕(138図6・7・13)、甕(8-12)が出土している。鉄器では(177図12・写278)があり、先端部に折り返しを付け、柄部には目釘があり木質部痕がある。

本址は中道Ⅰ期の住居址である。

(田畑・中村)

(31) 31号住居址(図81の1・138の16-21・139、写180)

遺構 中道地籍F区にあり柱列11号に切られている。プランは東西5.65m、南北6.60mの隅丸長方形の竪穴住居址で西壁がやや張り出す。主軸方向はN76°Wを示し、壁は垂直で壁高30cmである。周溝は北と西に一部認められ、床面は中央部が固く周辺は10cm以上も低く軟弱で浅い落ち込みなどで荒れている。主柱穴は4コ認められ、東壁中央には粘土カマドがあるが石組であったかも知れない。カマド南側と北壁中央部に貯蔵穴が認められた。

遺物 床面からは須恵器の坏蓋(138図16)、坏(17)と土師器の内黒坏(18・19)、高坏(20・21)、小形甕(139図1)、甕(3-5)、須恵器横瓶(139図1)が出土した。覆土からは須恵器の坏蓋(6-7)、坏(8・13)、土師器の内黒坏(139図9-11)、高坏(14・19)、甕(12・15-18)が出土している。他には鉄器が出土している。本址は中道Ⅱ期の住居址である。

(田畑・中村)

(32) 32号住居址(図81の2・3・140、写195・191)

遺構 中道地籍F区の北端に位置する。土壁22に切られている。プランは東西4.50m、南北4.10mの隅丸方形で主軸方向はN67°Wを示す。壁は垂直で周溝はない。床面は中央部が堅く周辺より高く、柱穴



は壁を切って8コ検出された。西壁中央の石組粘土カマドはよく保存され、壁を若干切り込んでつくられている。内部中央に支脚が残っていた。

遺物 床面からは須恵器の坏(140図1)、高台坏(2)、坏蓋(3)が、土師器では内黒坏(4~7)が出土している。須恵坏(140図1)は口縁が強く開いている。内黒坏は口縁が外反し、特に(7)は強く開きながら外反する。覆土からは須恵器の高台坏(140図8)、壺(11)、灰釉で黒(9)、椀(10)、土師器で内黒坏(12)、小形甕(14・15)、甕(13・16~18)が出土した。他に鉄器では刀子、釘が出土している。本址は中道Ⅱ期の住居址である。(田畑・中村)

(33) 33号住居址(図78の1・141の1~2、写173)

遺構 中道地籍EF区にまたがっており東側は用地外で調査不能、北側を25号住居址に切られている。隅丸方形のプランと思われるが規模は不明である。壁はほぼ垂直で調査部では周溝が認められなかった。床もほぼ良好で西壁にそってロームのテラスがあり、覆土からは灰釉の長頸瓶口縁部片が出土した。

遺物 いずれも覆土遺物であるが、須恵器では甕(141図1)、灰釉長頸瓶口縁部(2)が出土している。他に土師器ではロクロ引小形甕・甕片があり、鉄器では刀子1、釘2、用途不明鉄片が出土している。本址は中道Ⅲ期の住居址である。(木下)

(34) 34号住居址(図82の1・141の3~12・142、写196・192~4)

遺構 中道地籍F区にある。プランは東西4.00m、南北3.85mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はN69°Wで壁は垂直で壁高は10cm程度で上部は水田造成時に削られていると思われる。床面は固く良好で、カマド南側と北西隅に2コ貯蔵穴が認められた。主柱穴は4コある。カマドは西壁中央やや南よりに位置し石組粘土カマドの痕跡を残す。

遺物 遺物出土量は多く、床面からは須恵の坏蓋(141図3)、土師器の内黒の鉢(4)、小形甕(5)、甕(6~11・142図1~7)が出土している。鉢型土器(141図12)は長脚で輪轆み痕を残すが甗かと思われる。覆土からは須恵坏(142図8)、土師では小形甕(142図10)、甕(9・11)が出土している。本址は中道Ⅱ期の住居址である。(田畑・中村)

(35) 35号住居址(図82の1・143の1~10・177の6)

遺構 中道地籍C区にある。本址は13号住居址の貼床の下部で発見されたもので、遺構の大部分は破壊されている。東西4.00m程、南北3.30mの隅丸方形かと思われ、主軸方向はN20°Wである。床面は荒れているが、東西の壁になるとと思われる部分で主柱穴4コが検出されている。須恵高台坏の転用碗は覆土で発見された。

遺物 すべて覆土中として取上げられているが両址の床面差僅少なことを考えると須恵坏(143図2)が13号住居址からの混入と見ると他は本址に伴出するものとして良いと思われる。須恵器では坏蓋(同図1)、坏(3)、高台坏(4~9)が出土し荒切のものが多く、土師器では小形甕(10)、甕片があるがいずれも荒削りである。本址は遺物からみて中道Ⅰ期の住居址と思われる。(長沼・酒井)

## (36) 36号住居址 (図83の1・143の11~36、写197・203)

遺構 中道地籍のD・E区境界線上にある。本址は11号住居址を切り、10号住居址に切られている。東西5.10m、南北4.80mの隅丸方形で主軸方向はN64°Wを示している。周溝は東・北壁沿いにあり床はローム塊を含む黒土の貼床が11号住居址上にある。柱穴は6コで、東壁中央に焼土・粘土・拳大の石が検出されたが石組粘土カマドの痕跡と思われる。

第16表 中道遺跡36号住居址出土土器一覽表

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	装	形	備考
143-11	坏蓋	S	13.1	2.5		緻密・良	ぬずみ色		内外ともにロクロ	
143-12	皿	K	16.5	3.0	9.0				口縁、腰部、内外ともロクロ、蓋部?	
143-13	皿	K	15.5			良	灰白色		口縁、腰部、内外ともロクロ	
143-14	坏	H	13.5	2.8	5.4	小石粒多含	赤褐色		口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色瓦ミガキ、蓋部未可	
143-15	坏	H	13.0			良	赤褐色		口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色瓦ミガキ	
143-16	坏	H	14.0			細石粒含	暗褐色		口縁、腰部、内外ともロクロ	
143-17	坏	H	11.8				赤褐色		口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色瓦ミガキ、底縁未可	蓋部
143-18	坏	H	13.4	3.4	6.8		赤褐色		口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色瓦ミガキ、蓋部未可	蓋部
143-19	坏	H	11.5			砂質	明褐色		口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色瓦ミガキ	蓋部
143-20	坏	H	11.9				茶褐色		口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色瓦ミガキ (随文集)	蓋部
143-21	坏	H	13.9	3.6	6.7		茶褐色		口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色瓦ミガキ (随文集)	
143-22	坏	H	13.2	4.0	5.1	細石多	暗赤褐色		口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色瓦ミガキ、底縁未可	
143-23	坏	H	13.4	4.5	4.4	細石多	赤褐色		口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色瓦ミガキ、底縁未可	
143-24	坏	H	13.0	3.7	4.8	良	赤褐色	*	*	*
143-3	坏	H	14.2	4.5	6.3	良	明褐色	*	*	*
143-25	坏	H	16.0	4.3	6.1	砂質	茶褐色	*	*	*
143-27	坏	H	16.8	5.2	7.5		暗褐色	*	*	*
143-28	坏	H	14.4	4.0	7.2		茶褐色	*	*	*
143-29	高台碗	II			6.6	砂質	暗褐色	*	*	*
143-30	甕	H	22.3			小石粒多	暗茶褐色		口縁、内外とも横ナメ、胴部内外ともハケ状器具による調整	
143-31	甕	S			11.3		ぬずみ色		内外ともロクロ	
143-32	皿	S	14.5				ぬずみ色		口縁、内外ともロクロ	
143-33	碗	K	10.0	4.8	6.0		灰白色		口縁、腰部、内外ともロクロ	
143-34	煎茶盆	K	9.5				黄緑釉		口縁、内外ともロクロ	
143-35	煎茶盆	K	12.8				黄緑釉		口縁、内外ともロクロ	
143-36	高坏	H				細石多	暗褐色		腰部、内面瓦ミガキ、外面、胴部ロクロ	

遺物 床面からは須恵器の坏蓋 (143 図 11) と灰釉の皿 (12・13)、土師器の坏 (14~29)、甕 (30) が出土している。覆土からは須恵器の壺底部 (31)、坏 (32)、灰釉の椀 (33)、長頸瓶 (34・35) と土師高坏脚部 (36) が出土している。内黒坏で墨書されたもの (17・18・19・20) は「石」「見」と書かれており 17・18からは「石見」と二字連記されていたのではと考えられる。人名であろうか。鉄器では紡錘車軸部片がある。本址は中道Ⅳ期の住居址である。 (長沼・木下)

(37) 37号住居址 (図78の2・144の1~4)

遺構 中道地籍F区にあり26号住居址に切られている。26号住居址の壁下に本址の壁の一部を確認したが、大半が用地外にかり調査不能であった。

遺物 床面からは土師器の壺 (144 図 1)、甕 (2) が出土している。前者は明橙色を呈し、胎土は精選され口縁部横ナデ、腰部外面は篋削り、内面は篋磨き後刷毛目調整されている。これは関東地方の真間式に伴うものである。(倉田芳郎教授御教示による。)

覆土からは土師器の甕 (同図3・4) が出土している。本址は中道Ⅰ期の住居址である。 (田 畑)

(38) 38号住居址 (図83の2・144の5~9、写198・205)

遺構 中道地籍D区にあり、本址の西半は用地外のため調査不能である。隅丸方形であろうが壁高12cmで床は固く、ピットが2コあるが柱穴とは見なし得ない。東壁の恐らく中央と思われるところに石積粘土カマドの痕跡が残る。内部より礎土が検出された。

遺物 オべて土師器である。床面からは「見」と墨書された内黒坏 (144 図 5)、小形甕 (6・7)、刷毛目調整の甕 (8) が出土した。覆土からは頸部に稜を持つ甕 (9) が出土している。本址は中道Ⅱ期の住居址である。 (木 下)

(39) 39号住居址 (図83の3・144の10~12、写199)

遺構 中道地籍F区にある。本址は西壁の一部を40号住居址に切れ、中央部は柱列21の柱穴が床面まで切り込まれている。本址は40号住居址より古く、柱列21より新しい。

プランは東西3.90m、南北3.95mの隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向はN79°Wを示す。残存する壁高は20cm程である。床面は凹凸があり軟弱である。南東隅床面には白色粘土の集積部があり、柱穴は2コ確認された。住居址の覆土は暗褐色土で、カマドは40号住居址に切られた部分にあったのではないと思われる。

遺物 覆土遺物であるが、須恵器では高台坏 (144 図 10・11)、坏 (12) がある。11は篋切底であり小破片の甕片は篋削りに限られる。遺物量が少ないため断定できないが、中道Ⅱ期の住居址と思われる。

(片 柄)

(40) 40号住居址 (図83の3・145・146の1~9・177の7、写200・206~8・279)

遺構 中道地籍F区にあり本址の東壁は39号住居址を切り、西側は用地境のため調査できなかった。プランは東西5.20m以上、南北5.35mの隅丸方形を呈すると思われ、主軸方向はN66°Wを示す。壁は垂直で30~40cmの高さを持ち、南壁中央に緩傾斜な壁があり入口施設と思われる、床は小礫混入ロームを地盤

としているが、中央は貼床されていた。南と北に幅10~16cmの周溝があり柱穴は2コ確認された。東壁中央のカマドは石組粘土カマドで、南袖に須恵完形杯が出土した。カマド南側のピットには焼土が多く灰溜めと見られる。暗褐色の覆土中からは鉄滓が出土した。

遺物 須恵器では杯蓋(145図1)、杯(2~4)が、土師器では内黒環(5)、環(6)、ロクロ引小形甕(7)、匱による小形甕(9)、甕(10~13・15)がある。甕には細いカキ目のある11・13があり14は土管を連想させる円筒形土器である(写207)。以上は床面出土のものだが、覆土からは須恵で杯(146図1・2・6)、高台杯(3・4)、甕(5)、長頸瓶(9)と土師で内黒環(7)、「宮」と書きされる環(8)が出土した。鉄器では鉄鏃(177図7、写279)がある。本址は中道Ⅱ期の住居址である。(片 桐)

(41) 41号住居址(図84の1~2・146の10~20、写201)

遺構 宮西地籍I区にあり、住居址の東半は破壊されており調査不能であった。プランは南北6.60mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN52°Wを示す。壁はほぼ垂直で床面は堅緻でカマド北に貯蔵穴があり土器片多数が出土した。柱穴は5コあるが主柱穴は2コ(R・R<sub>2</sub>)で残りは覆土が黒色土で本址のものではないと思われる。西壁中央の石組粘土カマドは焚火から美壁にかけて焼土が厚く堆積し、南袖から甕が出土している。カマドは壁をやや挟んでいたが支脚石は残っていないかった。

遺物 床面からは須恵器の高台杯(146図10)と土師器の小形甕(11)、甕(12~13)、瓶(14)が出土し、覆土からは須恵器の杯蓋(15)、杯(16~18)があり、17は高台杯である。土師器では小形甕(19・20)が出土している。本址は中道Ⅱ期の住居址と考えられる。(田 畑)

(42) 42号住居址(図84の3・147の1~11・177の8、写202・280)

遺構 宮西地籍I・J区にまたがっている。プランは東西6.50m、南北6.00mの長方形を呈する竪穴住居址で主軸方向はN60°Wを示す。壁はほぼ垂直で壁高は18~27cmである。南北壁はやや張り出している。床面は軟弱で、カマドの左右に貯蔵穴が検出され覆土はともに焼土を含む褐色土であった。カマド北の貯蔵穴からは刀子が出土し、床面東部に焼土がある。柱穴は中央に1コ認められ、西壁中央のカマドは完全に崩れ粘土のみ残存した。

遺物 床面からは土師器の小形甕(147図1~3)、甕(4~5)が出土し、その整形は匱による。覆土からは須恵器の杯(147図7)、土師器の小形甕(8)、甕(9~11)が出土し、7は底部寛切後、回転寛削りで窯印がある。鉄器では刀子(177図8、写280)が貯蔵穴から、鉄滓が出土している。

本址は中道Ⅱ期の住居址である。

(田 畑)

(43) 43号住居址(図85の1・147の12~23・148・177の9、写209・281)

遺構 宮西地籍のJ区に位置している。住居址は東西6.80m、南北6.60mの隅丸方形プランを有し、主軸方向はN71°Wである。西壁は35cmと高く北壁は15cmとなる。周溝は不規則ながら全周し、床面は中央はロームの堅緻な床、周辺は黒褐色土とロームの貼床で下部は不規則なピットが多い。柱穴は10コ検出されたが主柱穴はR<sub>2</sub>~R<sub>3</sub>と考える。中央柱穴も主柱穴とともに上層構造を考える上で重要なものである。西壁中央の石組粘土カマドは袖の一部にロームを掘り残し利用している。内部には焼土・土器片が出

土し、支脚石は横転していた。Rは貯蔵穴か灰溜めで焼土が多く燧片も多かった。P<sub>2</sub>は焼土・黒土・焼土という層序となり、下部焼土には骨片を認めた。燧片の出土多く断面は袋状となる。P<sub>3</sub>も焼土が多く土器片多く、P<sub>4</sub>は黒土が均一に入る。P<sub>5</sub>は焼土が入りP<sub>6</sub>を切る。P<sub>6</sub>の上面より鉄斧が出土したP<sub>7</sub>は黒土のみ。北隅の不規則な凹みは焼土、遺物が多い。P<sub>8</sub>近くでは土製紡錘車が出土した。

遺物 床面からは須恵器の坏蓋(147図12)、坏(13-18)、土師器の小形甕(同図19-23、148図1・2・6)、甕(148図3-5・7-11)が出土したが、大半は貼床下のものである。覆土からは須恵器の坏蓋(12-14)、坏(15・16)、甕(17)が出土した。覆土からは土師器の甕(19・20)が出土している。坏は糸切底のみであり、小形甕底部(148図18)はロクロ引である。土製紡錘車(135図18)もある。

鉄製品で小形鉄斧(177図9)は袋状折返し部が長方形の断面を持ち、他に釘・鉄滓が出土している。遺物からみて本址は中道Ⅲ期の住居址である。(酒井)

(44) 44号住居址(図85の2・149の1-16・173の13、写210・217)

遺構 宮西地籍J区にあり、東西5.20m、南北4.90mの隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向はN71°Wである。西壁は45cmと高く他は25-30cmで軟弱である。床面は砂質ローム層上にあり軟弱で、柱穴はR~R<sub>1</sub>と考えられる。東壁中央の石組粘土カマドから壁外にも焼土のマウンドが続き煙道部かと思われる。カマド両脇の貯蔵穴からは焼土にまじって須恵環が多く出土し、左右の貯蔵穴出土の須恵環が接合したものの(149図1)もある。

遺物 床面からは須恵器で高台坏(149図1・8・9)、坏(2-7)、土師器で甕(10-12)が出土した。覆土からは土師器の甕(13・14)、小形甕(15・16)が出土し、16はロクロ引である。他に砥石(173図13)がある。本址は中道Ⅲ期の住居址である。(酒井)

(45) 45号住居址(図86の1・149の17-27・177の14・15、写211)

遺構 宮西地籍I・J区にまたがっている。本址は46号住居址の壁の一部を切っており、東西3.25m、南北4.00mの隅丸長方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はN80°Eで、西壁36cmと高く東が26cmとなる。周溝が全周するが東壁から中央へ延びる溝があり間仕切されたかと考えられる。床面は非常に固く、上層構造を知り得る柱穴はない。東壁南隅に石組粘土カマドがあり、床面に石が散乱していたがカマドのものか考える。カマド周辺に遺物が集中した。

遺物 床面からは須恵器の坏蓋(149図17)、坏(18)、灰釉の盤底部(19)、土師のロクロ引小形甕(20)、甕(21)が、覆土からは坏蓋(22・23)、高台坏(24)、壺(25)、土師小形甕(26)、甕(27)が出土した。他に砥石(177図14・15)がある。本址は中道Ⅲ期の住居址である(竹村)

(46) 46号住居址(図86の2・3・150の1-5、写211)

遺構 宮西地籍J区にあり、45号住居址に南壁の一部を切られている。東西・南北とも3.60mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN7°Eである。東壁34cmと高く北壁では13cmで、西・北壁は水出造成で削平されている。床面は中央が固く高い。周溝は南と西の一部にあり、柱穴は浅く4コあり、中央部貼床下にも柱穴があるので建て直したと考えられる。北壁中央部の石組粘土カマドは原形を留めない。

遺物 何れも覆土出土であるが、須恵器では環(150図1)、高台環(2・3)、甕(4)、土師ではカキ目のある小形甕(5)がある。遺物が少ないため断定できないが中道Ⅲ期の住居址である。(竹村)

(47) 47号住居址(図86の4・150の6~27・151の1~11・173の16・177の10、写212・写220・282)

遺構 宮西地籍J区にあり北西隅は工事用道路にかり調査不能であった。東西4.90m、南北4.60mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN85°Wを示す。壁は38cm程の高さで垂直、周溝が全周し、床面は貼床部を除き非常に固い。主柱穴は4コと思われ、カマド左のピットは貯蔵穴と思われる。西壁中央の石組粘土カマドは原形を失っていた。カマドの左から内黒環が完形で出土した。

遺物 床面からは須恵器の環(150図6~8・10~15)、高台環(9)が出土したが、10には「玉」と墨書される。他に刻書のある甕(18)と広口壺(19)がある。土師器では内黒環(20~24)、甕(25~27・151図1・2)がある。覆土からは須恵器で環(151図3・4・7~9)、高台環(5・6)、土師器では内黒環(10)、ロクロ引小形甕(11)が出土した。鉄器では刀子(177図10、写282)、鎌片と砥石(173図16)が出土している。本址は中道Ⅲ期の住居址である。(竹村)

(48) 48号住居址(図87の1・151の12~15、写213・223)

遺構 宮西地籍J区にあり、本址の大部分は水田造成時に破壊されていた。残存する西壁の高さは25cmある南北4.00m程の隅丸方形を呈する竪穴住居址であったと推定される。残存する床面はやや固く東側に焼土を残す。この横のピットからは手摺ねミニチュア土器(写223)が出土した。

遺物 床面からは須恵高台環(151図12)が、覆土からは須恵環(13)、土師器で内黒環(14)、甕(15)が出土した。他に轆口かと思われるものとミニチュア土器(178図14、写260)がある。本址は中道Ⅱ期の住居址である可能性が高い。(竹村)

(49) 49号住居址(図87の2・151の16~21、写214)

遺構 宮西地籍のJ区に位置し、東西4.35m、南北5.10mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はN70°Wを示す。水田造成時に東壁は削られ低くなっているが、壁高40cm程あったと思われる。床面は部分的に貼床が見られるが固く良好である。柱穴は建てかえがあったためか多く、このうち南東隅の2コ、中央部北壁寄りの2コは貼床が上部に認められ古い時期のものである。中央部の大穴は本址より新しい可能性がある。東壁中央のカマドは原形を留めないが焼土10cmの厚さで残存した。壁外に柱穴が認められたが本址のものかは確定できない。なお、土壌M22は本址を切っている。

遺物 床面からは須恵器で高台環(151図16)、底部寛切後外周寛削りの環(17)、土師甕(18・19)が、覆土からは須恵環蓋(20)、椀(21)が出土した。中道Ⅱ期の住居址である。(郷道)

(50) 50号住居址(図88の1・152の1~9、写215・218)

遺構 宮西地籍のK区にある。プランは東西3.95m、南北3.80mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はN81°Wを示す。壁はほぼ垂直で周溝はない。床面はカマド周辺と中央部が固く、他は軟

弱である。東壁中央の石組粘土カマドは煙道部が僅かに残る。カマド南の貯蔵穴は上に粘床があり、内部は灰・焼土まじりの黒褐色土が充満していた。これより出土した須恵坏片と北西隅床面の破片が接合すると完形となった。土器はカマド及びその周辺に集中した。土壇 M 2・M 3 は本址より新しい。

遺物 床面からは須恵器の坏蓋 (152 図 1)、高台坏 (2・3)、坏 (4)、土師器のロクロ引小形甕 (5)、甕 (6～8) が、覆土からは須恵甕片 (9) が出土した。カキ目を持つ甕片もあり中道Ⅲ期の住居址である。 (三浦)

(51) 51号住居址 (図88の2・152の10-15、写216)

遺構 宮西地籍K区にある。東西4.20m、南北4.60mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN 85°Wを示す。壁はほぼ垂直で40cm程の壁高を持つ。ロームの床面はカマド前を除き軟弱である。柱穴は内外に見られるが、本址に伴うものかどうかは不明である。西壁中央やや北寄りのカマドは壁を挟り込んでいる粘土カマドである。本址は土壇 M 23 に切られている。

遺物 床面からは須恵高台坏 (152 図 10)、土師甕 (11)、覆土からは須恵器の高台坏 (12-14)、坏 (15) があるが瓦切のものが含まれる。坏 (12) には口唇に漆と思われる樹脂状 (黒色エナメルに似る) のものが付着している。本址は中道Ⅱ期の住居址である。 (郷道)

(52) 52号住居址 (図89の1・2・152の10-15、写224・221-2)

遺構 宮西地籍K区に位置する。東西3.50m、南北3.65mの方形に近い竪穴住居址で、主軸方向はN 71°Wを示す。壁はほぼ垂直で、壁高40cm程である。床は堅緻で柱穴はない。南西隅の貯蔵穴には焼土・炭粉も含まれ、土器片も出土した。周溝も確認され、東壁中央やや北寄りにある石組粘土カマドは主体部を壁内に挟り込んで構築している。袖、支脚石も確認された。

遺物 床面からは須恵坏 (152 図 16・17)、土師内黒坏 (18・19)、墨書坏 (153 図 1、写 222)、甕 (2～5)、ロクロ引小形甕 (6) が出土し、覆土からは須恵坏 (7・10-12)、高台坏 (8・9)、灰釉高台碗 (13)、土師内黒坏 (14・15) が出土した。他に鉄滓がある。本址は中道Ⅲ期の住居址である。 (郷道)

(53) 53号住居址 (図89の3・154・155の1～4・173の17・18・177の11、写225・232-233・283)

遺構 宮西地籍K区にある。プランは東西4.40m、南北4.85mの隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向はN 82°Wを示す。壁は垂直で南・西壁は30cm強の壁高をもつが、他は水田造成時に削られている。東から南壁沿いに周溝がある。床面は小石が多く、東に粘床があり焼土が落ち込んでいた。主柱穴は3つ確認された。カマドの南にある貯蔵穴からは卒人の石が土層で確認された。西壁中央の石組粘土カマドは焼土が非常に多い。東端からは床面より4cm浮いて鎌が出土した。

遺物 床面からは須恵器の高台坏 (154 図 1)、坏 (2)、土師器の赤色胎土暗文坏 (3、写 235)、甕 (5) ロクロ低速回転による器面調整後、胴下半部鋭削する甕 (6)、カキ目を持つ甕 (4・7・8・155 図 1) が出土している。覆土からは須恵甕 (2)、土師小形甕 (3・4) が出土した。他に鎌 (177 図 11、写 232)、刀子 (写 283)、砥石 (173 図 17・18) がある。中道Ⅲ期の住居址である。 (片桐)

(54) 54号住居址 (図90の1・2・155の5~12・156の1~5、写226)

遺構 宮西地籍I区にある。宮西遺構群の南端部にある(63図)。プランは東西4.10m、南北4.00mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN61°Wを示す。混雑ルームを掘り込む壁は西で45cm、東で30cmとなる。北と南に浅い周溝を持ち、床面は固い。柱穴は1コ認められた。西壁中央の石組粘土カマドは壁のロームを掘り残し袖の一部に利用している。カマド左には貯蔵穴がある。住居址覆土は均一で、褐色土粒を含む黒土であった。遺物はすべて覆土中でカマド内の壺片も小破片で図示し得ない。

遺物 須恵器では坏蓋(155図5・6)、甕(7・9)、長頸瓶(8)が、土師では椀(10)、甕(11・12・156図1・4・5)、ロクロ引小形甕(2・3)が出土している。

遺物が少ないため断定できないが、覆土遺物からは中道Ⅲ期の可能性が高い。(酒井)

(55) 55号住居址 (図90の3、156の6~15、写227)

遺構 宮西地籍K区にある。プランは東西3.70m、南北3.80mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN85°Wを示す。壁は垂直で、周溝は西壁の一部を除いて深さ3~7cm、幅5~10cmのものが認められた。床面は全面に貼床され最初の床より5cm程上昇している。カマド北に貯蔵穴が、南東隅に焼土群がある。西壁中央のカマドは全く原形を留めず、焼土・粘土のみが残る土師甕が出土した。貼床の下から北壁中央に舟底状の貯蔵穴が認められ壺片4が出土、中央南側のピットからも土器片多数を得ている。

遺物 床面からは須恵器の坏蓋(156図6)、土師器の小形甕(7・8)、甕(9~13)が出土した。7~9は太く荒いカキ目が施されている。覆土からは須恵器の坏蓋(156図14)、土師器の甕(15)が出土しており、他に甕の角形把手、鉄片が出土している。本址は中道Ⅰ期の住居址である。(出畑)

(56) 56号住居址 (図91の1・157の1~8・158の1~3、写228)

遺構 宮西地籍K区に位置する。東側はU字溝が既に埋設され調査不能であった。プランは東西4.80m、南北4.75mの隅丸方形の住居址である。主軸方向はN64°Wを示す。壁は後の攪乱をうけ10cmの凹凸がある。周溝は全周するものと推定され、床はカマド周辺を除き軟弱である。柱穴は4コ検出された。西壁中央にはカマドの粘土だけが残存した。カマド南脇の貯蔵穴から完形に近い甕(157図7)が出土した。

遺物 床面からは須恵器の坏(157図1)、甕(2)、土師器の小形甕(3・158図2)、甕(157図4~8・158図1)が出土した。覆土からは須恵坏(同図2)が出土している。

本址は中道Ⅱ期の住居址である。(長沼・中村)

(57) 57号住居址 (図91の2・158の4~17、写229)

遺構 宮西地籍K区にある。土壁M5を切っている。プランは東西4.60m、南北4.65mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN84°Wを示す。周溝は南西隅を除き全周する。南壁下の周溝内には小ピットが5コ検出された。床は軟弱で北側は荒れている。西壁中央のカマドは原形を留めず、焼土・粘土のみであった。中央から南東寄り的大ピットは灰・焼土・木炭片が認められ一時期炉として使用された可能性がある。カマド周辺に遺物が多く、北西隅より床面で完形坏がつかわれて出土した。



遺物 床面からは須恵器の坏(4~6)、甕(7)、土師器ではロクロ引小形甕(9)と小形甕(10) 荒いカキ目を持つ甕(8)と篋削りのもの(11)が出土した。覆土からは須恵器の坏蓋(12・13)、短頸壺かと思われるもの(15)、土師の内黒坏(16)、甕(17)が出土した。中道Ⅲ期の住居である。(三浦)

(58) 58号住居址(図92の1・159の1~7、写231・236~8)

遺構 宮西地籍Ⅰ区にある。プランは東西3.55m、南北3.40mの隅丸方形を呈する住居址で、主軸方向はN71°Wを示す。壁は垂直で50cm程あり比較的深い。周溝は幅10cm、深さ5cm程で西壁下を除きめぐる。床面の中央部は叩いてあり平坦であるが周辺はやや軟かい。カマド北側には貯蔵穴があり、北東隅の土壁は本址を切っている。西壁中央のカマドは焼土・粘土を残すのみであった。住居址覆土にはロームブロックが多く混入していた。

遺物 床面からは須恵器の坏蓋(159図1)、土師器の甕(2)が出土している。覆土からは須恵器の坏(3)、土師器甕(4~7)が出土した。本址は中道Ⅱ期の住居址と思われる。(田畑)

(59) 59号住居址(図92の2・159の8~20・160~161、写231・237)

遺構 宮西地籍Ⅰ区にある。住居址は東西5.90m、南北6.00mの隅丸方形で、主軸方向はN70°Wを示す。壁は垂直で固く、北壁高55cm、南壁45cmである。全周する周溝15~20cmの幅、10cm程の深さで、床面はタタキである。主柱穴はR<sub>4</sub>・R<sub>5</sub>・R<sub>6</sub>・R<sub>7</sub>で4コである。西壁中央には粘土を主にするカマドがあり、出土遺物は殆んどない。貯蔵穴(R<sub>1</sub>)の底には焼土があり上部より甕が出土した。西隅にも貯蔵穴(R<sub>2</sub>)があり焼土・黒土という層序となる。最下部より青銅破片、上より完形坏が出土している。R<sub>8</sub>は下部に焼土が多く小形甕完形品が逆位で出土した。R<sub>9</sub>~R<sub>10</sub>は浅いが焼土が多く特にR<sub>10</sub>は遺物が多かった。カマド周辺にも出土が多かった。北平床に焼土が多くR<sub>3</sub>~R<sub>8</sub>だけが黒土で、他は焼土が入っていた。

遺物 床面からは須恵器の坏蓋(159図8~11)、坏(12~14)、高台坏(15)、甕(16)、土師器の高坏(17)、小形甕(18、写238)、甕(160図1~12、161図1)が出土した。覆土の須恵器では坏蓋(161図2~6)、坏(8・10~15・23)、高台坏(9)、土師甕(159図19・20・161図6~22・21)がある。坏(159図12、写237)には葉印があり、底部寛切である。土師甕はすべて篋削り、篋ナデ整形によるもので、本址は中道Ⅱ期でも古い様相の強い時期の住居址と思われる。(酒井)

(60) 60号住居址(図93の1~2・162の1~19・177の13、写239・256・258・284)

遺構 宮西地籍Ⅰ区にあり、66号住居址を切って床中央部はその上に陥床している。プランは東西5.20m、南北5.15mの方形を呈する整穴住居址で、主軸方向はN69°Wを示す。壁は垂直で25cm程の高さを持ち傾い。床面は周辺部が軟弱で、カマド北側に貯蔵穴がありピット、土壁が切り合っている。北東隅にはテラス状のものがある。カマド北側の壁ぎわより須恵甕、カマド南袖基部で鉄ノミが出土している。主柱穴は4コである。西壁中央に石組粘土カマドが壁を一部挟り込んでいる。支脚石も残り土師破片が出土した。

遺物 床面からは須恵器の坏蓋(162図1・2)、高台坏(3・4)、短頸壺(5)、土師器の赤色胎土暗文坏(6)、小形甕(7~10)、甕(11~15)が出土しており、1・4・5は黄褐色の自然釉がかかる。3は底

部荒切後静止彫削りしている。6は底部承切後外周回転彫削りしている。覆土からは須恵器の高台坏(162図16)、坏(17)、甕(18・19)、土師器の鉢(20)が出土している。鉄器では鉄ノミ(177図13、写284)、カマド内より刀子筈が出土している。本址は中道Ⅱ期の住居址である。(田畑)

(61) 61号住居址(図93の3・163の1～3、写240)

遺構 宮西地籍I区にある。プランは東西5.60m、南北5.50mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN70°Wを示す。壁は垂直で残存壁高15cm程で西南壁が張っている。床面は軟弱で東がやや高い。柱穴・カマドは認められなかった。住居址とするより竪穴とした方が適切かとも思える。

遺物 覆土遺物のみである。須恵器では坏(163図1)、甕底部(2)、土師小形甕(3)が出土している。他に須恵甕、土師器の坏、甕片が出土している。遺物が少ないので断定できないが、中道Ⅱ期の住居址と思われる。(田畑)

(62) 62号住居址(図94の1・163の4～7、写241)

遺構 宮西地籍K区にあり土壇6・10・11を切っている。東西・南北とも3.75mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN85°Wを示す。壁は垂直で周溝はない。床面は貼床部を除き良好である。西壁中央南よりの石組粘土カマドは煙道部も観察された。西側の貼床の下に楕円鉢状の浅い大穴があり、灰・焼土が混入した黒色土があった。

遺物 床面遺物はない。須恵器で高台坏(163図4)、荒切底の坏(5)、土師甕(6・7)が出土した。甕片の個体数は多い。覆土遺物では疑問が残るが中道Ⅱ期の住居址と考える。(三浦)

(63) 63号住居址(図94の2・163の8～12、写242・259)

遺構 宮西地籍K区にあり、64号住居址に東壁の一部を切られている。東西4.70m、南北4.00mの隅丸方形である。主軸方向はN18°Wである。壁は固く良好で周溝はない。床面はカマド前面を除き軟弱である。北西隅壁外に柱穴が1コある。東壁中央部のカマドは64号住居址に破壊され、焼土と軸部の粘土を残すのみである。覆土は褐色土粒を含む黒褐色土であった。

遺物 床面からは須恵器のカキ目を有する甕(163図8・11)、小形甕で寛調整のもの(9)とロクロ引のもの(10)が出土した。覆土からは須恵器の坏(12、写259)が出土している。本址は中道Ⅲ期の住居址である。(三浦)

(64) 64号住居址(図94の2・164の1～3、写242)

遺構 宮西地籍K区にあり、本址の大半は工事用溝・用地外にかり調査できなかった。本址は63号住居址の東壁を切っている。南北4.30mの隅丸方形竪穴住居址となると思われるが、調査した部分の壁は垂直に近く良好で、周溝はない。床面は軟弱で中央部ビットには焼土・灰・木炭片が混入しており灰溜めと思われ、土器が出土した。覆土は黒褐色土である。

遺物 床面から須恵器の坏蓋(164図1)、土師器のロクロ引小形甕(2)、カキ目を有する甕(3)が出土した。遺物は少ないが、中道Ⅲ期の住居址と思われる。(三浦)

(65) 65号住居址 (図95の1・164の4～6、写243)

遺構 宮西地籍1区にある。プランは東西・南北3.30mの隅丸方形で主軸方向はN74°Wである。壁高は西が45cm、東が25cmで周溝は浅い。床面は軟弱であるが主柱穴3コが確認され北隅よりの相当部を精査したが他の1コを確認できなかった。東壁中央部に石組粘土カマドがあるが焼土は比較的少ない。カマド周辺から遺物が僅か出土した。

遺物 床面からは土師器の甕(164図4・5)が、ロクロ引小形甕(6)は覆土から出土した。他は小破片であるが内黒坏、須恵器坏で寛切によるものがカマドより出土しており、合子片、鉄滓も1点出土している。床面遺物からは中道Ⅱ期の住居址と考えられる。(酒井)

(66) 66号住居址 (図95の2・164の7～14、写244)

遺構 宮西地籍1区の60号住居址の貼床の下から検出された住居址である。東西4.00m、南北3.80mの隅丸方形を呈するプランで、主軸方向はN77°Wである。残存する壁高は北で20cmあり、部分的には樹いロームの床がある。主柱穴は4コあり、西壁中央にカマドの焼土と思われる部分があった。カマド右には貯蔵穴がある。

遺物 床面からは須恵器の坏(164図7～9)が出土したが、9は寛切による。土師器甕(10)は頸部に一条の沈線を持っている。覆土からは須恵器坏蓋(11・12)、高台椀(13)、坏(14)が出土した。鉄器では刀子片と鎌茎が各1点出土した。本址は中道Ⅱ期の住居址である。(酒井)

(67) 67号住居址 (図96の1・165の1～9、写245)

遺構 中道地籍E区にある。プランは東西4.35m、南北5.60mの方形を呈する堅穴住居址で、主軸方向はN77°Wを示す。東壁は水田造成時に相当削られている。周溝は東を除いて幅8～22cm、深さ6cmでめぐり、床面は砂礫混りで荒れている。主柱穴は4コ、比較的深くて大きい。カマド左に貯蔵穴と思われるピットがあり、西壁中央に石組粘土カマドが良好な状態で遺存した。内部から焼土が多かった。

遺物 床面からは土師器の甕(165図1～5)、覆土からは須恵器の坏蓋(6)、高台坏(7～9)が出土している。他には須恵器甕・長頸瓶の破片がある。本址は中道Ⅱ期の住居址である。(片桐・中村)

(68) 68号住居址 (図66の2・166の1～13・177の14、写246・263・285)

遺構 中道地籍D区にあり4号住居址を切っている。プランは東西4.30m、南北4.90mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN64°Wを示す。床面は4号住居址上に貼床したもので凹凸があり検出が難しかった。主柱穴は4コある。カマド北の貯蔵穴内からは灰釉片・土師片が出土した。西壁中央には石組粘土カマドがある。

遺物 床面からは須恵器高台坏(166図1)、灰釉皿(2、写263)、土師器の内黒坏(3～5)、カキ目のある小形甕(6)、ロクロ引小形甕(7)、甕(8)が出土した。覆土からは土師器杯(9)、内黒坏(10～12)、墨書を持つ坏(13)が出土している。他に高坏片、須恵器片があり、鉄器では刀子片2点、用途不明(177図14、写285)がある。本址は中道Ⅲ期の住居址である。(片桐・中村)

第17表 中道遺跡68号住居址出土土器一覽表

図番号	器形	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	装	形	備考
166-1	高台杯	S	15.0	3.8	12.7		わずみ色	口縁、腰部、内外ともロクロ		
166-2	皿	K	14.0	3.7	8.7		灰白色	口縁、腰部、内外ともロクロ		
166-3	杯	H	15.8			砂	黄赤褐色	口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色研磨		
166-4	杯	H	16.1			粗石、少量	赤褐色	口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色研磨		
166-5	杯	H	13.0			網石含	赤褐色	* * *		
166-6	小形甕	H	15.6		6.8	良	暗褐色	口縁、内面ナデ、外面横ナデ、胴外面磨状器具によるまき目、内面横ナデ		
166-7	小形甕	H	18.2			良	暗茶褐色	口縁、内外とも横ナデ、胴部内外ともロクロ、底部未切		
166-8	甕	H	22.2			砂	黄褐色	口縁、内内横ナデ、胴部内外横ナデ、底部未切		
166-9	杯	H	12.5				赤褐色	口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒ナデ		
166-10	杯	H	15.5				赤褐色	口縁、腰部、外面ロクロ、内面黒色研磨		
166-11	杯	H	14.0				赤褐色	* * *		
166-12	杯	H	15.4				赤褐色	* * *		
166-13	杯	H			5.6		赤褐色	内外ともロクロ、底部未切		曇青

(69) 69号住居址 (図96の2・166の14・15、写247)

遺構 中道地籍E区にある29号住居址の貼床の下部より検出された。東西4.85m、南北4.90mの隅丸方形竅穴住居址で、主軸方向はN58°Wを示す。壁は29号住居址により破壊され、10cm程しか残っていなかった。ローム上面からの深さは60cm程である。周溝が全周し、床はロームのタタキであった。主柱穴は4コ組の2組が考えられ、各柱穴とも外側の柱穴を内側のが切っており、建直されたものと思われる。中央東側にあるピットは29号住居址のもので、カマド左には貯蔵穴があり底には焼土があった。西壁中央のカマドは焼土と粘土の一部を残すのみであった。覆土は1cm程度の黒土が床面上にあるのみで、後はロームで埋められ29号住居址の貼床となる。

遺物 遺物は僅少である。図示した小形甕(166図14)、甕(15)はともに土師器である。他に須恵器甕、坏蓋の破片がある。遺物が少ないため断定はできないが中道Ⅱ期の住居址と思われる。(竹村)

## イ 竅穴状遺構

(1) 竅穴1 (図97の1・167の1~11、写248)

遺構 中道地籍の最北端、F区にある。この遺構は例外的に表土下25cmの黒土中から遺物出土量が増加したため、そのレベルでグリットを拡張しプランの検出に努めた。平面プランは確認できず、水平に削り下げた結果、褐色土漸移層面で焼土をもった東西4.60m、南北2.60mの不整長方形に近い竅穴が確認され

た。壁高は10cm程となったが、焼土が壁上部より高い位置にあることからもう少し深い竪穴であったと思われる。遺物も焼土面より上に集中する。竪穴周囲には小ピットが多数見られる。

遺物 須恵器では坏蓋(167図1~5)、坏(6~8)と甕片がある。灰輪陶器では椀(9)のL線と黒笹90号窯期に見られる高台部がある。土師器では甕(10・11)の他、内黒坏、赤色胎土暗文の片があり、極細のカキ目をもつ甕片、ロクロ引小形甕片もみられ、磁石も出土している。遺物からは中道Ⅲ期である。

(2) 竪穴2 (図97の2・167の12~23、写249)

遺構 中道地籍C区、15号住居址の北に位置する。東西2.70m、南北2.30mのほぼ楕円形を呈する。壁はほぼ垂直で10cm程の高さを持ち、底は平坦で固さを持つ。周囲には小ピットが巡り上層構造があったと考えられる。遺物は褐色土中からも出土した。

遺物 須恵器では坏蓋(167図12~14)、坏(15)、高台坏(17~20)の他甕片が出土している。灰輪陶片(16)もある。土師器では甕(22・23)の他に内黒坏(21)がある。中道Ⅲ期の遺構である。

(3) 竪穴3 (図97の3・167の24~27・178の12、写250・261)

遺構 中道地籍C区、5号住居址の北西方にある。2コの土壁の切り合いのように見えるが、覆土の状態、遺物の出土状況から同一のものと判断した。東西2.70m、南北3.20mの不整形円形を呈するプランで中央にロームを間仕切状に残す。壁は傾斜し床面は多少固い。内部に柱穴2コがあるが性格は不明である。

遺物 須恵器には坏(167図24・25)、短頸壺(26)がある。土師器では坏部内面黒色磨研される高坏(27)、甕片が出土した。須恵坏にはロクロ整形痕が顕著で、短頸壺は同一個体片が竪穴4からも出土し接合したものである。土製品では紡錘車(178図12、写261)がある。中道Ⅱ~Ⅲ期と思われる。

(4) 竪穴4 (図97の4・167の28)

遺構 中道地籍C区、柱列22の西に位置する。東西1.80m、南北2.30mの不整形円形を呈し、壁高は南で35cm、北で16cmである。底部は平坦でやや固く、北側にロームの高い箇所がある。竪穴3と何らかの関連を持つ遺構と思われる。

遺物 須恵器は坏蓋(167図28)、前記短頸壺、青海波文のある甕片である。土師器では瓦調整の甕片少域である。中道Ⅱ~Ⅲ期の遺構である。坏蓋は古い様相を持つ

(5) 竪穴5 (図97の5・167の29)

遺構 中道地籍C区にあり、7・8号住居址の中間に位置する。東西3.20m、南北2.10mの不整形な長方形である。東壁に台状のロームの掘り残しがあるが、他は垂直で15cm程の壁高を持つ。底部は平坦でやや固い。

遺物 須恵器には高台坏底部片がある。土師器には内黒坏の厚手のもの(167図29)と甕整形の甕片がある。中道Ⅱ期の遺構と思われる。

(6) 竪穴6 (図97の6・167の30、写251)

遺構 中道地籍C区にある。東西1.80m、南北2.60mの不整楕円形を呈し、壁はほぼ垂直で1m程の深さを持つ。覆土上層に15cm程の厚さの焼土層があり、その上下に遺物が集中する。底は三段になり固さはない。土壌とした方がより適切なものである。

遺物 須恵器では高台付杯底部があり、土師器では小形甕(167図30)、粗いカキ目の小形甕、甕の破片が少量出土した。中道Ⅱ期の遺構と思われる。

(7) 竪穴7 (図97の7・169の3・4、写252・264)

遺構 中道地籍C区、7分住居址の東に位置する。長径2.30m、短径2.00mの楕円形のプランで楕円状で深さは50cmである。壁肩部と同一レベルで配石4コと深鉢、浅鉢が検出された(写252)。なお、深鉢1コが空堀に合っている。下層では遺物が少ないところから墓塚としての色彩が強いと考えられる。

遺物 深鉢(169図3)は口径41cmの大形、暗褐色で焼成は良くないが、半截竹筥により籠目文様を付している。浅鉢(同図4、写264)は赤褐色を呈する。ともに半完形品である。黒曜石片も多く出土した。遺物からみて梨久保式期の遺構である。

(8) 竪穴8 (図97の8・169の1・2・172の2)

遺構 中道地籍C区にある。長径2.00m、短径1.85mの不整楕円で約60cmの深さを持つ。壁はほぼ垂直で底は平坦で小ピットを持つ。土壌とした方がより適当である。

遺物 深鉢片(169図1・2)と、石錘(172図2)が出土した。梨久保式期の遺構である。

(9) 竪穴9 (図97の2、写293)

遺構 中道地籍C区にある。長径3.20m、短径2.40mの楕円形の竪穴である。壁はゆるい傾斜を持ち25cm程の高さを示す。底面は平坦で多少の硬さを持つ。床面より浮いて焼土が多く見られた。

遺物 土師、須恵の小破片が出土しているが図示し得るものはない。平安時代の遺構である。(郷道)

ウ 掘立建物址 (図77・98~104、写289~305)

掘立建物址(柱列)は中道地籍で30棟、宮西地籍で1棟検出された。中道地籍では住居址が大きく2群となるのに対応するかのよう、C区の群とE・F区の群に分かれる。宮西地籍では住居址数に比し少ないが川地外に存在するものであろう(63図・64図)

形態を分類すると最も多いのが3間×2間のAa型である。この型には柱列1(98図1、写291)、柱列4(98図4、写289)、柱列5(99図1、写290)、柱列7(99図2)、柱列8(99図3、写292)、柱列9(99図4)、柱列10(100図1、写301)、柱列11(100図2)、柱列12(100図3)、柱列16(101図2、写294~7)、柱列17(101図3、写298)、柱列18(101図4、写299)、柱列22(102図4、写303)、柱列27(104図1、写291)、柱列宮西1(77図2、写305)の15例がある。他に一部を破壊或いは調査不能であったが同型かと思われるものに柱列6(64図下)、柱列23(103図1)がある。

Aa型の変形として横と平行に廊を持つAaI型として柱列3(98図3、写289)があり、柱列2(98

第18表 中道遺跡 掘立建物址一覧表 No.1

※寸法 上段は最大寸法、下段 内は直交させて得た寸法

柱列番号	図版番号	型	規模(間)	桁行(m)	梁行(m)	棟方向	柱間寸法(m)			備考 (柱列内出土遺物)
							桁行	梁行	留梁行	
1	98-1	Aa	3×2	7.7 (7.2)	5.7 (5.1)	N 20° E	2.6 (2.4)	2.9 (2.3)		柱列27と重なる (土師甕片、須恵杯底部)
2	98-2	Aa I	3×?	7.1 (6.7)		N 9° E	2.4 (2.3)			柱列3の南か。
3	98-3		3×2 (3)	7.2 (6.3)	5.6 (4.7)	N 8° E	2.4 (2.1)	2.8 (2.4)		8住を切る。西厨有り? (土師甕片)
4	98-4	Aa	3×2	7.1 (6.4)	4.7 (4.4)	N 12° E	2.4 (2.1)	2.4 (2.2)		(土師甕片)
5	99-1	Aa	3×2	5.7 (5.1)	4.4 (3.9)	N 80° W	1.9 (1.7)	2.2 (2.0)		(土師甕片)
6	64-F	Aa ?	3×?	5.9 (5.4)		N 9° E	1.9 (1.8)			東厨破壊されている。
7	99-2	Aa	3×2	5.7 (5.4)	4.4 (3.9)	N 7° E	1.9 (1.8)	2.2 (2.0)		
8	99-3	Aa	3×2	7.2 (6.5)	4.4 (3.9)	N 20° E	2.4 (2.2)	2.2 (2.0)		
9	99-4	Aa	3×2	5.6 (5.0)	5.1 (4.6)	N 19° E	1.9 (1.7)	2.6 (2.3)		30住を切る。
10	100-1	Aa	3×2	6.7 (6.3)	4.3 (3.9)	N 70° W	2.2 (2.1)	2.2 (2.0)		22住を切る。
11	100-2	Aa	3×2	5.1 (4.5)	3.9 (3.4)	N 18° E	2.7 (2.3)	2.0 (1.7)		31住を切る。
12	100-3	Aa	3×2	5.3 (4.9)	3.7 (3.3)	N 16° E	1.8 (1.6)	1.9 (1.7)		28住を切る。 (土師甕口縁)
13	100-4	Aa I	3×2 (3)	5.9 (5.4)	4.5 (3.8)	N 16° E	2.0 (1.8)	2.3 (1.9)		北厨有り
14	100-4		2×?						(3.0)	柱列13の南か。
15	101-1	Aa I	3×2 (3)	6.3 (5.7)	4.4 (4.0)	N 45° E	2.1 (1.9)	2.2 (2.0)	(1.2)	東厨有り (土師甕・杯、須恵甕・杯・杯蓋)

第18表 中道遺跡 掘立建物址一覧表 No.2

単位法 上段は最大寸法、下段は直交させて得た寸法

柱列番号	図版番号	版型	規模(間)	幅行(m)	奥行(m)	傾方向	柱間寸法(m)			備考 (柱列内出土遺物)
							桁行	梁行	間梁行	
16	101-2	Aa	3×2	7.0 (6.1)	5.2 (4.5)	N 29° E	2.3 (2.0)	2.6 (2.3)		楕圓形の石あり (土師壺片)
17	101-3	Aa	3×2	5.0 (4.2)	3.9 (3.4)	N 61° W	1.7 (1.4)	2.0 (1.7)		柱列10と重なる。底部もつきかためた柱穴有り
18	101-4	Aa	3×2	5.4 (5.0)	4.2 (3.9)	N 16° E	1.8 (1.7)	2.1 (2.0)		柱列30と重なる (土師壺、須恵環)
19	102-1	Ab	3×1	5.8 (5.2)	4.4 (4.0)	N 13° E	1.9 (1.7)	4.4 (4.0)		
20	102-2	Ac	3×3	5.8 (5.1)	5.5 (4.7)	N 16° E	1.9 (1.7)	1.8 (1.6)		柱列29・30と重なる
21	102-3	Aa II	3×2 (4)	6.7 (6.1)	4.9 (4.2)	N 31° E	2.2 (2.0)	2.5 (2.1)	(2.6)	21・39住を切る。北廊有り
22	102-4	Aa	3×2	6.4 (6.0)	4.8 (4.4)	N 17° E	2.1 (2.0)	2.4 (2.2)		土壇31を切る
23	103-1	Aa ?	7×2		4.6 (4.2)	N 12° E		2.3 (2.1)		3×2の規模か
24	103-2	Aa I	3×2 (3)	6.3 (5.7)	4.4 (3.7)	N 21° E	2.1 (1.9)	2.2 (1.9)	(3.3)	20住を切る。東廊有り (土師、須恵壺片)
25	103-3	Ba	2×2	5.0 (4.5)	4.9 (4.5)	N 16° E	2.5 (2.3)	2.5 (2.3)		
26	103-4	C	1×2 ?	5.3 (5.0)	5.3 (5.0)	N 10° E				15住の壁外施設か
27	104-1	Aa	3×2	6.1 (5.5)	5.1 (4.6)	N 20° E	2.0 (1.8)	2.6 (2.3)		柱列1と重なる
28	104-2	D	1×1	3.8 (3.2)	3.2 (2.7)	N 78° W				
29	104-3	C	1×2	4.2 (3.9)	4.0 (3.7)	N 67° W		2.0 (1.6)		柱列20と重なる。柱列30と直交する
30	104-4	Bd	2×1	5.9 (5.3)	4.6 (4.0)	N 23° E	3.0 (2.7)			柱列18・20と重なる
宮 1 西	77-2	Aa	3×2	6.7 (6.1)	5.0 (4.3)	N 15° E	2.2 (2.0)	2.5 (2.2)		



図2)は調査時別個のものと考えたが柱列3の跡と考えられる。柱列15(101図1、写294)、柱列24(100図2、写304)もこれに含まれる。また、柱列13・14(100図4、写293)は同一のものと思われる。

A a 型の棟の延長方向に下壁か間仕切を持つものをA a II型としたが、柱列21(102図3)がある。

A b 型としたものはA a 型の棟柱を欠くものであるが、柱列19(102図1)の1例のみで、棟柱が浅く掘り込まれていたため既になくなっていった可能性もあるかと考えられ、ほぼA a 型と同一構造であろう。

A c 型としたものは3間×3間のもので、柱列20(102図2、写299・302)が該当する。

B a 型は2間×2間のもので柱列25(103図3)は北部が調査不能であったためA a 型の変形である可能性が高い。B d 型とした柱列30(104図4、写299)は2間×1間であるが、規模はA a 型とほぼ同大である。

C 型は1×2間、D 型は1×1間であるが正方形に近い形を持つ。C 型では柱列26(103図4)、柱列29(104図3、写299)、D 型では柱列28(104図2)がある。

柱列16では3コの柱穴で柱根を確認したが、径15~20cmの丸太材を使用しており、柱穴の径に比し意外に細い材を使用している(101図2断面図)。また、この柱根上に平石が礎石状に乗り検出された(写295~297)が補修したものと考えられる。柱列29・30は近接し、棟が90°ずれている。同時に存在した可能性があると考える。A a 型のは住居址、D 型のは高床式倉庫の様なものであろうか。

住居址との切り合いは中道I期の住居址を切るものとして柱列9が30号住居址、柱列24が20号住居址を切る。中道II期の住居址を切るのは柱列3が8号住居を、柱列11が31号住居を、柱列12が28号住居を、柱列21が21・39号住居を切っている。中道III期との切り合いはなく、中道IV期の22号住居を柱列10が切っている。

柱穴内から土師・須恵片の出土をみたものも少数あるが、小破片で時期を判定することは困難であった。また、柱列の遺構範囲内のグリット掘り段階の遺物も検討してみたが、水田造成時にローム面まで削平しているためか土師器・須恵・灰釉陶器片も磨滅したものが多く時期も雑多である。何れにしても当時の生活面を失っているものが圧倒的に多く、18表に出土遺物を載せておいたが遺構に作出するものは少ないと思われる。グリット遺物全体をみても灰釉陶器は少ない。中世陶器片は皆無に近い。

以上、遺構・遺物の検討から独立建物址が含まれたのは、平安時代後半頃で中世には至らぬものと思われる。なお、柱列相互の重複は幾例かあるが、柱穴の切り合いがないため前後関係は把握できなかった。

(郷 道)

## エ 土 壌

中道地籍では土壌37基を、宮西地籍では18基を検出した。出土遺物をもつ土壌は少ない。形状・規模については図版と次表を参照されたい。

中道地籍の時期の判明するものは縄文中期初頭製久保式期1基、奈良~平安時代の土師・須恵器片を出すもの7基である。砂利マウンド1基、ロームマウンド2基は遺物もなく人為的なものではないかも知れない。土壌17(写306右土)は上部で長頸瓶(168図12)が、下部には焼土があり、火葬墓かとも思われる。宮西地籍では一般的なもののみで、住居址の一部と見られるものも含まれる。土壌M12で須恵器の高台環(167図31)が出ている。

(三 浦)

第19表 中道遺跡中道地籍土壤一覽表

番号	図版番号	プラン		大きさ (m)			状態 (上部、内部など)	出土遺物	その他 (時期等)
		平面	断面	長軸	短軸	深さ			
1		楕円形	スリ鉢	95	80	37		近世瓦質陶片	近世
2	107-1	楕円形	ナベ底	113	85	41		深鉢片 2	縄文中期初頭
3	66-1	楕円形	舟底	103	80	38			
4	107-2	不整楕円形	スリ鉢	220	155	97	砂利マウンド		
5	66-1	方 形	舟底	138	138	64	3号住居址を切る		
6	66-1	不 整 形	舟底		145	102	3号住居址に切られる		
7	99-2	不 整 形	ナベ底	88	80	42			
8	99-2	不 整 形	ナベ底	84	70	29			
9	99-3	円 形	ナベ底	80	75	23	柱列8の一部か		
10	99-3	楕円形	スリ鉢	140	130	57		須恵環・甕片各1	平安時代
11	99-3	不整楕円形	ナベ底	140	120	42			
12		楕円形	スリ鉢	153	95	53			
13	78-1	楕円形	スリ鉢	180	125	95			
14	99-4	隅丸方形	ナベ底	90	80	13			
15	76-1	不 整 形	溝 状	215	80	47			
16	76-1	不整楕円形	スリ鉢	230	197	95			
17	107-3	長方形	ナベ底	175	130	35	溝状遺構2に切られる 焼土	長瀬瓶	平安時代
18	107-4	楕円形	ナベ底	185	120	33			
19	107-5	不整楕円形	スリ鉢	265	250	77	ローム・マウンド		
20	107-6	不整楕円形	ナベ底	175	133	45	ローム・マウンド		
21	100-4	隅丸方形	ナベ底	105	77	25			
22	81-2	隅丸方形	ナベ底	110	95	55	32号住居址を切る		
23	81-2	円 形	スリ鉢	85	80	40			
24	82-1	円 形	ナベ底	74	70	23	34号住居址の一部か	須恵環片・土師甕片	平安時代
25		長楕円形	舟底	220	75	70			
26	100-4	方 形	スリ鉢	82	78	38			
27		不 整 形	スリ鉢	210	145	50		須恵・土師片	平安時代
28	107-8	楕円形	ナベ底	147	115	42	釜大の礎多数・木炭	土師片	平安時代
29	82-2	楕円形	ナベ底	145	107	43		土師片	平安時代
30	107-9	楕円形	ナベ底	160	110	78			
31		不整楕円形	舟底	84	70	46	柱列22を切る		
32		円 形		128	125	38			
33	107-10	長楕円形	舟底	135	83	47			
34	107-11	長楕円形	舟底	136	89	49			
35	107-12	不 整 形	スリ鉢	180	165	110			
36		楕円形	舟底	172	130	72		土師甕片・須恵環片	平安時代
37	107-13	不 整 形	舟底	182	86	26		土師片	平安時代

第20表 中道遺跡宮西地籍土壌一覧表

番号	国取番号	プラン		大きさ (cm)			状 態 (上部、内部など)	出 土 遺 物	その他 (時期等)
		下 面	断 面	長軸	短軸	深さ			
M 1	87-2	楕円形	ナベ底	120	105	23			
M 2	88-1	円形	ナベ底	84	83	62	30位より新しい		50位の一部分
M 3	88-1	楕円形	舟底	115	97	30	*		*
M 4	90-3	楕円形	舟底	114	99	41	人頭大の石 3コ		
M 5	91-2	楕円形	不整	100	40	20			
M 6	94-1	不整形	不整	90	50	16			
M 7	107-14	不整形	舟底	207	115	53			
M 8	107-15	楕円形	スリ鉢	148	113	46			
M 9	107-16	楕円形	舟底	210	120	47			
M10	94-1	楕円形	竈状	58	38	55			
M11	94-1	不整形円形	竈状	145	88	32			
M12	87-2	隅丸方形	スリ鉢	125	105	91		須恵高台環	平安時代
M13	88-2	不整形円	ナベ底	90	83	48			
M14	107-17	不整形円形	ナベ底	145	140	30			
M15	107-18	方 形	ナベ底	124	95	24			
M16	107-19	長楕円形	舟底	195	107	35			
M17	87-1	円 形	ナベ底	118	110	67			
M18	107-20	不 整 形	舟底	316	120	140			

オ 特殊遺構 (図 105・106、写 306-311)

遺構 中道地籍D区西側にある。配石と焼土を持つ遺構で、当初、火葬墓と考え調査を始めた。150×80cmの長方形に配石し礫石間と下部は厚い焼土層となる(以下、主体部と呼ぶ)。センター左をカットिंगしたところ層をなす焼土があり、単なる火葬墓としては片付られないので周囲を含め精査することとした。

主体部は東西に長く東に開口するコの字状に埋め、上に石組の竈或いはカマドを構築したと思われる状況である。上部は水田造成時に削平されたものと考え、焼土は中央部で30cmの厚さを持ち西によるに従い薄くなる。焼土上層はレンガ状といえないまでも相当焼結し固く、配石面が火床となっていたことを示し焚口部と考えた中央の石は上部構造が崩落したものとみられ、その下に薄い木炭を含む灰層状のものがあった。東部は特に良く焼け、火床焼土層が凹部をつくり向側の配石は焚口部の軸石のように観察された。ここより小鉄片が出土し、焼上下の褐色土層より土師片が出土した(105図、写 306-308)。

主体部東には大ビット(尺一尺)があり最深部は97cmを示す。楕円状の底部は凹凸があり軟弱であるが最下層の黒土層上に主体部から流れ込んだと思われる状態で、主体部から続く20cm程の厚さで焼土・炭粉混入黒褐色土層があり、上部は再び黒土層となった。このビットは主体部と同時か、やや遅れて存在した

可能性が強い。内部からは土師・須恵片が少量出土した。

R<sub>6</sub>は褐色土が落ち込む椀鉢状のピットで土壌とも考えられる。R<sub>6</sub>の南で須恵焼(168図1)が出土し、R<sub>2a</sub>の南西部上面で刀子(177図15)が出土した。R<sub>2a</sub>の西壁部は僅か6cm程高い住居址の壁かと思われる段がある。

溝2に沿ってピットが多いがR<sub>6</sub>は褐色土が充填し、R<sub>1</sub>・R<sub>2</sub>・R<sub>6</sub>・R<sub>7</sub>は溝の砂礫層に覆われるか、砂礫が入っており、他は黒土が充填する。R<sub>6</sub>・R<sub>11</sub>は袋状を呈するが人為的なものか不明。R<sub>3</sub>・R<sub>2</sub>周辺で土師・須恵片の出土をみた(106図、写309)。

不規則ながらR<sub>3</sub>・R<sub>4</sub>・R<sub>5</sub>・R<sub>8</sub>・R<sub>9</sub>の柱穴とみられるものもあり、上屋があったと考えられる。

遺物 須恵器では椀(168図1・2)、坏(3-4)、高台坏(5-8・10)、壺(9)、甕(11)がある。土師では甕(13-15)が出土した。須恵坏には中道Ⅰ期にみられる寛切底のもの(4)もあるが、土師器で極細のカキ目を持つ甕片・内黒坏片もあり、遺構は中道Ⅲ-Ⅳ期の可能性が強い。灰釉片はない。

遺構の性格について諸先輩の御教示を頂いた。故藤森栄一氏、金井汲次氏は土師器を生産した窯の可能性を、制原健氏は火葬竈を、井上唯雄、沖村透の両氏はそれぞれ群馬県、上伊那に平安後期の長大なカマドを持つ住居址が存在することを示唆され、カマドの可能性を示唆された。調査者は他に鍛冶工房としての可能性も考えてみたが、遺構・遺物からみて現在ではカマドの可能性が強いと考えている。

(伴・酒井)

#### カ 溝状遺構

##### (2) 溝状遺構1(図64)

中道地籍D区の中央を東に流れた溝で、幅0.8-1.4m、深さは土壌17の部分で50cm、グリット47の線では70cmを示す。雨水を流した程度かと思われ溝底近くに薄い砂層があるだけで断面形はU字状である。溝中からは土師・須恵片が少量出土した。土壌17を切っていることから平安時代末に近いものと考えられる。溝状遺構2が廃棄された後に掘られたものかも知れない。

##### (2) 溝状遺構2(図64・106、写309)

中道地籍D区の中央を溝1と平行して走るものである。幅2-3m、西では擾乱されていない層から27cm、グリット47の線では50cm程の深さがあったと推定される。レンズ状に入る砂礫層からは流水量が多くはなかったものと思われる。遺物はDN52で多く出土した。土師・須恵器片のみで図示できないものである。下部では殆んどなく遺構が埋没し始めた上層に多かった。

遺物は中道Ⅰ期にみられる寛切底の須恵坏片から中道Ⅲ期に主としてみられる赤色胎土の暗文土師坏片までが時期の分かるものである。中世陶器片は勿論、灰釉陶器片も出土しなかった。特殊遺構が溝廃絶後その上に構築されていることから、溝としての存続期間は中道Ⅲ期までということになる。平安時代の遺構で中道地籍の集落が構成される上で重要な役割を果たしたものと考えられる。(伴)

#### キ K区トレンチ他出土石器(図175)

宮西地籍K区、52号住居址東壁テラス部で尖頭器(175図1)が発見された。次いで、50号住居址四壁上テラス部分より刃器状剥片(同図2)が検出され、ともに褐色土漸移層出土であり、旧石器の形態を持つ石器である点が注目された。遺構調査終了後、両住居址間にA-Cの試掘溝を設定し、ロームを約50cm掘り下げ、下層の含礫層まで調査した。Bトレンチ東壁よりローム層を25cm掘り下げた地点で打製石斧(同図3)が1点出土した。他にはフレイク・チップさえ出土しなかった。

宮西地籍は発掘調査前の表探で縄文時代の打製石斧1点を用地外で表探したのみで、縄文時代の遺構は今回の調査で全く確認できなかった。上記のもの以外、黒曜石片さえ出土していない。

175図1は左右非対称のbiface尖頭器の半欠品である。良質の黒曜石製で胴中央部で切断され、切断面は平坦である。整形は入念とは言えず押し剥離ではない。素材には縦長の剥片を用い、表左上部に剥離面を残し断面形は扁平な凸レンズ状を呈する。表右側縁からの調整は入念に行われる。裏は平坦に近く不規則な調整剥離である。尖頭部の調整は機能目的性に薄く、基部方位の残存と考えた方がよいかも知れない。現存する大きさ46×30mm、厚さ最大9mm、重量13.7gである。

同図2は半透明黒曜石製の刃器状剥片である。66×30mmの大きさで、中央部の厚さは12mmである。縦にねぢれ主要剥離面に向かって相当弯曲する。下部より二次的な剥き取りが見られるが、先端部は平坦で打面のバチナが著しいためか、或いは、間接打法により剥離されたかも知れない。2条の稜線を持ち左側縁に自然面を残す。主要剥離面platform方向には二次的な打撃が加えられ、表面の稜線と打撃部の作る尖頭状の鋭い部分は刃器的な機能を持つとも考えられる。

同図3はホルンフェルス製で表面の風化が激しい。刷や下下に最大厚を持つ部分があり他の部分より相当の厚さを持つのが特徴である。また、表面は最大厚を持つ部分から頭部に向い側面形に見られるような靴底状を呈する。刃部は薄減し丸味を持ち全体の整形は粗雑である。120×46mmの大きさ、最大厚22mm、重量122gである。これについて神村透氏は縄文時代のものと考えておられるが、一応、旧石器時代遺物に含め報告する。

(酒井)

#### ク その他の遺物 (図169-172、174・177、写287・288)

本遺跡の遺構外から出土した遺物を一括した。中道地籍B・C区では縄文時代の遺物が集中し、奈良～平安時代の遺物は遺構周辺の各グリットから相当量の出土を見た。然し、図示する価値のあるものは少ない。

縄文時代中期初頭 ソーメン状粘土紐を浅い平行沈線の地文上に貼付するもの(170図35)は晴ヶ峯式に見られる要素で古い。梨久保式(169図11-38・170図1-34・36-42)はB区の2分・3号住居址以東、C区の5号住居址を中心とする部分に集中した。

縄文時代中期中葉 懸坂式の新しい時期のもの(171図2・3・11・12)が少量ある。

縄文時代中期末葉 加曾利I期の古いもの(同図1・4-10)で粘土紐を貼付した曾利I式(4-10)がある。

縄文時代の石器では剥片石器(172図3-8)、石鏃4点(同図7-11)、打製石斧(174図5-9・11-14・17)、敲打器(同図15)がある。砥石(同図10・16・18)は奈良～平安時代の可能性が高い。

中世～近世の陶片は極めて少ない。24号住居址の表土であるグリットFD 51より青磁碗小片が出土し、他に天目茶碗片等がある。以上は中道地籍のものである。

富西地籍では縄文時代の打製石斧1点を表採したのみで、奈良～平安時代以外の遺物は殆んどない。鉄鍬(177図17、写288)はK区の北端で単独出土したものである。(伴)

### 3) ま と め

本遺跡では縄文時代中期初頭の竪穴状遺構2基、奈良から平安時代の住居址69軒、掘立建物址31棟(実数29)、竪穴状遺構7基、特殊遺構1、溝状遺構2という多くの遺構を確認した。特に、奈良から平安時代の遺構数は今回調査した用地内だけで県下最大で、遺跡は更に東西に広がることを考えると全国でも有数の遺跡に入ることは確実である。それだけに投げかけられた問題点も多い。

特に貴重な遺物を出したのは5号住居址の奈良三彩小蓋である。祭師遺跡では発見されているが、住居址から出土したのは佐久市中道遺跡の奈良二彩蓋(注1)と県内で2例のみである。また、20号住居址からの馬具の出土も平安後期の内田原1号住居址出土例はあるが(注9)最古の例である。横瓶の多出も注目される。

奈良・平安時代の出土土器については梶原健氏の指導を受け、中道Ⅰ～Ⅳ期に分類した。各期の特徴は次の通りである。

中道Ⅰ期 域の内遺跡の「域の内第6様式」(注2)、仮田遺跡H4号住居址(注3)、下条・灰塚遺跡H20号住居址(注4)の出土土器に併行するものである。奈良時代から平安時代初期にかけてのものである。

この編年を可能にしたのは37号住居址が次期の26号住居址に切られていることであった。35号住居址はⅢ期の13号住居址に、4号住居址はⅣ期の68号住居址に貼床されている。

須恵器の坏蓋は20号住居址例(123図6～9)のように器高が低く、端部が僅かに内折するA型と器高が高く、屈折する端部を明瞭につけているB型(同図1・2)がある。A型はより古い要素を持つものである。坏では底部施切手法の古い型(同図18・22・24)と糸切底のもの(20)が混在する。高台付坏では施切手法によるため底が中心に向かって下がるもの(110図14～16)が多い。

土師器では、どの住居址でも小形甕の個体数が多い。小形甕(125図6・7)は胴中央に最大径を持つ丸味を持つものがあり、扁整形である。甕には頸部に弱い稜線を持つもの(126図6)、一乗の沈線のあるものもある。稜線を失ったものが一般的で、粗いカキ目のもの(同図12)が少数俤うがⅢ期の細密なカキ目とは異なる。小形鉢(4)や鉢に近いもの(4)もある。甕は鉢形で把手は持たない(126図1)。高坏は少数であるが伴出し、30号住居址例(138図20・21)のように坏部に比し脚が太く、安定感のあるものである。土師坏は非常に少なく、破片で1・2点各住居址からであるが、高坏片である可能性もある。土師の供膳形態は高坏のみといっても良い。39号住居址の甕は真胴式で古い。5号住居址は20号住居址より古い様相を呈する。

中道Ⅱ期 編年の根拠は上記26号住居址例と該期の21号・39号・69号住居址が、それぞれ、Ⅲ期の23号・40号・29号住居址に切られていることである。土器は青木六反山Ⅱ2号住居址(注5)、茅野和田遺跡西10

分住居址（注6）にほぼ併行するものである。茅野和田遺跡では9世紀から10世紀にわたっている。

最良のセットを残すのは堂地遺跡大原地路4号住居址である。本遺跡を含めて述べたい。

須恵器ではI期の坏蓋にみられたA型が消え、B型（39図1・40図6）のみになる。坏形では糸切底のものが圧倒的に多い。寛切底のものもあるが混入遺物か伝世の可能性が強く、何れにしても本期の主流をしめるものではない。坏は39図2・3例のように口径に比し、底径が大きくなる傾向がある。

土師器の小形甕は前期のが胴中央部に最大径を持つものが多かったのに比し、最大部がやや上部へ移動し胴の丸味を失ってくるものが多いと考える。甕では頸部に弱い稜線を持つもの（39図14・120図16）、一条の沈線をめぐるもの（39図1）が残存する。甕はI期にみられる口唇が丸味を持たず直角に近く平坦に仕上げられたもの、粗いカキ目を有するものもあり変化はない。大きく異なるのは、内面黒色磨研された椀に近い糸切底の坏が多く伴うことである。この坏は次期のものに比し、砂質胎土のがさついた感じで厚みがあるものがあり、これは寛磨きも丁寧ではない。

中道Ⅲ期 前期までの住居址か、同期の住居址との切り合いだけである。福島遺跡（注7）、馬山遺跡4号住居址（注8）に併行する時期のもので灰精陶器が伴う。10世紀後半から11世紀頃で23号住居址は最良のセットを持っている。

灰精陶器は各住居址に散見する程度で多くはない。45号住居址出土の盤（149図19）は黒笹14号墓期、23号住居址の椀（128図48）は黒笹90号墓期であろう。

須恵器の坏蓋は器高があり端部を急角度で折り曲げ、ロクロ整形痕が顕著である（同図1～22）。坏は口径に比し底径の大きいもの（同図28～32）と底径の小さい椀形のもの（同図24）があり、これまたロクロ痕が目立つ。高台付坏では浅いもの（同図42・13図21～25）が多いが、体部の直立する深いもの（128図45）が少数ある。坏形土師器の胎土はⅡ期までに多かった灰白色のものは消え青灰色のもののみとなる。また、須恵器の供膳形態のものが多用されている。甕（129図1・130図27）は口縁部無文となり甲目のあるものは少ない。だが、狐窪地籍13号住居址例のように青海波甲目を内面に持つものがある。同じく伝世品かも知れないが、この期において横瓶の出土例が1例ある。

土師器では小形甕でロクロ整形・糸切底のものが出現する。指頭整形によるかと思われるロクロ目幅の広く厚手のもの（129図11）と遠いロクロ回転で櫛状具をあてた整密な条痕をもつ薄手のもの（同図14）がある。甕は寛削りの鳥帽子形のものもあるが、刷毛か櫛状具による極細のカキ目を持つもの（131図2）が伴出することが特徴である。内面黒色磨研された坏（同図50～54）は出土数も増加し、丁寧な仕上げとなる。また、12号住居址例のように土師高台付椀（118図13）と赤色胎土の暗文坏（同図15）が散見される。赤色胎土暗文坏はどれも斉一性を持ち、丁寧な寛磨きがされ、底中央の糸切痕残存部がくぼみ、外周を寛磨きする。これはこの期のメルクマールになる一つの土器だと考える。

中道Ⅳ期 Ⅱ期の4号住居址に貼床する68号住居址があるだけである。内田原遺跡1号住居址（注9）、大塚遺跡（注10）、月見松遺跡の灰釉を伴う住居址に併行するもので、折戸S3号墓期と思われる灰釉を伴う。11世紀後半から12世紀初頃とされる時期（注11）のものである。

須恵器の坏は混入したか、伝世したものと思えるものが僅かあるだけで須恵器の供膳形態のものは灰釉に取って代られると考えて良い。須恵器の甕はある。

土師器の構成はⅢ期と坏の形態に僅かな変化をみせるだけである。内面黒色磨研された坏（143図17～

28・166図3～5)は口部で外反気味となる点が前期と異なる特徴である。Ⅲ期の赤色胎土暗文環は5軒の住居址にはなく、消滅してしまっている。やや小形の皿に近いもの(143図14・15)が現われる。これはかわらけの祖形といわれるものである。

次に期別の住居址数をみると、中道Ⅰ期9軒、Ⅱ期26軒、Ⅲ期28軒(内?2)、Ⅳ期5軒、不明1である。時期によって住居址の偏在する可能性もあり、調査した用地内だけで考えることは問題があろうが、中道集落は中道Ⅰ期、奈良時代に成立し、平安時代中期に最盛期に達し、中道Ⅳ期の平安後期を最後に消滅したものと考えられる。

期別に同時存在した住居址を探り集落を復元してみようと考えたが、用地外を考えに入れねば無理であるので気づいた点をあげるに止める。中道Ⅱ期では富西地籍で2群に分かれる。Ⅲ期では中道地籍の1・3号住居址、13・14号住居址、9・12号住居址の同時存在性が強いことと中道・富西地籍のそれぞれで孤状をなす傾向がうかがえることである。

本遺跡の獨立建物址は平出遺跡第2号、第3号柱穴址のような総柱を持ち、明瞭に高床式倉庫であると(注12)判断できるものはない。伊那市福島遺跡例と同一形態のものが多く、柱列16では3コの柱穴で柱根跡を確認したが僅15cm程度の丸太材を使用しており、柱穴の径に比し意外に細い材を使用している(101図2断面図)。また、この穴は柱根上に平石が礎石のように置かれていた。補修したものであろう(写295～297)。福島遺跡では3間×2間の構造を持つものを、10世紀中頃からの竪穴住居址群とは期を別にする後続する時期の住居址と考える(注7)のに対し、八幡一郎氏は竪穴住居址と共存した高床式倉庫、郷倉の可能性があると反論している。(注13)

西日本では飛鳥・奈良時代から現われており、東海の伊場遺跡では同様遺構を奈良時代の駅址の礎と考えておられる。(注15)茨城県石井台遺跡では同様遺構が10世紀から11世紀頃の竪穴住居址群に後続する住居として扱っている。同遺跡で注目されることは獨立建物址が11世紀から12世紀の住居址に切られている(注14)ことである。この切る住居址はかわらけ皿等、中道Ⅳ期と共通する遺物を持つ併行期のものである。本遺跡では中道Ⅲ期までの竪穴住居址を切り、Ⅳ期に切られる例はないが獨立建物址の上限をみる上で参考にならう。倉庫であるか住居址であるかは確証がないので、さておき、中道Ⅲ～Ⅳ期の竪穴住居址と併存した可能性が強いと考える。

最後に、遺跡の性格についてふれたい。現地指導に見えた林茂樹氏は遺跡のすぐ東の大出部落から駅跡が出土したといわれていることと、獨立建物址が多数存在することに着眼され、駅舎としての可能性、延喜式に記載される深沢駅址ではないかということを示唆された。

その後、一志茂樹博士をお招きして現地視察して頂いた。その折の講演内容は次のようであった。

第一に、中道遺跡と倭名抄に記される沢郷との関係を考えて見る必要がある。沢は和銅6年の好字割により付けられた字で、本来は「佐布<sup>ソフ</sup>」と書き読ませたものである。従って、箕輪町沢部落とは読みがちがい一致しない。沢郷は広い範囲、塩尻市小野、辰野町小野から箕輪までを含むと考えられる。中道遺跡が沢郷と関係あるならば郷庁、郷寺、郷社が存在した筈で、この面からも周囲の歴史的環境を調査する必要がある。

第二に、駅・駅家とみる考え方について考えると、これは古代東山道と関連してくる。古代の畿内より信濃へのルートは飛鳥時代には伊勢・熱田・信濃、奈良時代前期には伊勢・美濃・信濃というルートであ



った。古代東山道が伊那谷と深く関わるのは大宝二年越後の国府が直江津に移った時である。この時に山城—美濃—神坂峠—伊那谷—松本、松本より一つは上田、一方は直江津方面と道が分れるルートが成立した。延喜式には深沢駅に10頭の駅馬を置くことと規定されているが、中道遺跡を駅家と断定することは疑問であり、次の理由から可能性は薄い。

深沢川の「深」は里より奥とか上を指す語で、仮に、近くにあったとしても中道遺跡の西方古田部落を考えた方が良く、天竜川の上となれば緩野である。また、駅は長さ120間前後で、道路が中央を樹形に切り、駅はその中央部の2軒分をあてる。中道遺跡にみられる柱列は厩か飼料倉庫であった可能性はある。延喜式に馬数板の記載があり、唐尺で1×12尺、厚さ6寸の板10枚を1頭に当て、馬2頭を1棟に入れたので厩は20×11~12尺の大きな建物となったと思われる。駅経営には多くの労力を必要とし、上野国等では駅家郷がよく見られるが信州では見られない。信濃では一般の郷の中に駅家ができたものと思われる。この点から中道遺跡を見ると住居址・柱列址が散在しているため、道路の通過は困難である。また、馬飼育には多量の水を必要とするので整備された用水址があつてよいが存在しない。他の駅の場合、駅家は道の分岐点へ置くのが通例で、深沢駅は諏訪・松本への分岐点にあると考えるのが妥当である。むしろ、現辰野町の位置を考えたい。

第三に、中道遺跡を牧との関係が深いとみる考え方が成立する。延喜式記載の宮牧として平井旦、宮処、岡原牧が上伊那近在にあり、10世紀には立野牧、小野牧等が成立する。宮処牧は天竜川右岸の相当広い範囲を含んでいたと考えられ、小野牧はこれから分立したものである。宮処牧は辰野町大出付近が中心であったと考えるが、宮処、立野牧の関係が不明確である。

然し、中道遺跡が牧と関係がある可能性は強い。大出部落に馬瀬口という小字名が残っているが、これは牧の現業厩の入口を指す言葉である。柱列址は飼料倉庫と考えられる。更に、北大出の部落には馬の信仰があり、伊那谷には同様な民俗信仰が見られないだけに有力な資料となろう。以上が御講演要旨である。

遺跡地周辺は大正時代まで畑であり森林も残っていたといわれる。台地土は水利が悪く水田は深沢川の狭い谷に求める他ない。中道遺跡、深沢川対岸の堂地遺跡の集落は倭名抄の沢郷の一部と考えられる。然し、生産の基盤は何に求めたのだろうか。中道Ⅰ・Ⅳ期は良いにしても、人口増の中道Ⅲ期には今回の調査だけでも調査跡で50軒を超える。同時に存在したものは仮に3分1にしても、用地外を考えると相当のものである。米作・畑作以外に牧場経営を考えると妥当と思われる。

( 伴 )

- 1 佐久市龍山中道遺跡緊急発掘調査概報、1972
- 2 岩崎卓也「城の内」更城市教育委員会 1961
- 3 森嶋勉他「佐久市依田遺跡緊急発掘調査報告」長野県考古学誌第12号 1971
- 4 岩崎卓也「下条・灰塚」考古学資料刊行会 1971
- 5 岡田正彦「青木六反田遺跡調査報告」長野県考古学学会機関紙
- 6 河西原光他「茅野和田遺跡」茅野市教育委員会 1970
- 7 大川清「伊那福島遺跡」長野県考古学研究会報告書 6 1968
- 8 岡田正彦「長野県更城市馬口遺跡調査報告」信濃 23 巻第 5 号
- 9 原嘉藤他「長野県塩尻市内田原遺跡調査概報」信濃 21 巻 6 号
- 10 岡田正彦「長野県更城市岸代大塚遺跡調査報告」信濃 22 巻 4 号
- 11 榎崎彰一「猿投山須原町の福平」世界陶磁全集所収 1958
- 12 大場謙雄也「平出」平出遺跡調査会編 1955
- 13 八幡一郎「群馬遺跡発見の高倉遺跡」伊那路 第17巻第9号 1973
- 14 大川清「石井台遺跡」国十郎大学文学部 1973
- 15 向坂彌二氏御教示による。



第21表 中道遺跡住居址一覧表 No.2

遺跡名	中 道 遺 跡														
	15号	16号	17号	18号	19号	20号	21号	22号	23号	24号	25号	26号	27号	28号	
遺 跡	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	中道Ⅱ	
遺 跡	ブ ラ ン 南 北	溝丸方形 410	溝 440	溝丸方形 440	溝丸方形 350	溝丸方形 825	溝丸方形 640	溝丸方形 360	溝丸方形 750	溝丸方形 630	溝丸方形 730	溝丸方形 470	溝丸方形 440	溝丸方形 480	
	東 西	430	溝 480	380	320	845	610	350	725	640	?	460	460	490	
	柱 穴	3	不	3	0	13	8	4	11	3	11	2	5	内1 外0	7
遺 跡		石垣かまど 家壁中央 石目A 石目C	溝 石垣 家壁中央 石目A 石目C	柱土の残 足(北) 溝中央	石垣かまど 内壁中央 C	石垣かまど 内壁 B	石垣かまど 内壁 C	石垣かまど 家壁中央 C	石垣かまど 内壁中央 C	石垣かまど 家壁中央 C	石垣かまど 家壁中央 C	石垣かまど 家壁中央 C	石垣かまど 家壁中央 C	柱土の残 内壁 C	柱土の残 内壁 C
	上 輪	N 90° E	N 65° W	N 30° E	N 50° W	N 65° W	N 69° W	N 77° W	N 65° W	N 61° W	N 65° W	N 70° W	N 65° W	N 55° W	
	遺 跡	貯蔵穴		貯蔵穴		中央に城土 物小に 埋石あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり	中央に城土 物小に 埋石あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり	貯蔵穴 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり	貯蔵穴 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり	貯蔵穴 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり	貯蔵穴 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり	貯蔵穴 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり	貯蔵穴 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり	貯蔵穴 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり 溝の跡あり	
遺 跡	先形土器		2		3	18			1		1				
	円上縁定 可成土器	19	0	14	12	5	47	7	9	88	30	18	7	4	
	壺	183土(12)		168	5(2)	118	203土(8)	5	5(2)	201土(8)	170	10(2)	8(3)		
	小 壺	2		1(1)			129土(9)	2	2(1)	15(4)					
	杯	1		4	13(5)	8	3(2)土(4)			7(4)		5(2)	24(3)	2	
	その他				溝跡1	溝跡1	溝跡2	溝跡2	溝跡1	溝跡1	溝跡1	溝跡1	溝跡1	溝跡1	
	壺	4土(1)		1		4(2)	10土(7)	4土(1)	2	201土(8)	15(4)	4土(1)		3	
	蓋 杯	3(3)土(4)			1(1)		17土(1)	7		8(3)	2(1)	1(1)	1	2	
	杯	6土(4)		3	18	3	24土(18)	5	2(1)	30土(20)	12(4)	20(5)	4(2)	2	
	高 台付陶 反 簍 類 その他	3土(1)							1		10土(7)	6			
反 簍 類 その他					溝跡1(1)						溝跡1	溝跡1	溝跡1		
反 簍 類 その他									1(1)						
物 類	刀子	1		刀子1		銅製1	鉄製1	刀子	1	鉄製	釘1	平銅1		鉄製1	
	石 器	3				骨製1	鉄製1			砥石1					
遺 跡	溝跡			溝跡2		銅製1	鉄製1	溝跡1		溝跡1	溝跡1	溝跡1	溝跡1	溝跡1	

第21表 中道遺跡住居址一覧表 No.3

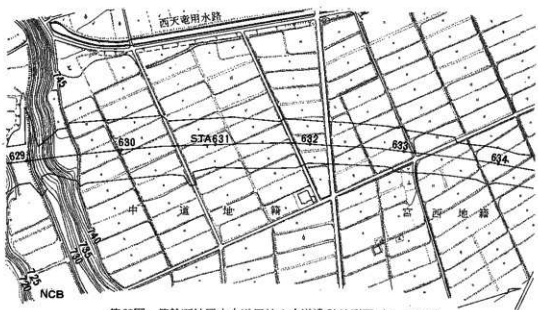
遺 跡 名	中 道 遺 跡														
	29号	30号	31号	32号	33号	34号	35号	36号	37号	38号	39号	40号	41号	42号	
時 期	中道Ⅲ	中道Ⅰ	中道Ⅱ	中道Ⅲ	中道Ⅳ	中道Ⅰ	中道Ⅱ	中道Ⅲ	中道Ⅳ	中道Ⅰ	中道Ⅱ	中道Ⅲ	中道Ⅳ	中道Ⅴ	
遺 跡	プラン	方 形	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	?	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	隅の部は 保護 区域外	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	方 形	
	南 北	740	570	660	410	?	385	330	480		395	575	660	600	
	東 西	?	600	565	430		400	400?	510		390	520以上	?	650	
柱 穴	5	8	12	11	?	6	9	6			5	3	5	7	
加 考	調査不能	粘土かまど	粘土かまど	石製かまど	?	粘土	?	石製かまど?		石製かまど	内洗? 40?に 付てしまっ た	石製かまど	石製かまど	粘土のみ 石製かま ど	
	かまど		西壁中央	西壁中央	西壁中央		西壁中央	東壁中央							
座 向	K 63° W	N 30° W	K 60° W	K 67° W	N 54° W?	N 68° W	N 20° W	K 61° W			N 79° W	K 66° W	N 32° W	N 60° W	
遺 跡		約深穴 9に穿られ る	約深穴2 壁の跡は 11に穿られ る		2壁に穿ら れる		約深穴2 13壁に穿ら れる	10壁に穿ら れる	10壁に穿ら れる	2壁に穿ら れる		白色粘土の 集積 4壁に穿ら れる	約深穴 3壁に穿ら れる	約深穴2 壁中央に穿 れる	
	遺 跡	1	2	2				1				3			
土 器	定形土器														
	国上層式 司波の土器	16	42	24	16	3	34	10	23	4	4	3	30	11	10
	壺	19(4)	10(7)	22(12)	13(8)	5	11(1)	4	6(4)	3(2)	7(2)	2	10(9)	6(5)	9(12)
	小形 甕		14(1)	2			1		20(1)					3(2)	
	杯	2(1)	4(2)		7(5)							2	4(2)		
	その他		高杯2(2)	高杯2(2)			鉢 1		高杯1(1)	器 1)			高脚土器 壺 1)		
	甕	3(2)		2	3(2)		1(1)		2	*	1	2(2)	1	2	1
	蓋 杯		3(2)	7	1(1)	2(1)	1(1)	1(1)					1	3(2)	
	杯	8(2)	36(2)	16(4)	2(2)	1		8(8)				1	6(5)	3(2)	*
	高台付 陶 長 脚 瓶	1		高杯 1	1	2						2	2		2
その他		高脚瓶 1	高脚瓶 1(1)	高脚瓶 1(1)				瓶 1							
杯・陶	1				*		1		2	1)					
その他	皿 1			土器類			土器類	土器類							
物 資	器		土 1	土 1		刀 1		小皿 1	土 2	土 2			土 1(1)?	土 1	
	石 器														
備 考	粘土杯							6700?の 「石見」			6700?の 「石見」		6700?の 「石見」?		

第21表 中道遺跡住居址一覧表 No.4

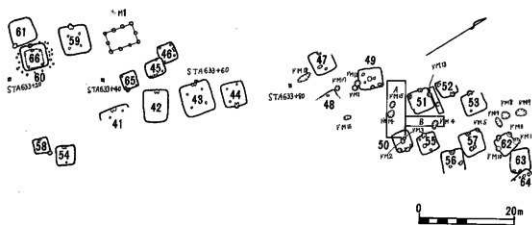
遺跡名		中道遺跡														
遺積	横	43号	44号	45号	46号	47号	48号	49号	50号	51号	52号	53号	54号	55号	56号	
時期	期	中道Ⅲ	中道Ⅱ	中道Ⅰ	中道Ⅱ	中道Ⅰ	中道Ⅱ	中道Ⅲ	中道Ⅱ	中道Ⅰ	中道Ⅲ	中道Ⅱ	中道Ⅰ	中道Ⅱ	中道Ⅲ	
遺	プラン	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	方	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	隅丸方形	
	南	660	490	400	360	460	400	310	380	480	365	485	400	380	475	
	北	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
遺	東西	680	320	325	360	490	?	433	395	420	330	440	410	370	480	
	柱穴	20	4	4	4	3		1	8	0	3	0	6	2	5	
	部	石積かまど 西壁中央	石積かまど 東壁中央	土 東壁中央	石積かまど 北壁中央	土 一部調査のみ	土 東壁中央	土 東壁中央	石積かまど 東壁中央	土 西壁中央	石積かまど 東壁中央	石積かまど 西壁中央	石積かまど 西壁中央	土 西壁中央	土 西壁中央	土 西壁中央
構	上軸	N71°W	N71°W	N60°W	N7°E	N65°W	N66°E	K70°W	N31°W	N65°W	N71°W	K62°W	K61°W	K65°W	N64°W	
	礎	礎穴2	礎穴2		礎穴	礎穴			礎穴2	礎穴1	礎穴1	礎穴1	礎穴1	礎穴2	礎穴2	
	方		中央に礎1 4石	4石を礎6	4石を礎4											
遺	土	完形土器	3			2			1		4	1				
	土	同上復元可能な土器	31	15	11	5	30	3	4	8	6	11	11	11	10	11
	土	壺	17(12器)	15(8)	6(2)	3	16(8)	5	6	11(8)	5	7(3)	10(5)	5	15(2(1))	6(8)
	土	小形壺	1(1)	*										3	1	2(2)
	土	杯		1	1(1)		20(8)	1		2		8(4(2))	*			
	土	その他	杯類等				1(1)等							1(1)等	杯類等	
	土	壺	8(3)		3	2(2)			2	4	5	4	2	3	1	2(2)
	土	壺	4		3(1)		3		1(1)				1	2	5(3)	
	土	杯	9	17(5)	2	3	37(8)	2	4(2)	3(2)	7	7	4(1)			2(2)
	土	高向付焼			*					(1)	*		*			
遺	土	灰			1				1				1			
	土	灰										1	1			
	土	灰			壺	1							壺(1器)	灰類類	1	
遺	土	鉄	第1期1 (明)鉄片			第1期1 鉄片	?	(?) 鉄片			鉄片	第1期1 鉄片		鉄片	1	
	土	鉄														
遺	土	石														
	土	石														
遺	土	陶	片片													
	土	陶					割片S+K 燻製1(玉)						燻製	1	燻製	

第21表 中道遺跡住居址一覧表 No.5

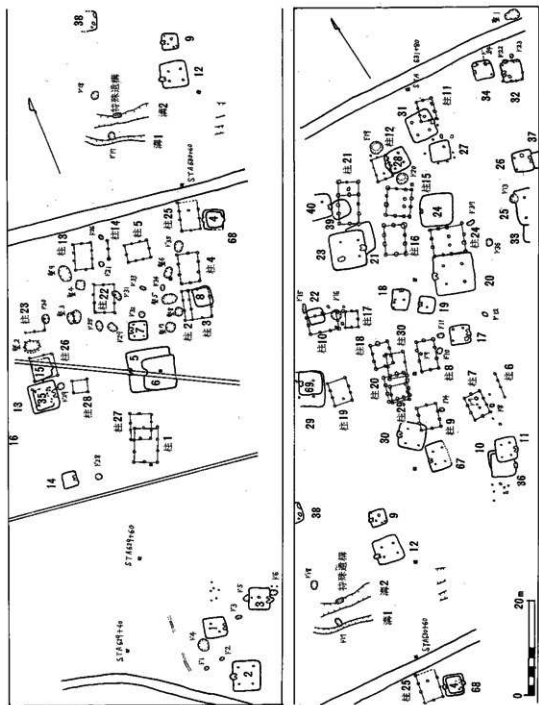
遺 跡 名	中 道 遺 跡													
	57号	58号	59号	60号	61号	62号	63号	64号	65号	66号	67号	68号	69号	
時 期	中道Ⅰ	中道Ⅱ	中道Ⅲ	中道Ⅳ	中道Ⅴ	中道Ⅵ	中道Ⅶ	中道Ⅷ	中道Ⅷ	中道Ⅷ	中道Ⅷ	中道Ⅷ	中道Ⅷ	
遺 跡	ブ ラ ン	溝丸方群	溝丸方群	溝丸方群	方 群	溝丸方群	溝丸方群	溝丸方群	溝丸方群	溝丸方群	方 群	溝丸方群	溝丸方群	
	遺 北	405	340	600	515	530	375	400	430	330	380	560	490	
遺 西	460	355	590	520	560	375	470	?	330	400	435	430	485	
積 層	柱 穴	5	2	9	5	?	8	4	2	3	4	6	5	6
	跡 名	結 七 結 十	結 十	結 十	石 蔵かまど	?	石 蔵かまど	結 七	?	石 蔵かまど	礎 石のみ	石 蔵かまど	石 蔵かまど	?
積 層	西院中央	西院中央	西院中央	西院中央	西 院		西院中央	西院中央	西院中央	西院中央	西院中央	西院中央	西院中央	
	東 輪	N 84° W	N 71° W	N 70° W	N 69° W	N 70° W	N 65° E	N 18° W	N 80° E	N 74° W	N 77° W	N 77° W	N 64° W	N 58° W
積 層	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	
	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	跡 名	
遺 跡	完形土器	1		2	2									
	同上程度可能な土器	14	7	38	21	3	4	5	3	3	8	9	8	2
遺 跡	壺	4(3)	9(6)	25(12)	4(6)	8	10(2)	7(5)	6(5)	7(4)	3(5)	16(8)	10(11)	5
	小形壺	2(2)		3(2)	4(4)	2		2(2)	1(1)		2(2)	4(2)	2(2)	3(2)
遺 跡	杯	1		1(1)	1(1)	1				1			8(3)	
	その他			壺 1(1)									高杯 1	
遺 跡	壺	3(1)	3(2)	6(1)	5(2)	2				1	1	2(1)	3(2)	1(1)
	杯	6(1)	1	11(4)	6(2)	1	2	2	1	2	5(2)	3	4	
遺 跡	高台付瓶										1(1)			
	反 鼎 類				2							1		
遺 跡	その他				短冊状①					合子 1	刷			
	杯・瓶												2(1)	
遺 跡	物 類				貝 洋 のみ 1					貝 洋	瓦 子 1		刀 子 2	不明 1
	石 器				刀 子 1									
遺 跡	遺 跡				時文塚									
	遺 跡													豊吉塚



第62图 箕輪町地区中央道用地内中道遺跡地形図 (1 : 4000)



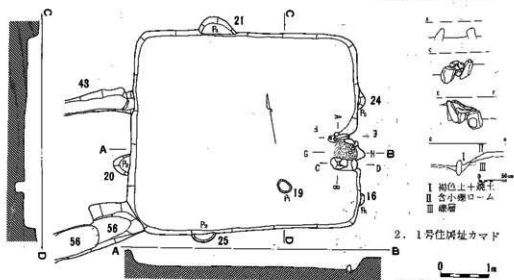
第63图 中道遺跡宮西地籍遺構配置図 (1 : 800)



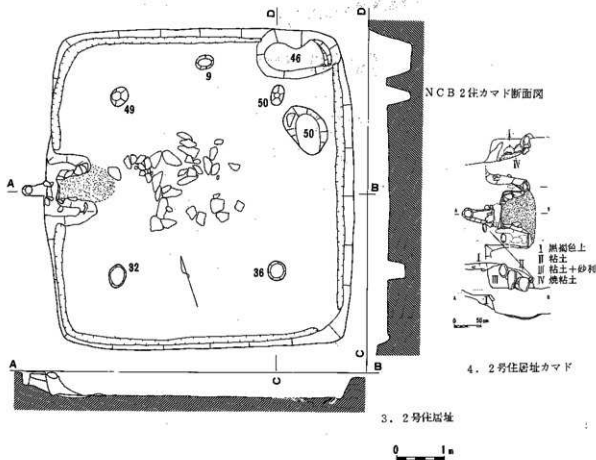
第64圖 中道遺跡中道地籍遺構配置圖 (1 : 800)



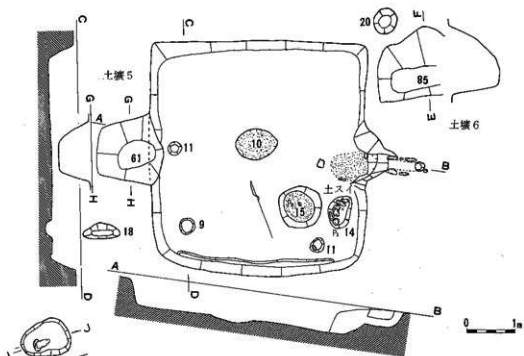
NCB 1住カマド断面図



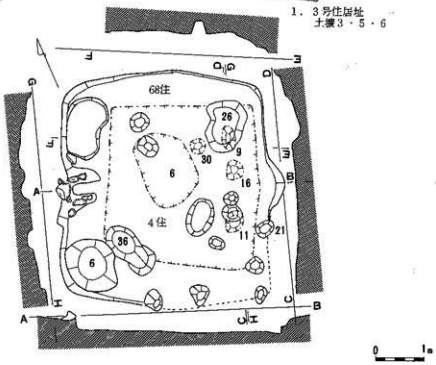
NCB 2住カマド断面図



第65図 中道遺跡1号2号住居址 (1:80)

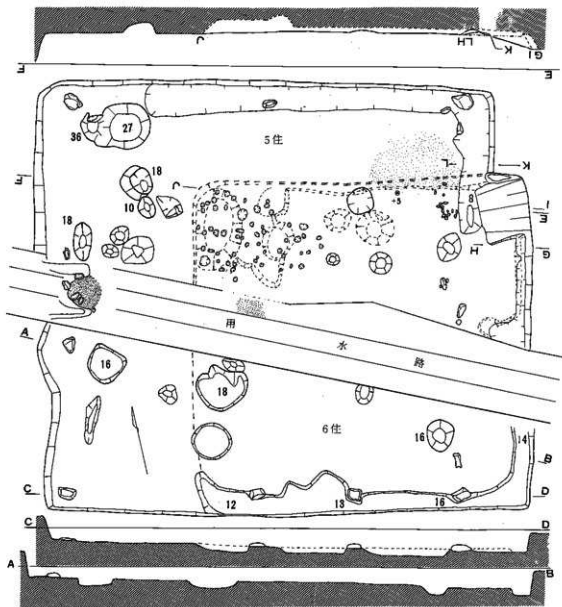


1. 3号住居址  
土壊3・5・6



2. 4号68号住居址

第66図 中道遺跡3・4・68号住居址及び土壊3・5・6 (1:80)



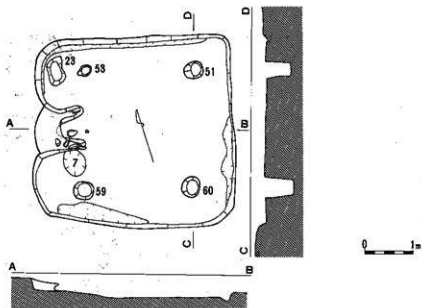
1. 5・6号住居址



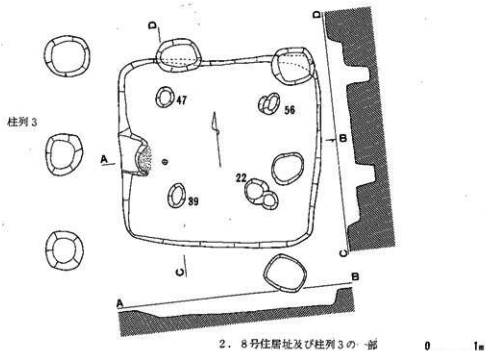
2. 6号住居址東壁入口施設断面図



第67図 中道遺跡5号6号住居址(1:80)

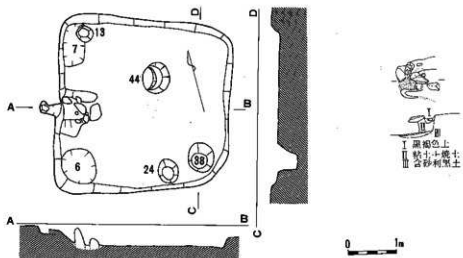


1. 7号住居址

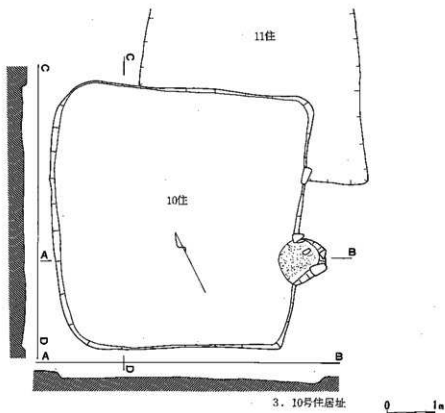


2. 8号住居址及び柱列3の一部

第68図 中道遺跡7号8号住居址及び柱列3の一部 (1:80)

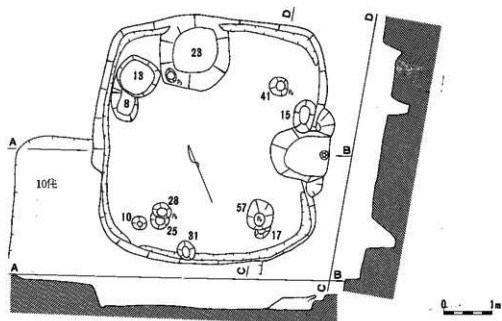


1. 9号住居址

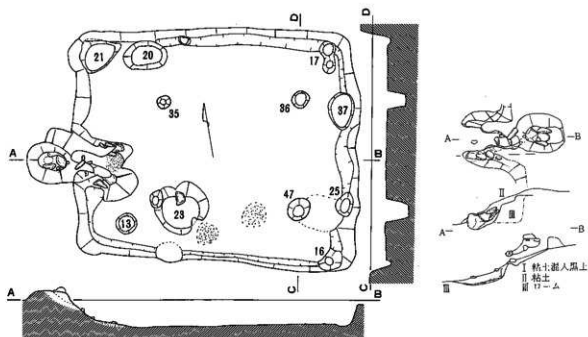


3. 10号住居址

第69图 中道遺跡 9号10号住居址(1:80)

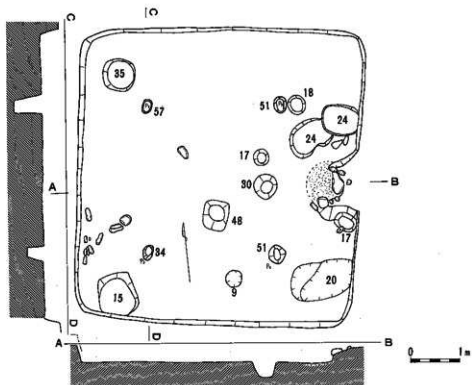


1. 11号住居址

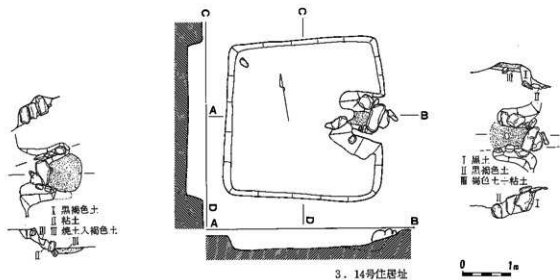


2. 12号住居址

第70图 中道遺跡11号12号住居址(1:80)

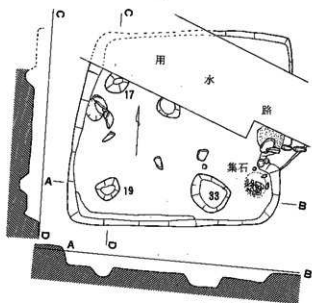


1. 13号住居址

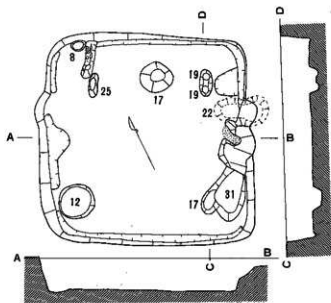
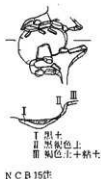


3. 14号住居址

第71图 中道遺跡1314号住居址 (1 : 80)



1. 15号住居址

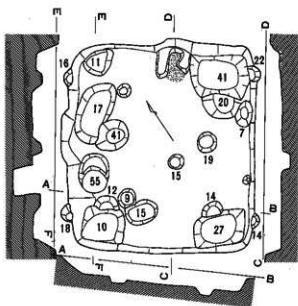


3. 17号住居址

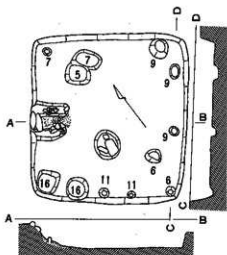


第72图 中道遺跡15・17号住居址(1:80)





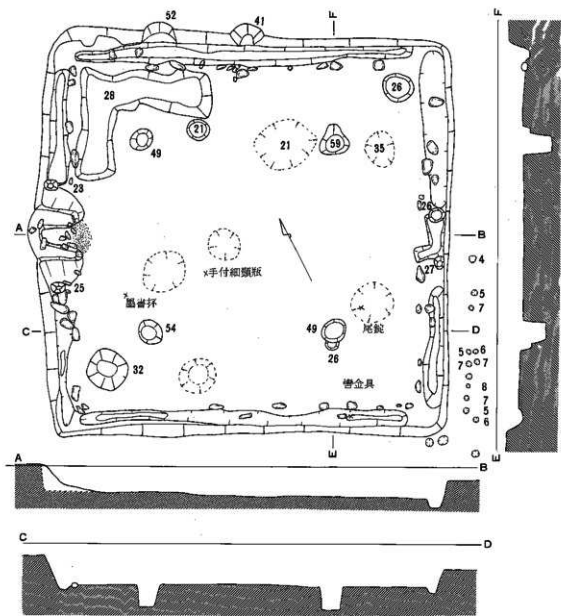
1. 18号住居址



2. 19号住居址



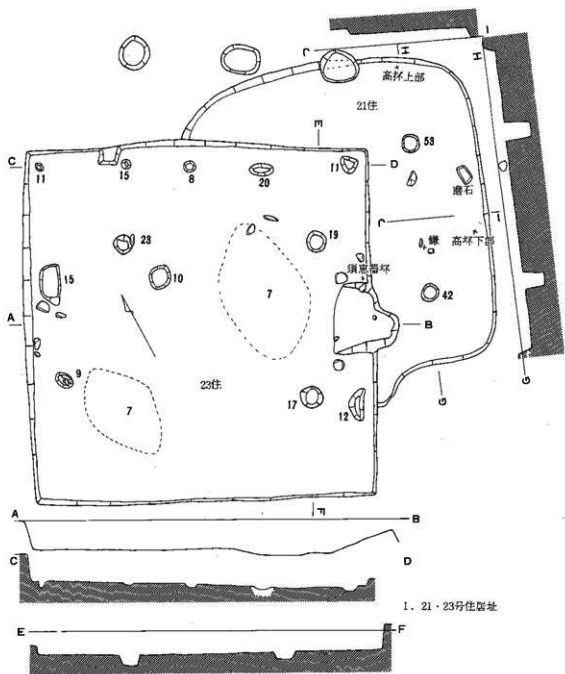
第73図 中道遺跡18・19号住居址(1:80)



1. 20号住居址

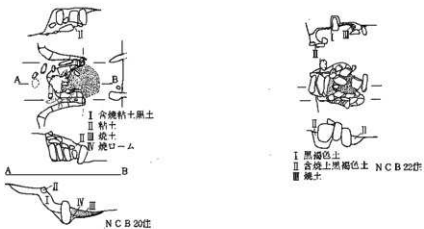
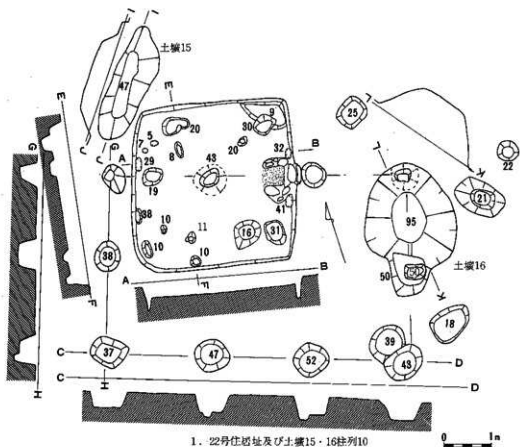
第74圖 中道遺跡20号住居址 (1 : 80)



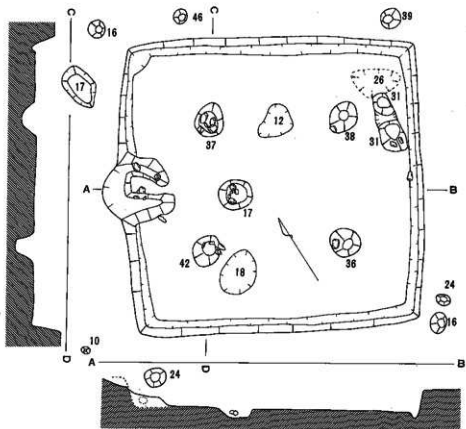


1. 21・23号住居址

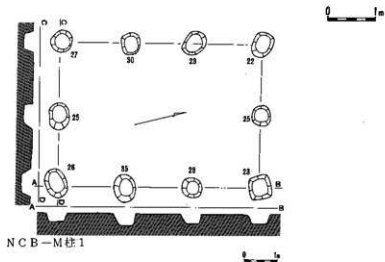
第75图 中道遺跡21・23号住居址(1:80)



第76図 中道遺跡22号住居址及び土壇15・16柱列10 (1:80)

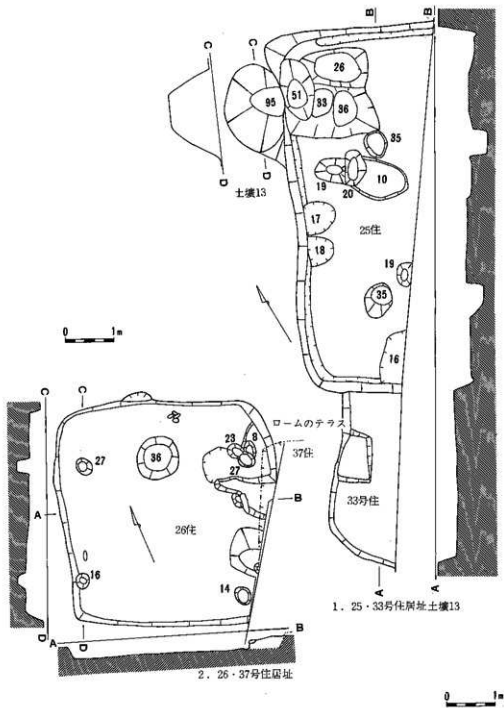


1. 24号住居址

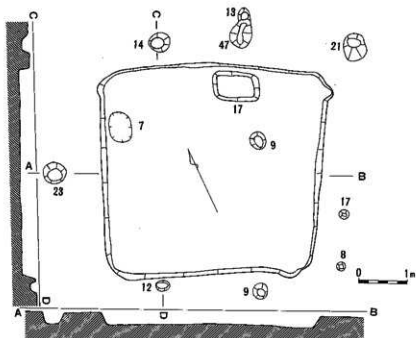


N C B—M柱1

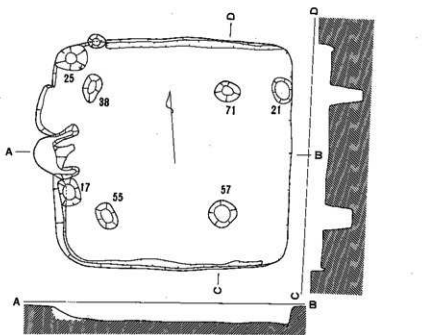
第77図 中道遺跡24号住居址及び柱列M1 (1 1:80, 2 1:120)



第78図 中道遺跡25・26・33・37号住居址及び土壌13 (1:80)

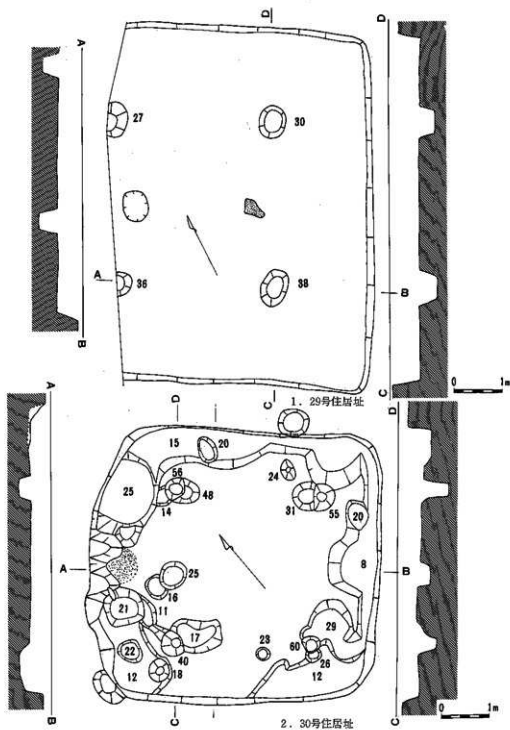


1. 27号住居址



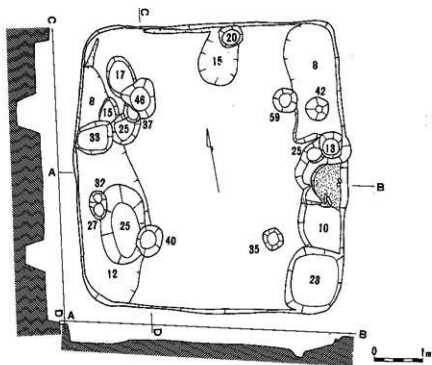
2. 28号住居址

第79图 中道遺跡27・28号住居址 (1:80)

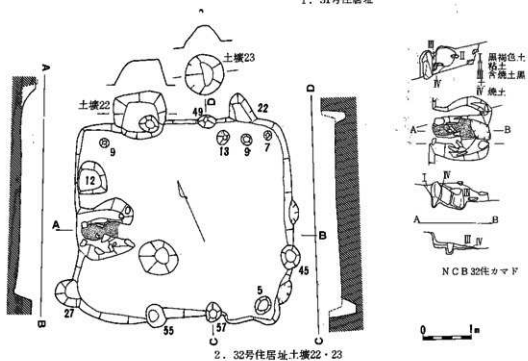


第80图 中道遺跡29・30号住居址 (1:80)



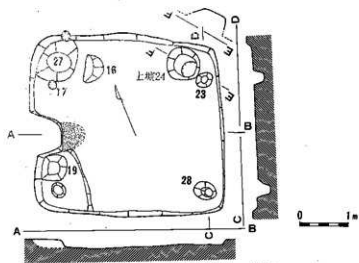


1. 31号住居址

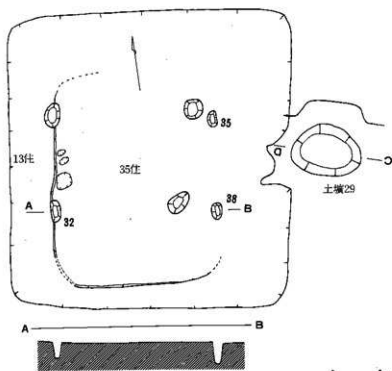


2. 32号住居址土壇22・23

第81図 中道遺跡31・32号住居址及び土壇22・23 (1 : 80)

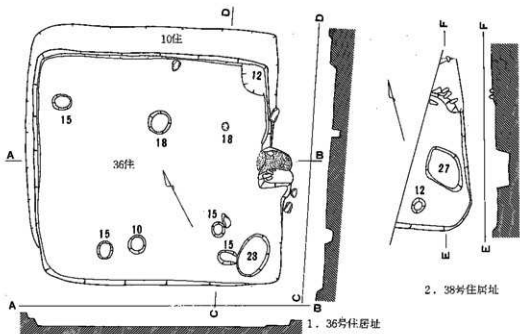


1. 34号住居址・土壇24



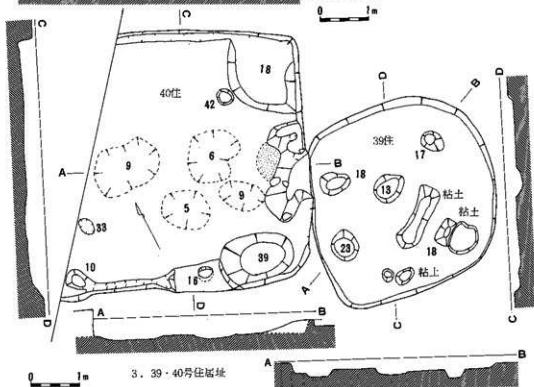
2. 35号住居址・土壇29

第82図 中道遺跡34・35号住居址及び土壇24・29 (1:80)



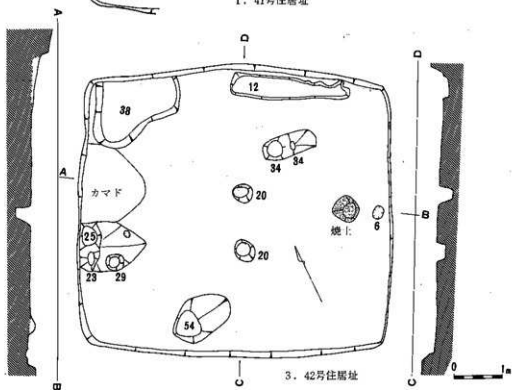
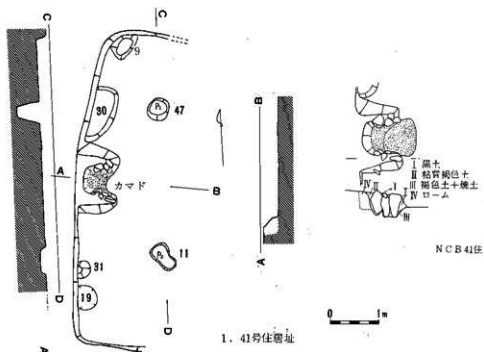
2. 38号住居址

1. 36号住居址

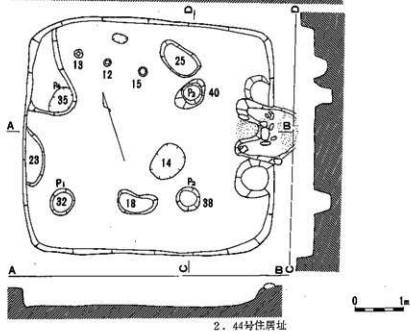
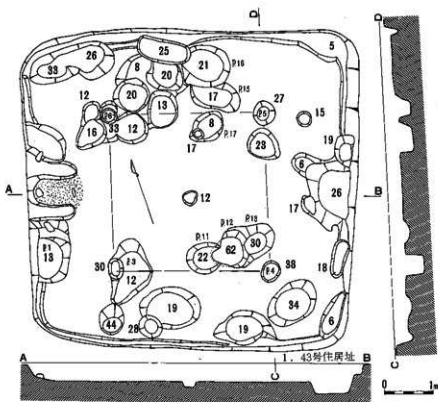


3. 39・40号住居址

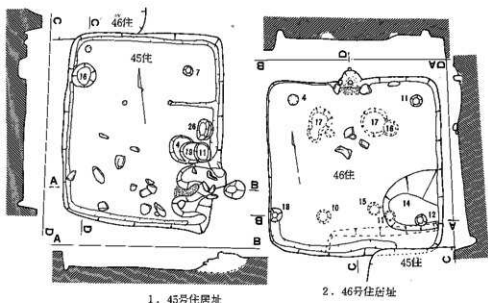
第83图 中道遺跡36・38・39・40号住居址 (1:80)



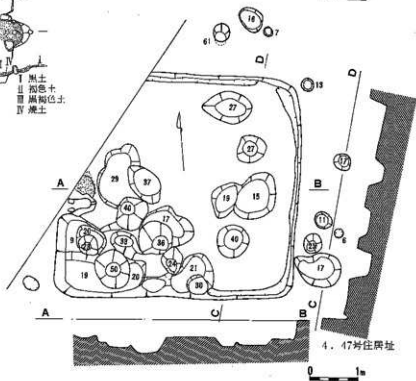
第84図 中道遺跡41・42号住居址(1:80)



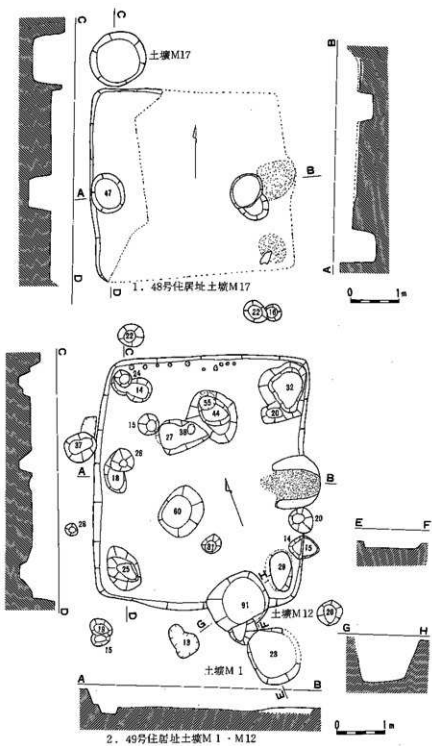
第85图 中道遺跡43・44号住居址 (1:80)



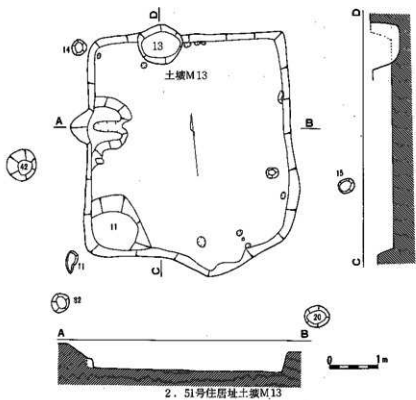
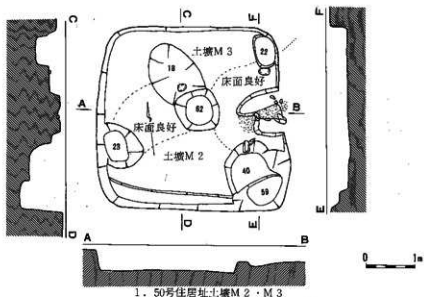
N C B 46住



第86图 中道遺跡45・46・47号住居址(1:80)

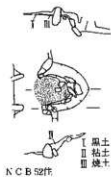
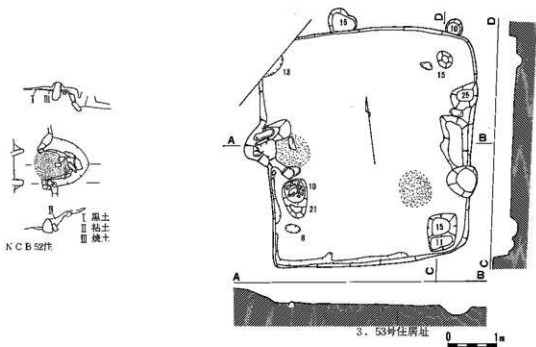
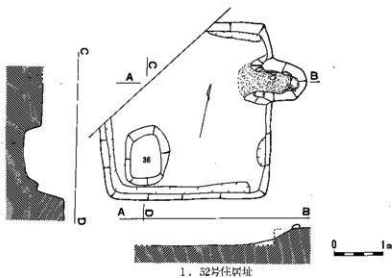


第87図 中道遺跡48・49号住居址及び土壇M1・M12・M17 (1:80)

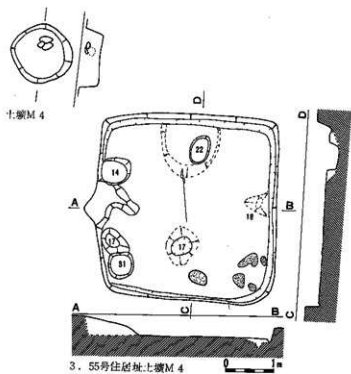
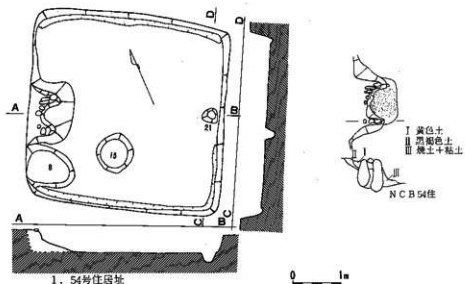


第88図 中道遺跡50・51号住居址及び土壇M2・M3・M13 (1:80)

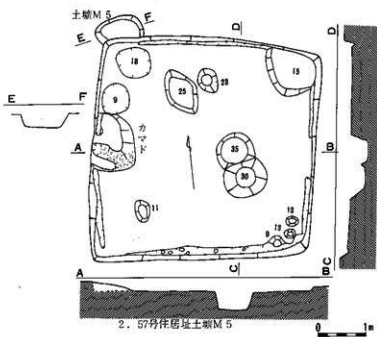
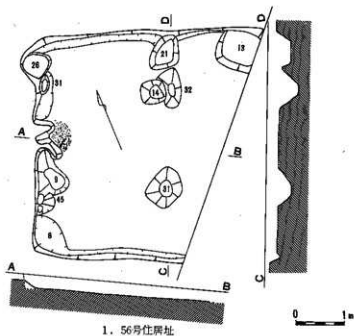




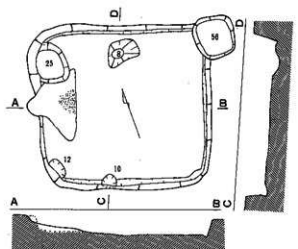
第89图 中道遺跡52・53号住居址(1:80)



第90图 中道遺跡54・55号住居址及び土坑M 4 (1 : 80)

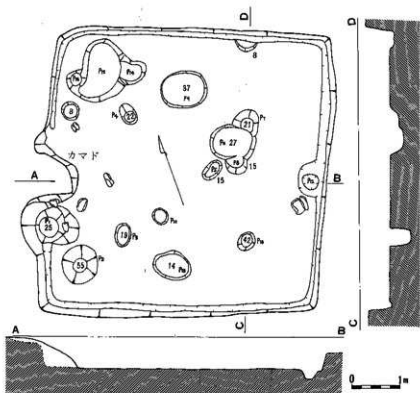


第91图 中道遺跡56・57号住居址及び土堀M5 (1:80)



1. 58号住居址

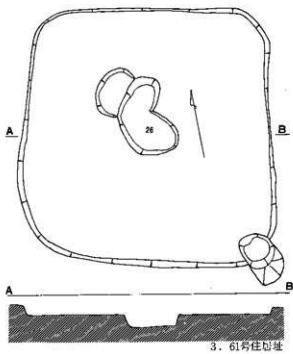
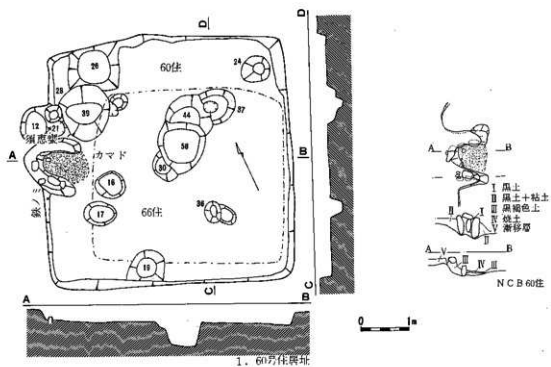
0 1m



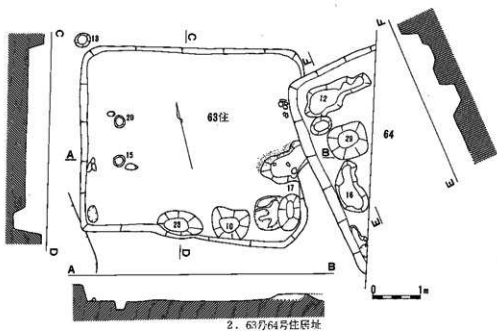
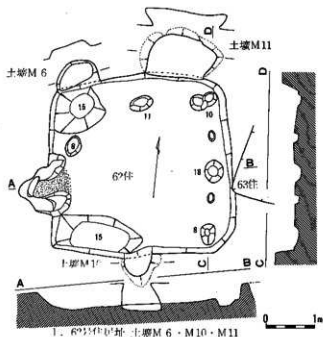
2. 59号住居址

0 1m

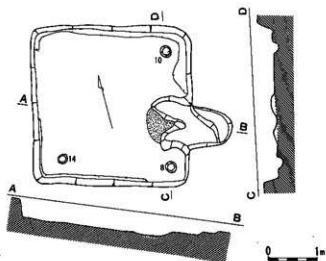
第92図 中道遺跡58・59号住居址(1:80)



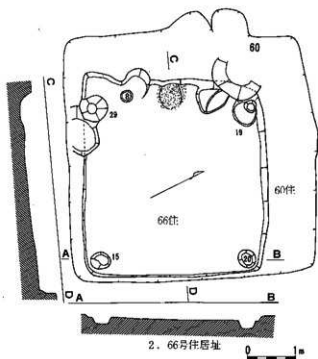
第93図 中道遺跡60・61号住居址(1:80)



第94図 中道遺跡62・63・64号住居址及び土塚M6・M10・M11(1:80)



1. 65号住居址

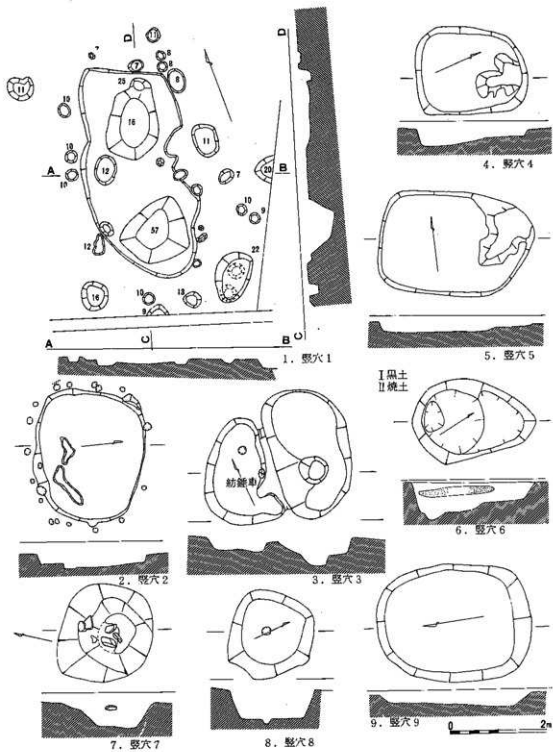


2. 66号住居址

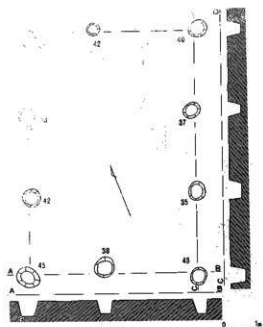
第95圖 中道遺跡65・66号住居址(1:80)



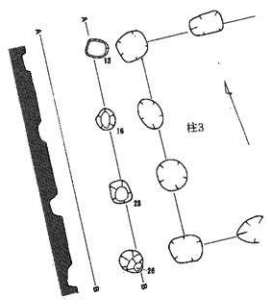




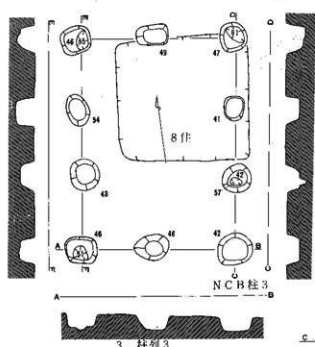
第97图 中道遺跡豎穴1~9 (1:80)



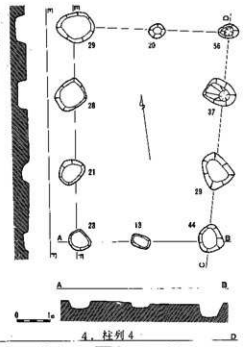
1. 柱列 1



2. 柱列 2

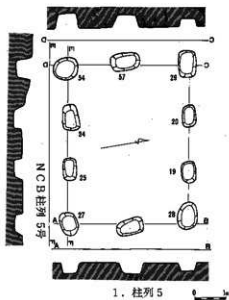


3. 柱列 3

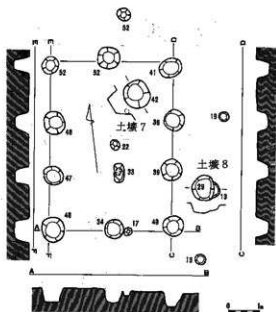


4. 柱列 4

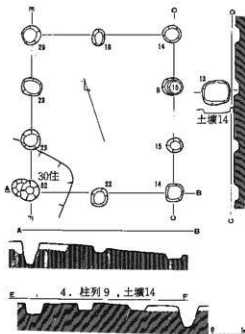
第98圖 中道遺跡柱列1~4 (1 : 120)



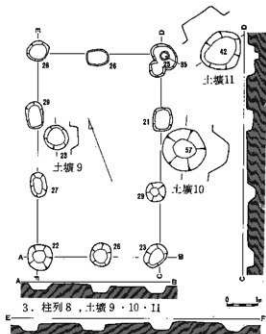
1. 柱列 5



2. 柱列 7, 土壤 7·8

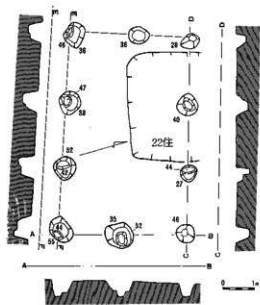


4. 柱列 9, 土壤 14

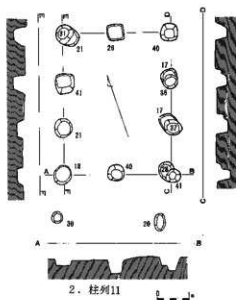


3. 柱列 8, 土壤 9·10·11

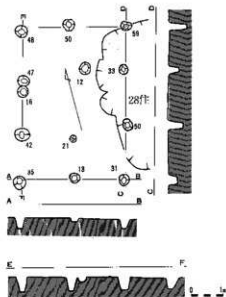
第99图 中道遗址柱列5·7·8·9·土壤7·8·9·10·14(1:120)



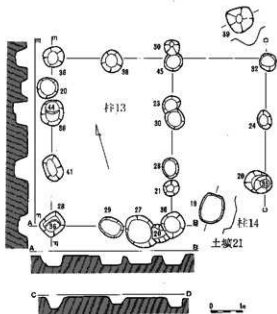
1. 柱列10



2. 柱列11

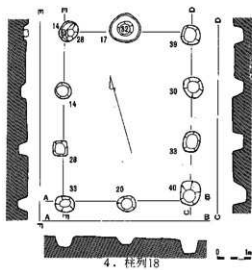
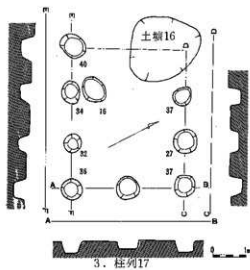
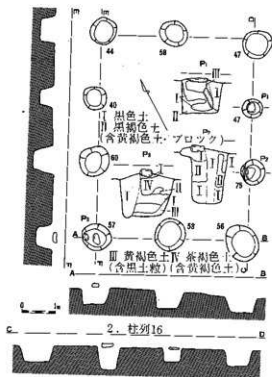
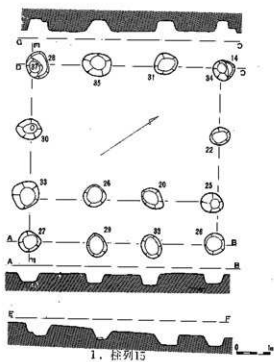


3. 柱列12

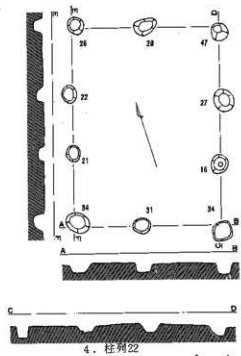
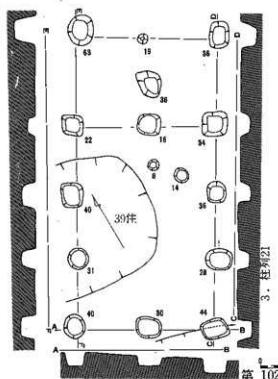
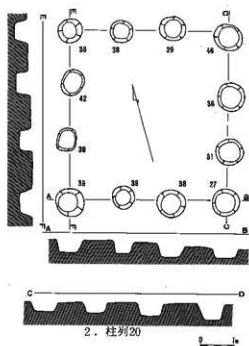
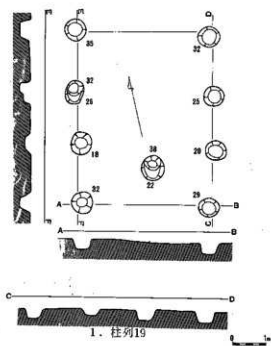


4. 柱列13·14土塚21·26

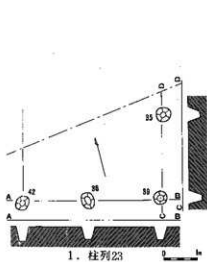
第 100 圖 中道遺跡柱列10·11·12·13·14土塚21·26 (1 : 120)



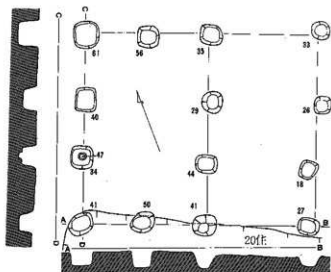
第 101 図 中道遺跡柱列15・16・17・18 (1:120但し柱列16)



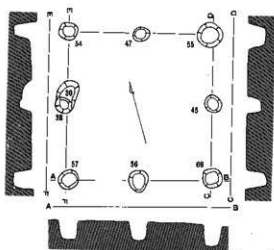
第 102 图 中道遺跡柱列19·20·21·22 (1:120)



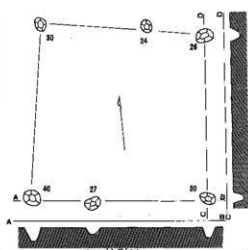
1. 柱列23



2. 柱列24

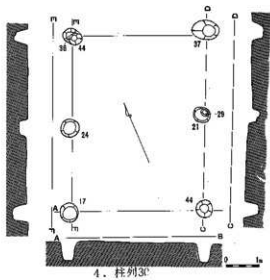
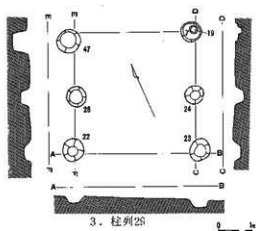
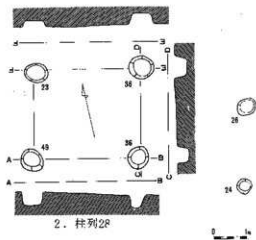
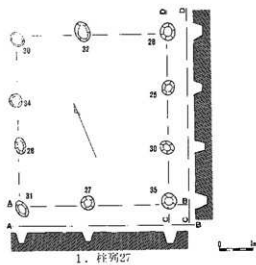


3. 柱列25



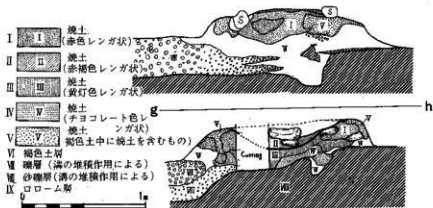
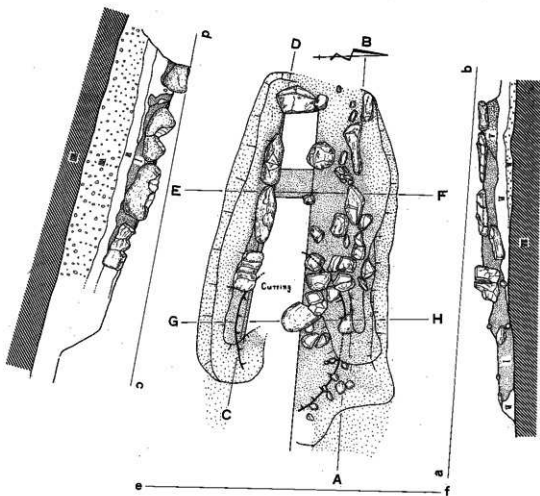
4. 柱列26

第 103图 中道遺跡柱列23·24·25·26

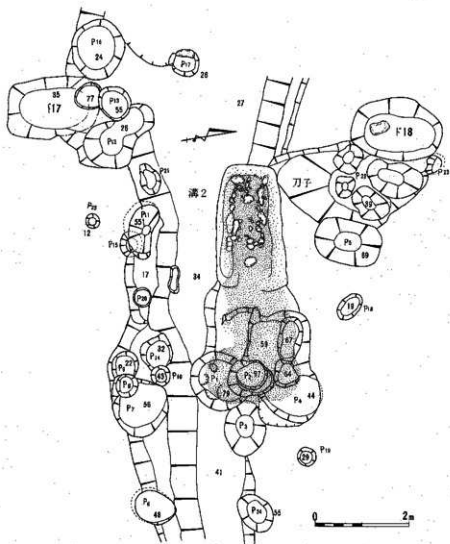


第 104 图 中道遺跡柱列27・28・29・30 (1 : 120)

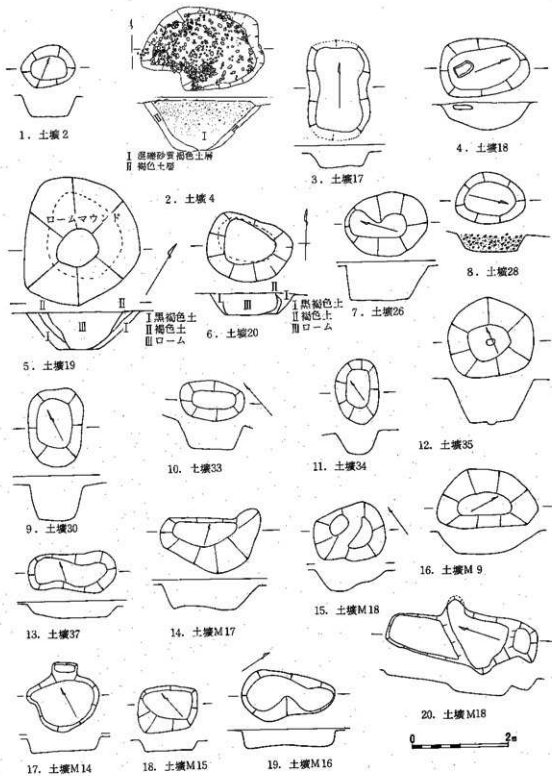




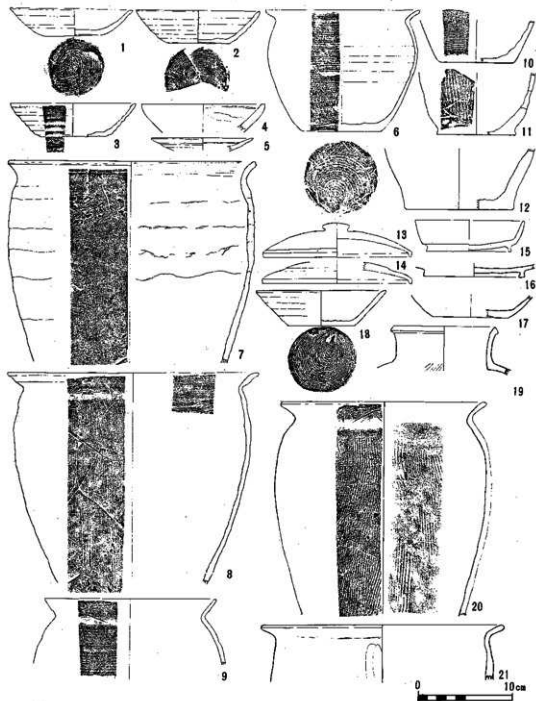
第 105 図 中道遺跡特殊遺構 (1 : 30)



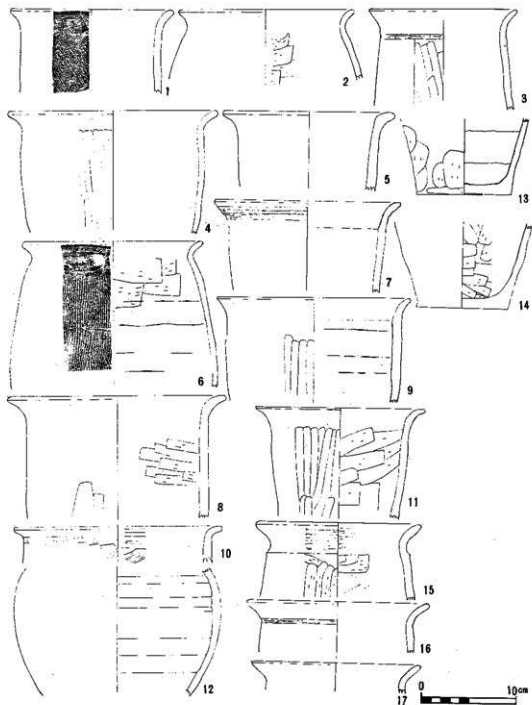
第 106 図 中道遺跡特殊遺構及び溝状遺構 2 (1 : 80)



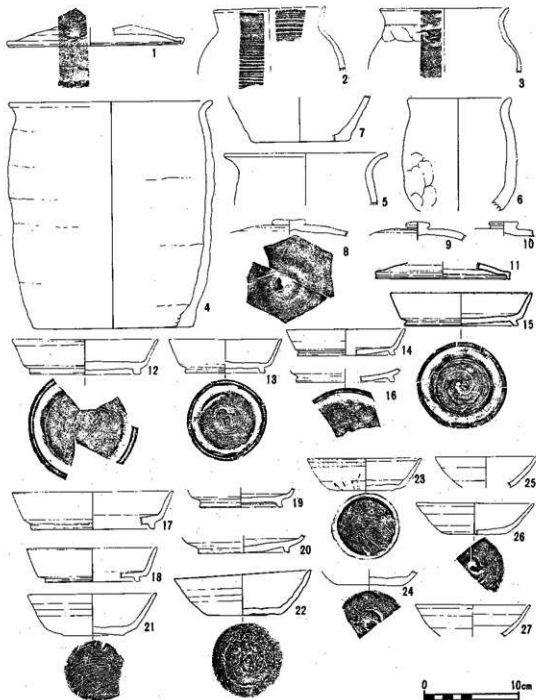
第 107 図 中道遺跡土壌 (1 : 80)



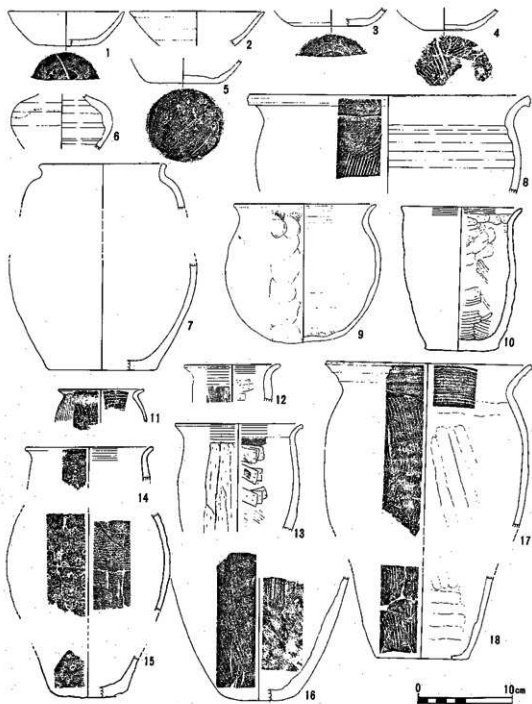
第 108 図 中道邊跡 1 号・2 号住居址出土土器 (1:4) 1 件 1・2・6 枚 4~5 カマド 3・7~12 覆土  
 S (1~3) H (4~12) 2 件 13~17・20 枚 21 カマド 18・19 覆土 S (13~16・18・19) H (17・20・21)



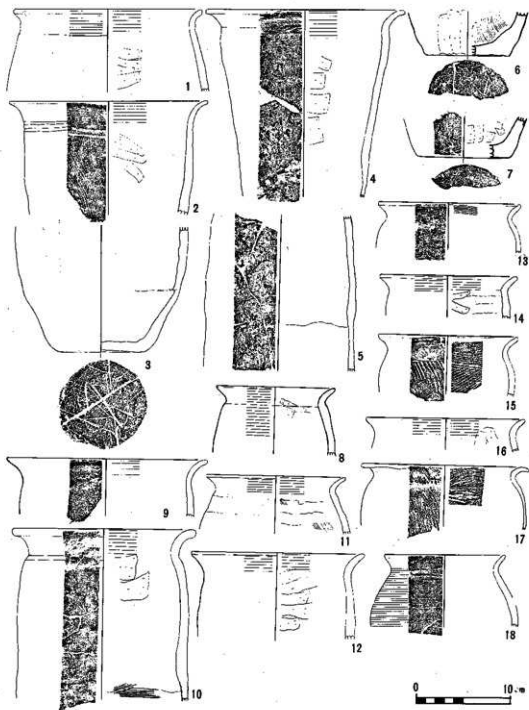
第 109 图 中道遺跡 2 号住居址出土土器 (1:4) 1~3·6·7·9~13·17 唐, 4·5·8·14 摄土 S (12) H (1~11·13~17)



第 110 図 中道遺跡 3 号・4 号・5 号住居址出土土器 (1 : 4) 3 住 1~4 床 S (1H (2~4)  
4 住 5~7 床 H (5~7) 5 住 8~27 床 S (8~27) 19 軒用碗

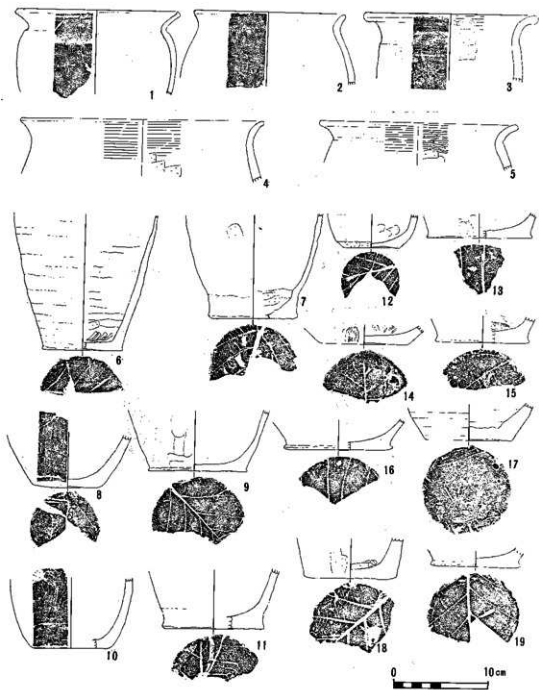


第 111 図 中道遺跡 5 号住居址出土土器 (1 : 4) 6・8・12 カマド 残りは灰面 S (1・3・5-8)  
H (2・4・9-15)

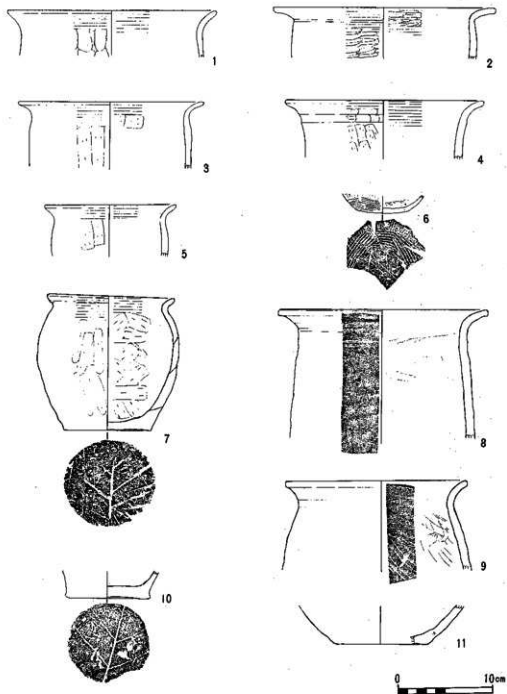


第 112 図 中道遺跡 5 号住居址出土土器 (1 : 4) 1 カマド, 2~8 床, 9~18 土器 (1~18)

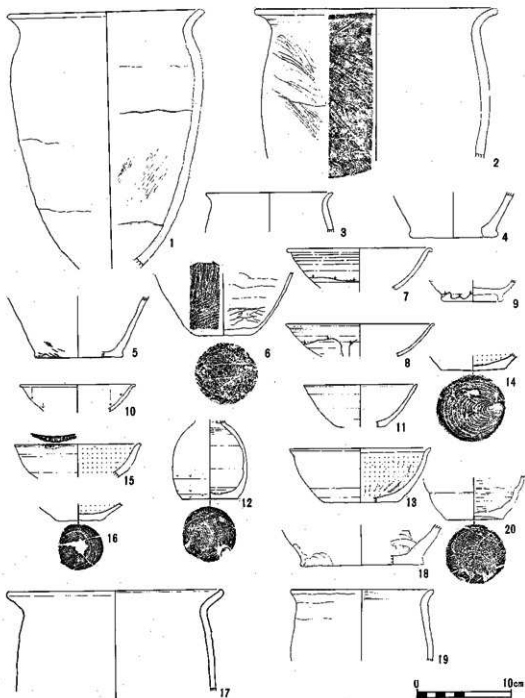




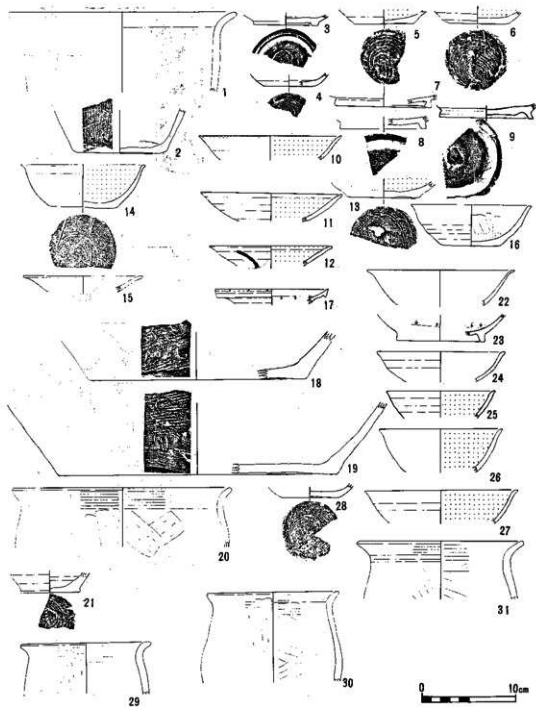
第 113 图 中道迹跡 5 号住居址出土土器 (1 : 4)  
1~19 覆土 II (1~19)



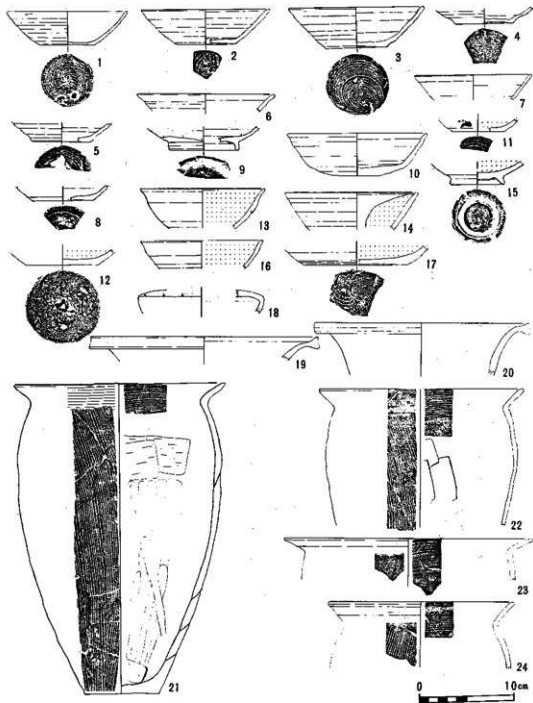
第 114 図 中道遺跡 6 号・7 号住居址出土土器 (1 : 4) 6 住 1~5 床 6 覆土, H (1~6) 7 住 7・9 床, 8 カマド, 10~11 覆土 H (7~11)



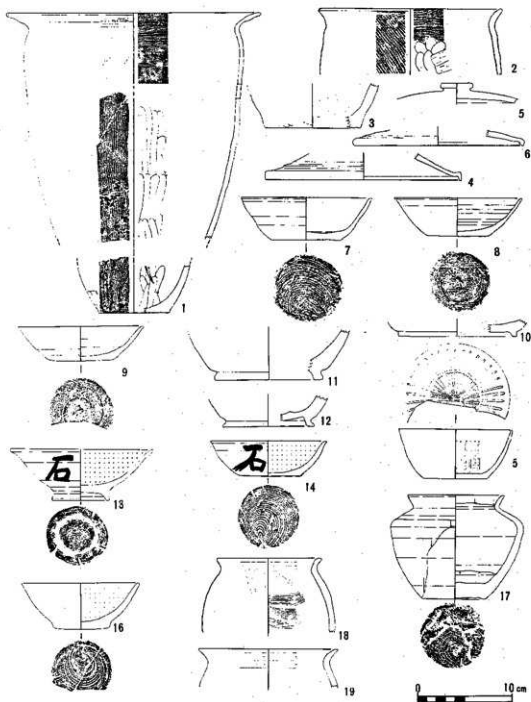
第 115 図 中道遺跡 8 号・9 号住居址出土土器 (1 : 4)  
 8 住 1-2 床 3-6 覆土 H (1-6) 9 住 7-9 13・14 床  
 17・18 カマド 10-12・15・16・19・20 覆土 S (11) K (7-10・12)  
 H (13-20)



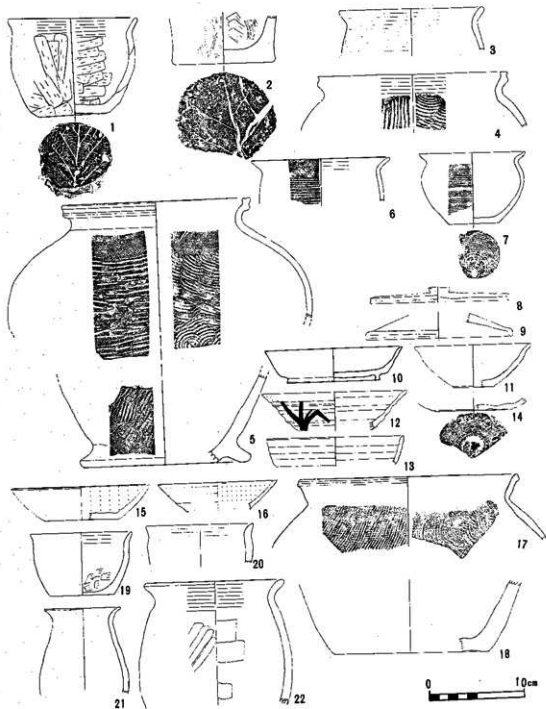
第 116 图 中道造跡 9 号・10 号・11 号住居址出土土器 (1 : 4) 9 住 1・2 覆土 H (1・2) 10 住  
 3・7・10・11・14・18~21 床 8・9・12・13・15~17 覆土 S (3・4・7~9・17~19) H (5・6・10~16  
 ・20・21) 11 住 22・25・26・28・30 床 23・24・27・29・31 覆土 S (24) K (22・23) H (25~31)



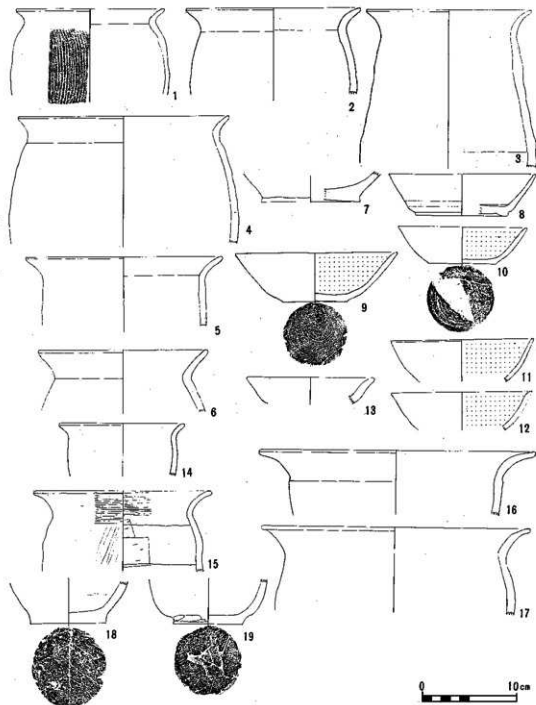
第 117 图 中道遺跡 12 号住居址出土土器 (1 : 4)  
 1~5 · 10~15 · 18 · 21~24 类 · 6~9 · 16 · 17 · 19 · 20 類土  
 S (1~8 · 18~20) K (9H (10~17 · 21~24)



第 118 図 中道遺跡 12 号・13 号住居址出土土器 (1 : 4)  
 12 件 1・2 床 3 覆土 H (1~3) 13 住 7・8・10・13~15・17 床  
 4・9 カマド 5・6 6・11・12・16 覆土 S (4~12・17) H (13~16・18・19)

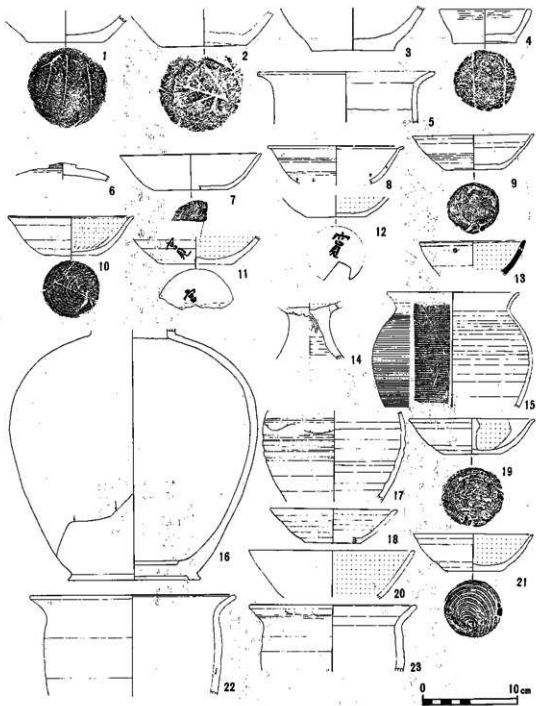


第 119 図 中道遺跡 13 号・14 号・15 号住居址出土土器 (1 : 4)  
 13 住 1・3 カマド, 2・4 床面 S (4) H (1~3) 14 住 5~7 覆土 S (5)  
 H (6・7) 15 住 10~16 床, 17・18 22 カマド 8・9・19~21 覆土 S (8  
 ~14・17・18) H (15・16・19~22)

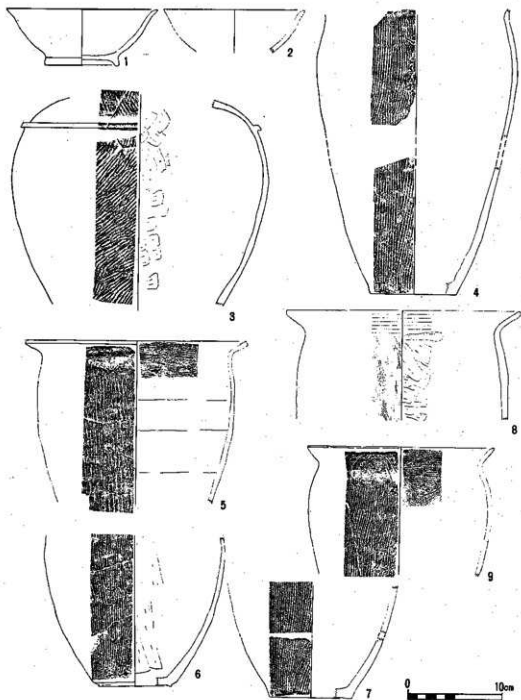


第 120 図 中道遺跡 15 号・17 号住居址出土土器 (1 : 4)  
 15 住 1・3・4 カマド 2 床 5~7 覆土 H (1~7) 17 住 14~19 床  
 9~12 カマド 8・13 覆土 S (8) H (9~19)

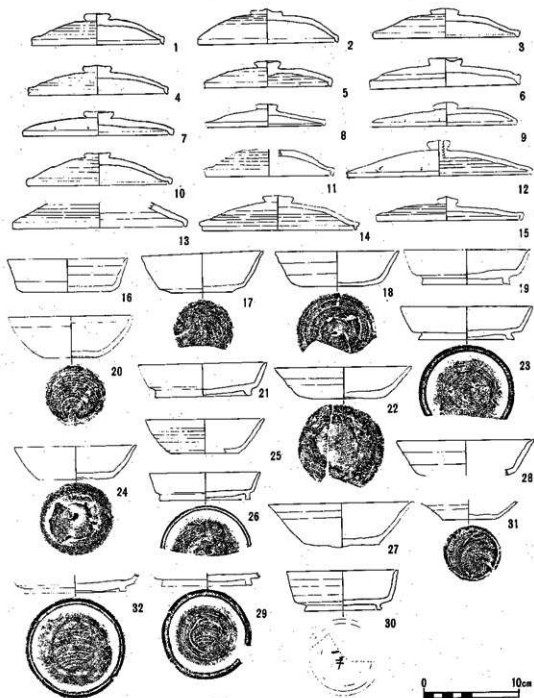




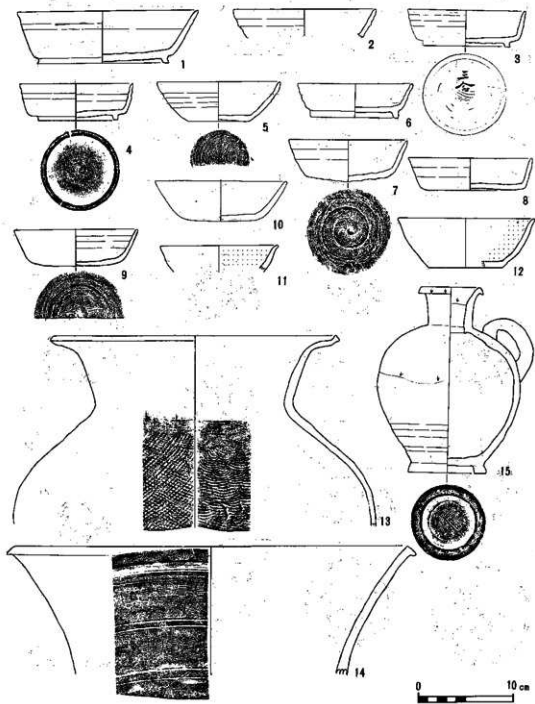
第 121 図 中道遺跡 15 号・17 号・18 号・19 号住居址出土土器 (1 : 4)  
 15 住 2 覆土 H (2) 17 住 1・3・4 床 5 覆土 H (1・3~5) 18 住 6~10・14・15 床  
 , 11~13・16・17 覆土 S (6・7・9・16・17) K (8) H (10~15) 19 住 18・19~22 床,  
 23 カマ F, 20・21 覆土, S (18) H (19~23)



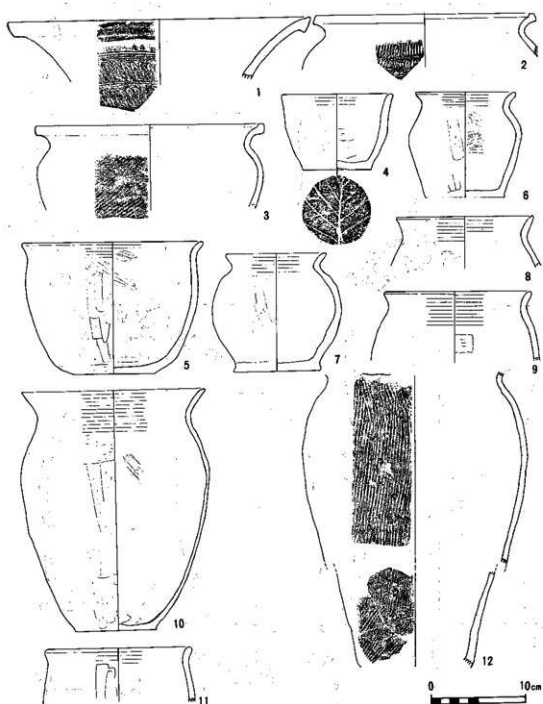
第 122 図 中道遺跡 19 号住居址出土土器 (1 : 4)  
 1~7 床 8・9 覆土 S(3)H (1・2・4・~9)



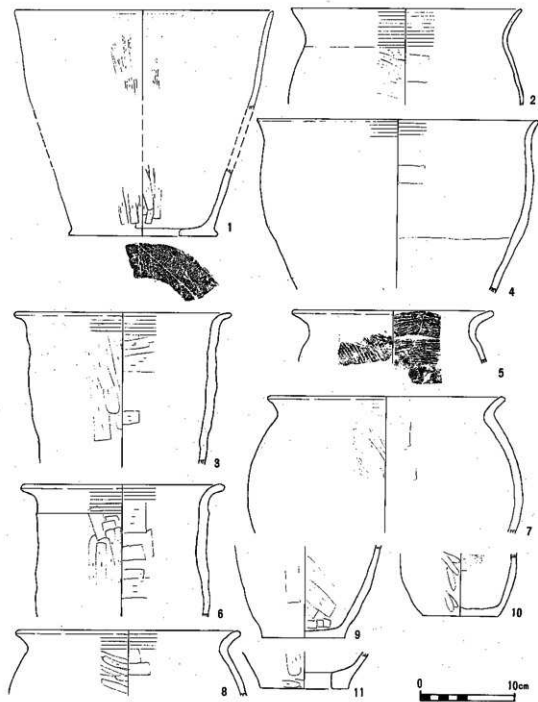
第 123 図 中道遺跡 20 号住居址出土土器 (1 : 4)  
 1~7・9・10・12~18・20~30 鉢面 8 カマド 11・19・31・32 覆土 S (全部)



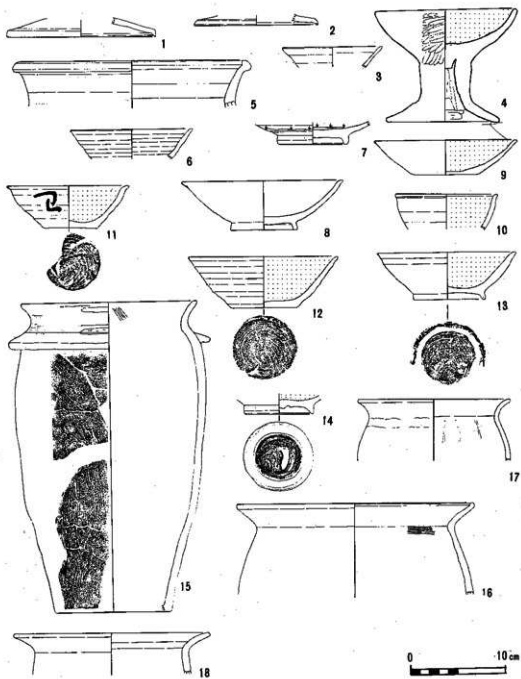
第 124 图 中道遺跡 20 号住居址出土土器 (1:4) 1~7·10~14 床, 8·9·15 覆土  
 , S (1~9·13~15) , H (10~12)



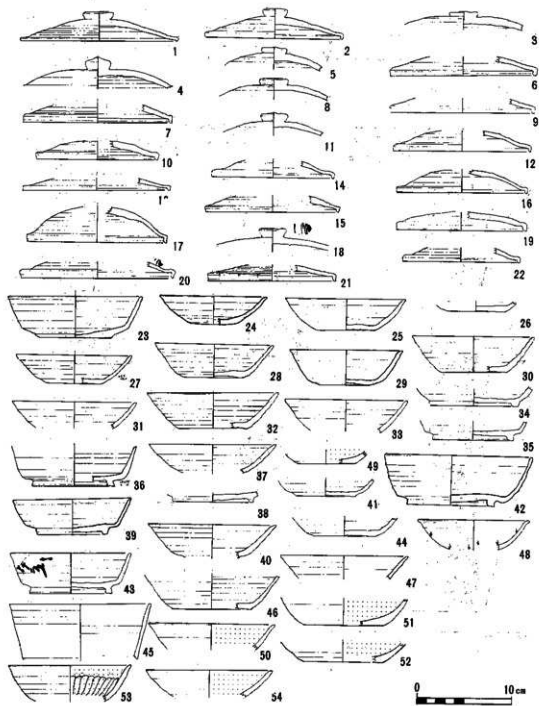
第 125 図 中道邊跡20軒住居址出土土器 (1 : 4)  
 1-6・9-11床, 12カマド, 7・8覆土 (1-3) H (4-12)



第 126 図 中道遺跡 20 号住居址出土土器 (1 : 4)  
 1 ~ 5 · 9 ~ 11 床, 6 ~ 8 カマド, II (全部)

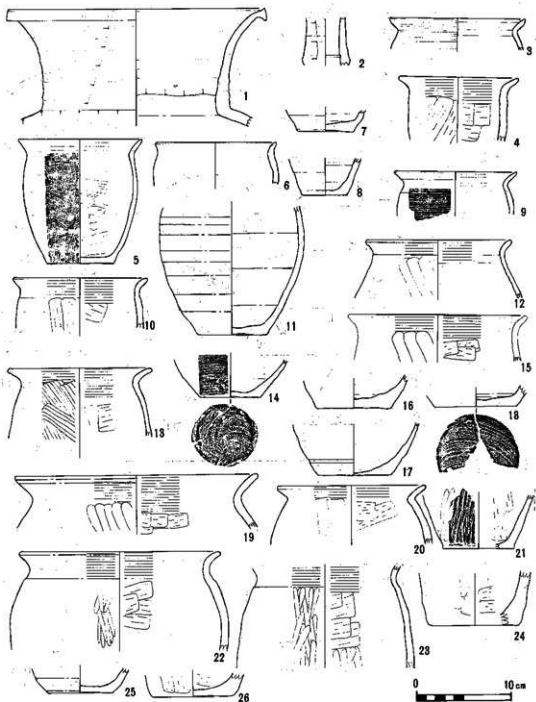


第 127 図 中道遺跡 21 号・22 号住居址出土土器 (1 : 4)  
 21 住 1~5 覆土 S (1~3・5 (H(4) 22 住 7・12・15・16 床 13 カマ F  
 6・8~11・14・17・18 覆土 S(6) K (7・8) H (9~18)

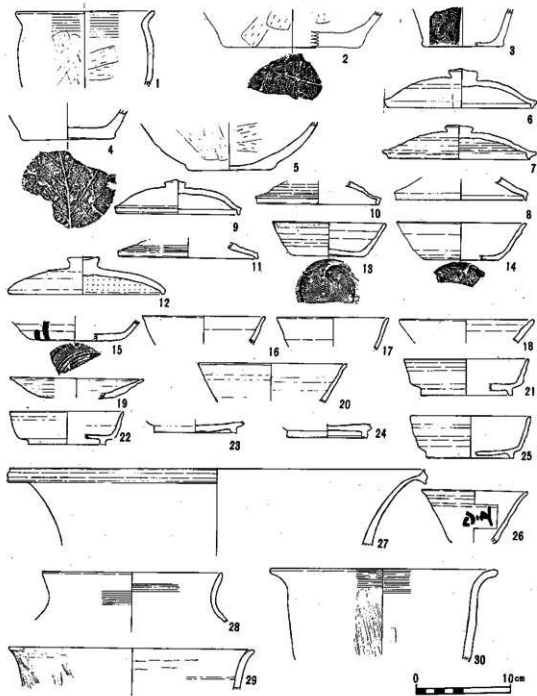


第 128 図 中道遺跡 23 号住居址出土土器 1~15・23・25~31・33~38・44・48 床 16・39 カマド  
 17~22・24・32・40~43・45・47・49~54 覆土 S (1~47) K (48) !! (49~54)

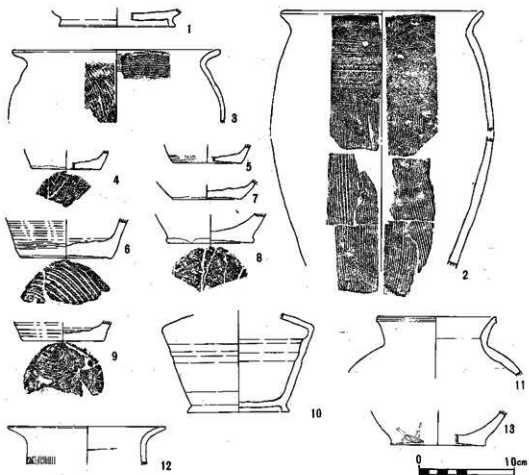




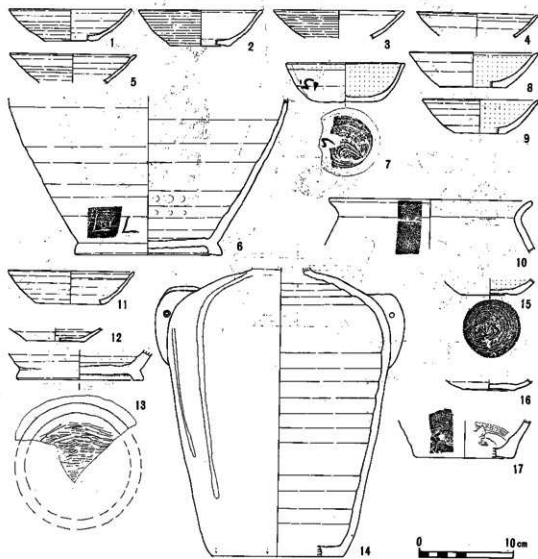
第129図 中道遺跡23号住居址出土土器 (1:4) 1~3・8・9・12・14・17・18, 4~7  
 ・10・11・13・15・16・カマド, 18~26燻土, S (1・2) II (13~26)



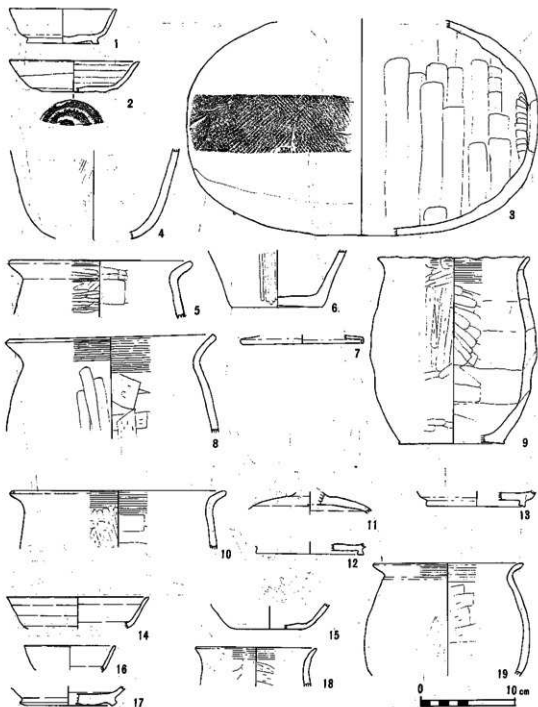
第 130 图 中道遺跡 23 号・24 号住居址出土土器 (1 : 4) 23 住 4 床 1~3・5 覆土 H (1~5)  
 24 住 6~8・17・24・26・28・30 床 9~16・18~25・27・29 覆土 S (6~11・13~16・18・20~25・27)  
 H (12・17・19・26・28~30)



第 131 図 中道遺跡24号住居址出土土器 (1 : 4) 2・6・7カマド, 1・3・8・9・11・12甕土  
4・5・10・13F S (1・10・11) H (2・9・12・13)

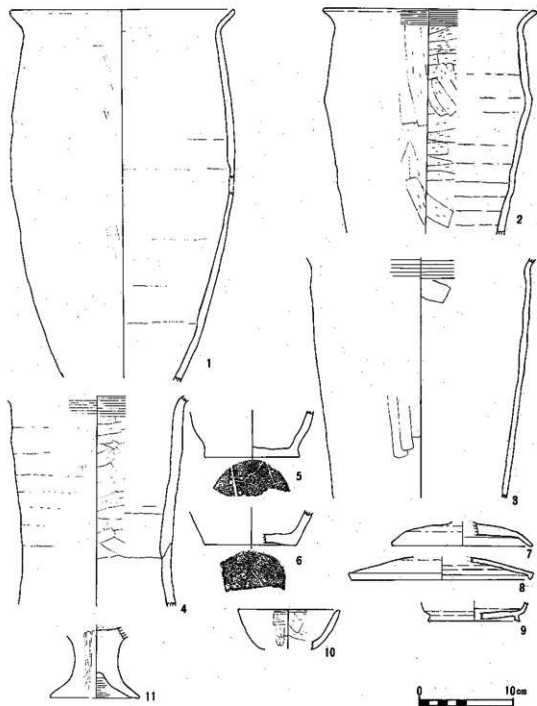


第132图 中道遺跡25号伴居址出土土器 (1:4) 1~10、11~17 類土 S (1~6·11~14) 類土  
H (7~10·15~17) 13 板用破

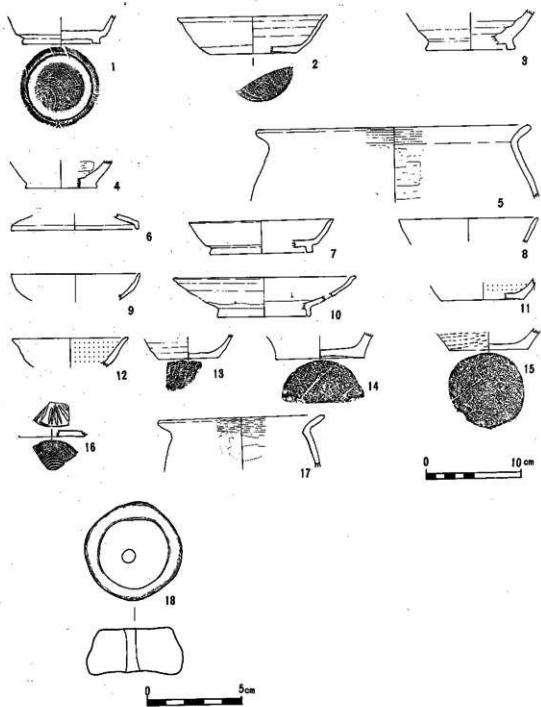


第 133 图 中道遗址 26 号・27 号・28 号住居址出土土器 (1:4)

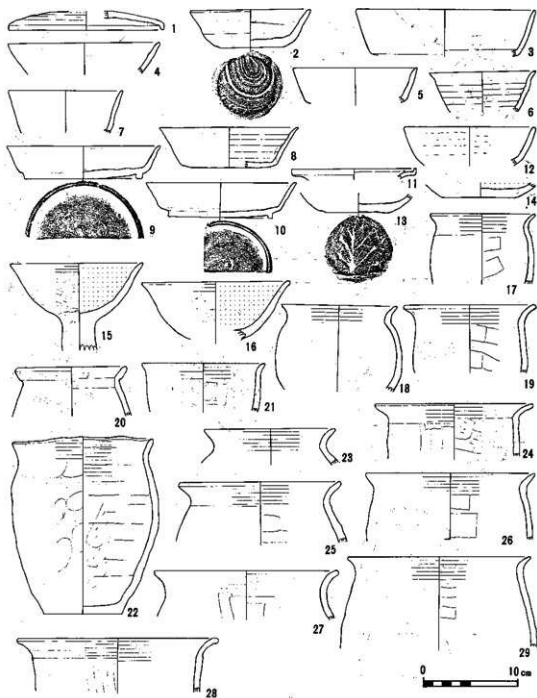
26 住 1~6 床, 7~9 覆土 S (1~3・7) H (4~6・8・9) 27 住 10・ユ  
 11~13 覆土 S (11~13) H (10) 28 住 14~19 床 S (14~17) H (18~19)



第 134 図 中道遺跡 28 号住居址出土土器 (1 : 4) 1~6 床, 7~11 覆土 S (7~9)  
H (1~6 · 10 · 11)

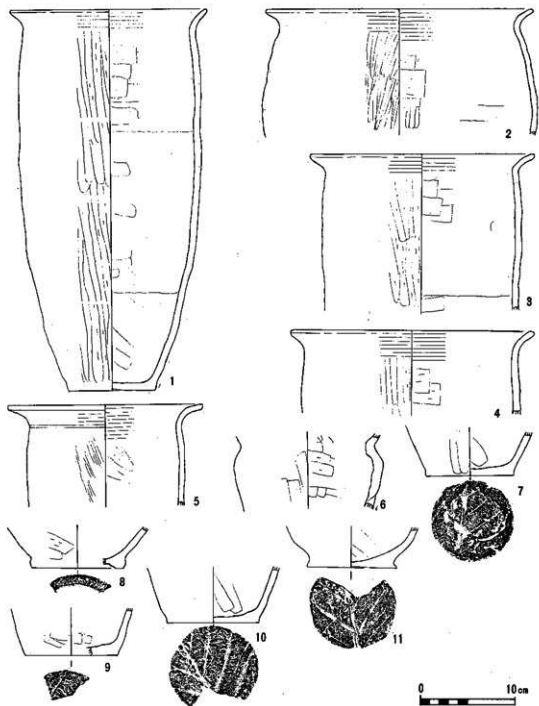


第 135 図 中道遺跡 29 号・43 号住居址出土土器 (1 : 4 但し 18 1 : 2) 1-5 床, 6-17 掘土  
 S (1-2・6-9) K (3-10) H (4・5・11-17) 18・43 住

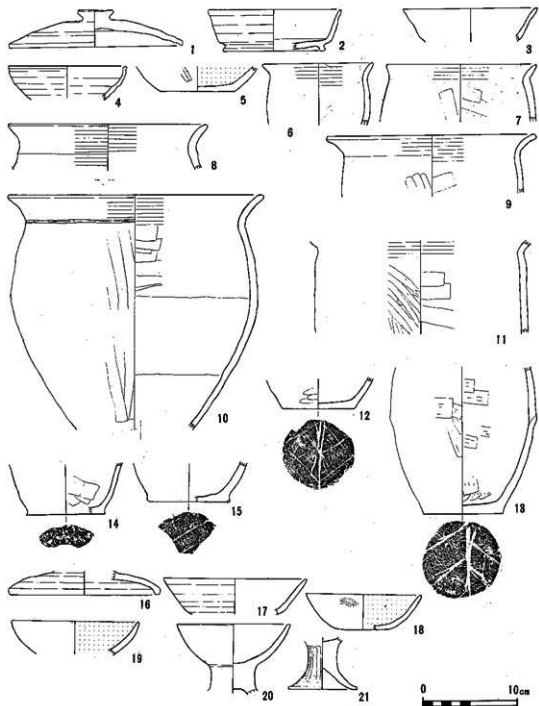


第 136 图 中道遺跡 30 号住居址出土土器 (1:4) 1~29 珠, S (1~11) H (12~29)

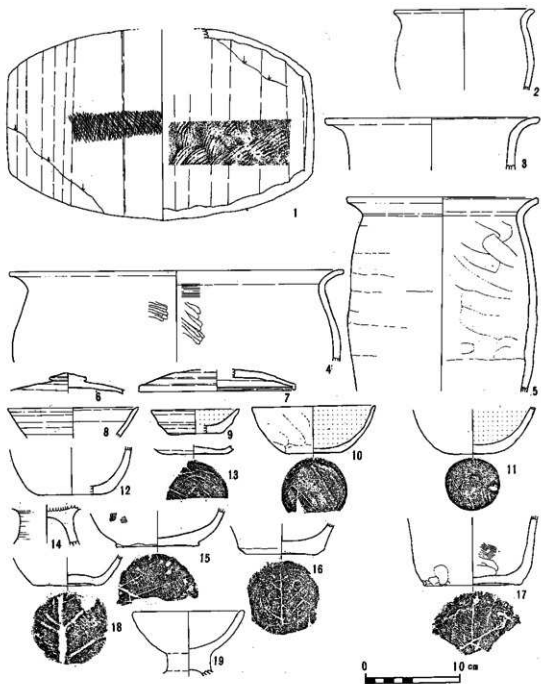




第 137 图 中道遺跡30号住居址出土土器 (1 : 4) 1~1 床 H (1~11)

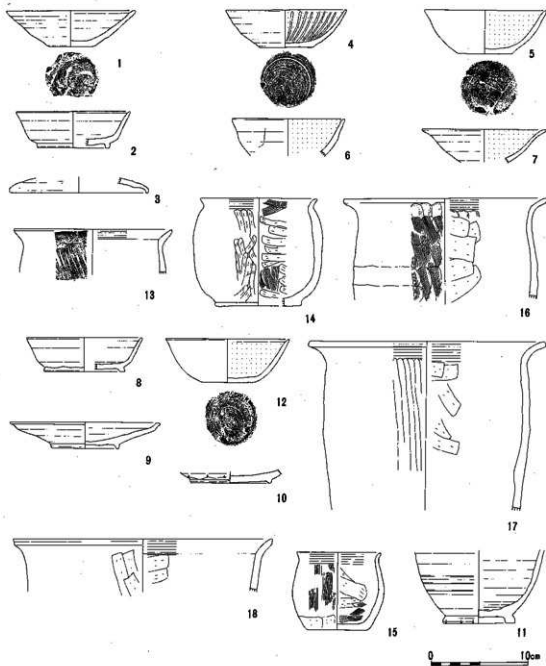


第 138 圖 中道遺跡 30 号・31 号住居址出土土器 (1 : 4) 20 住 1~15 類土, S (1~4)  
H (5~15) 31 住 16~21 床 S (16~17) H (18~21)

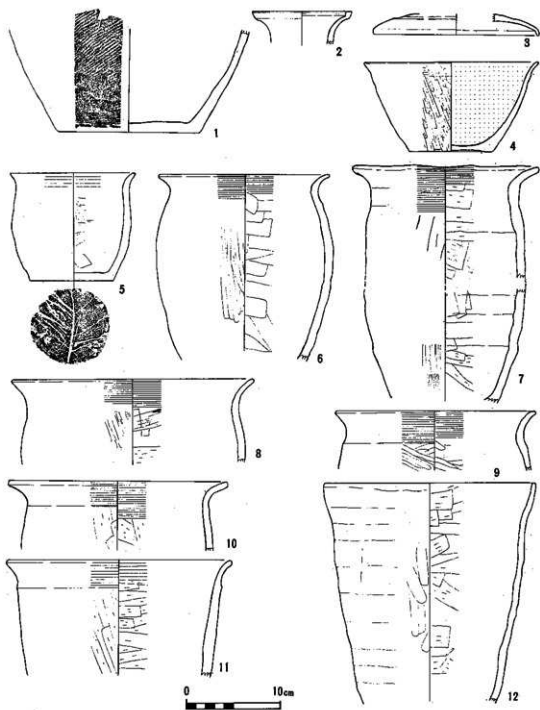


第 139 図 中道遺跡31号住居址出土土器 (1 : 4)

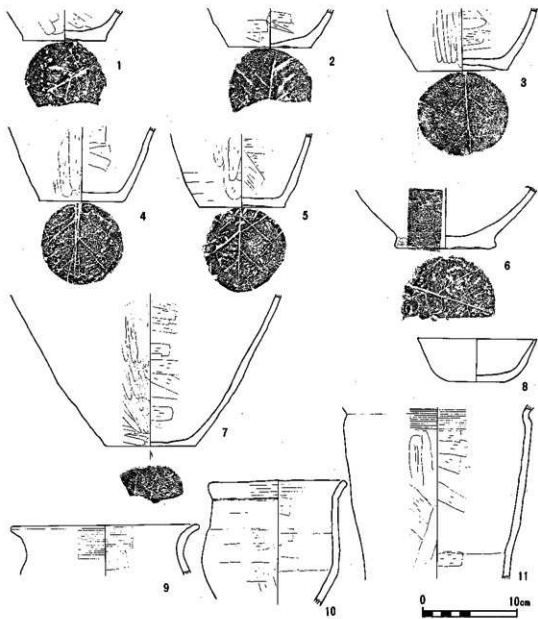
1~5 床, 6~19 覆土, S (1·6~8·13), II (2~5·9~12·14~19)



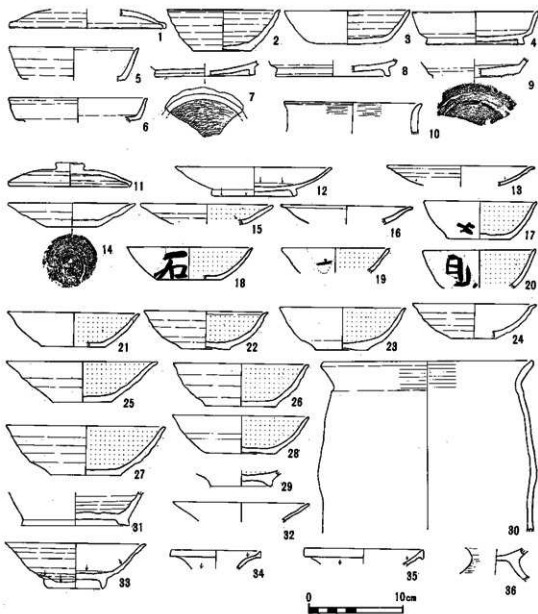
第 140 図 中道遺跡 32 号住居址出土土器 (1 : 4) 1~7 床, 8~18 覆土  
 , S (1~3 · 8 · 11), K (9 · 10), H (4~7 · 12~18)



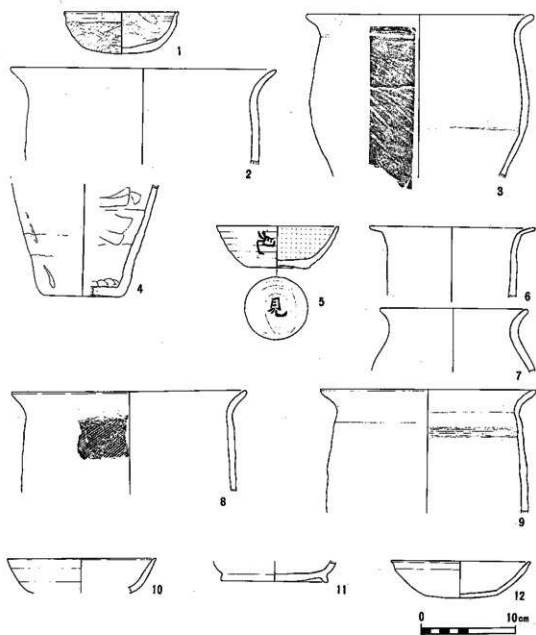
第 141 図 中道遺跡33・34号住居址出土土器 (1 : 4)  
 33住 1~2 覆土, S(1), K(2) 34住住 3~12床, S(3), H (4~12)



第 142 圖 中道遺跡 34 号住居址出土土器 (1 : 4) 1~7 床, 8~11 覆土, S(8), H (1~7・9~11)



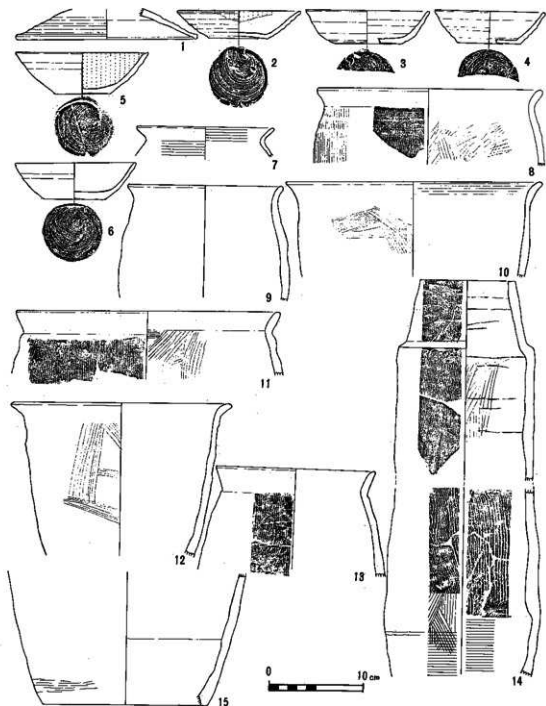
第 143 图 中道遺跡 35・36 号住居址出土土器 (1 : 4) 35 住 1~10 覆土, S  
 (1~9), H (10), 7...転用碗 36 住 11~30 床, 31~36 覆土, S (11・31・32)  
 , K (12・13・33・34・35), H (14~30・36)



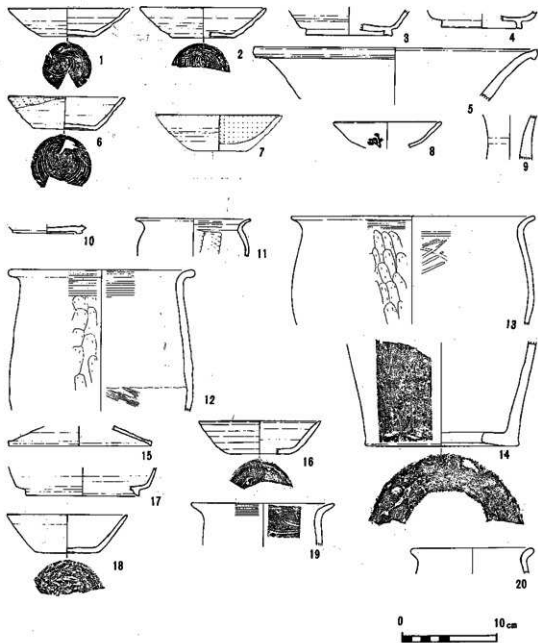
第 144 図 中道遺跡 37・38・39 号住居址出土土器 (1 : 4)

37 住 1・2 床, 3・4 覆土, H (1~4) 38 住 5~8 床, 9 覆土, H (5~9) 39 住 10~12 覆土, S (10~12)

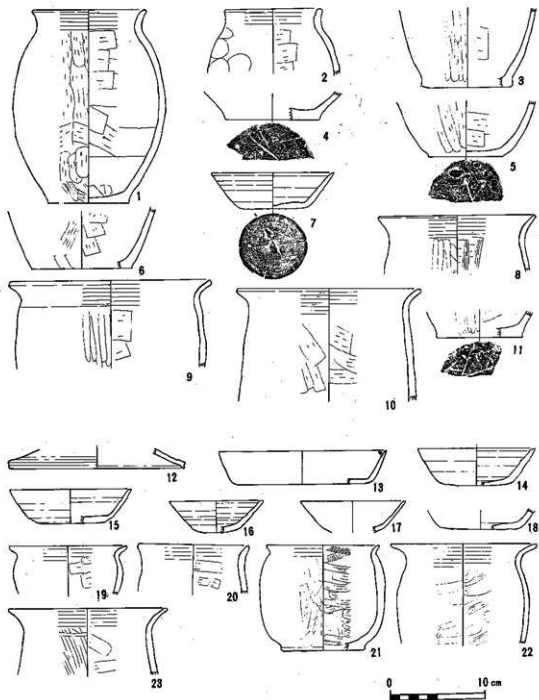




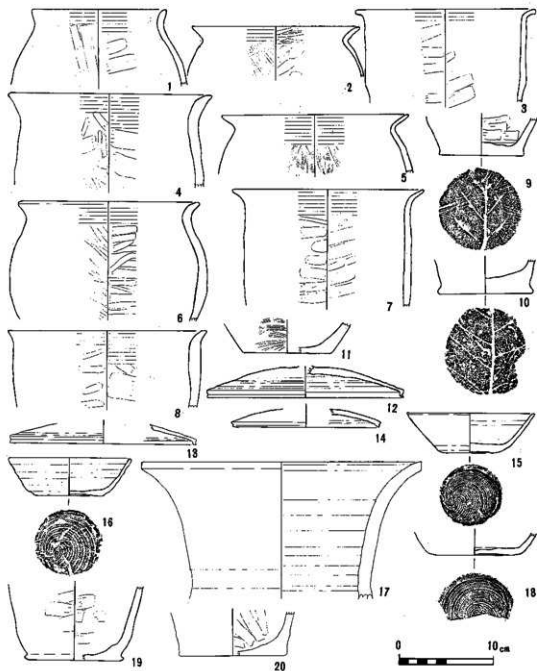
第 145 図 中道通跡40号住居址出土土器 (1 : 4) 1~15 床, S (1~4), H (5~15)



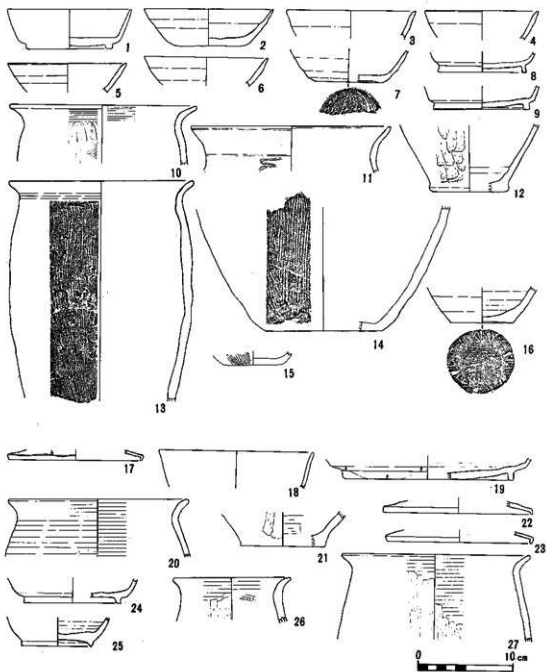
第 146 图 中道遺跡 40 号 41 号 住居址出土土器 (1:4) 40 住 1-9 瓦土, S (1-6·9), H (7·8)  
 41 住 10-14 床, 15-20 瓦土, S (10·15-18), H (11-14·19·20)



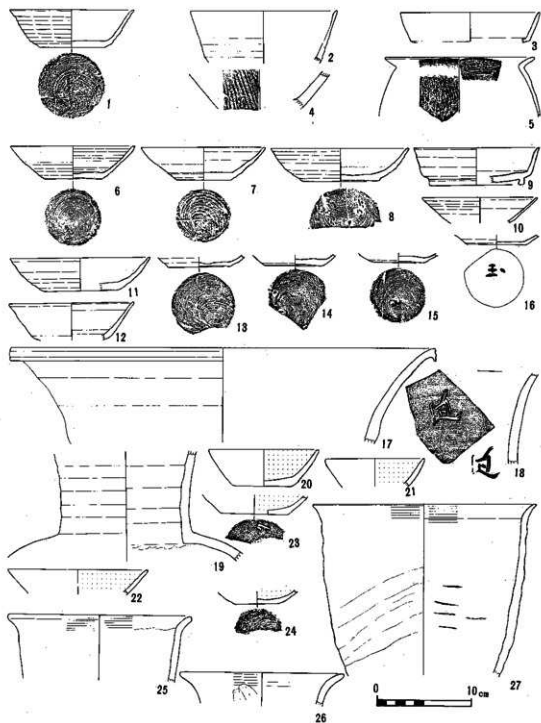
第 147 図 中道遺跡 42・43 号住居址出土土器 (1 : 4) 42 住 1~6 床,  
7~11 覆土, S (7), H (1~6・8~11) 43 住 12~23 床, S (12~18), H (19~23)



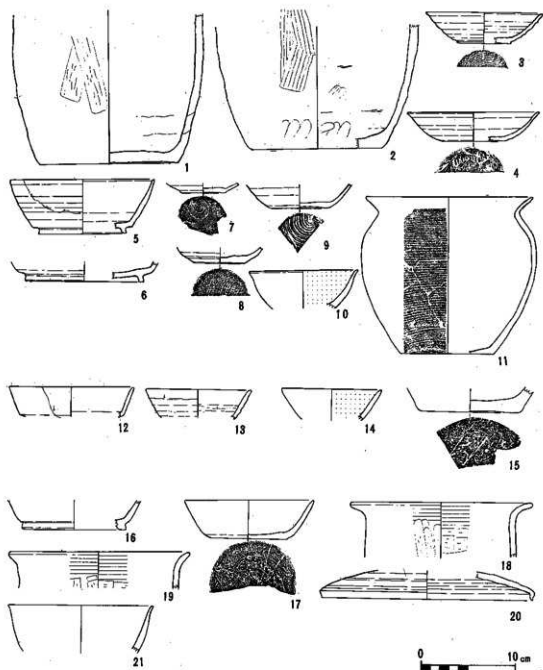
第 148 图 中道遗址 43 号住居址出土土器 (1:4)  
 1~11 A, 12~20 B, S (12~18), H (1~11, 19~20)



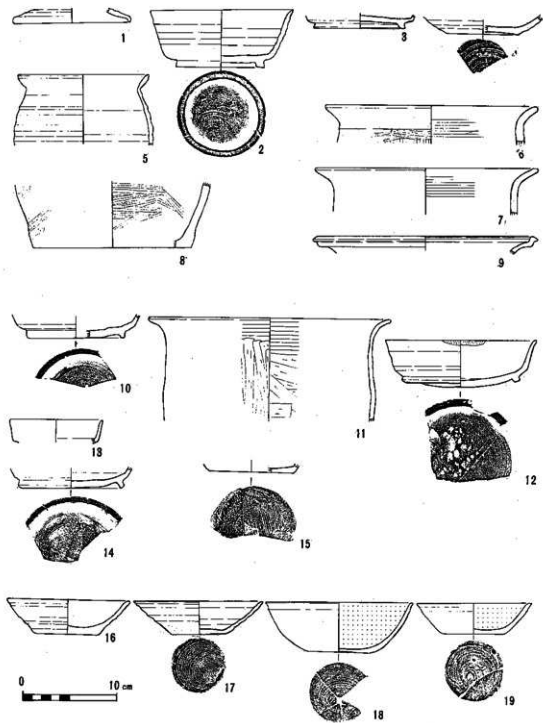
第 149 圖 中道遺跡 44・45 号住居址出土土器 (1 : 4) 44 住 1~12 床, 13~16 覆土, S (1~9)  
 , H (10~16) 45 住 17~21 床, 22~27 覆土, S (17・18・22~25), K (19), H (20・21・26・27)



第 150 图 中道遺跡 46・47 村住居址出土土器 (1:4) 46 住 1~5 覆土, S (1~4), H (5)  
47 住 6~27 床, S (6~19), H (20~27)

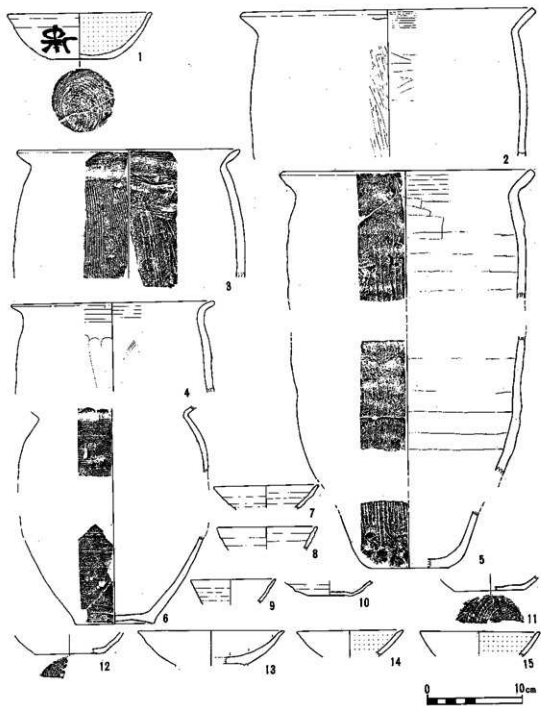


第 151 图 中道遺跡 47・48・49 号住居址出土土器 (1:4) 47 住 1・2 床, 3~11 覆土, S (3~9), H (1・2・10・11) 48 住 12 床, 13~15 覆土, S (12・13), H (14・15) 49 住 16~19 床, 20・21 覆土, S (16・17・20・21), H (18・19)

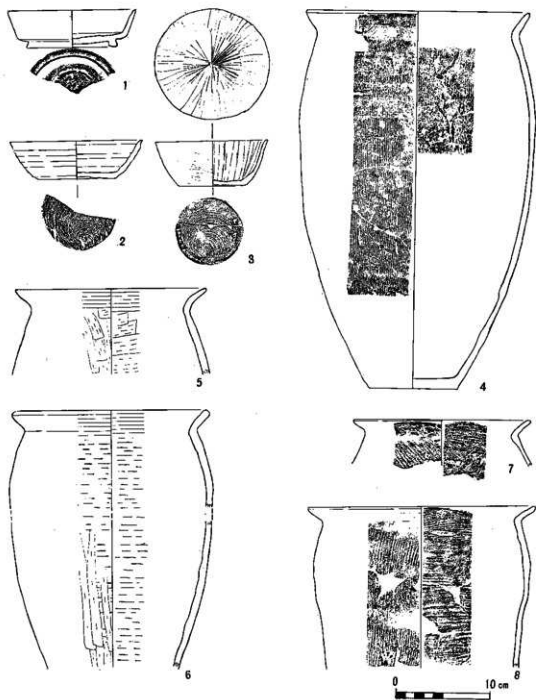


第 152 図 中道遺跡 50・51・52 号住居址出土土器 (1:4) 50 件 1~8 床, 9 覆土, S (1~4・9), H (5~8) 51 住 10・11 床, 12~15 覆土, S (10・12~15), H (11) 52 住 16~19 床, S (16・17), H (18・19)

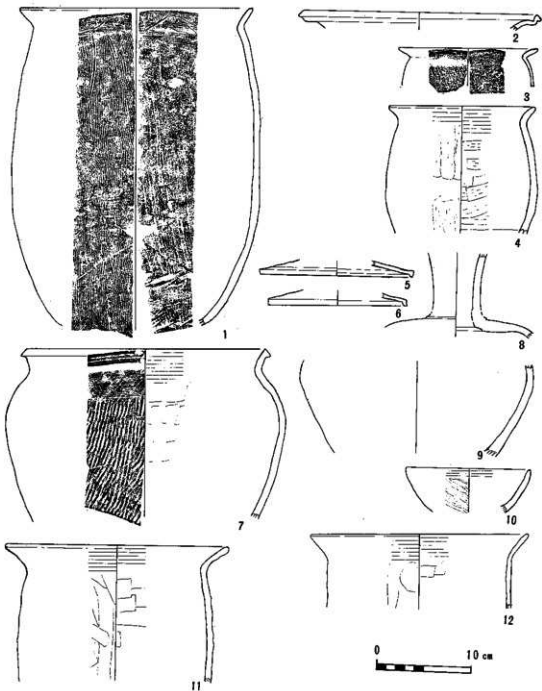




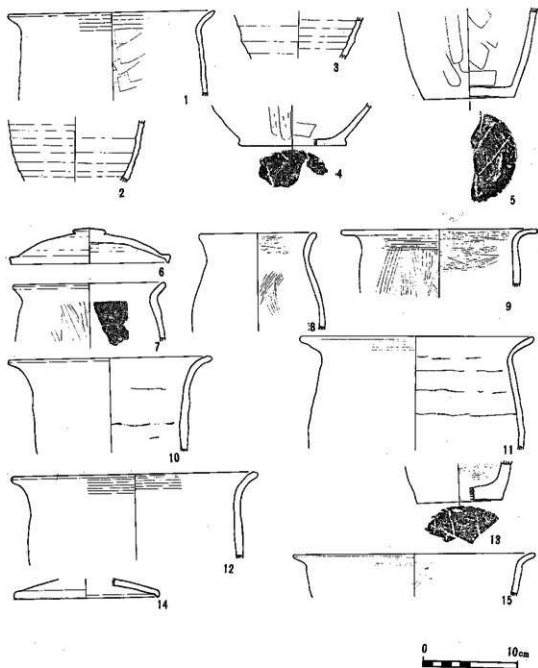
第 153 图 中道遺跡52号住居址出土土器 (1 : 4)  
 1~6 床, 7~15 覆土, S (7~12), K (13), H (1~6·14·15)



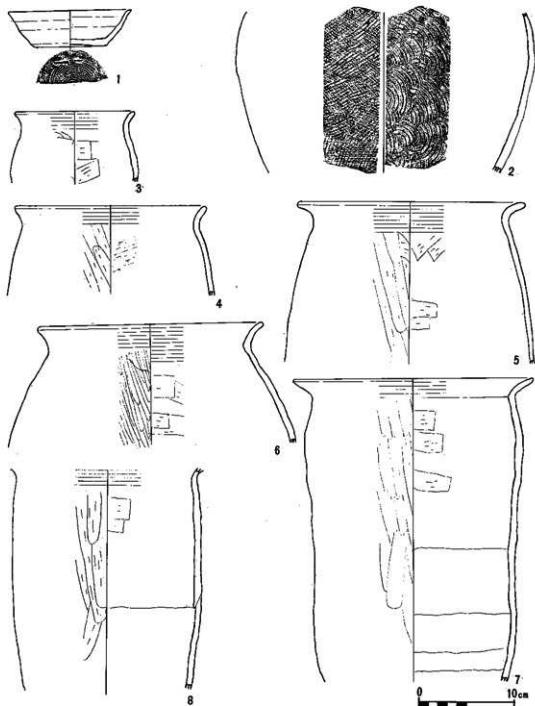
第 154 图 中道遗址 33 号住居址出土土器 (1:4) 1~8 库, S (1~2), H (3~8)



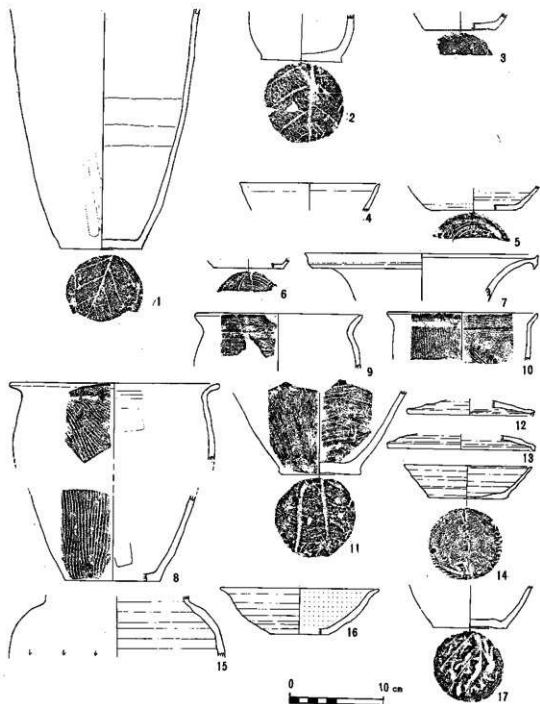
第 155 図 中道遺跡 53・54 号住居址出土土器 (1:4) 覆土, S(2), H(1・3・4) 54 住 5~12 覆土, S(5~9), H(10~12) 53 住 1 床, 2~4.



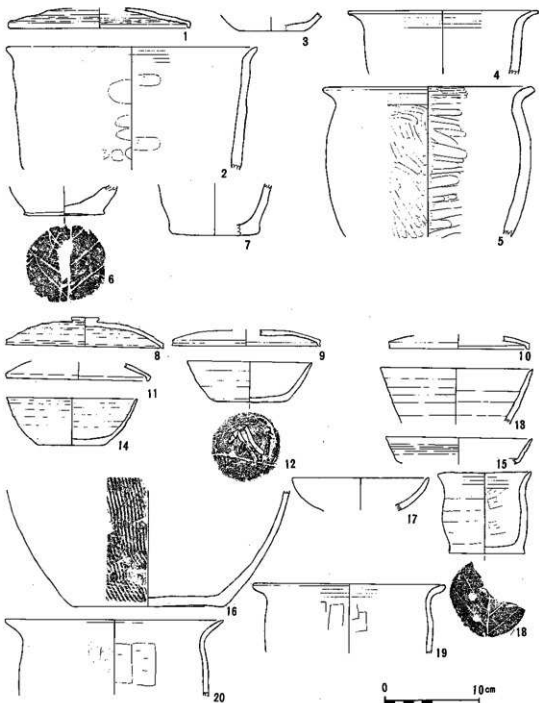
第 156 図 中道遺跡 54・55 号住居址出土土器 (1 : 4) 54 住 1~5 覆土,  
 H (1~5) 55 住 6~13 床, 14・15 覆土, S (6・14), H (7~13・15)



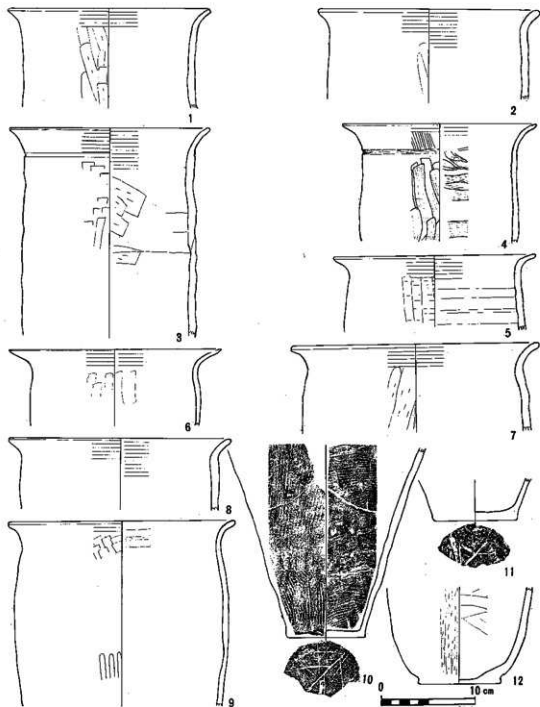
第 157 图 中道遺跡36号住居址出土土器 (1:4) 1-8 床, S (1-2), H (3-8)



第 158 図 中道遺跡 56・57 坪住居址出土土器 (1:4) 56 住 1・2 床, 3 覆土,  
 S (9, 11 (1~2) 57 住 4~11 床, 12~17 覆土, S (4~7・12~15), H (8~11・15・17)

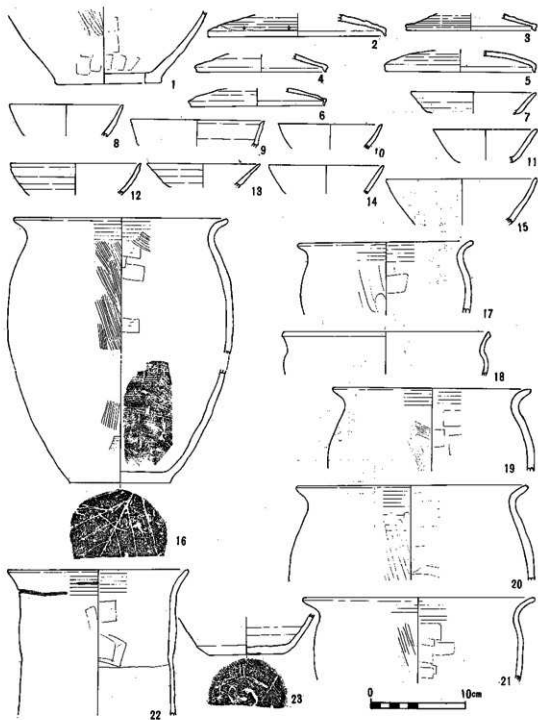


第 159 岡 中道遺跡 58・59 号住居址出土土器 (1:4) 58 住 1~2 床, 3~7 覆土, S (1・3)  
 , H (2・4~7) 59 住 8~18 床, 19・20 覆土, S (8~16) , H (17~20)

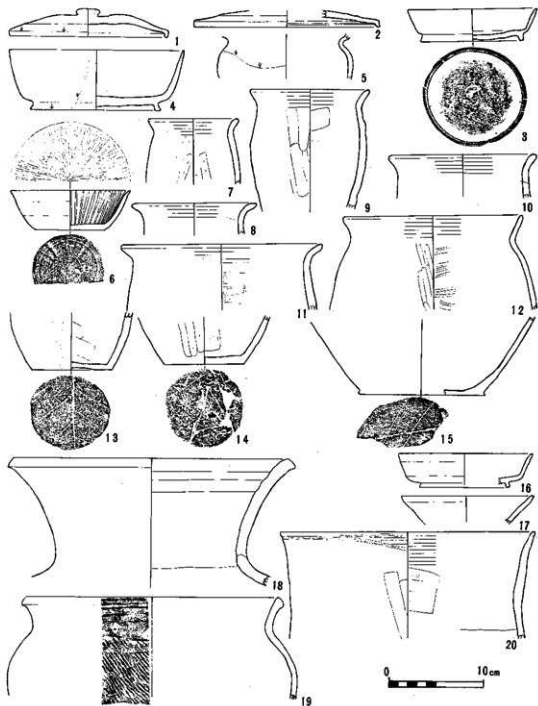


第 160 图 中道遺跡59号住居址出土土器 (1 : 4) 全部 断面 H (1~12)

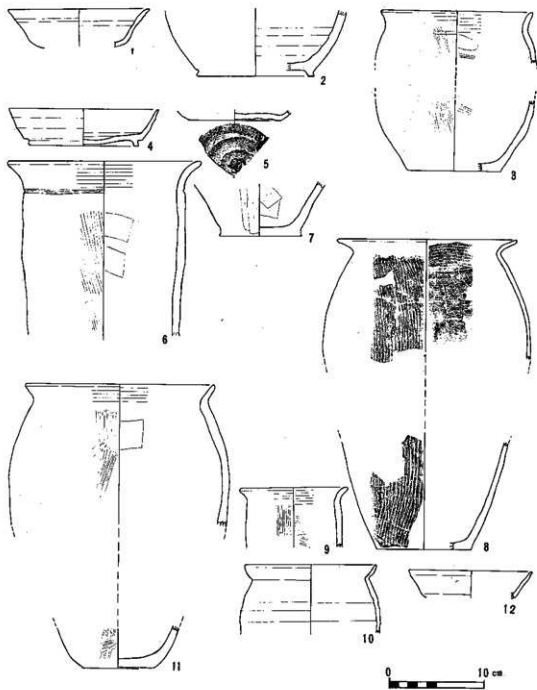




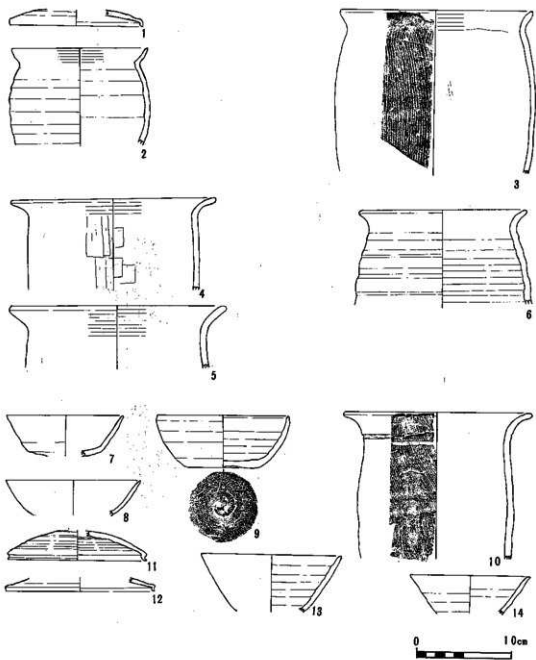
第 161 图 中道遗址 59 号住居址出土土器 (1:4) 1 床面, 2-23 覆土, S (2-15·23)  
 , H (1·16-22)



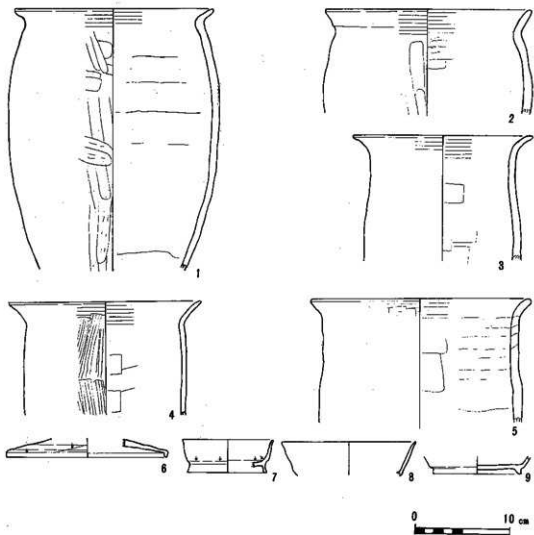
第 162 図 中道遺跡 60 号住居址出土土器 (1:4) 1~15 床, 16~20 覆土, S (1~5, 16~19)  
 , H (6~15, 20)



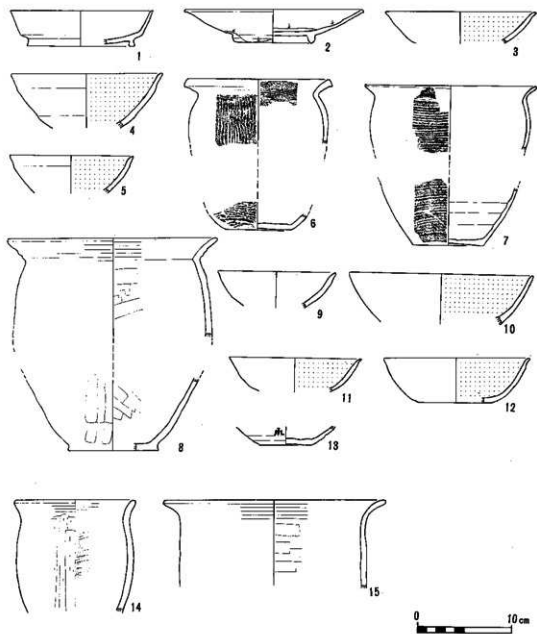
第 163 号 中込遺跡 61・62 号住居址出土土器 (1:4) 61 住 1~3 甕 I, S (1・2), H (3) 62 住  
4~7 甕土, S (4・5), H (6・7) 63 住 8~11 床面, 12 甕 I, S (12), H (8~11)



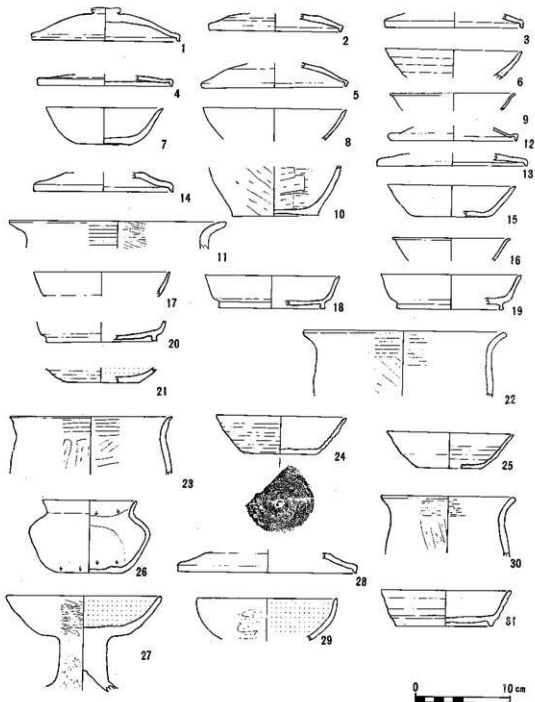
第 164 図 中道遺跡 64・65・66 号住居址出土土器 (1:4) 64 住 1~3 床, S (1), H (2・3)  
 65 住 4・5 床, 6 覆土, H (4~6) 66 住 7~10 床, 11~14 覆土, S (7~9・11~14), H (10)



第 165 图 中道遠跡67号住居址出土土器 (1:4) 1~5 宋, 6~9 覆土, S (6~9), H (1~5)

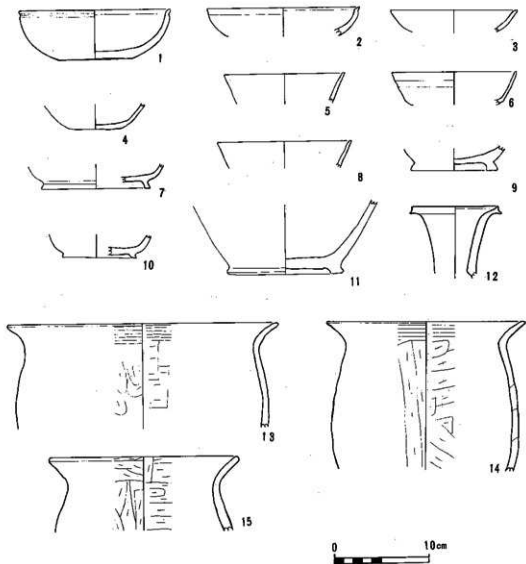


第 166 圖 中道遺跡 68・69 号住居址出土土器 (1:4) 68 住 1~8 床, 9~13 覆土, S(1), K(2), II (3~13); 69 住 14 床, 15 覆土, H (14・15)



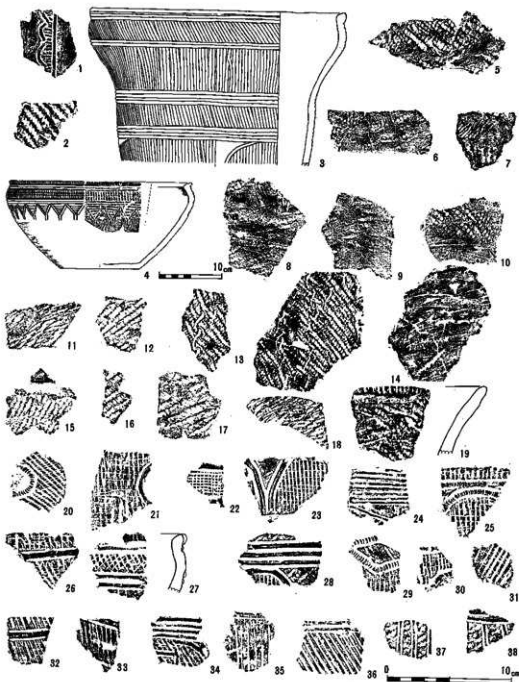
第 167 圖 中道遺跡豎穴 1・2・3・4・5・6 土壇 M12 出土土器 (1:4)

豎穴 1 1~11, S (1~8), K (9), H (10~11) 豎穴 2 12~23, S (12~15・17~20), K (16), H (21~23) 豎穴 3 24~27, S (24~26), II (27) 豎穴 5 29, H (29) 豎穴 4 28, S (28) 豎穴 6 30, H (30), 土壇 M12・31, S (31)



第 168 图 中道遗址特殊遗構・土城 17 出土土器 (1 : 4) 特殊遺器 S (1 ~ 11, H (13 ~ 15)  
土城 17, S (12)





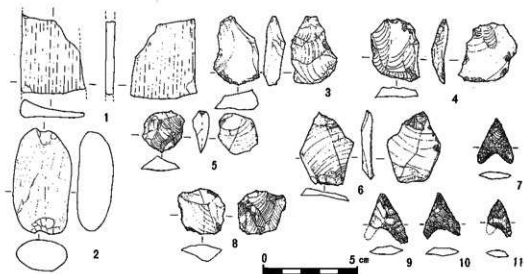
第 169 図 中道遺跡竪穴 7・8・他出土土器(1:3 但し 3・4 1:6) 1・2 竪穴,  
 8 3・4 竪穴 7, 5-10 その他(特殊遺構) 11-38 その他(B・C区)



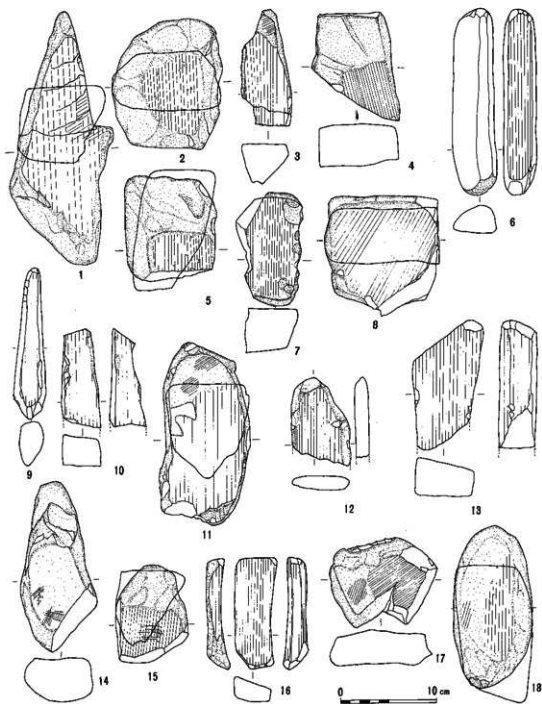
第 170 図 中道遺跡 B・C 区出土七器 (1:3) 1-42 その他



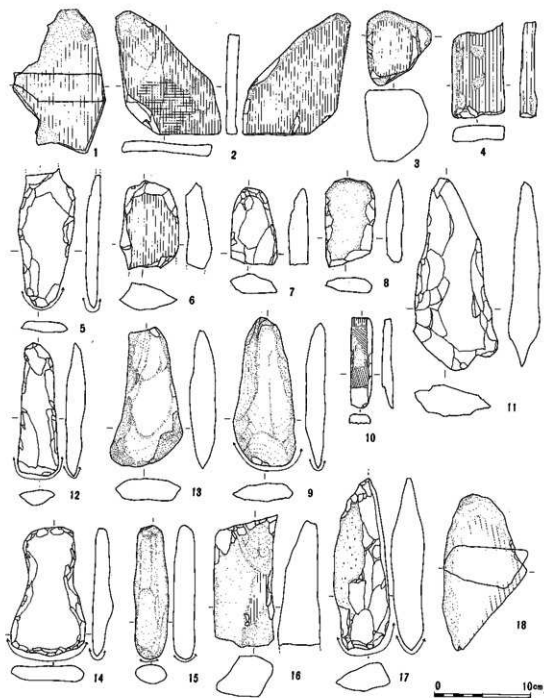
第 171 図 中道遺跡B・C区出土土器 (1:3) 1~12 その他



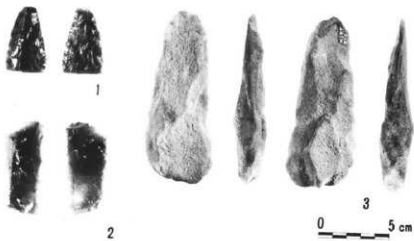
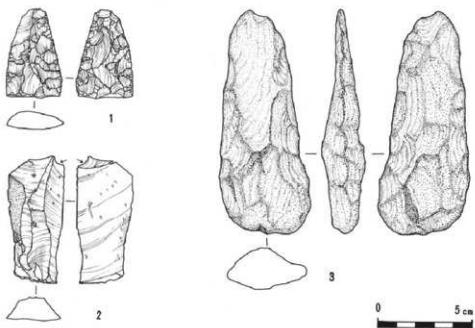
第 172 図 中央道遺跡出土石器 (1:2) 1. 2号住居址 2. 竪穴 8 3. B区 4・5. C区 6~11. その他



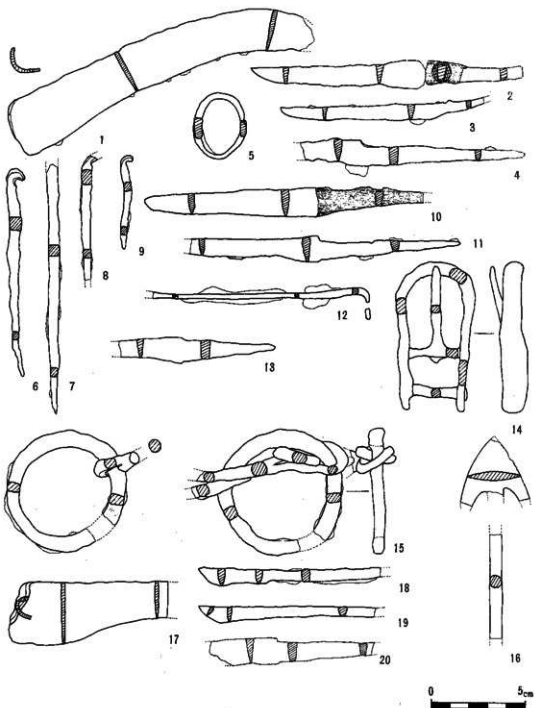
第 173 図 中道遺跡出土石器 (1 : 8 但し 6 · 9 · 12 · 13 · 16 · 17 1 : 4)  
 (1 ~ 5 2 住, 6 3 住, 7 · 8 19 住, 9 · 10 20 住, 11 21 住, 12 23 住, 13 44 住,  
 14 · 15 45 住, 16 47 住, 17 · 18 53 住)



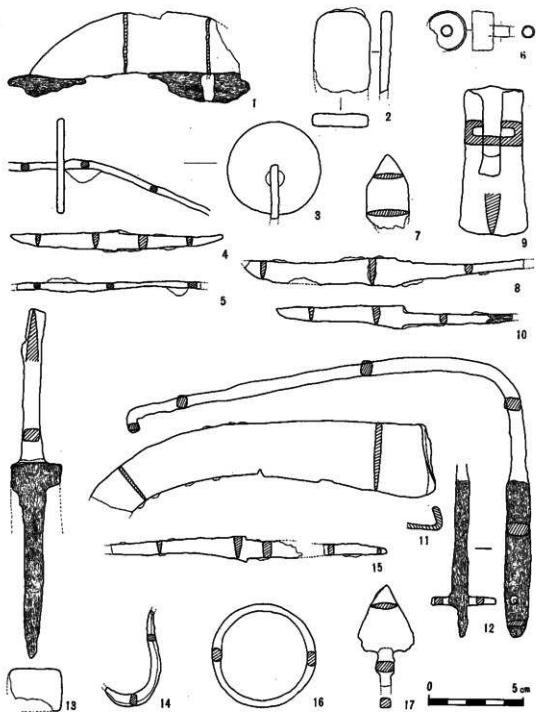
第 174 図 中道遺跡出土石器 (1:4 但し 1・18 1:8) (1 59 住, 2 66 住, 3 67 住, 4 68 住, 5 A 区, 6~8 B 区, 9~11 C 区, 12~17 その他)



第 175 团 中道遗址宫西地籍 K 区出土石器 (1 : 2) (1. 尖刃器, 2. 刃部状刮片, 3. 石器斧状石器)

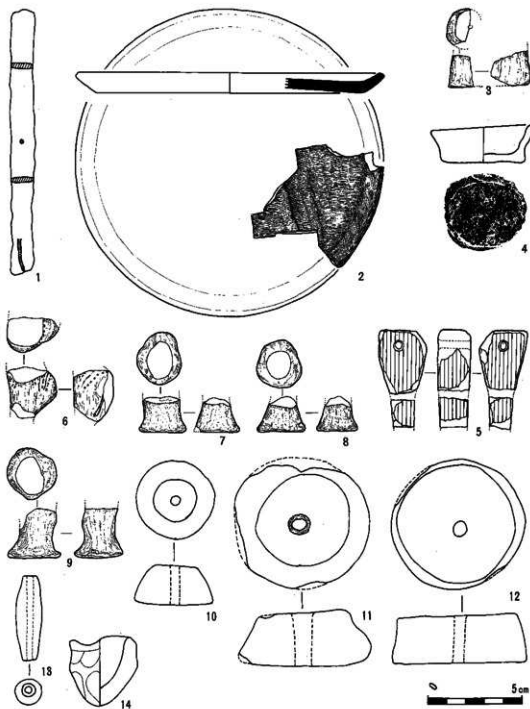


第 176 図 堂地遺跡大原・狐塚地籍及び中道遺跡出土鉄器 (1 : 2) 大原地籍 (1 ~ 2, 4 住床, 20, 1 件床) 狐塚地籍 (3, 9 住床, 4, 15 住覆土, 5, 20 住覆土, 6, 23 住, 7, 13 住) 中道遺跡 (8 ~ 9, 8 住, 10, 13 住床, 11, 15 住覆土, 12, 20 住覆土, 13 ~ 16, 20 住床, 18, 21 住床, 17 ~ 19, 21 住)



第 177 図 中道遺跡出土鉄器 1. 22 住, 2~3. 25 住, 4~5. 28 住, 6. 35 住 7. 40 住, 8. 42 住, 9. 43 住  
 . 10. 47 住, 11. 53 住, 12. 30 住, 13. 69 住, 14. 68 住, 15~16. 特殊遺構, 17. その他

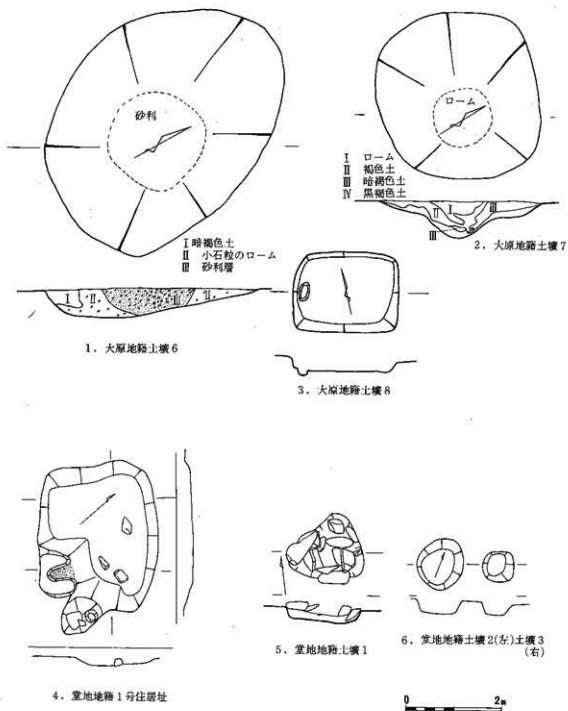




第 178 図 堂地遺跡狐塚地籍・中道遺跡出土土製品木製品他

中道遺跡 1. その他出土鉄器, 10. 21 住, 11. 20 住, 12. 窠穴 3, 13. 3 住, 14. 48 住

堂地遺跡狐塚地籍 2. 13 号住居址, 3・4・5. 土壇 48, 6・7・8. 土壇 226, 9. その他



第14図 堂地遺跡大原地籍土壌6~7,堂地地籍1号住居址土壌1~3(1:80)



1. 堂地遺跡・中道遺跡遠景



2. 堂地遺跡航空写真

1. 大原地籍・2. 堂地地籍・3. 狐原地籍



3. 1号住居址



4. 同 カマド



5. 同 坏



6. 1号住居址出土甕



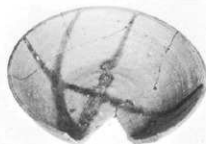
7. 1号住居址出土杯



8. 2号住居址出土杯



9. 2号住居址出土杯



10. 2号住居址出土杯



11. 2号住居址出土杯墨書